都市計画道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

木太中村遺跡
文京町二丁目西遺跡

2009. 2
香川県教育委員会

序文

本書は、都市計画道路の改築事業に伴い発掘調査を実施した香川県高松市木太町の木太中村遺跡と、香川県坂出市文京町の文京町二丁目西遺跡の報告を収めたものです。

まず、木太中村遺跡は、高松平野に広く残っている条里型地割の北限付近に位置し、かつての瀬戸内海に近接する地点に立地しています。発掘調査の結果、古代から中世の溝状遺構を検出しました。なかでも中世の溝状遺構からは、多量の土器が出土し、その多くは瀬戸内海の水上交通によって他地域から運ばれてきたことがわかりました。

次に、文京町二丁目西遺跡は、かつての海岸線に形成された小高い浜堤に立地しています。発掘調査により、古代の土器の包含層が見つかり、飯蛸壺が多く含まれていたことから、漁労を生業とする人々が生活していたことがわかりました。また、自然科学的分析の結果、中世には浜堤の前面まで海水が入る土地であったことが明らかになり、坂出市街地の地形変遷を知る貴重な資料となりました。

本報告書が、香川県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告に至るまでの間、関係機関並びに地元関係者各位には多大なご援助とご協力をいただきました。ここに深く感謝申し上げますとともに、今後ともご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成21年2月

香川県埋蔵文化財センター
所長　大山　眞充

例言

1．本報告書は、都市計画道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告で、都市計画道路福岡三谷線道路改築に伴い発掘調査を実施した、香川県高松市木太町に所在する木太中村遺跡（きたなかむらいせき）の報告と、都市計画道路富士見町線他１線道路改築に伴い発掘調査を実施した坂出市文京町に所在する文京町二丁目西遺跡（ぶんきょうちょうにちょうめにしいせき）を収録した。

2．発掘調査は、香川県教育委員会が調査主体となり、香川県埋蔵文化財センター（一部は財団法人香川県埋蔵文化財調査センター）が調査担当者として実施した。

3．発掘調査は、下記の期間で実施している。

木太中村遺跡

期間：平成18年９月１日～11月30日

担当：文化財専門員　木下晴一、福家正人、調査技術員　中村大地

文京町二丁目西遺跡

期間：平成15年７月１日～９月30日

担当：主任文化財専門員　西村尋文、主任技師　細川健一、調査技術員　飯間俊之

期間：平成19年９月１日～10月31日

担当：文化財専門員　木下晴一、山元素子、調査技術員　木野戸直

4．調査に当って、下記の各位及び関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）

財団法人大阪市文化財協会　趙哲済

香川県高松土木事務所、中讃土木事務所、地元自治会、地元水利組合

5．報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。執筆は木下晴一が担当した。

6．報告書で用いる座標系は国土座標第Ⅳ系（日本測地系）で、方位の北は国土座標第Ⅳ系による。また、標高は東京湾平均海水面を基準としている。

7．遺構は下記の略号により表示している。

ＳＫ　土坑　　ＳＤ　溝状遺構　　ＳＥ　井戸跡　　ＳＰ　柱穴跡　　ＳＲ　自然河川跡

8．遺構断面図の水平線上の数値は、水平線の標高値（単位m）を示している。

本文目次

木太中村遺跡

第１章　調査に至る経緯と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第１節　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第２節　調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第３節　調査体制・整理体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

第２章　遺跡の立地と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第１節　地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

第３章　調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第１節　調査の概要と土層・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第２節　遺構・遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17

第４章　自然科学分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
第１節　香川県木太中村遺跡における自然科学分析　株式会社古環境研究所・・・・・・・・・39
第２節　砂層の粒度分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46

第５章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49

文京町二丁目西遺跡

第1章　調査の経緯 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 63

第1節　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 63

第2節　調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 66

第3節　調査体制・整理体制・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 66

第2章　立地と環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 68

第1節　地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 68

第2節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 70

第3章　調査の成果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71

第1節　調査区と調査順序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 71

第2節　土層・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 72

第3節　遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 79

第4章　自然科学分析 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 90

第1節　放射性炭素年代測定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 90

第2節　花粉分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 91

第3節　珪藻分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 101

第4節　砂層の粒度分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 109

第5章　まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 111

挿図目次

木太中村遺跡

第１図　遺跡位置図（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第２図　遺跡位置図（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第３図　遺跡位置図（３）・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第４図　高松平野地形分類図・・・・・・・・・・・・・・・・6
第５図　地質断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
第６図　高松市街地における低標高地帯・・・・・・・・・・7
第７図　周辺の遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
第８図　木太本村遺跡旧河道出土遺物実測図・・・・・・・9
第９図　調査区割図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第10図　堆積状況と遺構配置模式図・・・・・・・・・・・12
第11図　調査区断面図（１）・・・・・・・・・・・・・・・13
第12図　調査区断面図（２）・・・・・・・・・・・・・・・15
第13図　SD01～03平面図・・・・・・・・・・・・・・・・17
第14図　SD01,02断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・18
第15図　SD01（Ⅱ区）出土遺物実測図・・・・・・・・・・18
第16図　SD01上層（Ⅰ区）出土遺物実測図・・・・・・・19
第17図　SD01下層（Ⅰ区）出土遺物実測図・・・・・・・20
第18図　SD02　出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・20
第19図　SD03断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
第20図　Ⅱ区SD03出土遺物実測図(1)・・・・・・・・・・22
第21図　Ⅱ区SD03出土遺物実測図(2)・・・・・・・・・・23
第22図　Ⅱ区SD03出土遺物実測図(3)・・・・・・・・・・24
第23図　Ⅱ区SD03出土遺物実測図(4)・・・・・・・・・・25
第24図　Ⅱ区SD03出土遺物実測図(5)・・・・・・・・・・26
第25図　Ⅱ区SD03出土遺物実測図(6)・・・・・・・・・・27
第26図　Ⅱ区SD03出土遺物実測図(7)・・・・・・・・・・28
第27図　Ⅱ区SD03出土遺物実測図(8)・・・・・・・・・・29
第28図　Ⅱ区SD03出土遺物実測図(9)・・・・・・・・・・30
第29図　Ⅱ区試掘トレンチ出土遺物実測図・・・・・・・・31
第30図　SE01平・断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・32
第31図　SE01埋土出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・32
第32図　SE01裏込め出土遺物実測図・・・・・・・・・・・32
第33図　SP32出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・33
第34図　Ⅰ～Ⅳ区　近代以降の遺構配置図・・・・・・・34
第35図　SE・ＳＫ平・断面図・・・・・・・・・・・・・・・35
第36図　近代以降の遺構出土遺物実測図（１）・・・・・36
第37図　近代以降の遺構出土遺物実測図（２）・・・・・37
第38図　Ⅳ区出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・37
第39図　SR01出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・37
第40図　Ⅰ・Ⅱ区包含層出土遺物実測図・・・・・・・・38
第41図　木太中村遺跡Ⅲ区トレンチにおける珪藻ダイアグラム・・・42
第42図　木太中村遺跡の珪藻・・・・・・・・・・・・・・43
第43図　試料採集位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・46
第44図　累積曲線・ヒストグラム・・・・・・・・・・・・48
第45図　累積曲線・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
第46図　高松市教育委員会調査地との関係図・・・・・50

文京町二丁目西遺跡

第１図　遺跡位置図(1)・・・・・・・・・・・・・・・・・・63
第２図　遺跡位置図(2)・・・・・・・・・・・・・・・・・・64
第３図　遺跡位置図(3)・・・・・・・・・・・・・・・・・・65
第４図　地質断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68
第５図　立地と環境解説図・・・・・・・・・・・・・・・・・69
第６図　文京町二丁目遺跡　出土遺物実測図・・・・・・・70
第７図　調査区割図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・72
第８図　堆積状況模式図・・・・・・・・・・・・・・・・・73
第９図　予備調査トレンチ　断面図・・・・・・・・・・・・74
第10図　Ⅳ区　東西壁　断面図・・・・・・・・・・・・・・75
第11図　Ⅰ区　東西壁、南トレンチ　断面図・・・・・・76
第12図　Ⅱ区　東西壁　断面図・・・・・・・・・・・・・・77
第13図　Ⅳ区　浜堤前縁部　包含層出土遺物（１）・・・・80
第14図　Ⅳ区　浜堤前縁部　包含層出土遺物（２）・・・・81
第15図　Ⅳ区　浜堤前縁部　包含層出土遺物（３）・・・・82
第16図　Ⅳ区　浜堤前縁部　包含層出土遺物（４）・・・・83
第17図　Ⅳ区　浜堤前縁部　包含層出土遺物（５）・・・・84
第18図　Ⅳ区　浜堤前縁部　包含層出土遺物（６）・・・・85
第19図　Ⅳ区　その他の遺物・・・・・・・・・・・・・・・85
第20図　Ⅰ区　出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・86
第21図　Ⅱ区　出土遺物（１）・・・・・・・・・・・・・・87
第22図　Ⅱ区　出土遺物（２）・・・・・・・・・・・・・・88
第23図　Ⅱ区　出土遺物（３）・・・・・・・・・・・・・・89
第24図　文京町二丁目西遺跡における花粉ダイアグラム（その１）・・96
第25図　文京町二丁目西遺跡における花粉ダイアグラム（その２）・・98
第26図　文京町二丁目西遺跡の花粉・寄生虫卵（その１）・・・99
第27図　文京町二丁目西遺跡の花粉・寄生虫卵（その２）・・・100
第28図　文京町二丁目西遺跡における珪藻ダイアグラム（その１）・105
第29図　文京町二丁目西遺跡における珪藻ダイアグラム（その２）・・106
第30図　文京町二丁目西遺跡の珪藻（その１）・・・・・・107
第31図　文京町二丁目西遺跡の珪藻（その２）・・・・・・108
第32図　累積曲線・ヒストグラム・・・・・・・・・・・・・110
第33図　累積曲線・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・110
第34図　等高線図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・111

図版目次

木太中村遺跡

図版 1
SD03　遺物出土状況（北から）
SD03　遺物出土状況（南から）
図版 2
調査地より東北を望む
Ⅲ区東西トレンチ　砂層および木質検出状況 (北から)
図版 3
Ⅰ・Ⅱ区　南壁断面 (北から)
Ⅰ・Ⅱ区　南壁断面 (SD01 付近)(北東から)
図版 4
Ⅱ区　西壁断面 (南端)(東から)
Ⅱ区　西壁断面 (東から)
図版 5
Ⅱ区　西壁断面 (東から)
Ⅱ区　東壁断面 (南端)(西から)
図版 6
Ⅰ・Ⅱ区　掘削状況 (北から)
SD03　遺物出土状況 (北から)
SD03　遺物出土状況 (南から)(手前は SE01)
図版 7
米軍　1948 年 1 月撮影 (部分、上が北)
図版 8
国土地理院　1962 年撮影 (S1-62-4　C6B-8(部分))
図版 9
SD01　断面 (西から)
SD01　遺物検出状況 (東から)
図版 10
SD01　掘削状況 (南西から)
SD01　掘削状況 (東北から)
図版 11
SD02　掘削状況 (東北から)
SD02　遺物出土状況 (東北から)
図版 12
SD03　遺物出土状況 (北から)
SD03　遺物出土状況 (２回目)(北から)
図版 13
SD03　掘削状況 (北から)
SD03　断面 (北から)
図版 14
SE01　掘削状況 (南から)
Ⅲ区　東部掘削状況 (東から)
図版 15
Ⅳ区 (東部)　掘削状況 (南から)
Ⅳ区 (西部)　掘削状況 (北から)
図版 16
出土遺物
図版 17
出土遺物
図版 18
出土遺物
図版 19
出土遺物

文京町二丁目西遺跡

図版 1
Ⅳ区　掘削状況 (南から)
Ⅳ区　浜堤前縁包含層　遺物出土状況 (西から)
図版 2
予備調査トレンチ 1　全景（東南から）
予備調査トレンチ 1　断面（西から）
図版 3
予備調査トレンチ 2　断面（西から）
Ⅳ区　浜堤前縁部包含層　検出状況（西から）
図版 4
Ⅳ区　調査区東壁　断面（西から）
Ⅳ区　完掘状況（下が北）
図版 5
Ⅱ区　西壁　断面（東南から）
Ⅱ区　東壁　断面（西から）
図版 6
Ⅰ区　掘削状況（北から）
Ⅰ区　南北トレンチ西壁　断面
図版 7
米軍 1948 年 1 月撮影（M746　55 部分）
図版 8
国土地理院　1962 年撮影（SI-62-4　C-7A-9 部分）
図版 9
調査地（Ⅳ区）遠景（南から）
調査地（Ⅳ区）遠景（北から）
図版 10
Ⅳ区　浜堤前縁部包含層　遺物出土状況①
Ⅳ区　浜堤前縁部包含層　遺物出土状況②
図版 11
Ⅳ区　浜堤前縁部包含層　遺物出土状況③
Ⅳ区　浜堤前縁部包含層　遺物出土状況④
図版 12
Ⅱ区　掘削状況（南から）
Ⅱ区　18 層上面の生痕化石
図版 13
出土遺物
図版 14
出土遺物
図版 15
出土遺物

表目次

木太中村遺跡

第１表　木太中村遺跡における珪藻分析結果・・・・・ 41
第２表　試料と方法　・・・・・・・・・・ 44
第３表　測定結果　・・・・・・・・・・ 44
第４表　篩目 1/2 φによる粒度分析結果表・・・・・・ 47
第５表　篩目 4/4 φによる粒度分析結果表・・・・・・ 47
第６表　木太中村遺跡出土土器観察表・・・・・・・・ 54
第７表　木太中村遺跡出土瓦観察表・・・・・・・・・ 62
第８表　木太中村遺跡出土石器観察表・・・・・・・・ 62

文京町二丁目西遺跡

第１表　文京町二丁目西遺跡における花粉分析結果（その１）・・ 95
第２表　文京町二丁目西遺跡における花粉分析結果（その２）・・ 97
第３表　文京町二丁目西遺跡における珪藻分析結果（その１）・・ 104
第３表　文京町二丁目西遺跡における珪藻分析結果（その２）・・ 104
第４表　篩目 1/2 φによる粒度分析結果表・・・・・・ 109
第５表　篩目 1/4 φによる粒度分析結果表・・・・・・ 109
第６表　文京町二丁目西遺跡出土土器観察表・・・・・ 114
第７表　文京町二丁目西遺跡出土瓦観察表・・・・・・ 121
第８表　文京町二丁目西遺跡出土石器観察表・・・・・ 121
第９表　文京町二丁目西遺跡出土木器観察表・・・・・ 121

都市計画道路福岡三谷線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

木太中村遺跡

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

都市計画道路福岡三谷線は、高松市南部の三谷町から香川インテリジェントパーク、高松自動車道高松中央インターチェンジを経て、市街中心部を南北に抜けるアクセス道路として整備が進められている。県道高松長尾大内線と県道牟礼中新線間が（中）工区として整備が開始されたのを受けて、香川県教育委員会文化行政課（現在の生涯学習・文化財課）が平成17年７月に試掘調査を実施した結果、中世を中心とする遺構・遺物が検出され、文化財保護法に基づく保護措置が必要と判断された。試掘調査の結果を受けて、県高松土木事務所都市港湾課等との協議の結果、平成18年度秋に1580㎡について本調査を実施することとなった。なお、今回の調査地の大半の小字は「川西」で、調査地の一部が小字「中村」に所在するが、遺跡名は、高松教育委員会が平成10、11年度に発掘調査を行った木太中村遺跡との連続性を考慮して、木太中村遺跡と命名されている。

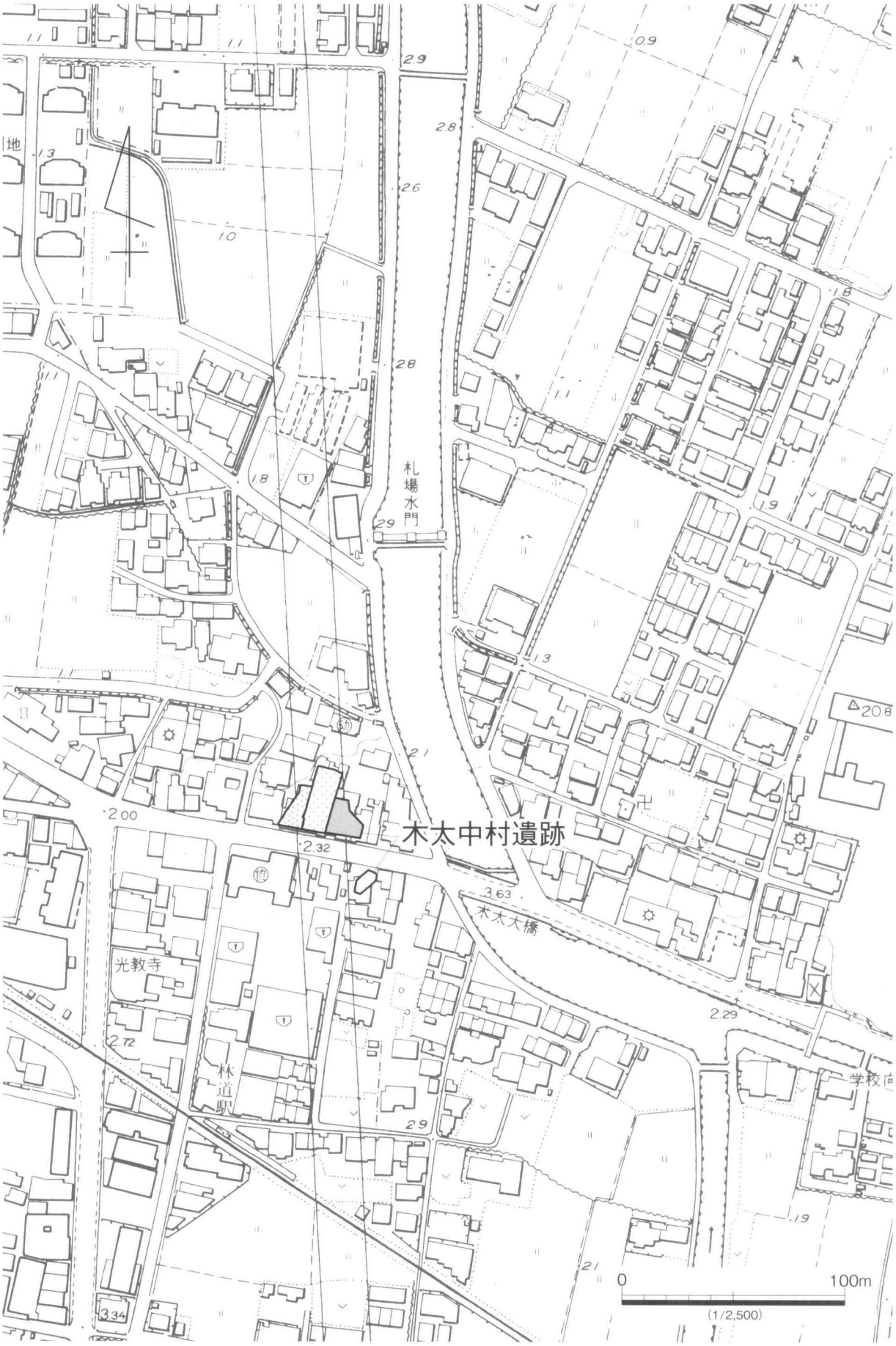
第２節　調査の経過

発掘調査は、平成18年９月１日から11月30日までの３ヶ月間で実施した。期間中は天候も安定し、順調に調査を進めることができた。なお、10月２、３日には、近隣の木太小学校の児童約600名が学年団毎に遺跡を見学した。

整理作業は、平成20年７、８月の２ヶ月間で実施した。遺物の洗浄や注記作業については終了していたことから、遺物の接合・図化・写真撮影と遺構図のトレース、遺構写真の整理などを行い、本書にまとめた。出土遺物量は28㍑入りコンテナ46箱である。

第１図　遺跡位置図（１）

第２図　遺跡位置図（２）（国土地理院「高松」「高松南部」を使用）



第３図　遺跡位置図（３）（高松市都市計画図 29「木太」を使用）

第３節　調査体制・整理体制

発掘調査の体制は、以下のとおりである。

平成 18 年度

香川県教育委員会事務局文化行政課

総括

課　　長　　三谷　雄治

課長補佐　　中村　禎伸

総務・振興グループ

副主幹　　河内　一裕

主　　事　　脇　　悠介

文化財グループ

課長補佐　　藤好　史郎

主　　任　　山下　平重

文化財専門員　信里　芳紀

香川県埋蔵文化財センター

総括

所　　長　　渡部　明夫

次　　長　　榊原　正人

総務課

課　　長　　野口　孝一

主　　任　　嶋田　和司

主　　任　　田中　千晶

調査課

課　　長　　廣瀬　常雄

文化財専門員　木下　晴一

文化財専門員　福家　正人

嘱託（土木）　　高嶋　勝英

嘱託（調査技術員）中村　大地

発掘作業に携わった方は、以下のとおりである。

整理作業員　　宮武　直人　　調査補助員　　今井　由記子

発掘作業員　　磯野　良照、遠藤　英樹、小川　浩司、請川　麗子、岡崎　文、岡田　忠幸、香川　慶一、鈴木　正博、林　悠香、東原　輝明、平井　加寿美、三谷　愛子、森安　悦美

整理作業の体制は、以下のとおりである。

平成 20 年度

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課

課　　長　　春山　浩康

総括・生涯学習推進グループ

課長補佐　　武井　壽紀

副主幹　　香西　としみ

主　　任　　林　照代

文化財グループ

主幹（兼）課長補佐　藤好　史郎

主任文化財専門員　　森　格也

文化財専門員　　乗松　真也

香川県埋蔵文化財センター

総括

所　　長　　大山　真充

次　　長　　廣瀬　常雄

総務課

課　　長　　廣瀬　常雄（兼務）

主　　任　　宮田　久美子

主　　任　　嶋田　和司

主　　任　　古市　和子

資料普及課

課　　長　　西岡　達哉

文化財専門員　　木下　晴一

嘱託整理作業員　山地　真理子・市川　孝子・加藤　恵子・柴垣　智美・朝田　加奈子・廣瀬　杏子

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

調査地は、高松市木太町に所在する。標高約２ｍで、東側至近に詰田川が流れ、詰田川河口から約2.5kmを測る。

今回の調査地付近は、高松平野の地形発達史を考える上で注目されてきた地域である。調査地は、香東川扇状地上に広範に広がる条里型地割の北限の北側に当る。1950年代に西村嘉助氏は、条里地割が７、８世紀に施行されたことから、条里地割の遺存する地形面を鍵地形面（地層でいう示準層）と捉え、条里地割の有無から、条里以後の地形変化を検討し得ると考えた(1)。西村氏は、条里の遺存する地形面を香東川扇状地、その前面を三角州と考え、条里地割が施行されていた地形面が沈水し、のちに現在の三角州面が形成されたと考えた。

その後、1987年に高橋学氏により高松平野の地形に関する本格的な検討結果が公表される(2)。高橋氏による地形分類図は、それ以後の高松平野の地形を考える基準となっているが、西村氏による三角州面は古代末以降に堆積が進行した地形面と考えられるようになった。

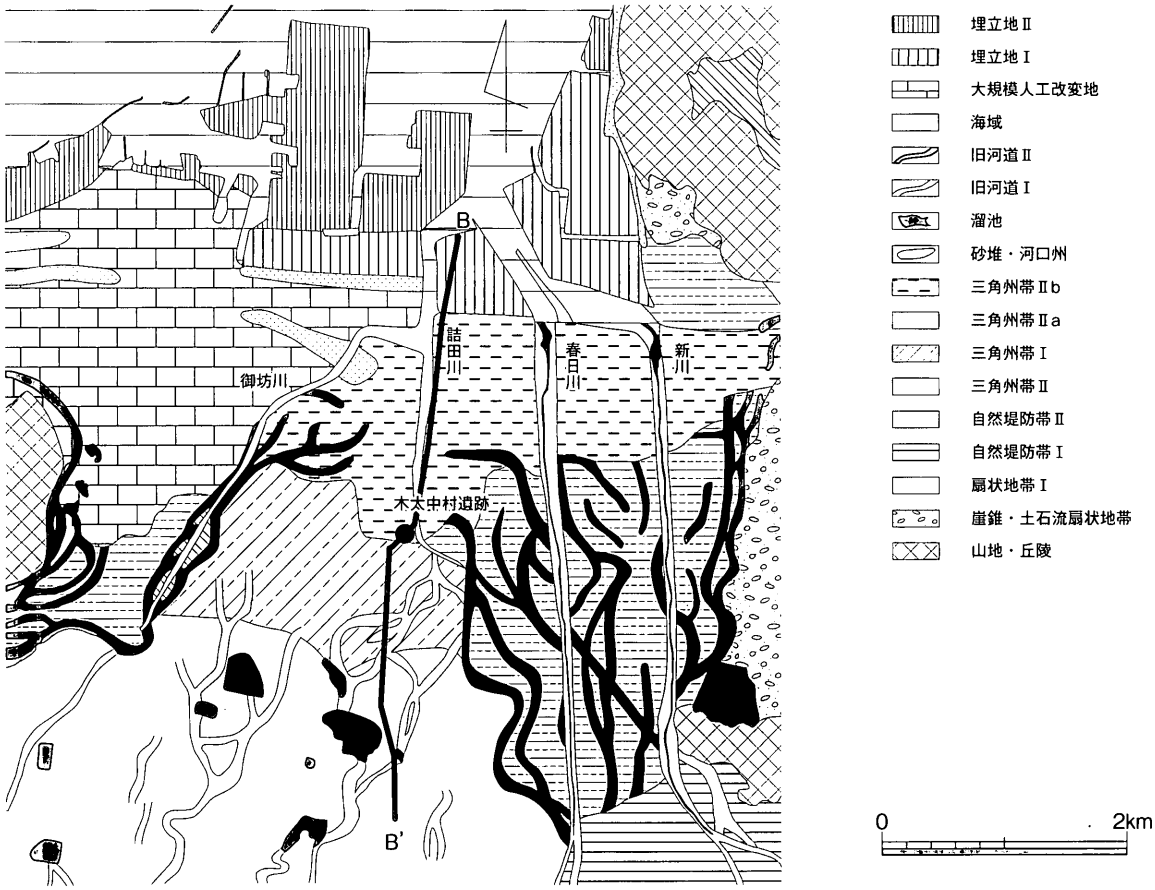
高橋氏の地形分類図によると、今回の調査地付近は三角州帯Ⅰと三角州帯Ⅱａの境界付近のⅡａ側に位置する。なお、扇状地帯Ⅰと三角州帯Ⅰは地形の傾斜変換線（扇状地帯で急、三角州帯で緩）に拠っている。なお、三角州帯Ⅰは、いわゆる縄文海進最盛期に海に没したところとされている。

近年、川村教一氏により高松平野の沖積層を中心とする堆積環境に関する研究が公表された(3)。この論文では、多数のボーリング資料の分析により、詰田川河口から詰田川の流路に沿う南北方向の地質断面図が示されている。ここでは、番町礫層と称される扇状地礫層(Bag)に福岡町泥層(Fum)、西内町泥層(Nim)、西内町砂層(Nis)が整合で重なっている。番町礫層は最終氷期の扇状地性堆積物、福岡町泥層は最終氷期のＡＴ降灰期前後の湿地性堆積物、西内町泥層・西内町砂層は、縄文海進高頂期及びそれ以降の三角州性堆積物としてまとめられている。

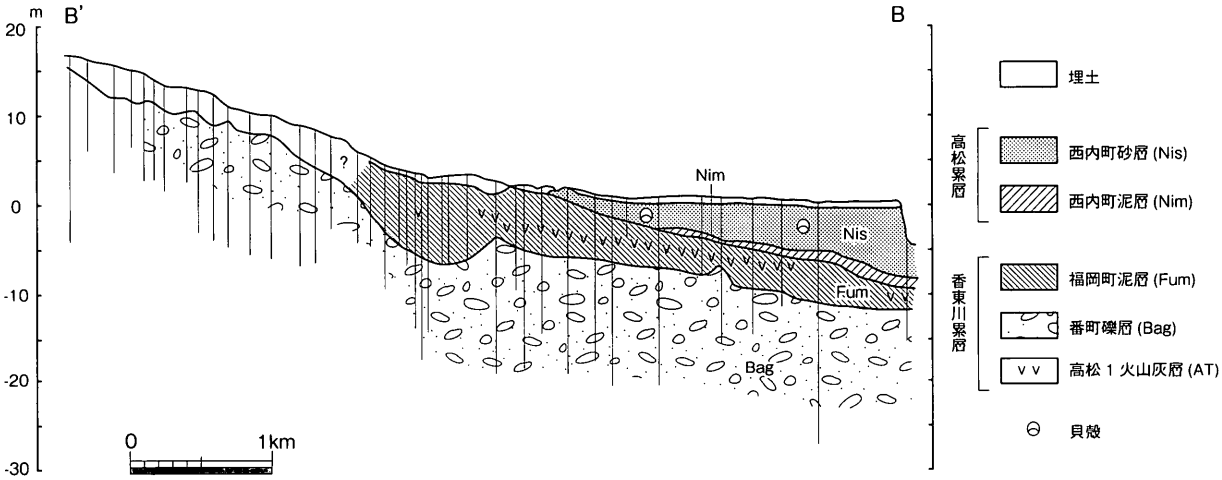
川村氏の成果をもとに高橋氏の地形分類図をみると、三角州帯Ⅰは福岡町泥層が表層に表れる部分に該当するものと考えられ、縄文海進最盛期の海岸線は三角州帯ⅠとⅡａ（川村氏の西内町泥層・西内町砂層）の境界付近ということになる。

三角州帯Ⅱａは、江戸時代初めに藩主生駒氏の客臣であった西嶋八兵衛と後の藩主松平頼重によって海面干拓が行われたことが知られている。文献史料の検討や地割の観察等から、県道牟礼中新線以北が松平、以南が西嶋により干拓されたことがわかるが、西嶋による干拓の範囲はよくわかっていない。なお、この付近の条里地域と非条里地域については、出石一雄氏による地理学的検討がある他(4)、田中健二氏が、文献史料を博捜し江戸時代初めの高松城下町周辺の地形に関する史料の整理を行っている(5)。また、香川県歴史博物館による特別展『海に開かれた都市　高松－港湾都市900年のあゆみ』では、この付近の中世後半の地形復元がなされている(6)。しかし、これは発掘調査により検出した遺構・遺物の歴史的評価を積極的に行うに当っての想像図であり、今後、裏付け作業を進める必要がある。

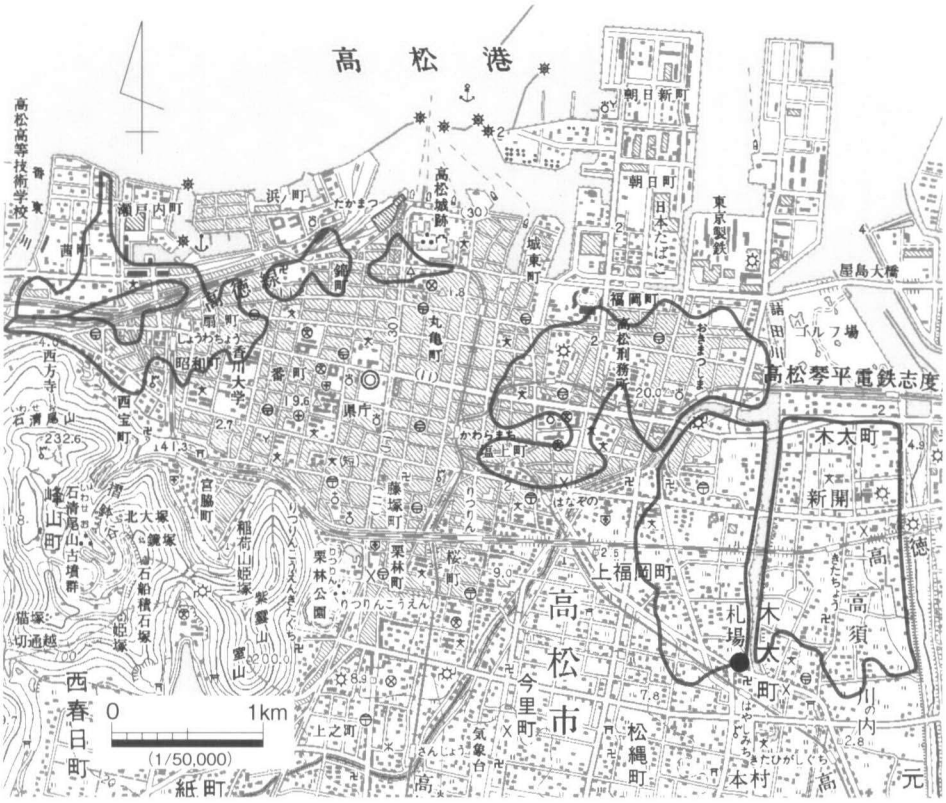
以上のように、木太中村遺跡周辺は注目される反面、地図上で地形界や地形発達の様子を図示するのは簡単ではない。これは都市化の進展によって地表面の微起伏を検出したり、範囲を括ったりすることが難しいこと等が理由である。そのような中で、平成16年台風16号による高松市の高潮浸水の被害調



第４図　高松平野地形分類図（部分）（高橋学氏による、遺跡位置、地質断面作成位置加筆）



第５図　地質断面図（川村教一氏による）

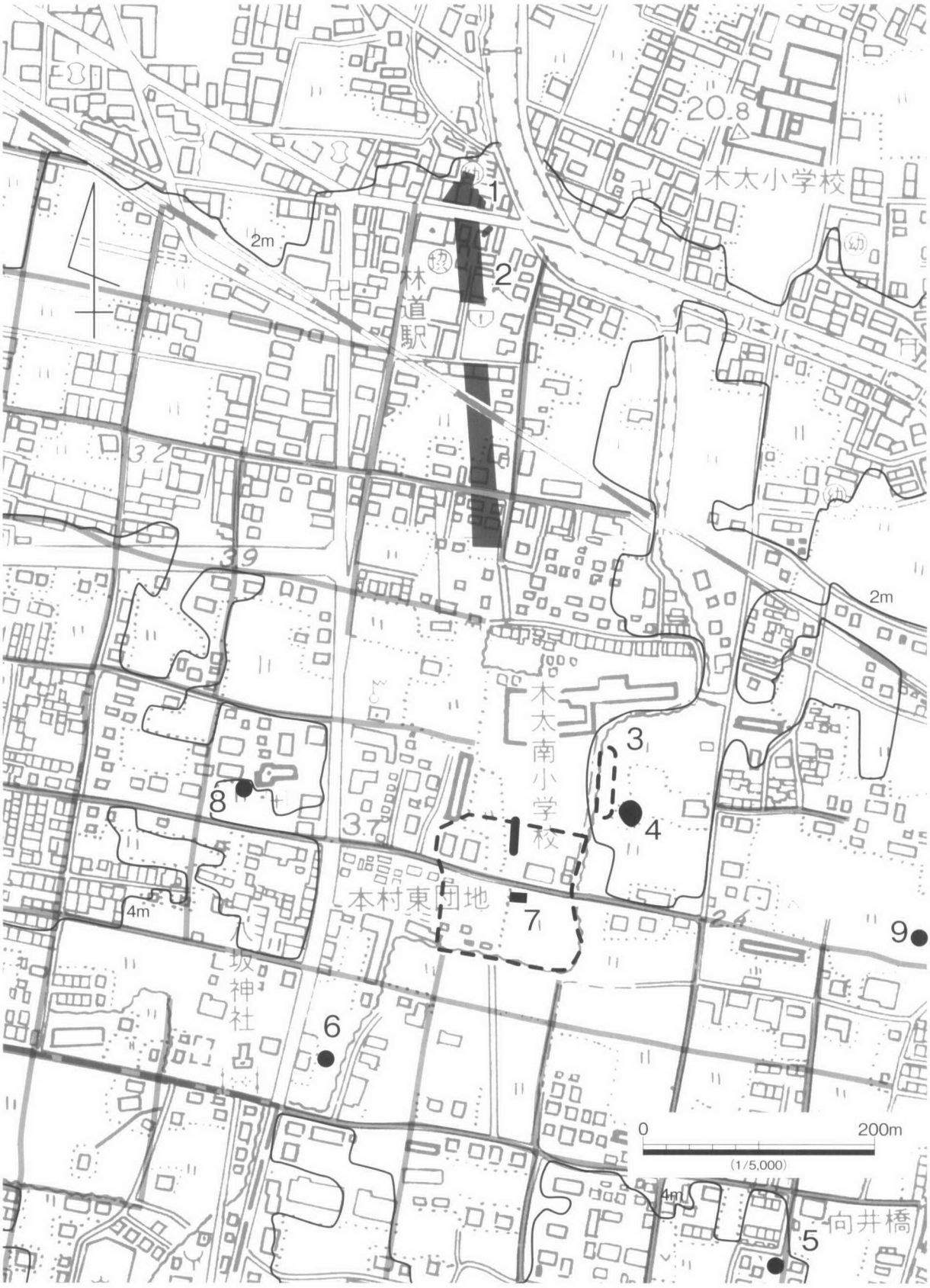


第６図　高松市街地における低標高地帯

査の際に、長谷川修一氏他によって作成された標高図は参考になる(7)。第６図に示した範囲は、相対的に標高の低い範囲である。平成16年台風16号による高潮浸水は、これより標高の高いところにまで及んだが、この範囲の湛水が長時間に及んだ。この図から読み取れることは、①近代以降の海面の埋め立ては、機械力を駆使して標高２ｍ程度まで盛土しているが、近世（江戸時代初め）に干拓が行われた範囲は、低標高地として取り残されている。②東側の低標高地帯には、２列の砂堆が推定されてきたが、微高地としては把握できない。このうち南側の一列は、西嶋による防潮堤に沿って営まれた集落を砂堆と推定したのが原因のようで、砂堆は存在しない可能性がある。また、西側にも砂堆があるが（国土地理院沿岸海域土地条件図）、その範囲に低標高地帯が含まれ再検討が必要である。さらに、低標高地帯は、田中健二氏によって江戸時代初頭に入江の存在が指摘されるところに該当している。③この地域に流入する河川の沿岸は、相対的に高標高である、等である。

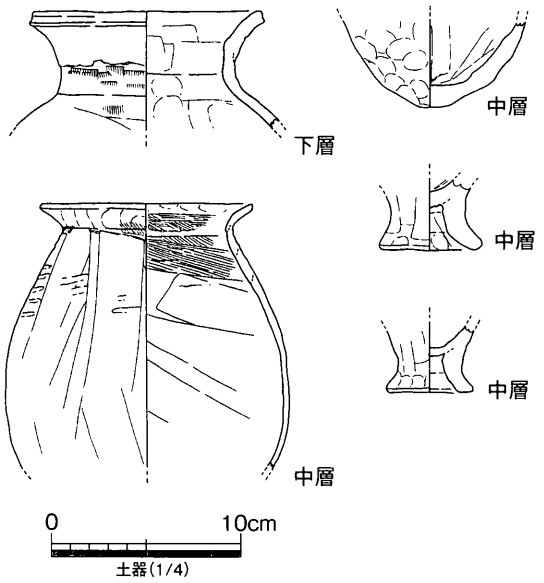
今後、より精密な堆積状況の検討を進める必要があろう。

(1) 西村嘉助「條里以後の地形変化」『広島大学文学部　紀要』第11号　1957
(2) 高橋学「高松平野の地形環境分析Ⅰ」『高松市太田地区周辺遺跡詳細分布調査概報』高松市教育委員会　1987（のちに「高松平野の環境復原」『讃岐国弘福寺領の調査　弘福寺領讃岐国山田郡田図調査報告書』高松市教育委員会　1992に所収）
(3) 川村教一「香川県高松平野における沖積層の層序と堆積環境」『第四紀研究』第39巻第６号　2000年
(4) 出石一雄「山田郡北西部における条里遺構と低限界－高松市木太町を中心として－」『香川地理学会会報』№27　2007年
(5) 田中健二「生駒時代・高松城下周辺の地形について」『香川県文書館紀要』第12号　2008年
(6) 香川県歴史博物館『海に開かれた都市　高松－港湾都市900年のあゆみ』展示図録　2007年
(7) 香川大学平成16年台風災害調査団『香川大学平成16年台風災害調査団報告書』2005　69Ｐ.



1. 木太中村遺跡　2. 木太中村遺跡（高松市）　3. 木太本村遺跡　4. 白山神社古墳
5. 大荒神古墳　6. 木太本村Ⅱ遺跡　7. 神内城推定範囲　8. 神内清定墓　9. 向城跡

第７図　周辺の遺跡　（基図は１万分の１高松市都市計画図を使用）



第８図　木太本村遺跡旧河道出土遺物実測図

第２節　歴史的環境

今回の調査地の南側の約 4000㎡を高松市教育委員会が調査している。調査の結果、弥生時代の掘立柱建物跡、溝状遺構、土坑、古墳時代の掘立柱建物跡、溝状遺構、古代の掘立柱建物跡、性格不明遺構、中世の掘立柱建物跡、土坑、溝状遺構、柱穴跡、近世の掘立柱建物跡、土坑、井戸跡等が検出されている(1)。今回の調査地との関連については、第５章のまとめで検討する。

南南東約 500 m付近に弥生時代後期前半期の遺物を多量に包含する旧河道跡が検出されている（木太本村遺跡）(2)。第８図は、出土遺物の実測図で、壺、甕、鉢、製塩土器が出土している。木太本村遺跡に接して白山神社古墳が所在している。白山神社古墳は、現況で東西方向の径 11 m、南北方向の径 12.6 m、高さ 1.75 mを測る円墳である。昭和 60 年に発掘調査が行われ、東西方向に主軸をもつ竪穴式石槨が盗掘された状態で検出された。出土遺物は無く、時期決定は困難であるが、古墳時代前期終末期から中期前半期までのものと考えられている。白山神社古墳の周辺には、かつて 10 基程度の塚が存在し、いくつかは古墳であったと考えられている(3)。標高２mに立地する特異な古墳群であり、瀬戸内海交通に関連する被葬者像が想定されている。

白山神社古墳から、詰田川の支流宮川を遡ったところに木太本村Ⅱ遺跡がある。ここでは８世紀後半期と推定される木組みの井戸跡が検出されている(4)。同時期の井戸跡としては有数の規模であり、「弘福寺領讃岐国山田郡田図」に描かれた「荘所」に比定されるという研究がある(5)。各地の荘園の荘所が水陸交通の至便の地を選択しているのと同じ立地である可能性が考えられる。

木太本村Ⅱ遺跡と白山神社古墳の間には、神内城跡という中世平地城館があったと推定されている。該当地内の小面積の発掘調査が行われ、16 世紀代を中心とする溝状遺構、土坑、柱穴跡を検出しており、城館の存在する可能性が高いと考えられている(6)。

神内城跡の東方約 300 mの所に向城跡という中世平地城館の存在が推定されている。現況では、長さ約 40 mの土塁状の遺構が存在するが、明確なことは良くわからない。

(1) 高松市教育委員会『都市計画道路福岡三谷線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第一冊　木太中村遺跡』 2001
(2) 香川県教育委員会『埋蔵文化財試掘調査報告Ⅷ　国道バイパス・県道建設予定地及び県営ほ場整備事業予定地等の調査』 1995
(3) 高松市教育委員会『社殿改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　白山神社古墳』2007
(4) 香川県教育委員会『木太本村Ⅱ遺跡』 1998
(5) 木下晴一「弘福寺領讃岐国山田郡田図の比定地について」『条里制・古代都市研究』第 23 号　2007
(6) 高松市教育委員会『高松市内遺跡発掘調査概報　平成 12 年度国庫補助事業』2001
高松市教育委員会・出光興産㈱『ガソリンスタンド建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　木太町神内城跡　～第２次調査～』 2005

第３章　調査の成果

第１節　調査の概要と土層

調査を進めるに当って、調査地北側の約500ｍ離れた地点に掘削土の仮置き場所を確保した。しかし、交通量の多い交差点や、道路幅員の狭い住宅地を通行しなければならず、また、近くの小学校の通学路にも当っているため、できる限り調査地内で掘削土を仮置きすることとした。このため長尾街道北側は３つの調査区に分割し、西からⅠ～Ⅲ区と呼称し、順次調査を進めた。長尾街道南側の調査区も同様の理由から、２分割しⅣ区（Ｅ）・Ⅳ区（Ｗ）と呼称して調査を進めた。

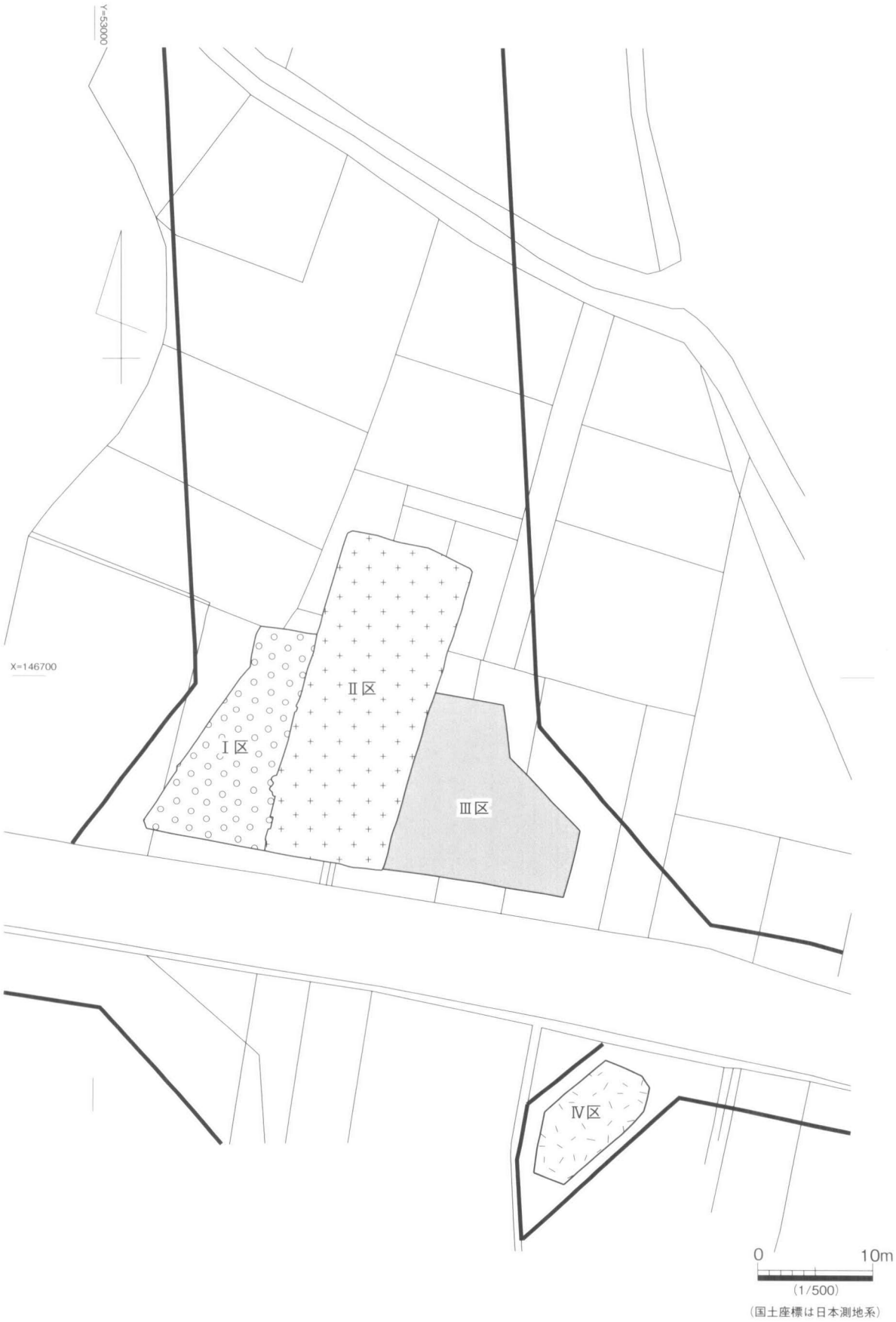
調査の結果、Ⅱ区で12世紀後半期から13世紀前半期の溝状遺構を検出した。この溝状遺構には、多量の中世土器が投棄されていたが、在地の土器は僅少で他地域で生産された土器が多数を占めるものであった。また、Ⅱ、Ⅲ区では、東南をピークとする微高地があり、その縁に沿う２条の溝状遺構を検出した他、石組みの井戸等を検出した。

木太中村遺跡の堆積状況を第10～12図をもとに説明する。Ⅰ～Ⅲ区では、東南をピークとし西方向、北方向に緩やかに下る砂層が堆積している。この砂層は、細砂と中砂を主体とする大変淘汰の良いものである。第４章に篩分けによる粒度分析の結果を報告するが、堆積環境を特定するまでに至っていない。斜面の落ち際にはインブリケーション（瓦重ね構造）のある径３cm以下の礫層が乗っている。砂層の厚さは30cm以上で、下層には径５cm以下の砂岩亜円礫を主体に、間隙に中砂や粗砂が入る砂礫層が堆積する。この砂礫層は良く締まっており、北に向かって次第に標高を下げながら連続しており、この付近の基盤層と考えられる。なお、砂層と砂礫層との境界で検出した木質の放射性炭素年代測定を行ったところ、6058 ± 32（補正 ^{14}C 年代）を得ている（第４章）。

標高を下げた砂層の上部に黒褐色粘質土層が堆積している。この層には遺物片の包含は見られなかったが、この層の上部に砂混じりで、弥生土器細片を包含する層が、約10cmの厚さで堆積している。調査中途までは弥生時代の包含層と考えていたが、古代のＳＤ01より新しくＳＤ02より古い堆積層であることがわかった。弥生土器細片を包含する層の上に、水田耕土が堆積し、その上に造成土が乗っている。明治時代の土地台帳を見ると、該当箇所は明治40年代に水田から宅地に変わり、昭和初期に相次いで分筆され、宅地化したことが記されていることから、水田耕作土層より上位は明治40年代以降の堆積層であることがわかる。

第11図は、Ⅱ区の東壁と西壁の断面図とⅡ区で行った下層確認のための断ち割りの断面図である。東壁の南部に見える12層が上述の砂層で、10層が基盤の砂礫層である。これらが北方に緩やかに下っており、３～９層は、その落ち込みに堆積した旧河道埋土である。第39図のＳＲ01出土遺物としているのは、第７層出土のもので、近世の堆積物であることがわかる。なお、西壁で明瞭であるが、砂層の落ち込みは、明治40年代までの水田が約30cmの段差になっており、地表面の段差になって表れていた。

東壁断面では、砂層の上部の黒褐色粘質土層が堆積している。断面図では、５、７層を切って、下層の砂が噴き上がった噴砂状のものが観察されたが、平面的には砂脈が形成されることなく、確定することはできなかった。また、第４層はＳＤ01、02、第５層が含まれているが、図化段階では認識できていなかったため、一層と把握した。

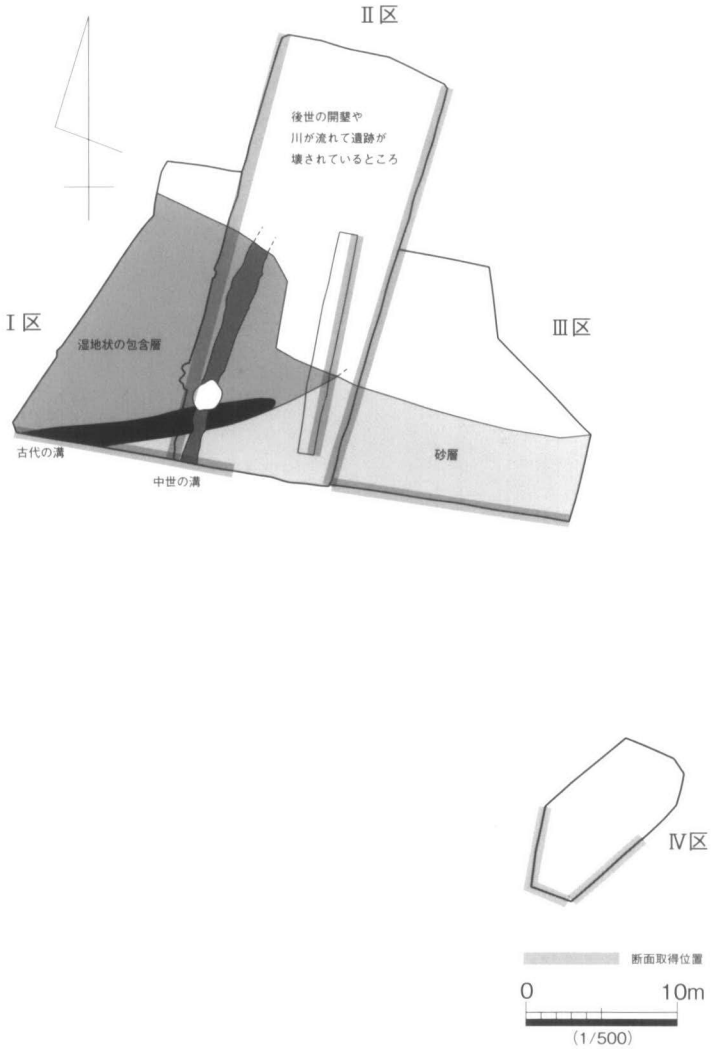


第９図　調査区割図

第12図は、Ⅰ～Ⅲ区の調査区南壁の断面図とⅣ区の断面図である。

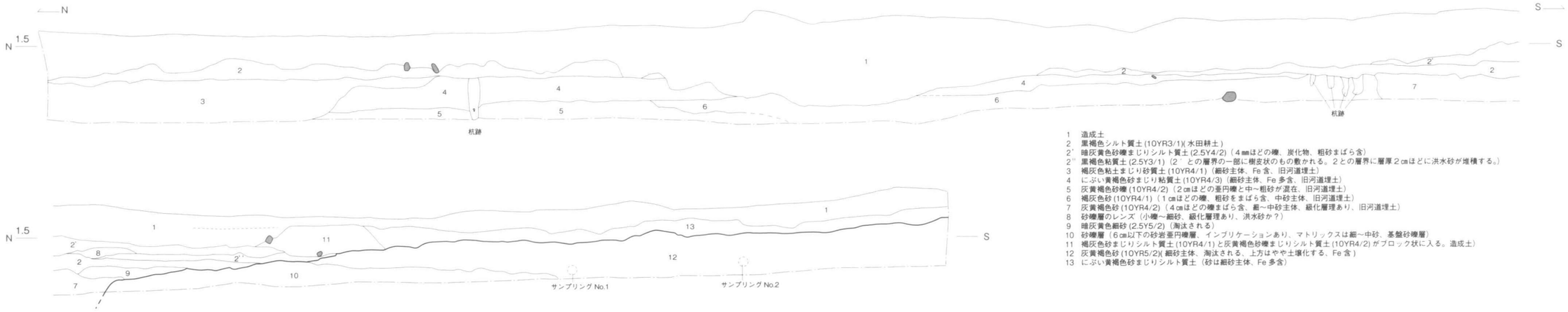
Ⅲ区では、造成土の直下に砂層が堆積しており、Ⅰ、Ⅱ区で西方に下がっている様子がわかる。また、第３層は、砂層の落ち込みの上面に見られる砂礫層である。第７層が弥生土器片を中心に遺物片を多く含む包含層で、ＳＤ01はその下層に、ＳＤ02は第７層の上面から掘り込まれている。

Ⅳ区の堆積状況は、Ⅰ～Ⅲ区と多少異なっているが、連続して土層を観察できないため推測が混じる。Ⅳ区の地山は、褐色シルト質土層で、下方で灰黄褐色細砂層に変わっていくが、この層がⅠ～Ⅲ区の砂層と連続している可能性が高いと考えられる。



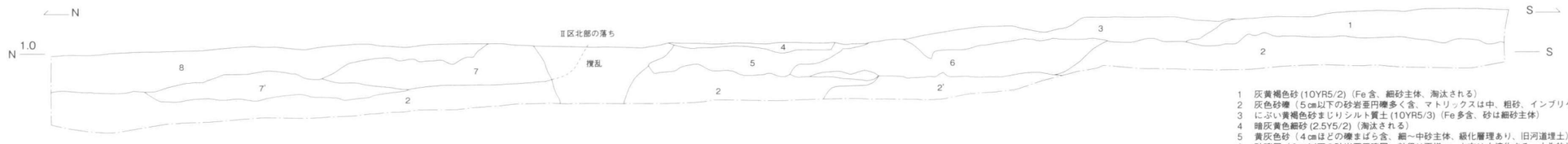
第10図　堆積状況と遺構配置模式図

Ⅱ区東壁断面



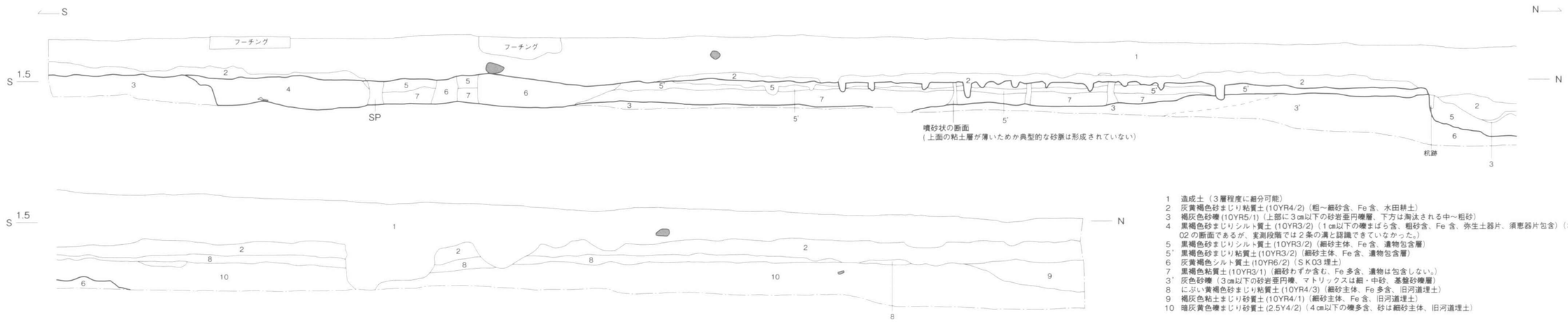
1　造成土
2　黒褐色シルト質土 (10YR3/1)(水田耕土)
2'　暗灰黄色砂礫まじりシルト質土 (2.5Y4/2)（4㎜ほどの礫、炭化物、粗砂まばら含）
2''　黒褐色粘質土 (2.5Y3/1)（2　との層界の一部に樹皮状のもの敷かれる。2との層界に層厚2㎝ほどに洪水砂が堆積する。）
3　褐灰色粘土まじり砂質土 (10YR4/1)（細砂主体、Fe 含、旧河道埋土）
4　にぶい黄褐色砂まじり粘質土 (10YR4/3)（細砂主体、Fe 多含、旧河道埋土）
5　灰黄褐色砂礫 (10YR4/2)（2㎝ほどの亜円礫と中～粗砂が混在、旧河道埋土）
6　褐灰色砂 (10YR4/1)（1㎝ほどの礫、粗砂をまばら含、中砂主体、旧河道埋土）
7　灰黄褐色砂 (10YR4/2)（4㎝ほどの礫まばら含、細～中砂主体、級化層理あり、旧河道埋土）
8　砂礫層のレンズ（小礫～細砂、級化層理あり、洪水砂か？）
9　暗灰黄色細砂 (2.5Y5/2)（淘汰される）
10　砂礫層（6㎝以下の砂岩亜円礫層、インブリケーションあり、マトリックスは細～中砂、基盤砂礫層）
11　褐灰色砂まじりシルト質土 (10YR4/1) と灰黄褐色砂礫まじりシルト質土 (10YR4/2) がブロック状に入る。造成土）
12　灰黄褐色砂 (10YR5/2)(細砂主体、淘汰される、上方はやや土壌化する、Fe 含)
13　にぶい黄褐色砂まじりシルト質土（砂は細砂主体、Fe 多含）

Ⅱ区断ち割り断面



1　灰黄褐色砂 (10YR5/2)（Fe 含、細砂主体、淘汰される）
2　灰色砂礫（5㎝以下の砂岩亜円礫多く含、マトリックスは中、粗砂、インブリケーション）
3　にぶい黄褐色砂まじりシルト質土 (10YR5/3)（Fe 多含、砂は細砂主体）
4　暗灰黄色細砂 (2.5Y5/2)（淘汰される）
5　黄灰色砂（4㎝ほどの礫まばら含、細～中砂主体、級化層理あり、旧河道埋土）
6　砂礫層（6㎝以下の砂岩亜円礫層、粒径は不揃い、上方は土壌化する、人為的堆積層）
7　褐灰色砂礫まじり粘質土 (10YR4/1)（2㎝以下の礫含、植物根含、下方は木本的な粘質土）
7'　褐灰色砂礫 (10YR4/1)（褐灰色はマトリックスの砂まじり粘土、4㎝以下の礫、インブリケーション）
8　褐灰色砂 (10YR4/1)（1㎝ほどの礫をまばらに含、粗砂含、中砂主体）

Ⅱ区西壁断面

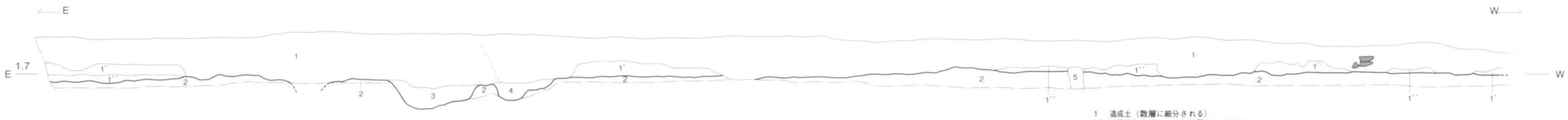


1　造成土（3層程度に細分可能）
2　灰黄褐色砂まじり粘質土 (10YR4/2)（粗～細砂含、Fe 含、水田耕土）
3　褐灰色砂礫 (10YR5/1)（上部に3㎝以下の砂岩亜円礫層、下方は淘汰される中～粗砂）
4　黒褐色砂まじりシルト質土 (10YR3/2)（1㎝以下の礫まばら含、粗砂含、Fe 含、弥生土器片、須恵器片包含）（ＳＤ01 と 02 の断面であるが、実測段階では２条の溝と認識できていなかった。）
5　黒褐色砂まじりシルト質土 (10YR3/2)（細砂主体、Fe 含、遺物包含層）
5'　黒褐色砂まじり粘質土 (10YR3/2)（細砂主体、Fe 含、遺物包含層）
6　灰黄褐色シルト質土 (10YR6/2)（ＳＫ03 埋土）
7　黒褐色粘質土 (10YR3/1)（細砂わずか含む、Fe 多含、遺物は包含しない。）
3'　灰色砂礫（3㎝以下の砂岩亜円礫、マトリックスは細・中砂、基盤砂礫層）
8　にぶい黄褐色砂まじり粘質土 (10YR4/3)（細砂主体、Fe 多含、旧河道埋土）
9　褐灰色粘土まじり砂質土 (10YR4/1)（細砂主体、Fe 含、旧河道埋土）
10　暗灰黄色礫まじり砂質土 (2.5Y4/2)（4㎝以下の礫多含、砂は細砂主体、旧河道埋土）

0　1m
(1/50)

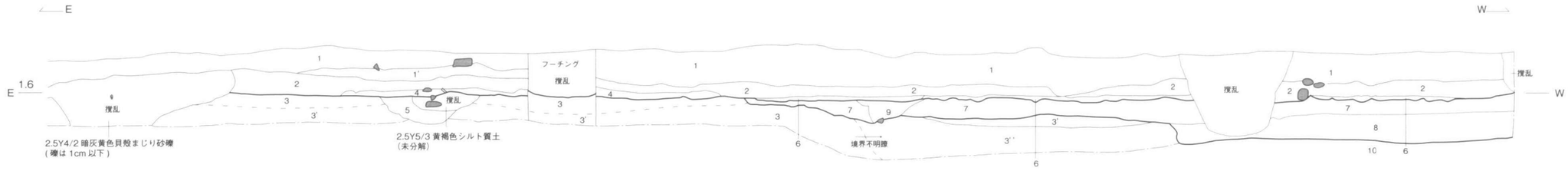
第 11 図　調査区断面図（1）

Ⅲ区南壁



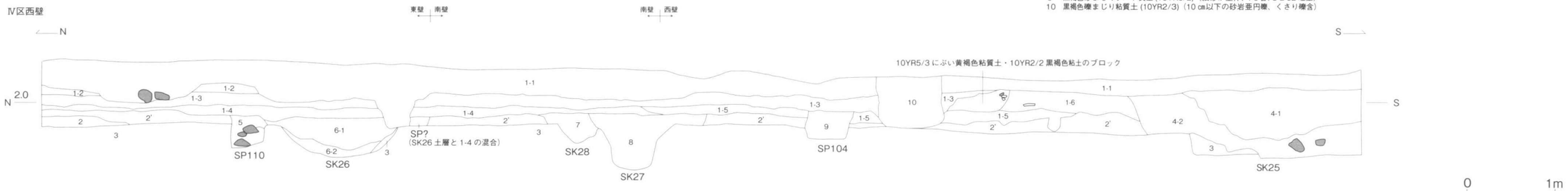
1　造成土（数層に細分される）
1′　暗灰黄色小礫まじり細砂質土 (2.5Y4/2)
1″　暗灰黄色細砂質土 (2.5Y4/2)（Fe 含）
2　にぶい黄褐色細砂 (10YR4/3)（淘汰される、Fe 含）
3　暗灰黄色礫まじり砂質土 (2.5Y4/2)（3㎝ほどの砂岩亜円礫含、攪乱）
4　黄灰色砂質土 (2.5Y4/1)（中～粗砂主体、粘土ブロック含、攪乱）
5　灰黄褐色砂 (10YR4/2)（細砂主体、粘土ブロック含、S P 埋土）

Ⅰ区南壁



1,1′ 造成土
2　灰黄褐色極細砂質土 (10YR5/2)（3㎜以下の礫、炭化物含、水田耕土）
3　灰色砂礫（3㎝以下の砂礫、インブリケーション）
3′　にぶい黄褐色砂 (10YR5/3)（中砂が主体、淘汰される）
3″　灰色砂礫（4㎝以下の砂岩、チャートなどの亜円礫、マトリックスは粗砂）
4　褐色極細砂質土（Fe 多含、床土）
5　暗灰黄色砂質土 (2.5Y4/2)（小礫含、溝底はやや粘質、S D03 埋土）
6　にぶい黄褐色礫まじり細砂質土 (10YR5/3)（5㎜ほどの礫まじる、中砂が主体、Fe 含）
7　黒褐色砂まじりシルト質土 (10YR3/2)（2㎜以下の砂粒含、Fe 多含、遺物包含層）
8　黒褐色砂礫まじりシルト質土 (10YR3/2)（3㎝以下の砂岩亜円礫、中砂含、S D01 埋土）
9　黒褐色砂まじりシルト質土 (10YR3/2)（細砂が主体、Fe 含、S D02 埋土）
10　黒褐色礫まじり粘質土 (10YR2/3)（10㎝以下の砂岩亜円礫、くさり礫含）

Ⅳ区西壁



1-1　造成土（花崗土など）
1-2　にぶい黄褐色シルト質土 (10YR4/3)（炭化物わずか含、粗砂わずか含、造成土）
1-3　にぶい黄褐色シルト質土 (10YR4/4)（層界に粘質土のバンドあり、造成土）
1-4　黒褐色粘質土 (10YR2/2)、灰黄褐色シルト質土 (10YR5/2)（混在して堆積、造成土）
1-5　灰黄褐色小礫まじり細砂質土（Fe 含、造成土）
1-6　灰黄褐色小礫まじり砂質土（5㎜以下の礫多含、造成土）
2　灰黄褐色細砂 (10YR4/2)（Fe 含、淘汰される）
2′　黒褐色砂まじり粘質土 (10YR3/2)（Fe 多含、2 層の土壌化層）
3　褐色シルト質土 (10YR4/4)（Fe 多含、Mn 含、15㎝ほど下は灰黄褐色細砂層に漸移、地山）
4-1　灰色砂礫（5㎜以下の礫～中砂主体、貝殻混入、淘汰悪い、SK25）
4-2　灰黄褐色粘質土 (10YR5/2)（Fe 多含、S K 25）
5　暗灰黄色シルト質土 (2.5Y4/2)（Fe 含、S P 110）
6-1　灰黄褐色細砂質土 (10YR5/2)（Fe・Mn 含　S K 26）
6-2　褐灰色細砂まじり粘質土 (10YR4/1)（Fe 含、S K 26）
7　灰黄褐色極細砂質土 (10YR5/2)・灰黄褐色粘質土 (10YR4/2) が未分解のままブロック状に堆積、S K 28）
8　灰黄褐色極細砂質土 (10YR4/2)（黒褐色粘質土 (10YR3/2) のブロック含、S K 27）
9　灰黄褐色粘質土 (10YR4/2)（未固結、S P 104）
10　にぶい黄褐色粘質土 (10YR5/3)・粘土粘土黒褐色 (10YR2/2) がブロック状に堆積、攪乱

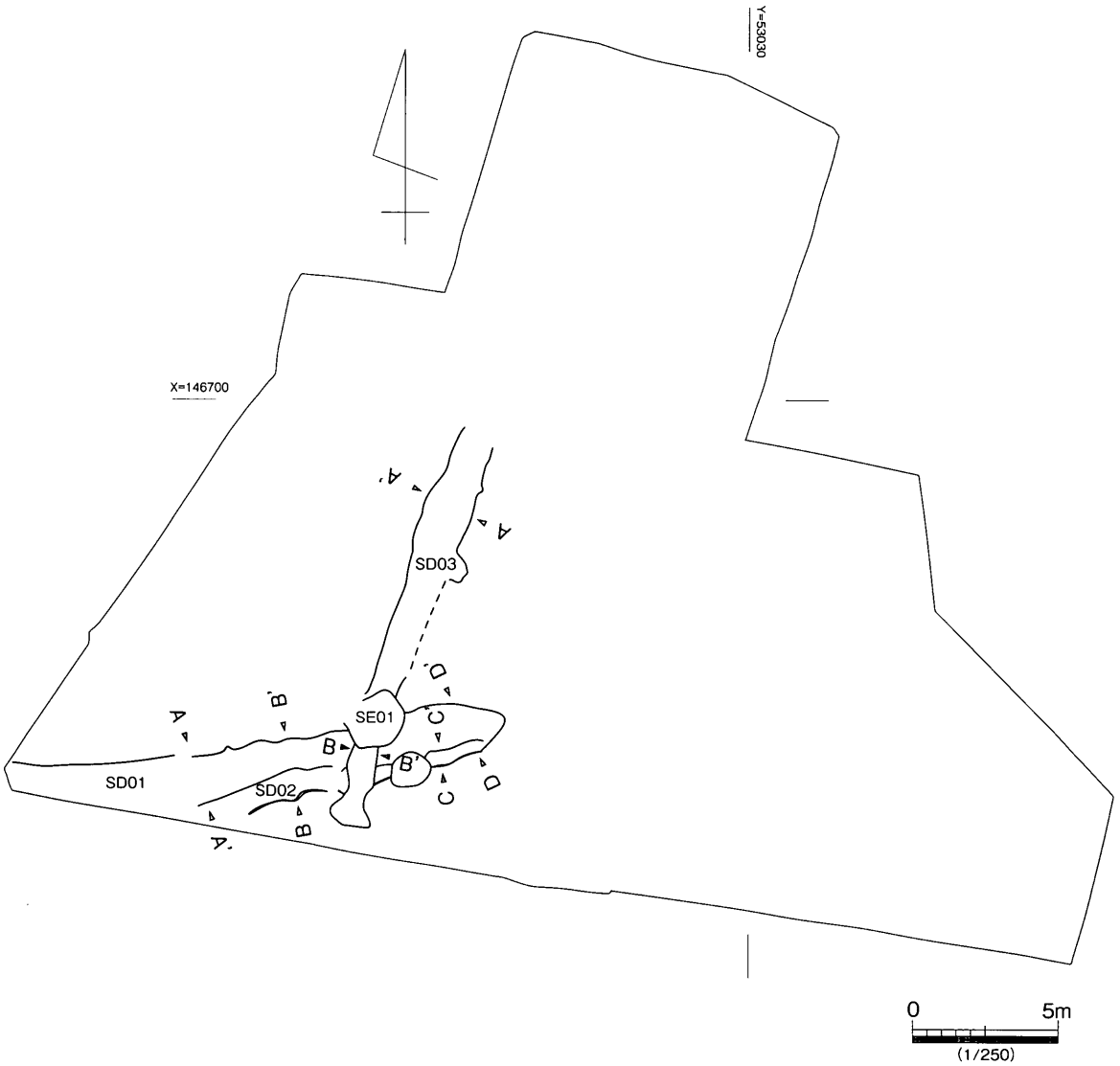
第 12 図　調査区断面図（2）

第２節　遺構・遺物

ＳＤ01

Ⅰ区南部からⅡ区にかけて、砂層の微高地の縁辺に沿うように東西方向に流れる溝状遺構である。西方では幅約２ｍ、深さ約0.5ｍの規模で、東方に向かい次第に浅くなり、Ⅱ区で消滅する。埋土は西方では２層に分層されるが、東方では下層が欠落する。上層の黒褐色砂混じり極細砂質土層も下層の黒色粘質土層も、所々に黒色粘土のブロックを含んでおり、人為的に埋め戻された可能性がある。ＳＤ01からは28リットル入りコンテナ2.5箱分の遺物が出土したが、細片が多い。第15図はⅡ区出土、第16図はⅠ区上層出土、第17図はⅠ区下層出土の遺物実測図である。

１は、弥生土器壺で、直立する頸部から斜め上方に短く屈曲する口縁である。摩滅している。２～４は「く」の字状に屈曲する口縁をもつ弥生土器甕である。４は下川津Ｂ類土器である。いずれも摩滅している。５～７は高杯の脚部片である。５、６は著しく摩滅している。７は細く直立する軸部からラッパ状に開く裾部をもち、金雲母、赤色粒を含む特徴的な胎土である。８～10は製塩土器の脚部片、11



第13図　SD01～03平面図

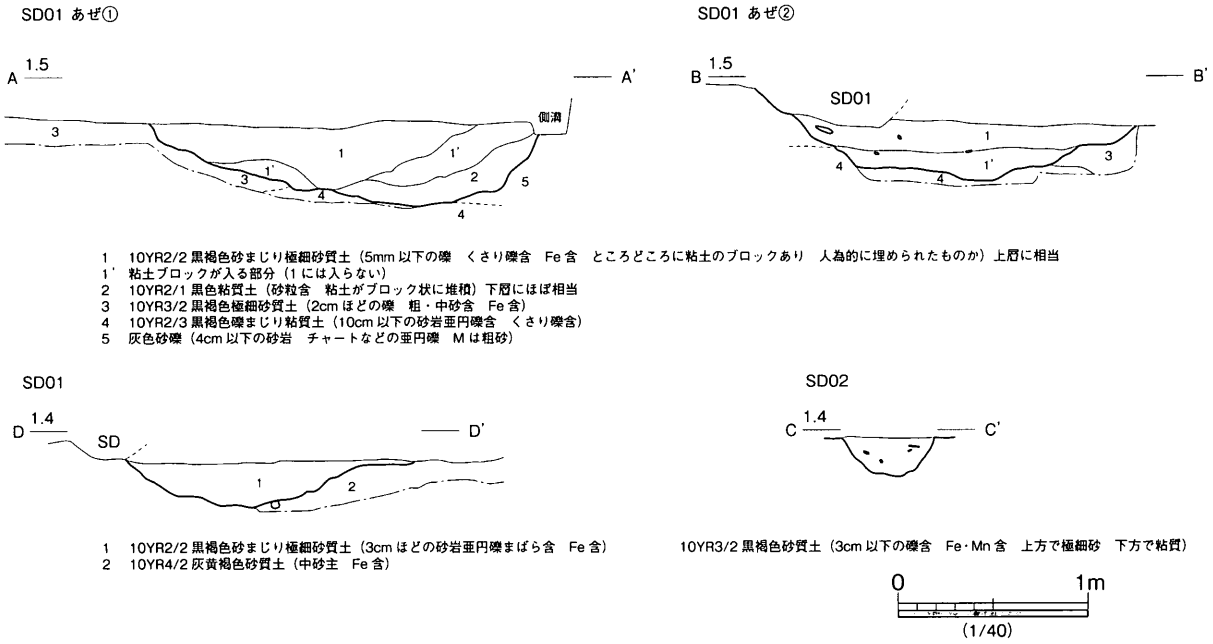
はふいごの羽口の破片である。

12～14は弥生土器壺で、いずれも細片である。14は下川津B類土器である。15は弥生土器高杯（もしくは鉢）の口縁部で、下川津B類土器である。23は安山岩製の打製石包丁である。

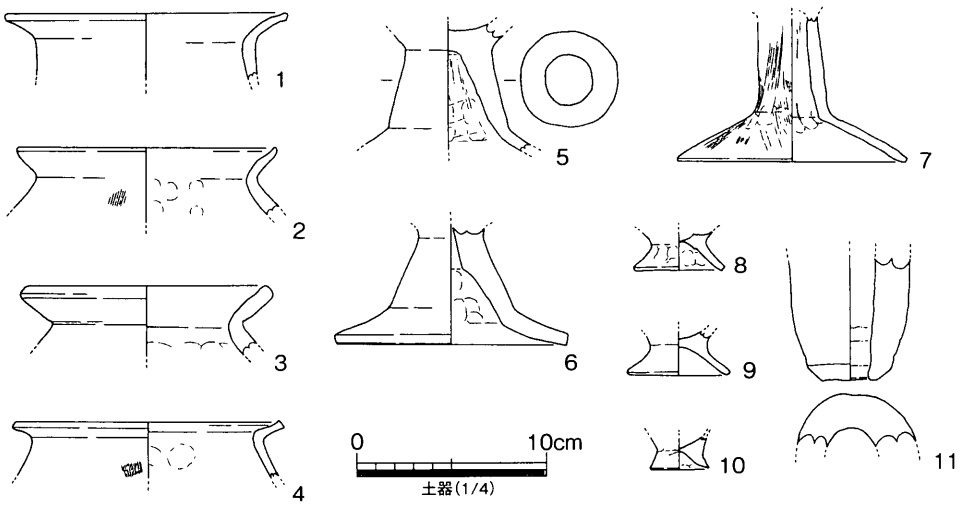
18は、須恵器杯で、内外面に火襷が見られる。19は須恵器皿で、口縁端部はやや外湾気味に丸く収束している。20は須恵器平瓶で、ＳＤ01検出作業中にほぼ完形で出土した。口縁は外上方に開き、口頸部中央に沈線を施し、体部は肩部に稜をもつが、全体に丸みを帯びたつくりである。21は須恵器甕で、外湾気味に立ち上がる口縁で、端部の外側を肥厚させている。ヘラ記号が認められる。

22は内面黒色の黒色土器椀の底部片である。ＳＤ01の検出作業中に出土したもので、ＳＤ01の上面を覆う包含層に含まれていた可能性がある。

24は弥生土器甕で、明瞭な稜をもたずに「く」の字状に屈曲する口縁で、薄手につくられている。



第14図　SD01,02断面図



第15図　SD01（Ⅱ区）出土遺物実測図

25は弥生土器高杯の脚部小片、26は製塩土器の脚部片である。27は須恵器高杯の脚部小片、28は須恵器平瓶である。ＳＤ01の溝底に接して検出した。28の口縁部は欠損しており、体部は全体に丸みを帯びたつくりである。口頸部と体部の境界付近の体部にヘラ記号が認められる。

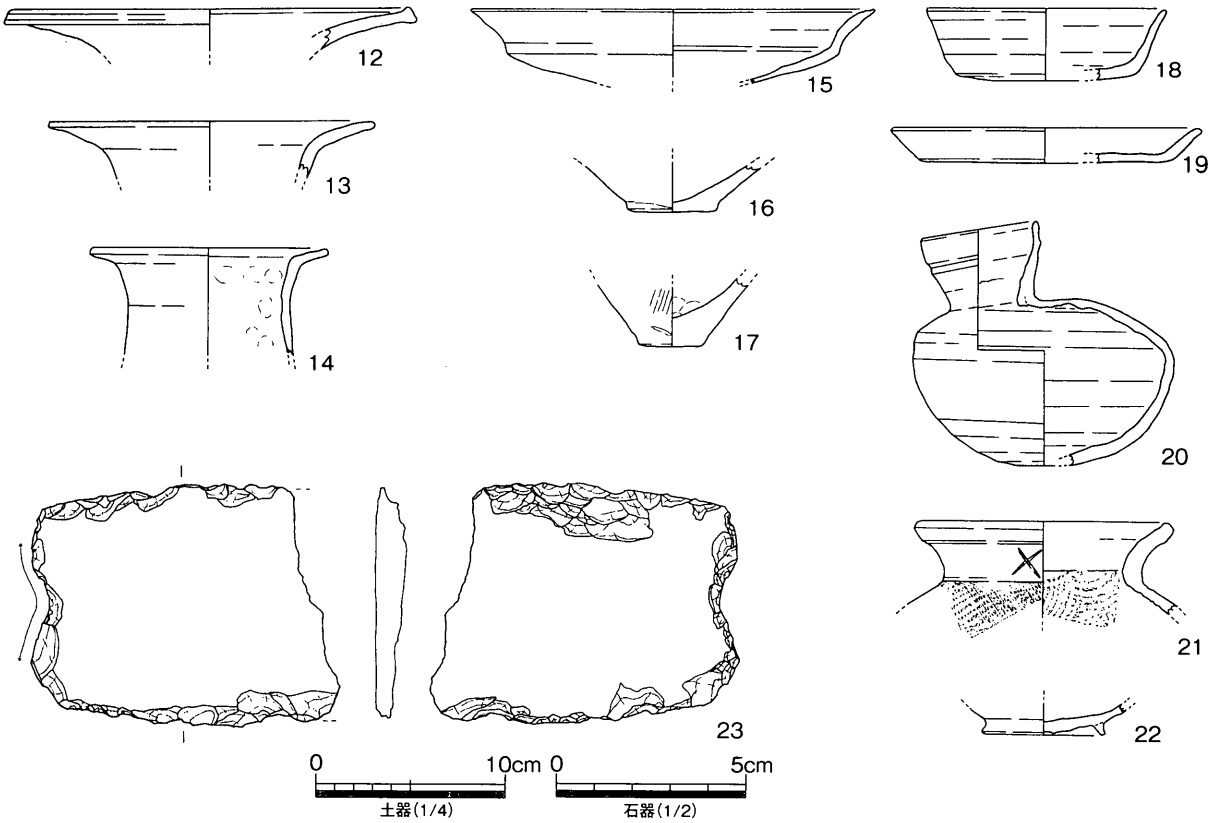
以上のようにＳＤ01には、弥生時代後期と古代の遺物が混在している。土器は弥生時代後期の細片が多い。南へ約50ｍ離れた高松市教委調査の木太中村遺跡５工区の中央部以南から、弥生時代後期の遺構が検出されていることから、ＳＤ01の東南方向の微高地上にも当該期の集落が存在し、削平されて堆積した可能性が考えられる。古代の遺物は、年代を特定する資料に恵まれないが、概ね７世紀後半期から８世紀前半期のものと考えられる。

ＳＤ02

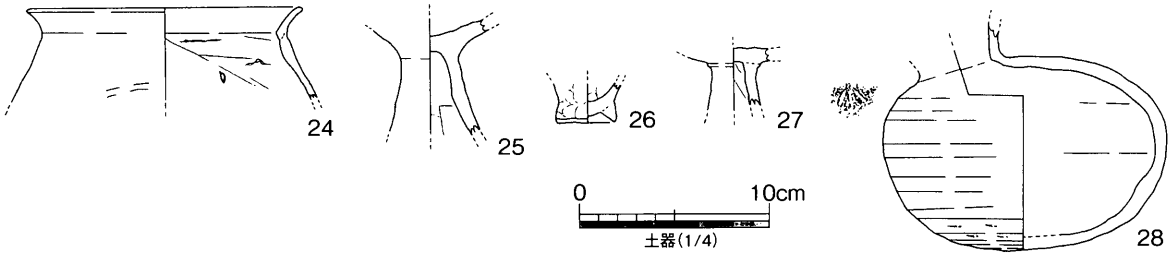
ＳＤ01と平行するように砂からなる微高地の縁辺を周る溝跡である。ＳＤ01埋没後に堆積した包含層の上面から掘り込まれている。切り合い関係から、後述するＳＤ03よりも古い。幅約0.5ｍ、深さ約0.2ｍの規模で、多量の弥生時代後期土器の細片を包含している。これらの細片は、ＳＤ01のものよりも相対的に摩滅している。

第18図は、ＳＤ02出土の遺物実測図である。29は須恵器甕で、外湾気味に立ち上がる口縁の端部外側を肥厚させている。30は弥生土器の壺か甕の底部、31はサヌカイト製の凹基式石鏃、32は安山岩系の火山岩製の有溝石錘である。

ＳＤ02の年代を特定することは困難で、ＳＤ01と03の間のいずれかの時期であることしかわからない。



第16図　SD01上層（Ｉ区）出土遺物実測図



第17図　SD01 下層（Ⅰ区）出土遺物実測図

ＳＤ03

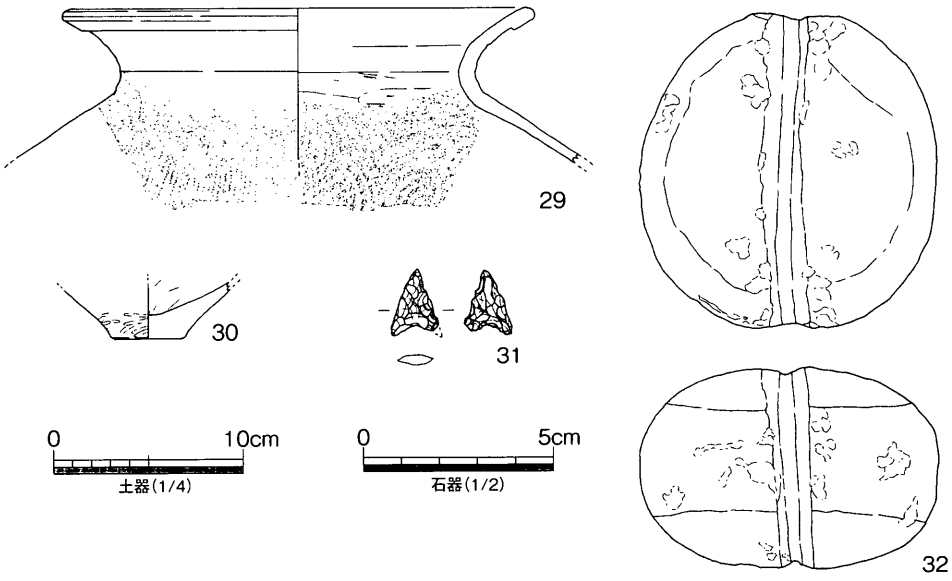
Ⅱ区で検出した溝状遺構である。座標北から東へ12～19度程振った方向で、東側にわずかに湾曲しながら流れている。当地域の条里型地割の方向より若干東に振った方向である。検出長は約15ｍで、北は後世の削平によって途切れ、南は調査区外に延びている。規模は、幅約0.8～1.6ｍ、深さ0.4～0.5ｍを測る。

ＳＤ01は、試掘トレンチの北端付近からＳＥ01までの範囲を中心に多量の土器片が含まれ、その北と南は対照的に少量の土器片が出土した。多量の土器片は、拳大から犬頭大の礫とともに投棄された状況である。滞水状況にあれば、椀等は見込みを上に、一定の流れのある場合には、底を上にして出土する傾向があるが、ＳＤ01の場合は、どちらかに偏ることなく投棄という出土状況であった。なお、なるべく土器を取り上げずに掘削し、写真撮影後、遺物を上層出土として取り上げ、つぎに現れた土器を下層として取り上げたが、層位的に区別されるものではなく単一層からの出土である。

第20～29図は、ＳＤ03出土の遺物実測図である。

第20図33～43は土師質土器小皿で、37の底部が回転糸切りの他は、回転ヘラ切りしているものが多い。44～59は瓦器小皿である。形状が歪んでいるものが多い。60～64は土師質土器杯である。60、63、64の底部は回転ヘラ切りで、それ以外は摩滅のため不明である。65は高い高台を付した土師質土器杯、66は土師質土器椀である。

67～92は吉備系土師質土器椀である。灰白色の色調で、胎土中に1mmほどの砂粒が含まれるという点で共通する。形態も、断面が幅の狭い高台を付し、口縁部下が横ナデによって、最も器壁が薄くな



第18図　SD02　出土遺物実測図

り、やや肥厚気味の口縁をもつという点で共通する。内外面にミガキ調整は認められない。口径は13.0～15.2cm、器高は4.2～4.7cmの範囲内に収まり、なかでも口径13.2～13.7cm、器高4.2～4.5cmの範囲に収まるものが多い。以上の点は、山本悦世氏によるＣ１類の特徴をもつものである。

92は両面黒色の黒色土器椀の底部細片である。93～97は須恵器椀（西村型土器椀）である。幅３mmほどのヘラミガキが間欠に施されている。94は土師質、それ以外は瓦質に焼成される。98、99は須恵器椀である。98は小片で産地等の情報は得られない。99は形態から東播系と考えら、見込み部にくぼみを持たず、森田稔氏による第Ⅷ期のものと判断される。

第21～23図の100～142は瓦器椀で、100、101は楠葉型、102～134は和泉型である。楠葉型の椀は、口縁部内側に沈線を一条巡らすもので、101の内面にはヘラミガキが認められるが、外面には見られない。内面のヘラミガキは幅約１mmのものが間欠に施され、見込み部はジグザグ状である。口径13.4cm、器高5.0cmを測り、橋本久和氏によるⅢ-１かⅢ-２期に所属するものと考えられる。

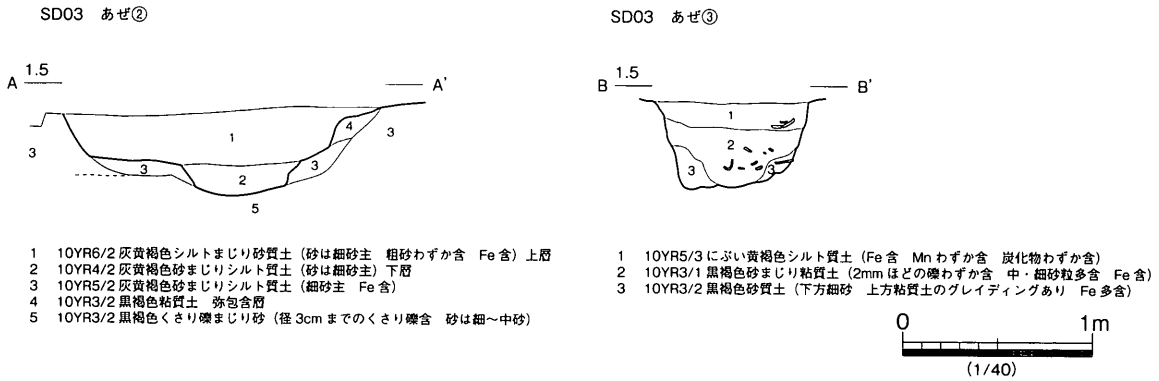
102～134の和泉型瓦器椀は、形状が歪んだものが多く、実測は基本的に口縁を基準にして行った。調整は、外面にヘラミガキは見られず、内面に疎らに施されている。見込みの暗文は平行線状が基本である。高台は矮小化し、断面は半球状のものや尖ったものがある。口径は13.6～16.8cm、器高3.5～5.1cm（平均口径15.0cm、器高4.1cm）で、概ね口径14.6～16.0cm、器高3.7～4.7cmの範囲に大半が収まるものである。以上の様相から、尾上実氏によるⅢ-２期に所属するものと考えられる。

第23図143～152は、龍泉窯系青磁椀で、143のように飛雲文を片彫りしたものと、145のように蓮華文を片彫りしたものがある。底部付近は、底部の器肉が厚く断面四角形の高台を付している。高台まで施釉し、高台部畳付およびその内部は露胎である。147、150は外面に縦方向の櫛目が見られる。以上の様相から、これらの資料は、森田勉・横田賢次郎両氏による龍泉窯系青磁椀Ⅰ-２類、Ⅰ-４類に所属するものと考えられる。なお、口縁に輪花のあるものは見られない。

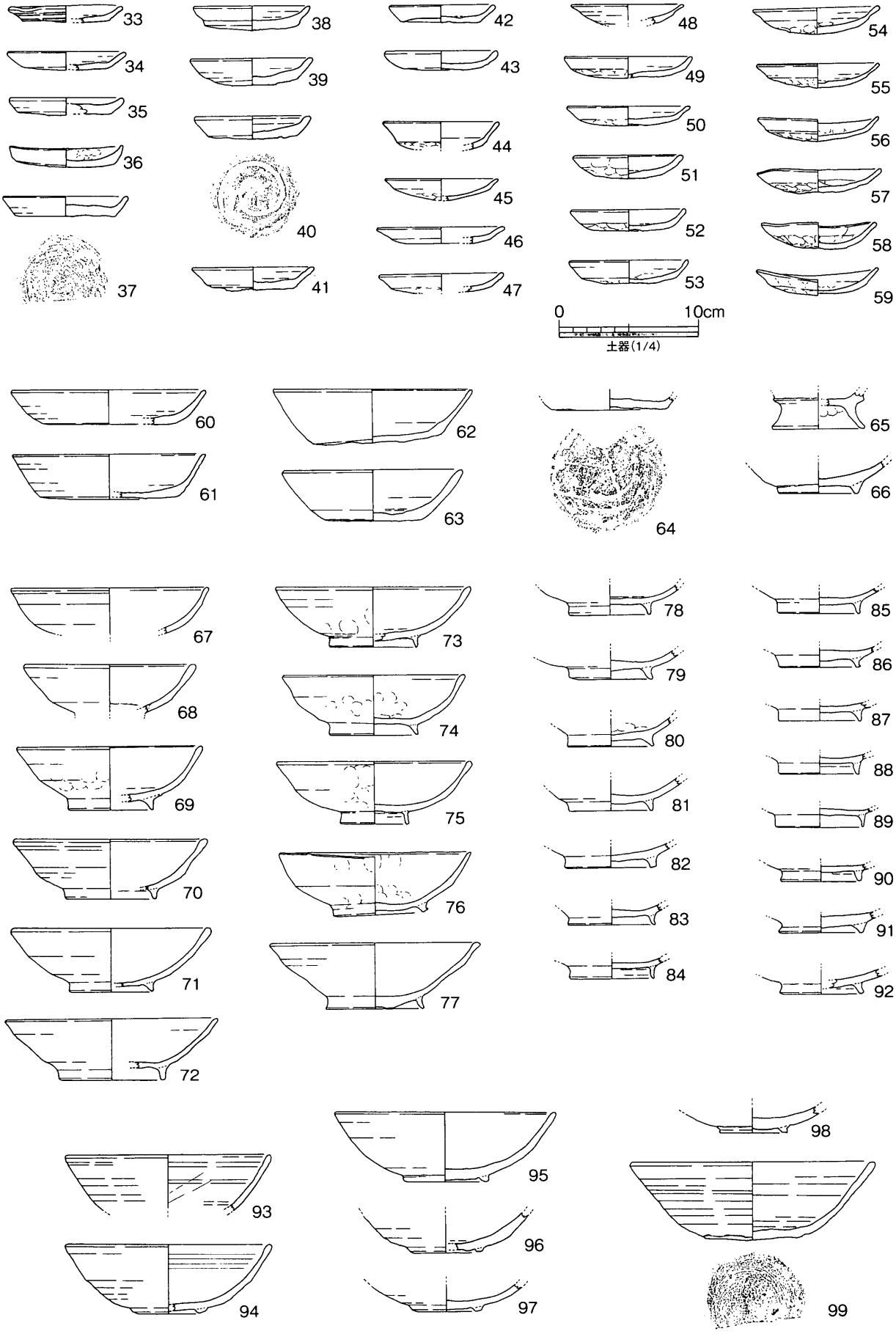
第23図153～156は、同安窯系青磁皿である。体部中位で屈曲し、体部と見込みの境に段をもつ形態で、内面にヘラによる片彫りと櫛によるジグザグ文様を施している。底部は露胎である。これらは、森田勉・横田賢次郎両氏による同安窯系青磁皿Ⅰ類に所属するものである。

第23図157は、白磁椀の口縁部の小片で、玉縁状を呈する。

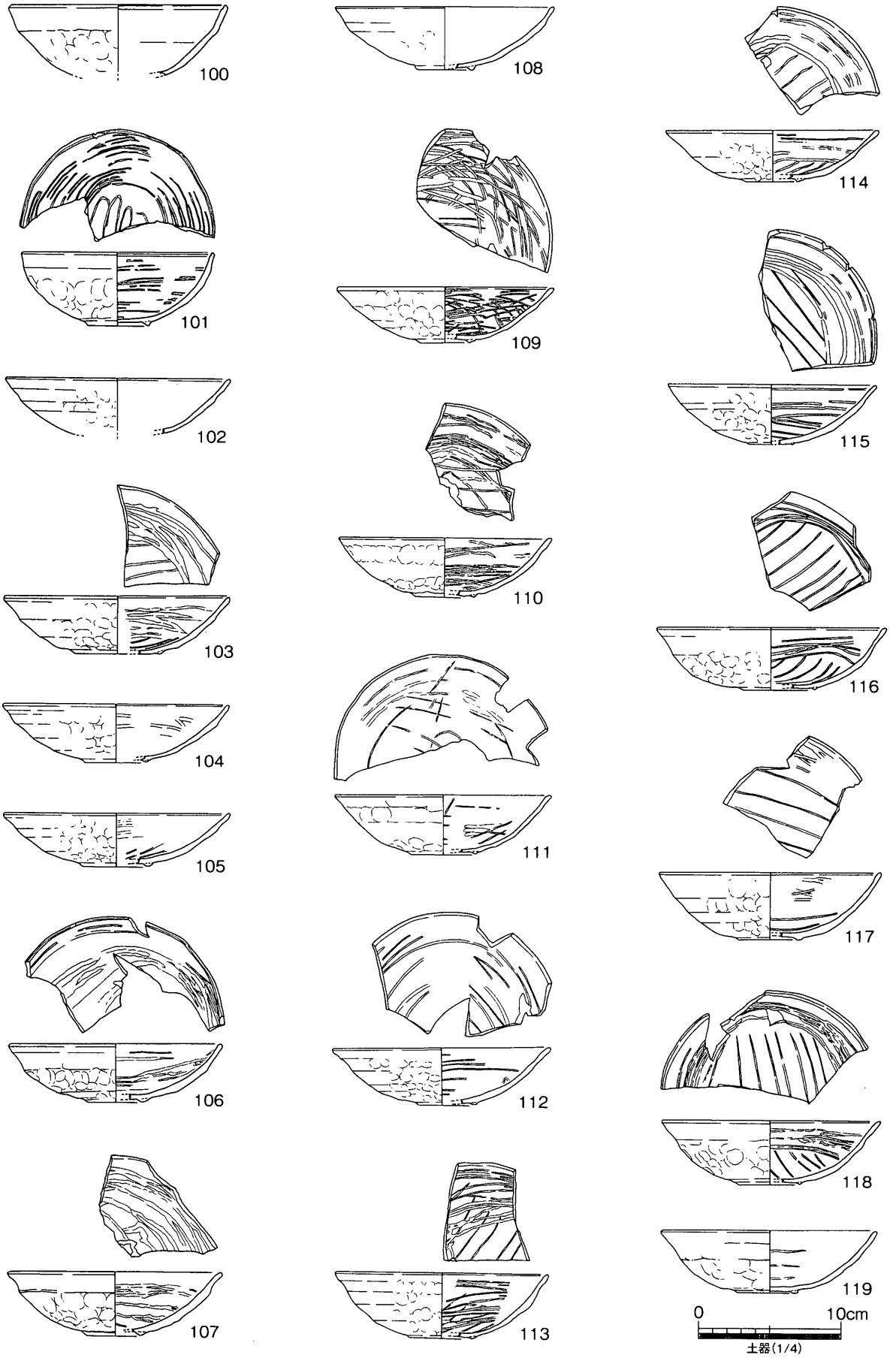
第23図158～163は、東播系の須恵器鉢である。体部上半から口縁部にかけてわずかに外反し、口縁端部の拡張は上下両方向にわずかに拡張している。口径は、26.8～31.0cmで、底部が残る162、163は回転糸切りされている。以上の様相は、森田稔氏による第Ⅷ期第２段階に所属するものである。



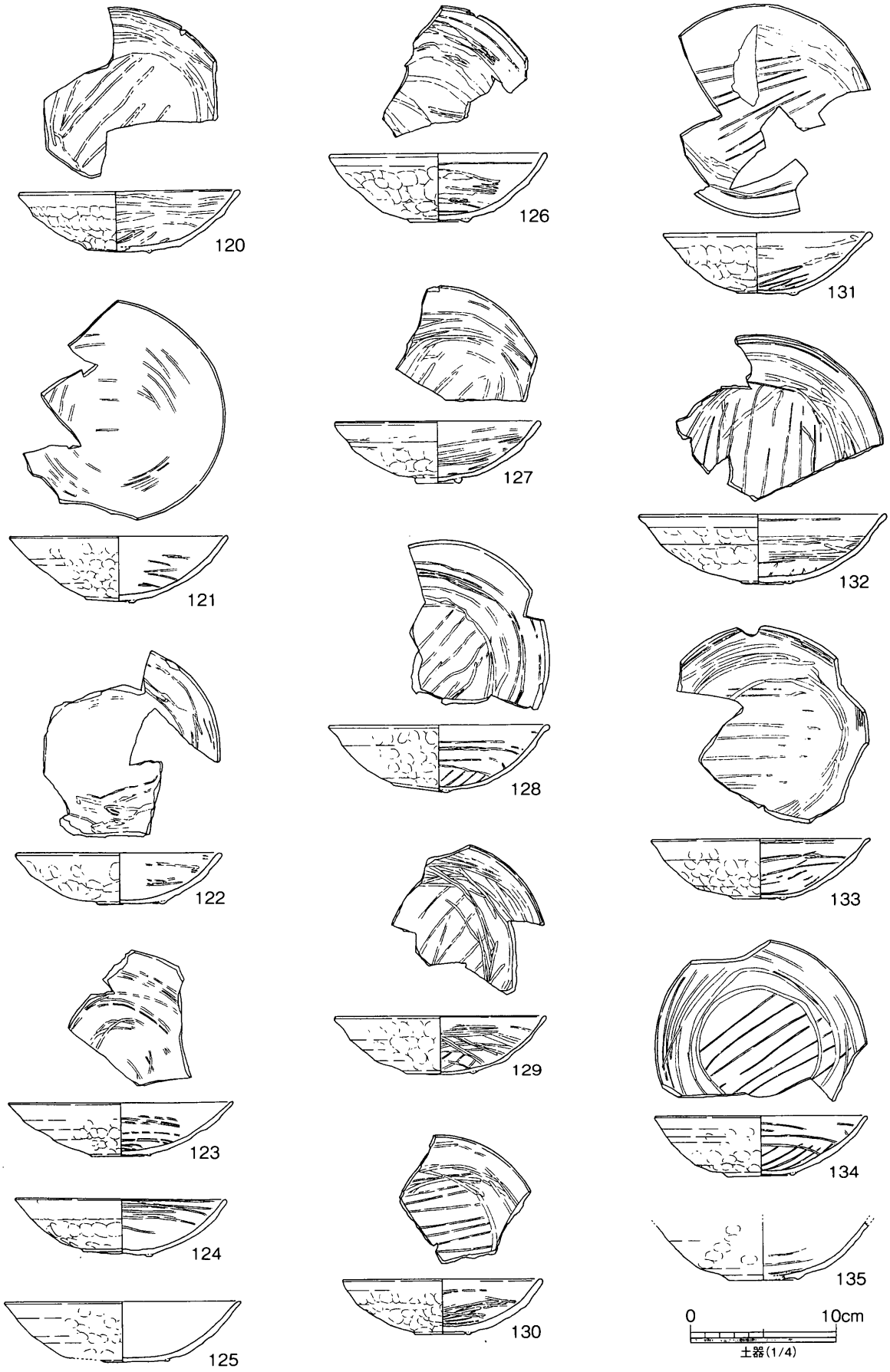
第19図　SD03断面図



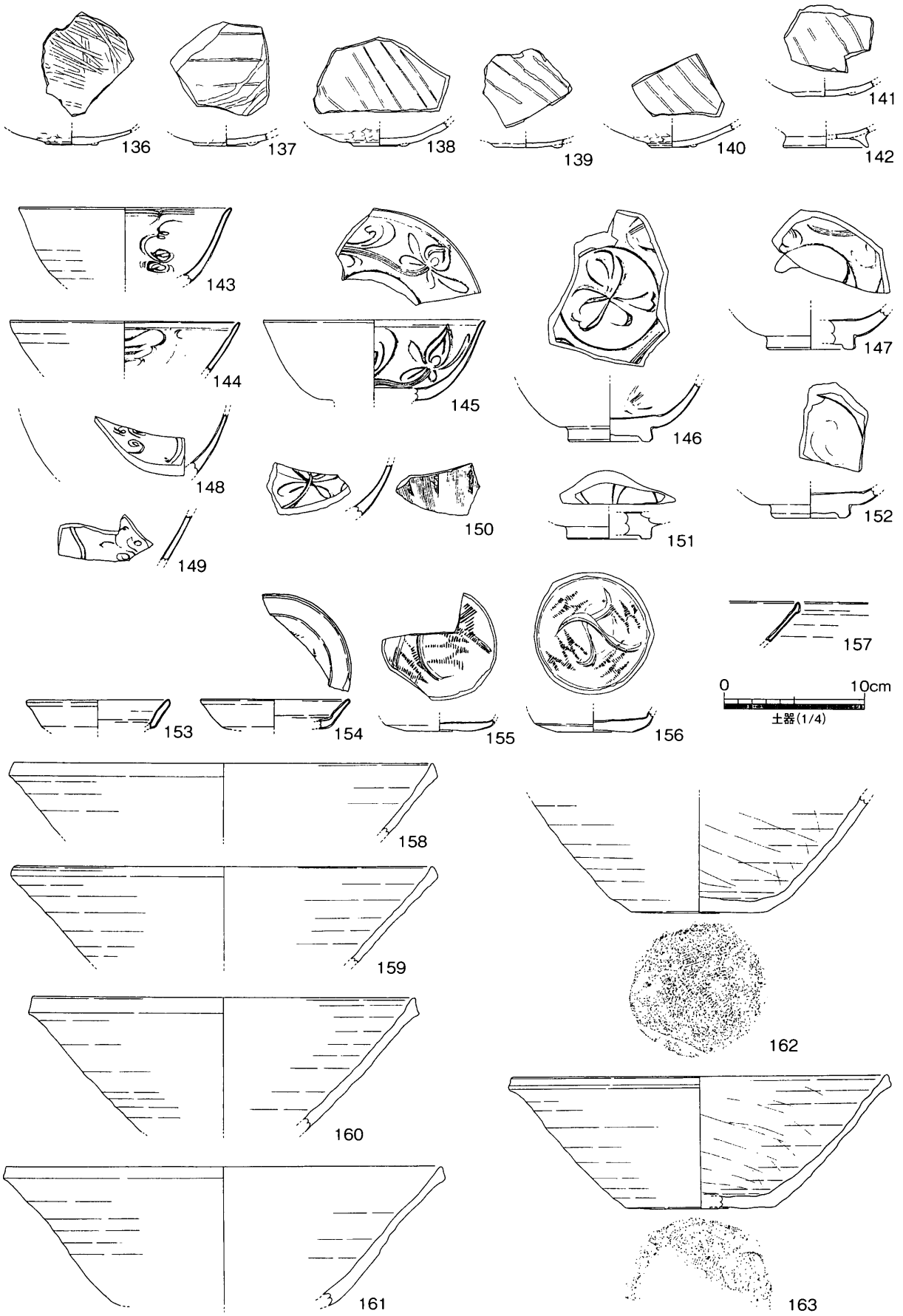
第 20 図　Ⅱ区 SD03 出土遺物実測図 (1)



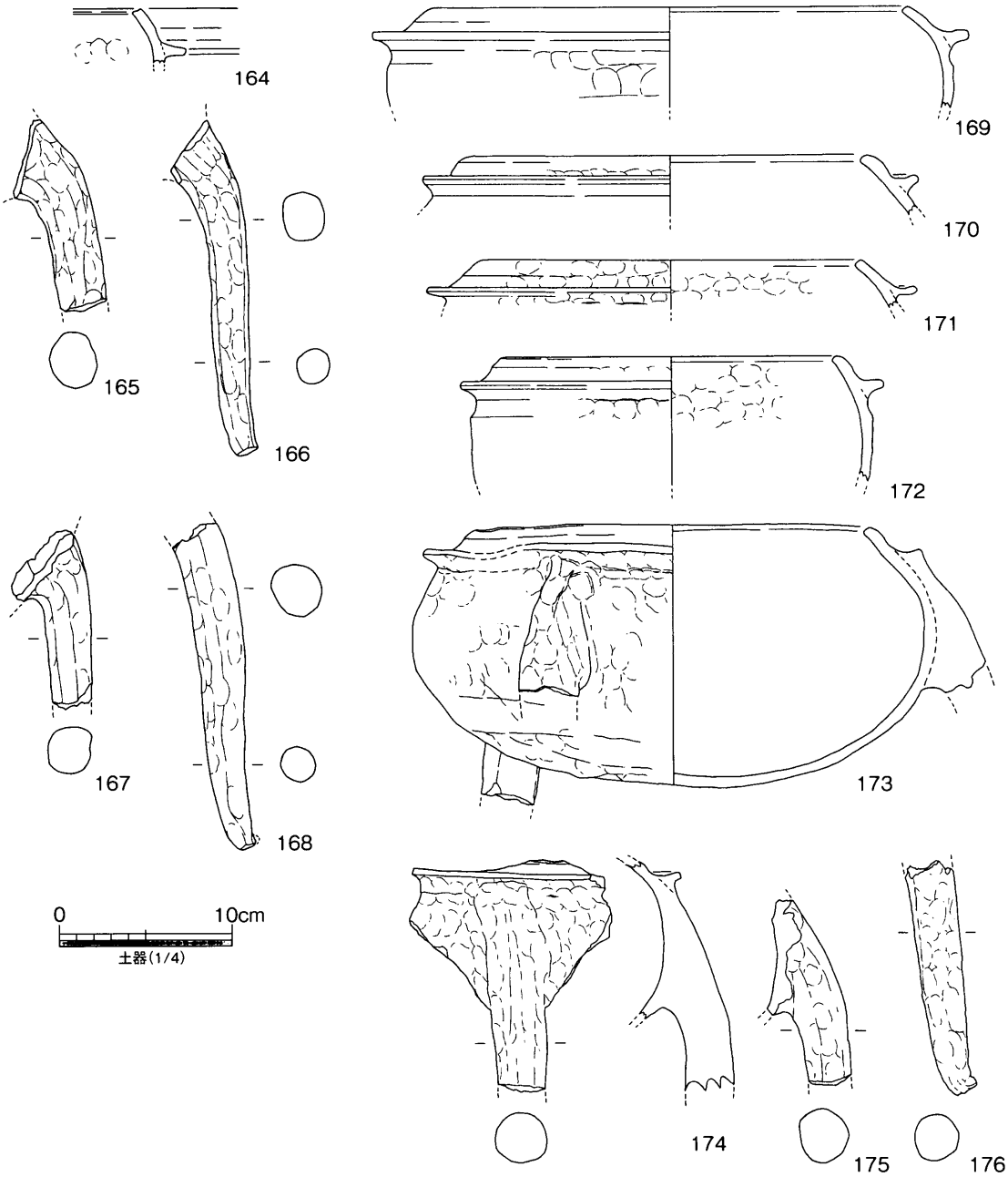
第 21 図　Ⅱ区 SD03 出土遺物実測図 (2)



第 22 図　Ⅱ区 SD03 出土遺物実測図 (3)



第 23 図　Ⅱ区 SD03 出土遺物実測図 (4)



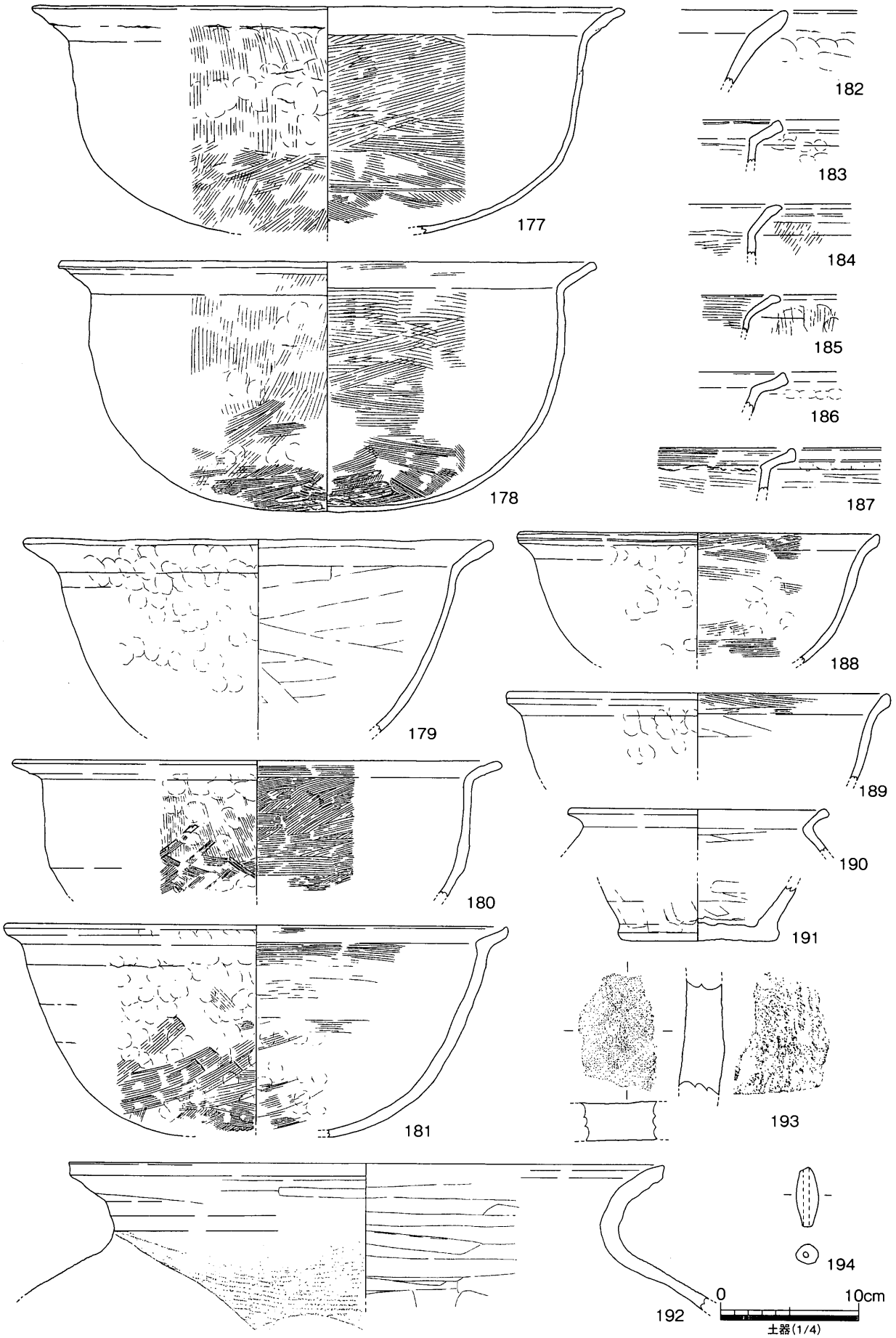
第 24 図　Ⅱ区 SD03 出土遺物実測図 (5)

第 24 図 164 は土師質土器土釜の口縁部小片、165 ～ 168 は土師質土器足釜の脚部である（土釜のうち、脚部が付くことが明白な場合を足釜、不明な場合を土釜と呼称することとする）。

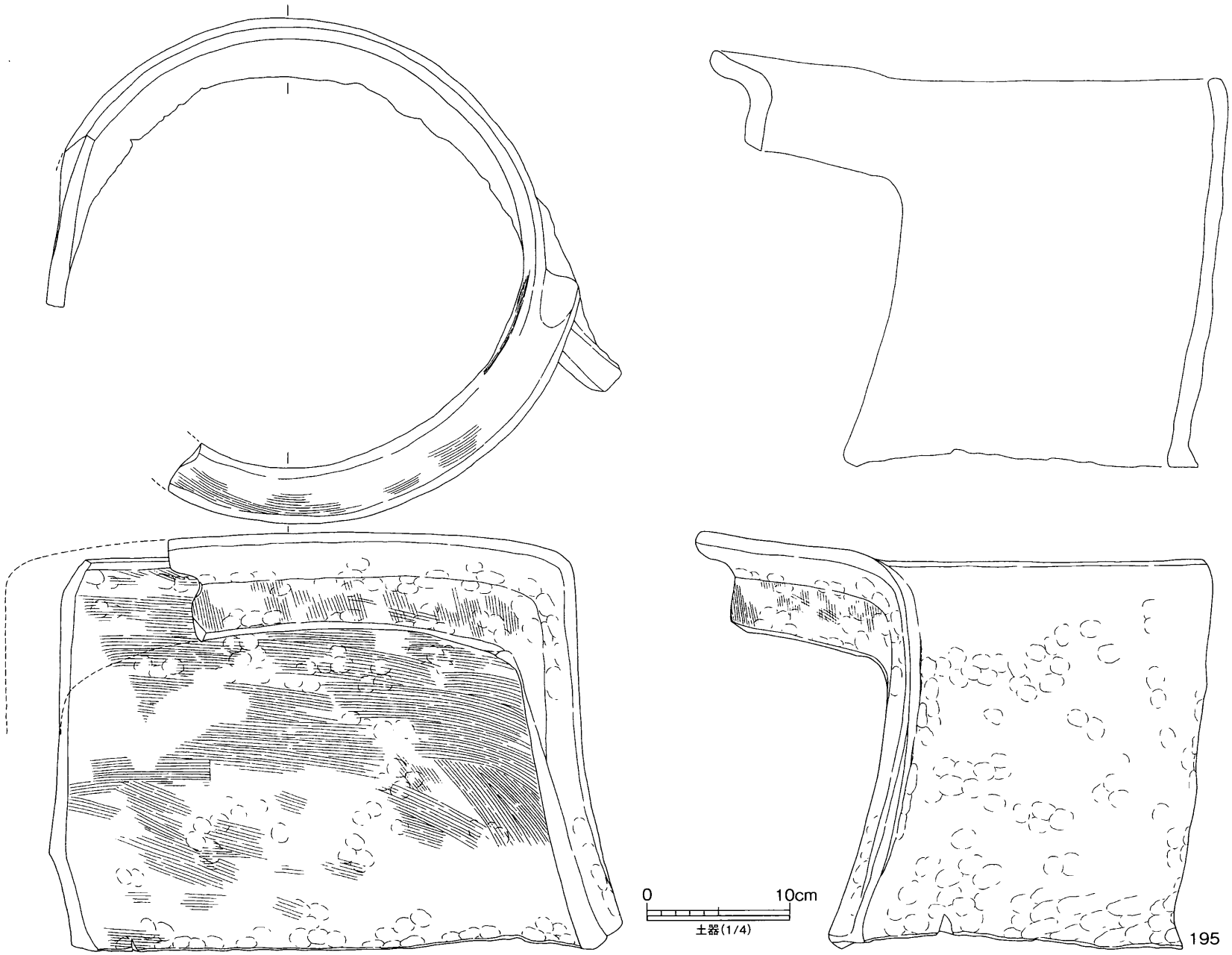
169 ～ 176 は瓦器土釜・足釜で、口縁部は大きく内傾し、体部はやや偏平な球形を呈する。口縁下 2 cmほどのところに鍔を付している。173、174 は鍔と脚部との関係がわかるが、鍔直下から体部側面に脚を付している。器面には指頭痕が残るが、細部調整は見られない。

近畿地方では、各時代・地域によって、それぞれ形態・製作技法・調整技法・焼成方法等を異にする土釜群が存在し、一定地域に分布する土釜の「型」が確認できるとされているが、169 ～ 176 は、山城国に分布するものと共通する要素が多い。香川県での出土例は稀少である。

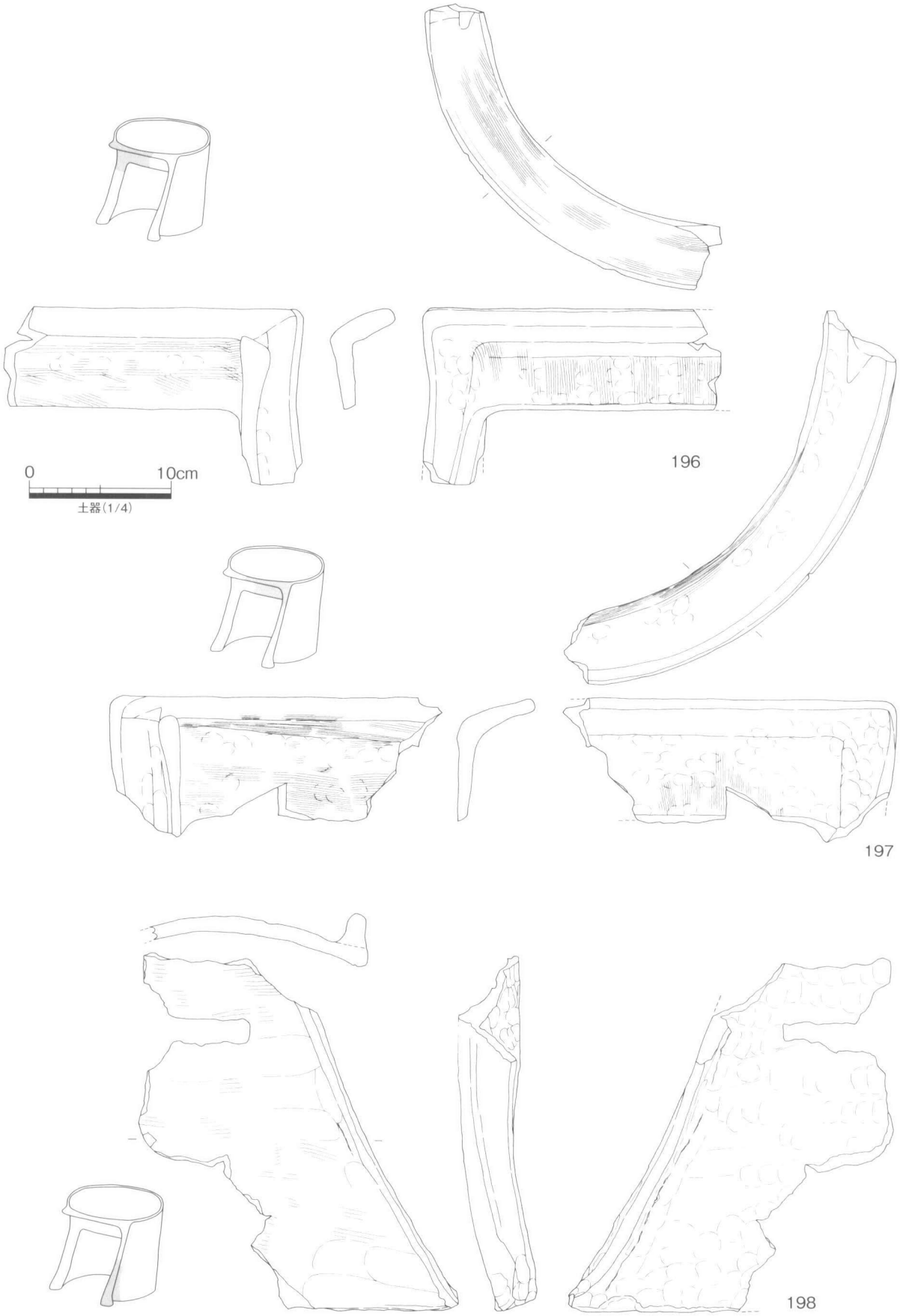
第 25 図 177 ～ 189 は土師質土器土鍋で、177、178 は色調、形態や製作技法から吉備系土師質土器土鍋と考えられる。半球状の体部と外側に直線的に開く口縁をもつ。完形に復原できる 178 について見る



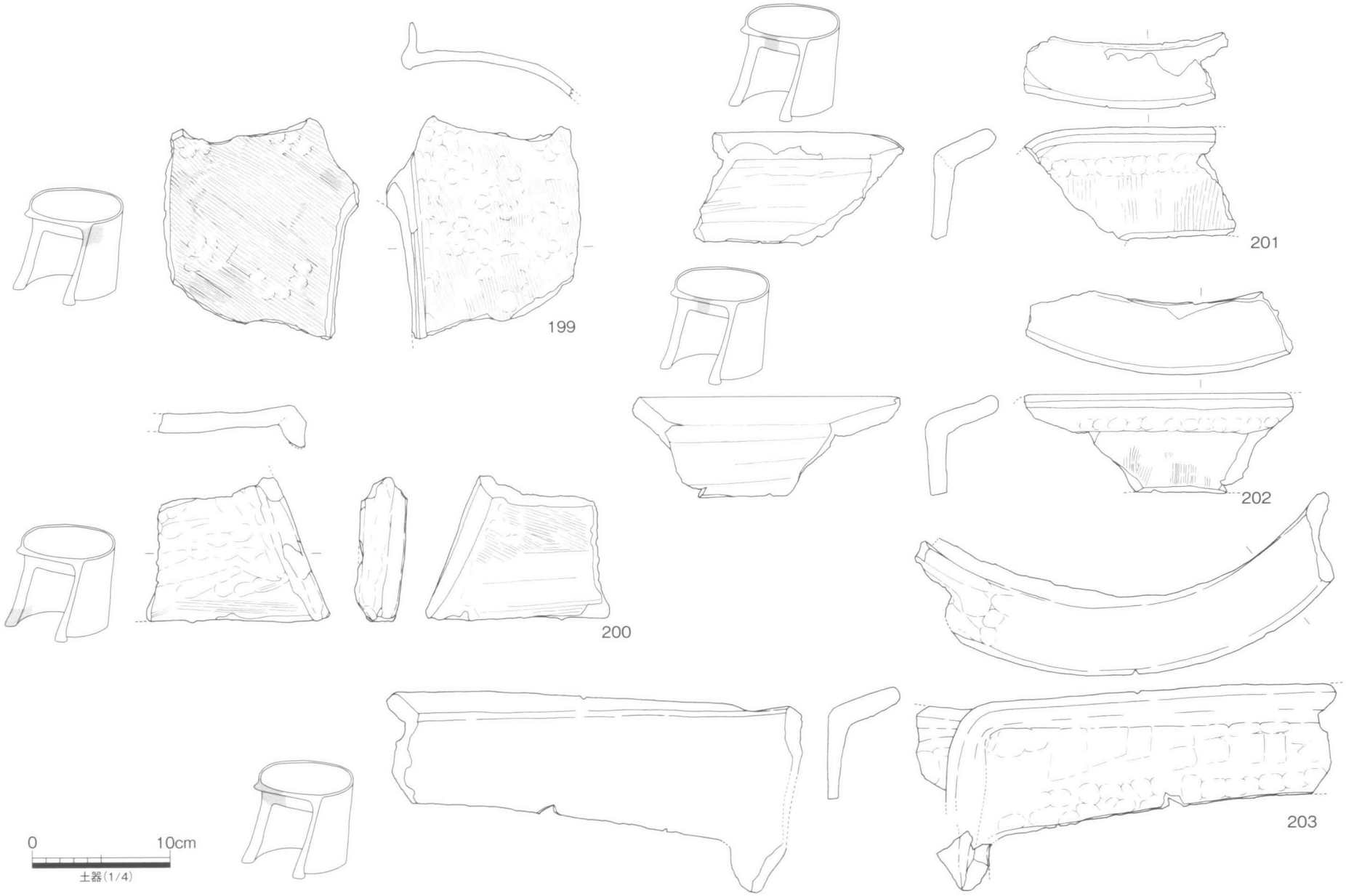
第 25 図　Ⅱ区 SD03 出土遺物実測図 (6)



第 26 図　Ⅱ区 SD03 出土遺物実測図 (7)



第 27 図　Ⅱ区 SD03 出土遺物実測図 (8)



第 28 図　Ⅱ区 SD03 出土遺物実測図 (9)

と、口径38.6cm、器高17.9cmを測り、器壁は底部で4㎜、体部で5㎜と非常に薄いことがわかる。調整はハケで、体部外面は縦方向、内面は横方向、底部は格子状に施されている。

以上の様相は、山本悦世氏によるCタイプに所属するものであり、器高からⅢ-1期に所属するものと考えられる。

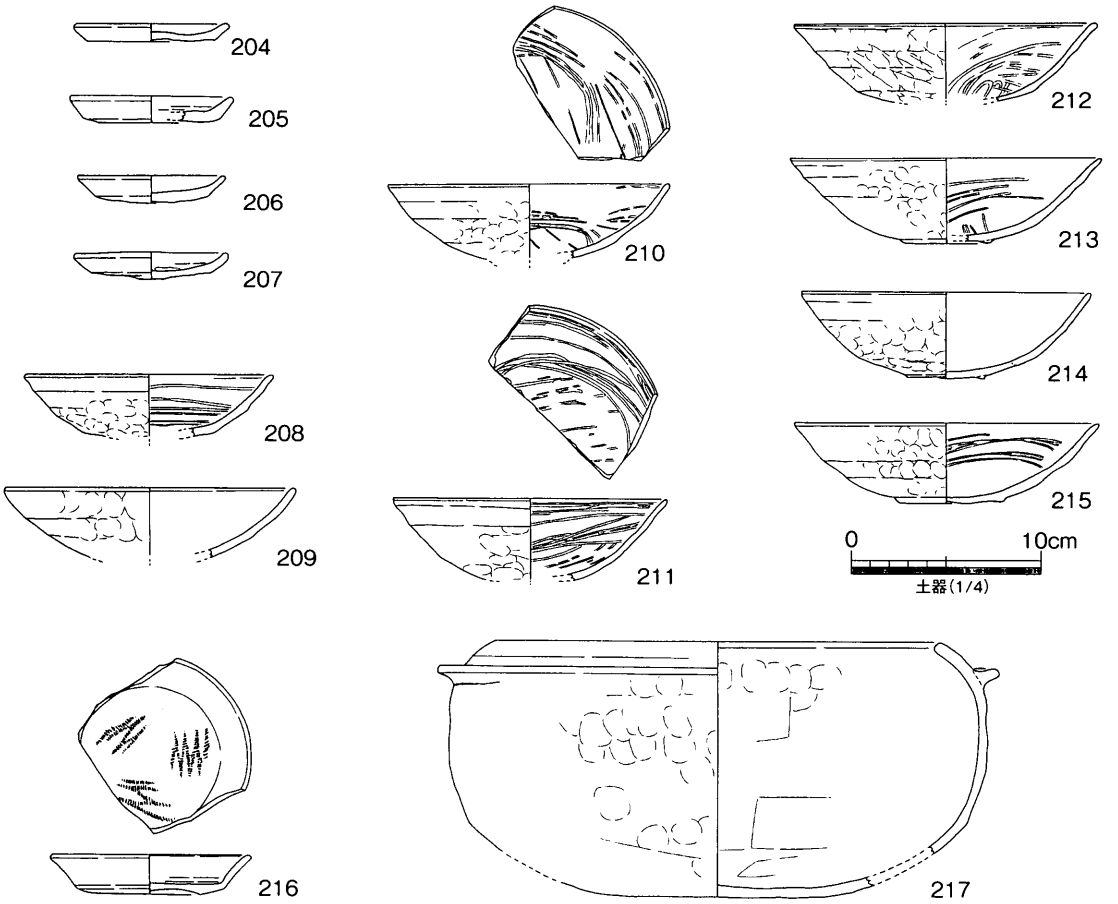
190は瓦質土器甕の口縁部で、器壁5㎜と薄く「く」の字状に外反する口縁である。細片のため、産地等の情報は得られない。この他に土師質に焼成された、平底の壺か甕の底部（191）、須恵器甕（192）、須恵質に焼成された平瓦片（193）、管状土錘（194）が出土している。

第26～28図195～203は土師質の移動式竈である。195は、残りが良く全体像がわかる。円柱状の体部の前面を切り取って焚き口をつくり、焚き口の周囲に庇を付している。体部外面の庇の内側には縦方向のハケ、体部内面には横方向にハケを施している。196、197、201、202、203は焚き口上部の破片、198、200は焚き口側面の底部を含む破片、199は焚き口側面の破片である。

第29図204～217は、平成17年7月に教育委員会文化行政課が実施した試掘調査トレンチを埋め戻した部分から出土した遺物である。これらは周囲の遺構の検出状況からみて、ＳＤ03に伴うものである可能性が強く、一部の破片はＳＤ03出土遺物と接合している。

204、205は土師質土器小皿、206、207は瓦器小皿、208～215は和泉型の瓦器椀である。216は同安窯系青磁皿Ⅰ類の皿、217は土師質土器土釜である。なお、試掘では褐釉陶器四耳壺片も出土している。

以上のようにＳＤ03から出土した遺物は、他地域からの搬入品が圧倒的に多いのが特徴である。これらは、吉備系土師質土器の椀・土鍋、和泉型や楠葉型瓦器椀、東播系須恵器鉢、青磁椀・皿等の年代観から12世紀後半期から13世紀前半期に属するものと考えられる。



第29図　Ⅱ区試掘トレンチ出土遺物実測図

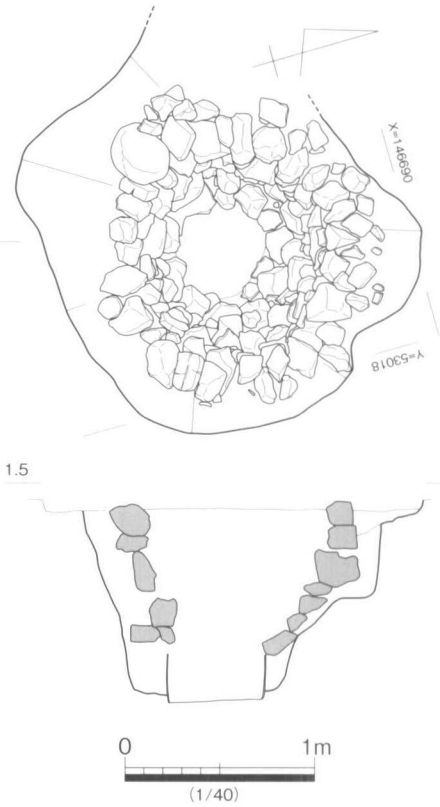
ＳＥ01

ＳＤ03を切って構築された石組みの井戸跡である。掘り方は不整形で、検出面における掘り方長辺2.0ｍ、短辺1.7ｍ、内法径1.0ｍ、深さ1.1ｍを測る。最下部には径約50cm、高さ約27cmの曲げ物を据えていた。石材は垂直方向に積み上げるのではなく、上方に向かって開くように積み上げており、石材下端では約0.5ｍの径が、上端では約１ｍに広がっている。井戸内部には、同種の石材が多数落ち込んでおり、遺物はほとんど出土しなかった。なお、曲げ物は劣化が著しいために取り上げることが不可能であった。このため、見通しの断面図も不十分なものとなり、掲載できなかった。

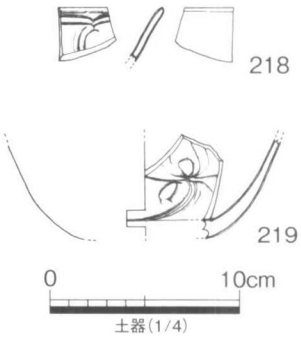
第31図はＳＥ01の埋土から出土した遺物実測図である。218、219のいずれも青磁椀で、218は龍泉窯系青磁椀Ｉ-４類、219は同じくＩ-２類である。

第32図はＳＥ01の裏込め出土の遺物実測図である。220は瓦器小皿、221は土師質土器杯、222は青磁皿、223は青磁椀、224は瓦器土釜、225は須恵器鉢である。222は同安窯系青磁皿Ｉ類、223は外面に鎬蓮弁の文様を有し、龍泉窯系青磁椀Ｉ-５ｂ類のものである。224は山城型、225は東播系のものである。

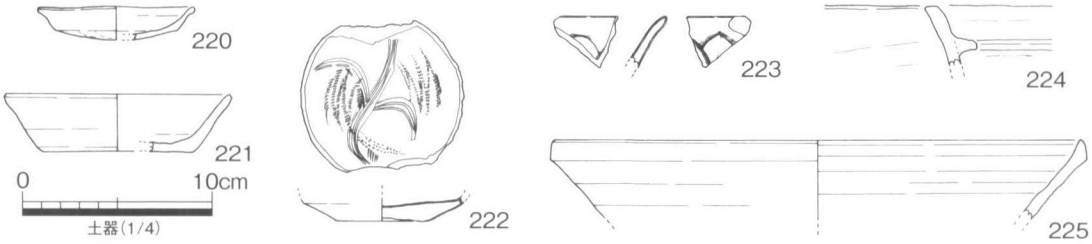
裏込め出土の遺物は、223を除くとＳＤ03と同時期のものと思われ、ＳＥ01がＳＤ03を壊して構築されており、ＳＤ03出土遺物と接合する例もあることから、本来はＳＤ03に伴う可能性がある。反面、223の青磁椀は後出のもので、13世紀中頃から後半期の年代観が与えられる。わずか１点の資料であるが、223の鎬蓮弁の文様を有する青磁椀がＳＥ01の年代を示すものと考えられる。



第30図　SE01 平・断面図



第31図　SE01 埋土出土遺物実測図



第32図　SE01 裏込め出土遺物実測図

近代以降の遺構・遺物

先述したように、明治時代の土地台帳によるとⅠ区が明治31年に郡村宅地と記載され、それ以前の地目が不明である他は、明治43年から昭和4年にかけて、相次いで水田から郡村宅地・宅地に地目変更されている。つまり、遺構検出面において水田耕作土より上層より掘り込まれた柱穴跡や土坑跡、井戸跡などの大半は、明治43年以降の遺構と考えられる。このうちのＳＥ06は、井戸側と井戸側の接合部分に新聞紙を巻きつけ、さらに粘土を巻きつけていた。新聞紙の残欠を精査したところ昭和4年4月10日付けの大阪毎日新聞が含まれることが判明した。このことから、ＳＥ06が昭和初期のものであり、土地台帳の記載とも矛盾しないことがわかる。

第33図は、ＳＰ32から出土した和泉型瓦器椀である。ＳＰ32の埋土は、黒褐色砂混じりシルト質土で、周辺の近代遺構の埋土とはやや異質なものであるが、近代以降の遺構と考えられ、遺物は混入と考えられる。

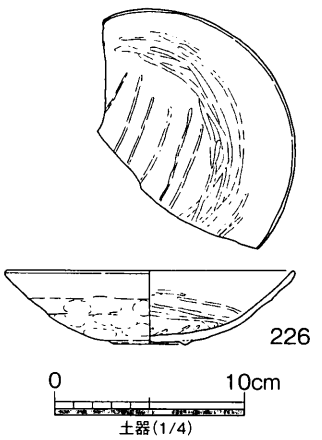
第34図は、Ⅰ～Ⅲ区の近代以降の遺構配置図、Ⅳ区の近代以降の遺構配置図である。Ⅰ～Ⅲ区には6基の井戸が構築されている。ＳＥ02～06は、素焼きの井戸側を3段程度重ね、地山の砂礫層を掘り込んで構築している。底面の標高は、ＳＥ06がマイナス0.5ｍと深い他は、マイナス0.2ｍ～プラス0.1ｍ程で、豊富な湧水がある。ＳＥ07は、溝状の落ち込みに南と西側の2辺を石組みし、内部に風呂桶を据えたものである。227はＳＥ02、228はＳＥ03、229はＳＥ04、230はＳＥ05、231はＳＥ06、232はＳＥ07の井戸側である。223は上面に丸印の中に「協」の字を刻印している。229と231の上部には、井戸側を接合する際のセメントが付着している。231が昭和4年の新聞が巻きつけられていたものである。233と234はＳＫ18から出土したものである。

第38図は、Ⅳ区出土の遺物である。Ⅳ区から出土した遺物は極めて少なく、遺構は埋土の状況から、大半を近代以降のものと推定している。235は瓦器小皿、包含層中から出土した。236はＳＤ07より出土した製塩土器である。いずれも遺構の年代を示すものではないと考えている。

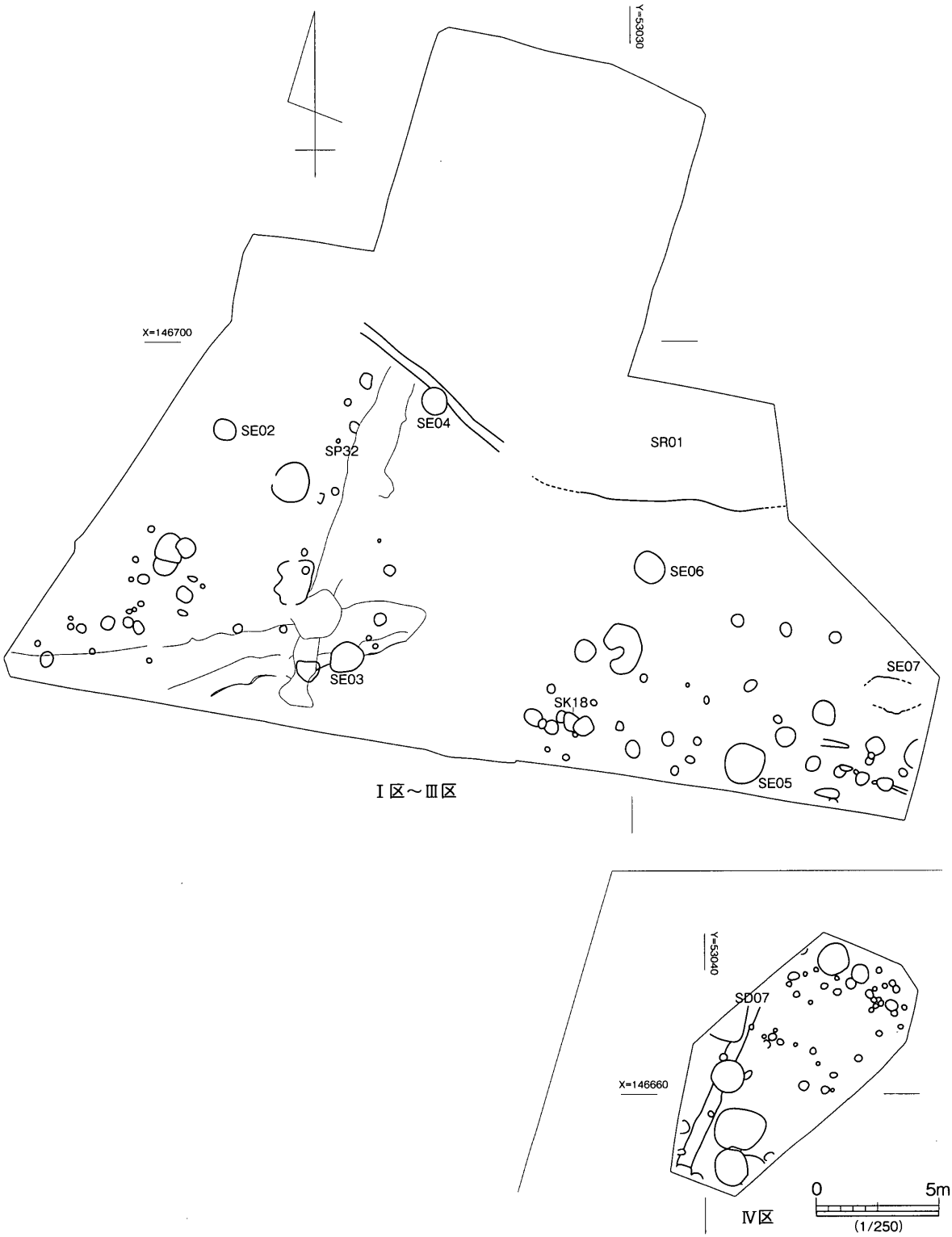
包含層・その他の遺物

第39図は、ＳＲ01出土の遺物実測図である。ＳＲ01は、Ⅱ・Ⅲ区で検出した砂層が北方に向かって落ち込んでいく所に堆積したもので、Ⅱ区東壁断面図の7層に当る。237～241は弥生土器で、237は壺、238は甕、239は高杯である。239の高杯は、下川津Ｂ類土器で軸部と杯部の接続部は円盤充填している。243は立ち上がりをもつ須恵器杯身、244は須恵器皿である。口縁部は外上方に屈曲し、端部は肥厚することなく丸く終わる。245は土師質土器甕の側面に付される把手と考えられる。246、247は土師質土器土釜、248は東播系須恵器鉢の口縁部小片、249は瓦質土器甕の口縁部片、250は瓦質土器焙烙である。以上のようにＳＲ01は弥生時代後期から近世に至る時期幅のある遺物片をまばらに包含している。

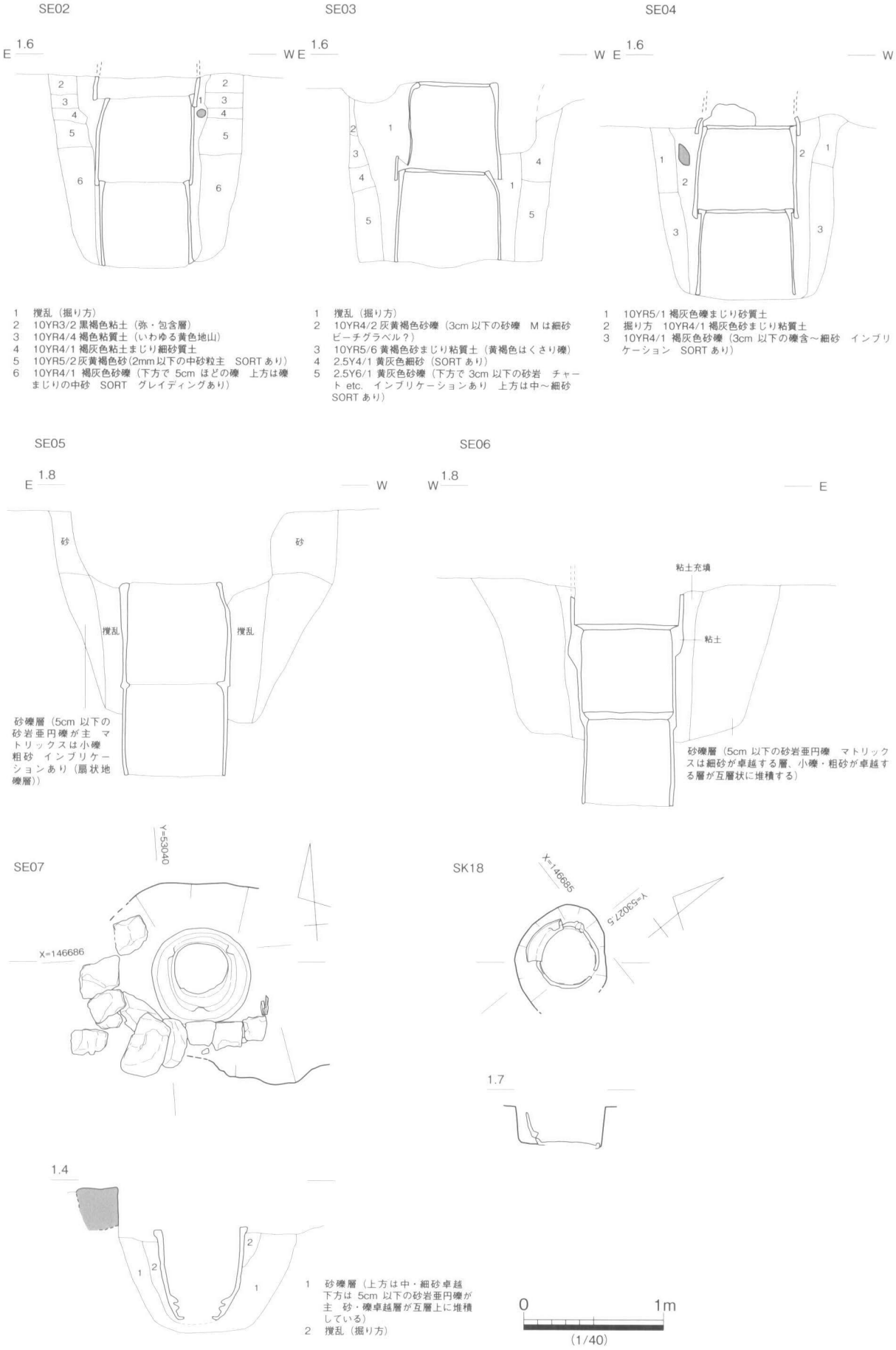
第40図は、包含層から出土した遺物実測図である。251、252は弥生土器の壺か甕の底部、253は弥生土器甑の底部、254は製塩土器底部である。255は、弥生土器を包含する層の上面に張り付くような状態で出土した東播系須恵器鉢である。口縁部の形状や口径からみて、森田稔氏による第Ⅷ期のものと判断される。



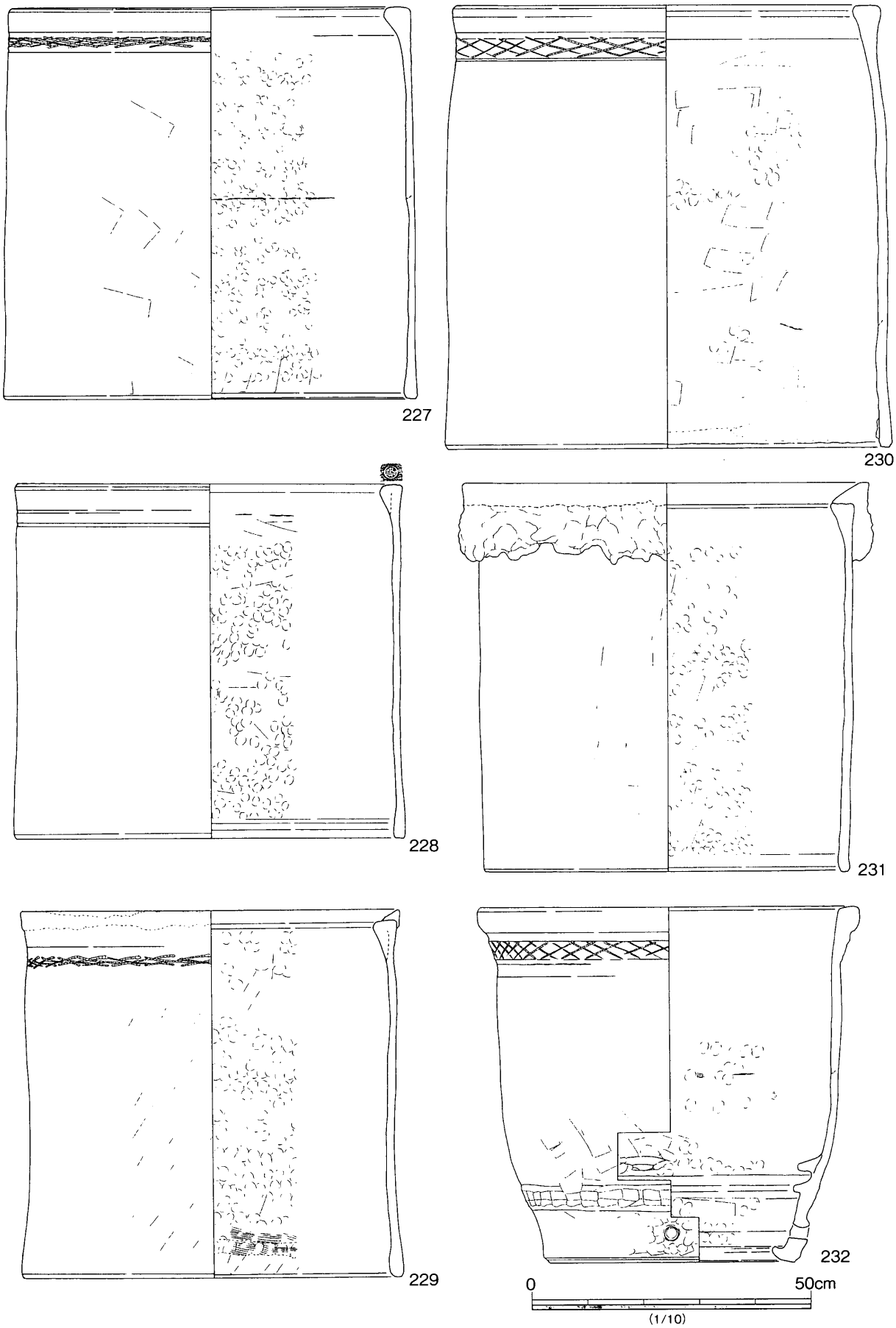
第33図　SP32出土遺物実測図



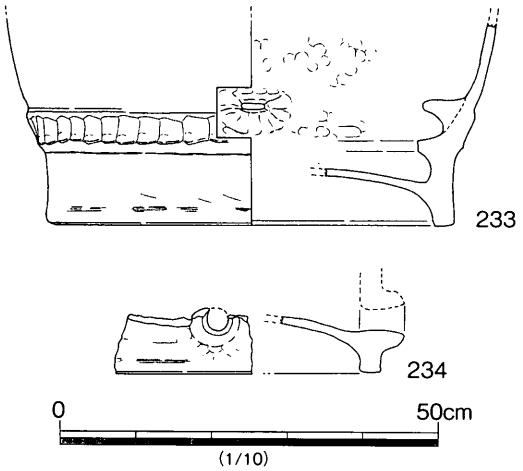
第 34 図　Ⅰ～Ⅳ区　近代以降の遺構配置図



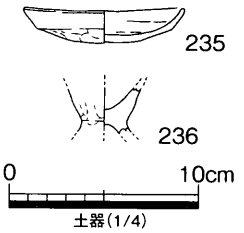
第35図　SE・SK平・断面図



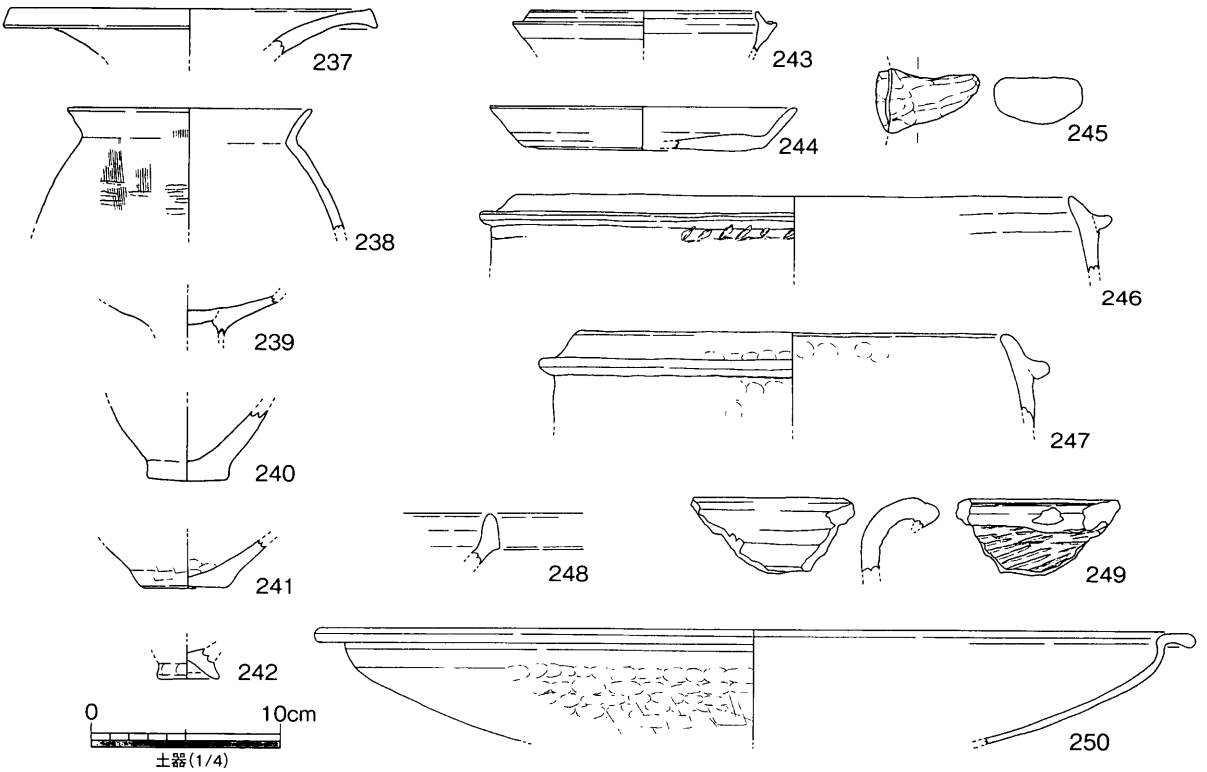
第 36 図　近代以降の遺構出土遺物実測図（1）



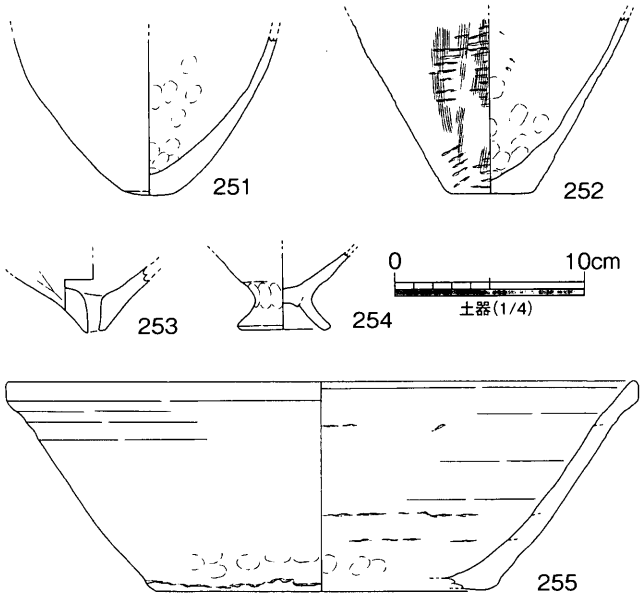
第 37 図　近代以降の遺構出土遺物実測図（2）



第 38 図　Ⅳ区出土遺物実測図



第 39 図　SR01 出土遺物実測図



第40図　Ⅰ・Ⅱ区包含層出土遺物実測図

第４章　自然科学分析

第１節　香川県木太中村遺跡における自然科学分析　株式会社古環境研究所

Ⅰ．珪藻分析

１．はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復元の指標として利用されている。

木太中村遺跡は、高松市木太町に所在し、中小河川の詰田川に隣接するとともに、縄文海進時の推定海岸線に隣接している。今回、発掘調査において淘汰の良い砂層が検出されたことから、遺跡の立地（海岸・河畔）を検討する目的で珪藻分析を行うことになった。

２．試料

試料は、Ⅲ区東西トレンチ１層上部より採取された試料 S1（(黄）褐色砂)、１層下部より採取された試料 S2（(黄）褐色砂)、２層上部より採取された試料 S3（灰褐色砂)、２層下部より採取された試料 S4（灰褐色砂）の計４点である（第 43 図参照)。

３．方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

１）試料から 1 cm^3 を秤量
２）10％過酸化水素水を加え、加温反応させながら１晩放置
３）上澄みを捨て、細粒のコロイドと薬品を水洗（５～６回）
４）残渣をマイクロピペットでカバーグラスに滴下して乾燥
５）マウントメディアによって封入し、プレパラート作成
６）検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって 600 ～ 1500 倍で行う。計数は珪藻被殻が 100 個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

４．結果

（１）分類群

試料から出現した珪藻は、貧塩性種（淡水生種）29 分類群である。第１表に分析結果を示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定した珪藻ダイアグラムを第 41 図に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性は Lowe(1974) や渡辺（2005）等の記載により、陸生珪藻は小杉（1986）により、環境指標種群は淡水生種は安藤（1990）による。また、主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下にダイア

グラムで表記した分類群を記載する。

〔貧塩性種〕

Amphora montana、*Gomphonema gracile*、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula capitata*、*Navicula confervacea*、*Navicula contenta*、*Navicula cryptocephala*、*Navicula cryptotenella*、*Navicula elginensis*、*Navicula goeppertiana*、*Navicula mutica*、*Navicula mutica* v. *ventricosa*、*Navicula pupula*、*Navicula pygmaea*、*Navicula saxophila*、*Navicula* sp.1、*Navicula* spp.、*Navicula veneta*、*Navicula viridula* v. *rostellata*、*Nitzschia brevissima*、*Nitzschia capitellata*、*Nitzschia debilis*、*Nitzschia frustulum*、*Nitzschia palea*、*Pinnularia appendiculata*、*Pinnularia borealis*、*Pinnularia microstauron*、*Pinnularia subcapitata*、*Surirella angusta*、

（2）珪藻群集の特徴

下位より珪藻構成と珪藻組成の変化の特徴を記載する。

1）　2層

上部、下部とも珪藻は検出されない。

2）　1層

珪藻密度がわずかに高くなり、下部（試料S2）では、流水不定性種などがわずかに出現する。上部（試料S1）では、陸生珪藻が優占し、流水不定性種もやや多い。陸生珪藻では、*Navicula mutica*、*Hantzschia amphioxys* を主に、*Navicula contenta*、*Pinnularia borealis*、*Navicula saxophila*、*Amphora montana*などが出現する。流水不定性種では、*Nitzschia palea*、*Navicula* spp.をはじめ好塩性種の*Navicula pygmaea*、*Navicula veneta*、*Nitzschia capitellata*などが低率に出現する。真・好流水性種では、*Surirella angusta*、*Navicula viridula* v. *rostellata*などが低率に出現する。真・好止水性種では、*Nitzschia frustulum*、*Pinnularia microstauron*、*Gomphonema gracile*などが出現する。

5．珪藻分析から推定される堆積環境

1）　2層

上部、下部とも珪藻が検出されない。試料となった堆積物が砂であることから、分別作用（淘汰）により堆積しなかったか、砂のため水落ちがよく乾燥した環境で付着生珪藻等が生育できなかったと考えられる。

2）　1層

下部（試料S2）では流水不定性種などがわずかに出現するが、上部（試料S1）では、陸生珪藻が優占し、流水不定性種もやや多く、真・好流水性種、真・好止水性種が伴われる。概して湿った環境が推定される。流水域と止水域の影響をうけたか、あるいはその近隣に分布し、河川の影響が示唆される。好塩性種を低率に含むが、貧塩性種（淡水生種）で占められることから淡水の環境であり、海水の影響は認められない。

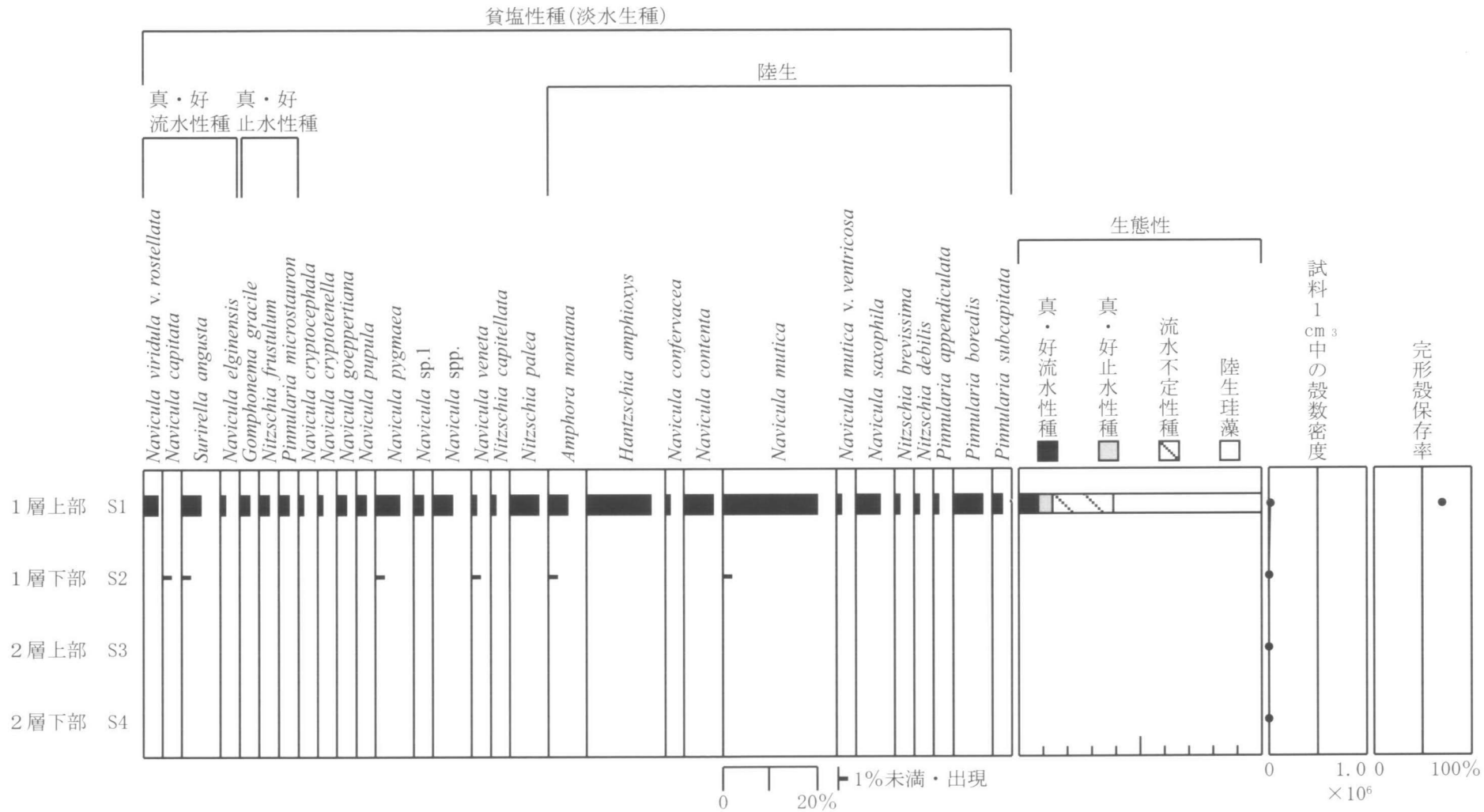
6．まとめ

木太中村遺跡のⅢ区東西トレンチにおいて珪藻分析を行った。その結果、下位より2層は珪藻が検出されず、水落ちがよい乾燥した環境が推定された。1層では陸生珪藻が優占し、湿った環境が示唆され、河川の影響はあるものの、海水の影響は認められなかった。

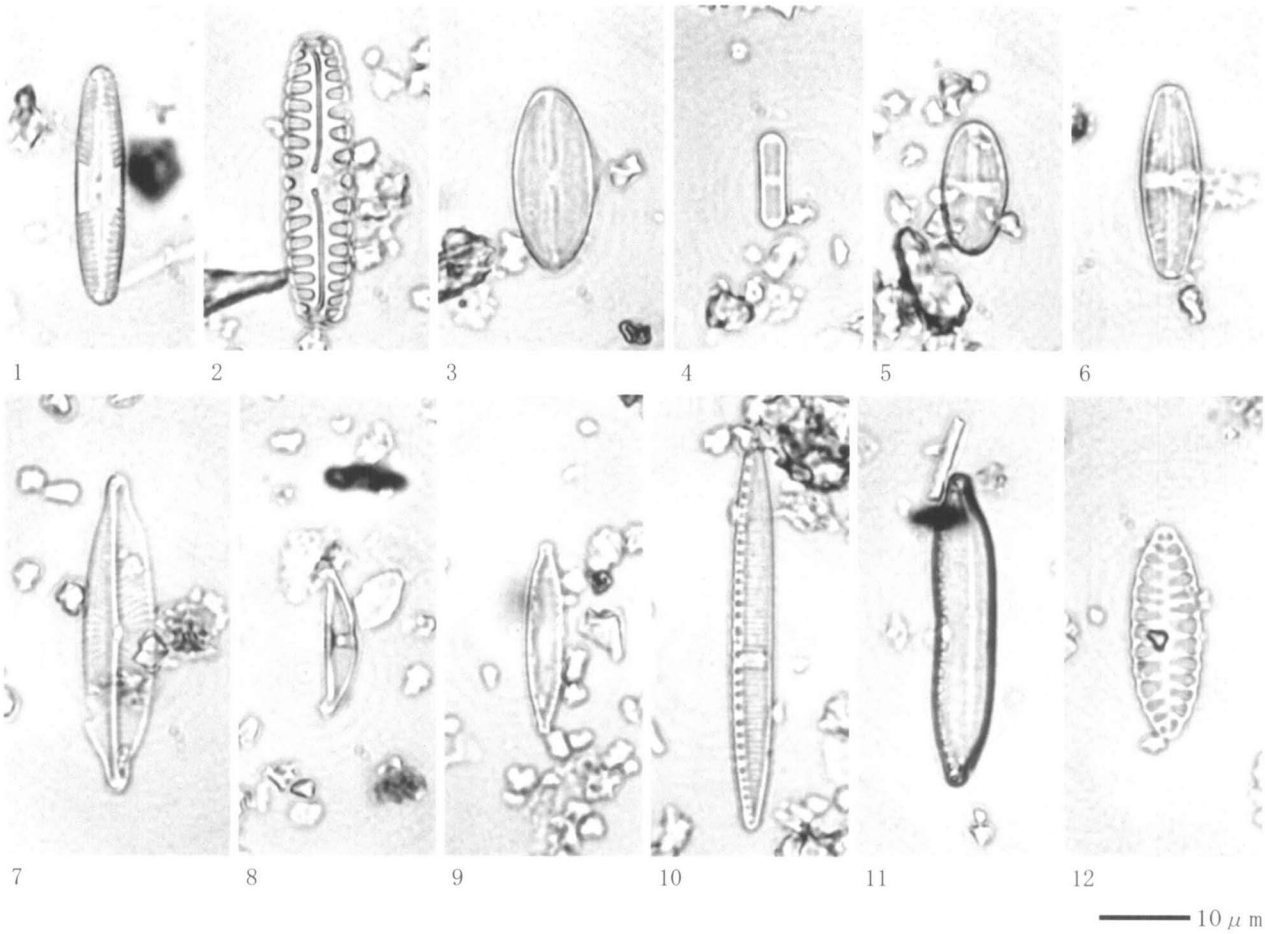
参考文献
Asai,K.&,Watanabe,T.(1995)Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relaiting to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,p.35-47.
K. Krammer・H.Lange-Bertalot(1986-1991) Bacillariophyceae・1 - 4 .
安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用．東北地理，42，p.73-88.
伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，6 ,p.23-45.
小杉正人（1986）陸生珪藻による古環境解析とその意義－わが国への導入とその展望－．植生史研究，第1号，植生史研究会，p.29-44.
小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，p. 1 -20.
渡辺仁治（2005）淡水珪藻生態図鑑　群集解析に基づく汚濁指数 DAIpo, pH 耐性能．内田老鶴圃，pp.666.
藤田剛（1984）日本化石集第 27 集 ,ATLAS OF JAPANESE FOSSILS・№ 27-158, 南関東の第四紀化石５（沖積世の珪藻化石２）

分類群	Ⅲ区東西トレンチ			
	1層上部	1層下部	2層上部	2層下部
	S1	S2	S3	S4
貧塩性種（淡水生種）				
Amphora montana	4	1		
Gomphonema gracile	2			
Hantzschia amphioxys	13			
Navicula capitata		1		
Navicula confervacea	1			
Navicula contenta	6			
Navicula cryptocephala	1			
Navicula cryptotenella	1			
Navicula elginensis	1			
Navicula goeppertiana	2			
Navicula mutica	20	2		
Navicula mutica v. *ventricosa*	1			
Navicula pupula	2			
Navicula pygmaea	5	1		
Navicula saxophila	5			
Navicula sp.1	2			
Navicula spp.	4			
Navicula veneta	1	1		
Navicula viridula v. *rostellata*	3			
Nitzschia brevissima	1			
Nitzschia capitellata	1			
Nitzschia debilis	1			
Nitzschia frustulum	2			
Nitzschia palea	6			
Pinnularia appendiculata	1			
Pinnularia borealis	6			
Pinnularia microstauron	2			
Pinnularia subcapitata	2			
Surirella angusta	4	1		
合　計	100	7	0	0
未同定	9	1	0	0
破片	45	3	0	1
試料 1 cm^3 中の殻数密度	1.8×10^4	3.2×10^3	0.0	0.0
完形殻保存率（%）	70.8	-	-	-

第１表　木太中村遺跡における珪藻分析結果



第41図　木太中村遺跡Ⅲ区トレンチにおける珪藻ダイアグラム



1. *Pinnularia subcapitata* 2. *Pinnularia borealis* 3. *Navicula pygmaea* 4. *Navicura contenta* 5. *Navicula saxophila* 6. *Navicula mutica* 7. *Navicula viridula* v. *rostellata* 8. *Amphora montana* 9. *Nitzschia palea* 10. *Nitzschia frustulum* 11. *Hantzschia amphioxys* 12. *Surirella angusta*

第 42 図　木太中村遺跡の珪藻

Ⅱ．放射性炭素年代測定

1．はじめに

放射性炭素年代測定は、呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（^{14}C）の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去における大気中の^{14}C濃度は変動しており、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学などの成果を利用した較正曲線により^{14}C年代から暦年代に較正する必要がある。

ここでは、木太中村遺跡で検出された砂層の堆積年代に関する資料を得る目的で、当該砂層中より出土した木片を対象に加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を行った。

2．試料と方法

測定試料は、砂層最下部で出土した木片１点である。放射性炭素年代測定の手順は以下のとおりである。

まず、試料に二次的に混入した有機物を取り除くために、以下の前処理を行った。

1）蒸留水中で細かく粉砕後、超音波および煮沸により洗浄
2）塩酸（1.2N）により炭酸塩を除去後、水酸化ナトリウム（1N）により二次的に混入した有機酸を除去
3）再び塩酸（1.2N）で洗浄後、アルカリによって中和
4）定温乾燥機内で80℃で乾燥

前処理後、試料中の炭素を燃焼して二酸化炭素に変え、これを真空ライン内で液体窒素、ドライアイス、メタノール、n-ペンタンを用いて精製し、高純度の二酸化炭素を回収した。こうして得られた二酸化炭素を鉄触媒による水素還元法でグラファイト粉末とし、アルミニウム製のターゲットホルダーに入れてプレス機で圧入しグラファイトターゲットを作製した。これらのターゲットをNEC社製コンパクト加速器質量分析計（1.5SDH）のイオン源にセットして測定を行った。測定試料と方法を第２表にまとめた。

試料名	地点	種類	前処理・調整	測定法
No.1	砂層	木　材	酸－ｱﾙｶﾘ－酸洗浄	ＡＭＳ

※ AMS（Accelerator Mass Spectrometry）は加速器質量分析法

第２表　試料と方法

3．結果

年代測定の結果を第３表に示す。

試料名	測定No. (PLD-)	^{14}C年代 (年BP)	δ^{13}C (‰)	補正^{14}C年代 (年BP)	暦年代（西暦）
No.1	7161	6060 ± 30	-28.91 ± 0.20	6058 ± 32	1σ：cal BC 5010 ～ 4900(67.3%) 2σ：cal BC 5050 ～ 4840(95.4%)

第３表　測定結果

（1）^{14}C年代測定値

試料の^{14}C/^{12}C比から、単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は国際的慣例によりLibbyの5568年を使用した（実際の半減期は5730年）。

（2）δ^{13}C測定値

試料の測定^{14}C/^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

（3）補正^{14}C年代値

δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C/^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料のδ^{13}C値を-25（‰）に標準化することによって得られる年代である。

（4）暦年代 Calendar Age

^{14}C年代測定値を実際の年代値（暦年代）に近づけるには、過去の宇宙線強度の変動などによる大気中^{14}C濃度の変動および^{14}Cの半減期の違いを較正する必要がある。暦年較正には、年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値およびサンゴのU/Th（ウラン/トリウム）年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新の較正曲線であるIntCal04ではBC24050年までの換算が可能である（樹木年輪データはBC10450年まで）。

暦年代の交点とは、補正^{14}C年代値と較正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ（68%確率）と2σ（95%確率）は、補正^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点や複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。暦年代範囲の後のカッコ内の百分率の値は、その暦年代範囲の確からしさ（確率分布）を示し、10%未満については省略した。

4．所見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果、木太中村遺跡で出土した木片は6058±32年BP（1σの暦年代でBC5010～4900年）の年代値が得られた。

文献

Paula J Reimer et al., (2004) IntCal04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46, 1029-1058.
尾嵜大真（2005）INTCAL98からIntCal04へ．学術創成研究費 弥生農耕の起源と東アジア№3－炭素年代測定による高精度編年体系の構築－，p.14-15.
中村俊夫（1999）放射性炭素法．考古学のための年代測定学入門．古今書院，p.1-36.

第２節　砂層の粒度分析

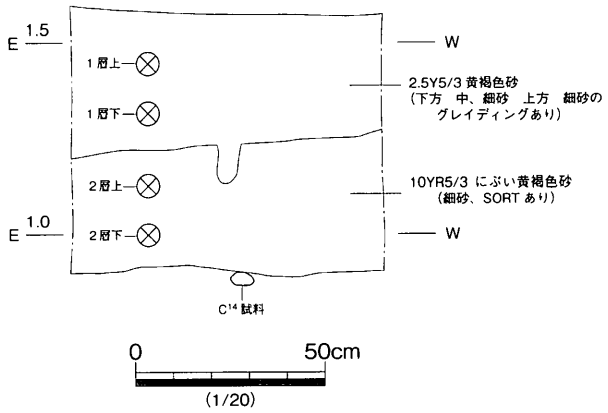
後述の文京町二丁目西遺跡では、浜堤の存在が空中写真判読によって確認でき、その堆積物と考えられる砂層が検出された。木太中村遺跡でも、淘汰のよい砂層が検出された。しかし、木太中村遺跡の場合は、どのような地形の堆積物であるのか地表面の観察からは判断することはできなかった。砂層の堆積環境を推定するために、両遺跡の砂層の珪藻分析を行ったが、もともと砂層には珪藻の遺存が良くないこともあって、良好な結果が得られなかった。

このため砂の粒度分析を行った。試料は、Ⅲ区に設定したトレンチから採集した４点と、Ⅱ区西壁から採集した２点（第11図参照）である。分析は、風乾させた試料を秤量し、わんがけして粘土分を除去してから再び風乾させ、4.75mm（-2 ϕ）・2.00mm（-1 ϕ）・850 μ（0 ϕ）・425 μ（1 ϕ）・250 μ（2 ϕ）・106 μ（3 ϕ）・75 μ（4 ϕ）の篩を用いて篩い分けをおこなった。それぞれの篩に残った試料を秤量し、縦軸に累積頻度（%）、横軸に粒径（ϕ）をとった累積曲線を作成し、中央値・分散度・歪度を累積曲線から読み取った値で求めた。

砂の粒度分析に関する論考によると、篩目の間隔をより細かくする必要が指摘されている。また、より厳密に篩分けを行う必要性があったことから、文京町二丁目西遺跡の２試料と木太中村遺跡の２試料について、財団法人大阪市文化財協会の趙哲済氏のご指導により、１／２間隔の篩による篩分けも行った。表４，５と図44、45が木太中村遺跡の分析結果である。

Friedman（1961、1967）は、世界中の海浜、河川、砂漠の砂を集め、その粒度特性を比較した結果、平均値－淘汰度や平均値－歪み度の図で堆積環境がよく識別できることを示した。そして、砂丘砂は正の歪み度をもち、海岸砂よりもやや細粒である。海岸砂は河川砂よりも一般に細粒で淘汰度がよく、海岸砂は歪み度が負、河川砂は正であるといった特徴が指摘されている。しかし、上杉（1972）によると、Friedmanの区分線と日本島の各海岸の砂を用いた区分線とは明瞭な食い違いがあることが指摘されているため、単純に歪み度などの指標値をFriedmanの図にあてはめて堆積環境を特定できるか疑問がある。また一個の試料から断定的に堆積環境を決めることは困難という指摘もある（公文1998）。

粒度分析を行って堆積環境を推定するのは、堆積層に関する詳細な観察が必要で、試料の採集も厳密に行われる必要がある（複数の層にまたがった試料の分析は、かえって混乱のもととなる）。また、近隣の現世の砂層の粒度組成との比較などからの総合によって判断する必要があるため、今回は分析値のみを報告することとし、堆積環境の推定は今後の課題としたい。



第43図　試料採集位置図

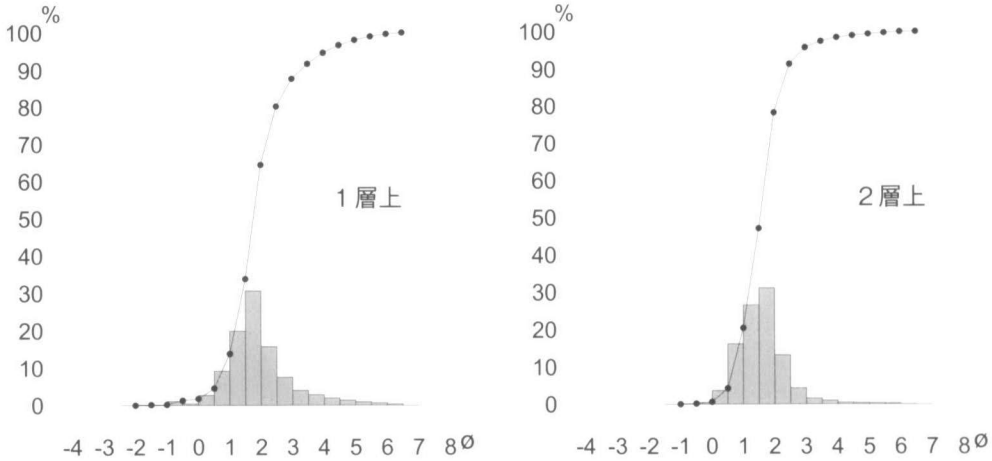
参考文献
上杉陽「粒径頻度分布からみた風成砂・海成砂の諸特徴」『第四紀研究』11-2　1972年
公文富士夫編『新版　砕屑物の研究法』地学団体研究会　1998年
Friedman,G.M. Distinction between dune,beach,and river sands from their textural characteristics Journal of Sedimentary Petrology,Vol.31,No.4 1961
Friedman,G.M. Dynamic Processes and Statistical Parameters Compared for Size Frequency Distribution of Beach and River Sands Journal of Sedimentary Petrology,Vol.37,No.2 1967

fai_Med	Distribution3	Distribution4
	Kitanakamaura	Kitanakamaura
	1層上	2層上
-3.75		
-3.25		
-2.75		
-2.25	0	
-1.75	0.162775755	
-1.25	0.03998001	0
-0.75	1.11372885	0.145533592
-0.25	0.476904405	0.455022751
0.25	2.772899265	3.653077391
0.75	9.281073749	16.19475711
1.25	19.94431356	26.61606765
1.75	30.6432498	31.11655583
2.25	15.7535518	13.22145055
2.75	7.547654744	4.349427998
3.25	4.022274577	1.645082254
3.75	2.902834297	1.037157121
4.25	2.00471193	0.501077685
4.75	1.375026772	0.412652212
5.25	0.943813807	0.338964317
5.75	0.646819447	0.278171803
6.25	0.368387235	0.03500175
6.75	0	0

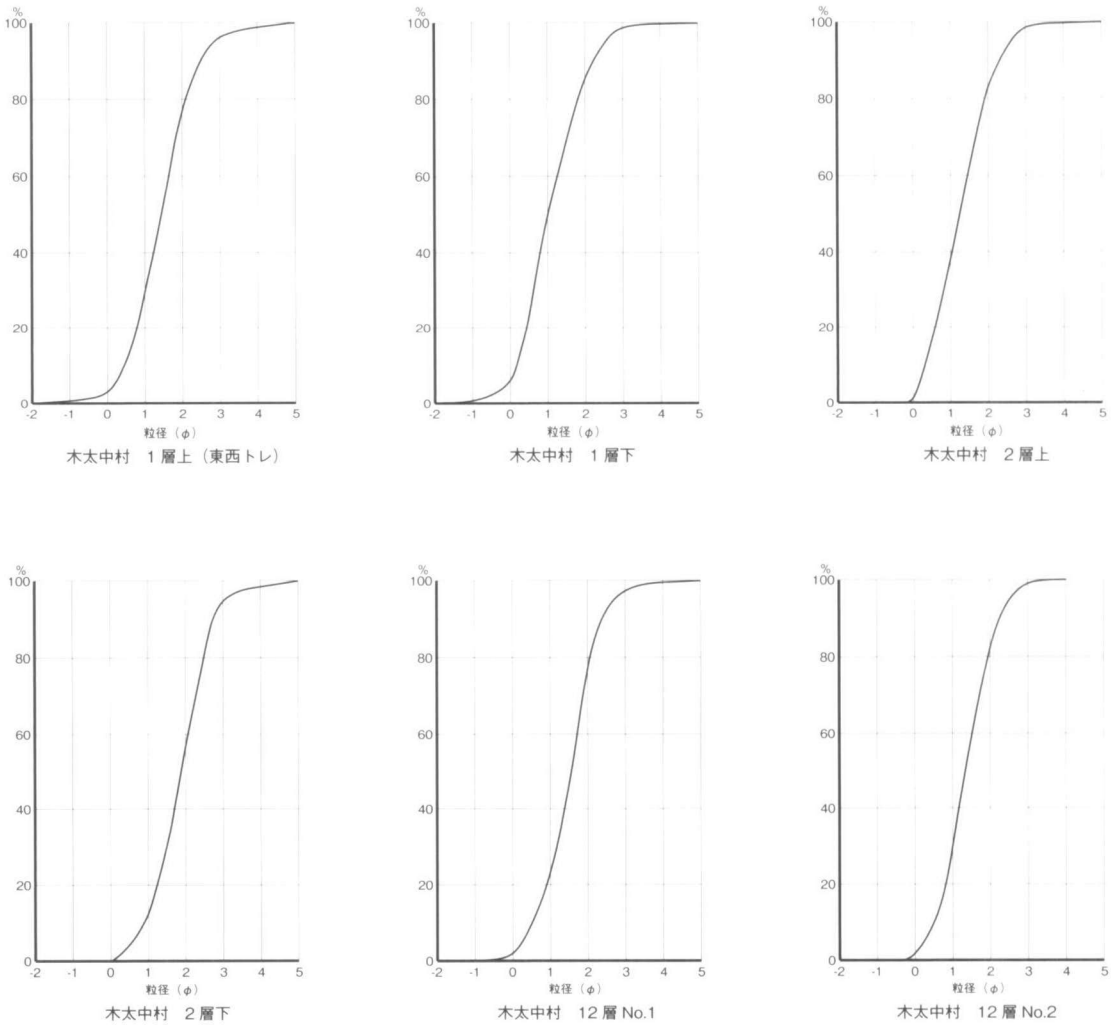
第4表　篩目 1/2 φによる粒度分析結果表（単位は g）

fai_Med	Ⅲ区トレンチ				Ⅱ区西壁	
	1層上	1層下	2層上	2層下	No.1	No.2
-2	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
-1	0.20	0.21	0.02	0.00	0.21	0.07
0	1.74	5.27	1.63	0.28	1.53	0.89
1	25.39	43.16	32.49	11.89	19.82	29.74
2	40.87	33.77	39.70	42.29	51.62	49.16
3	17.99	12.73	14.26	33.24	18.28	15.56
4	2.43	0.70	0.83	2.21	1.84	0.60
5	11.03	4.18	10.96	10.10	6.39	4.25

第5表　篩目 4/4 φによる粒度分析結果表（単位は g）



第44図　累積曲線・ヒストグラム



第45図　累積曲線

第5章　まとめ

1．ＳＤ03出土遺物について

木太中村遺跡の主たる遺構は、溝状遺構３条と井戸跡１基である。遺構の数は多くないが、中世の溝状遺構の出土遺物は、他地域からの搬入品が大多数を占め、遺跡の立地とあいまって瀬戸内海水上交通による運輸が想定されるという点で重要な遺跡である。近年、同じような立地で、港湾施設に関連する遺跡と考えられる報告例が続き、出土遺物の組成に関する検討がなされている。

木太中村遺跡のＳＤ03の遺物の組成を次の手順で検討した。ＳＤ03出土遺物は細片のものが多く、個体数を復元することは困難なため、椀・杯・小皿については底部の破片を基準に個体数を推定し、甕・土釜・土鍋については口縁部の破片を基準に個体数を推定した。計数は、ＳＤ03出土遺物に限定し、文化行政課（現在の生涯学習・文化財課）による試掘による出土品は、混入遺物が含まれる可能性があるため除外した。計数は、推定の部分が多く、数値は概要である。

ＳＤ03の遺物組成は、総個体数306のうち土師質土器の小皿12.4%、杯5.6%、椀2.3%、甕0.3%、土鍋3.3%、土釜0.3%、吉備系土師質土器の椀19.0%、土鍋1.0%、黒色土器椀0.3%、須恵器椀0.3%、杯（東播系）0.3%、壺か甕0.3%、こね鉢（東播系）2.0%、瓦器の小皿8.8%、椀32.4%、土釜（山城型）2.0%、甕0.3%、白磁椀0.3%、青磁の椀（龍泉窯系）3.3%、皿（同安窯系）2.0%、移動式竈2.9%、平瓦0.3%、土錘0.3%の比率である。瓦器椀のうち楠葉型と和泉型の比は、口縁から底部まで残る破片で比較すると1:16であるが、底部のみの破片も大半は和泉型の可能性が高く、この場合は1:49となる。

臨海部に位置し、他地域の搬入品の比率が高い遺構は、荷揚げの際に破損品や不良品を選別して廃棄した可能性を想定できる例がある。ＳＤ03における遺物の出土状況は、多くの拳大の石材とともに検出されたこと、瓦器小皿のうちには完形のものが数点含まれていることから、上記の想定通りではない可能性があるが、似たような状況を考えるべきである。

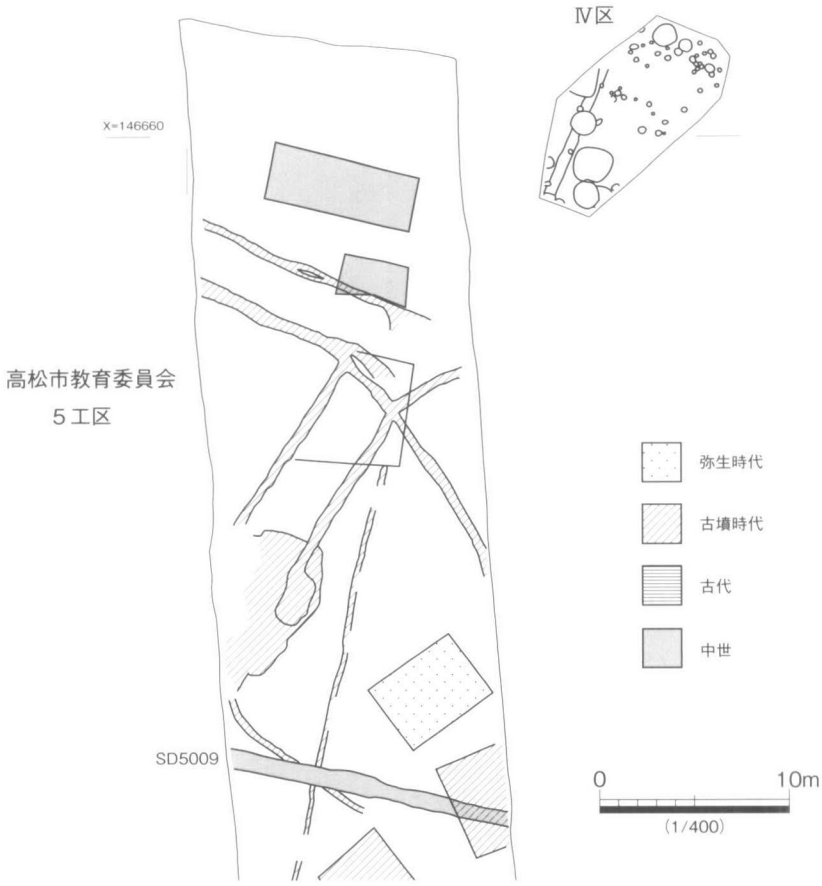
2．木太中村遺跡（高松市教育委員会調査）との関連について

今回調査区のⅠ～Ⅲ区の南、Ⅳ区の西に接して高松市教育委員会が調査を行った木太中村遺跡が所在している。ここでは、近接する木太中村遺跡（高松市教委）５工区を中心に両者の関連を見てみたい。

木太中村遺跡では、古代よりも新しい遺物包含層中に弥生土器片が多数含まれていた。５工区においても、当該期と考えられる掘立柱建物跡３棟、数個体の完形品を含む多量の土器が出土した土坑１基を検出している。遺跡の範囲は不明であるものの、今回調査区のⅡ、Ⅲ区の南側で検出した砂からなる微高地上にまで弥生集落が広がっており、削平を受けて微高地前縁に堆積したと考えるのが自然である。

今回調査区で検出した古代の溝状遺構と関連しそうな遺構は、５工区では認められない。

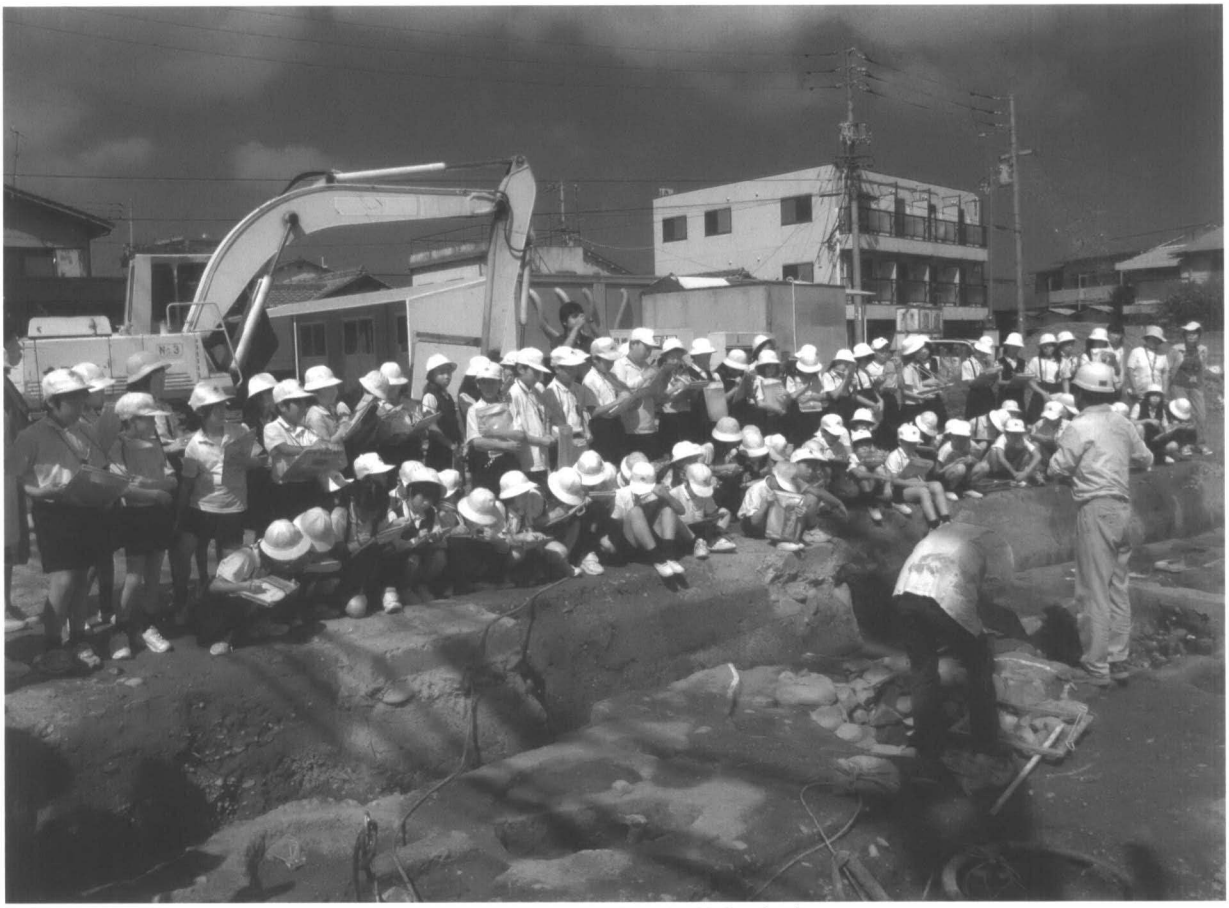
他地域から搬入された土器が多数出土したＳＤ03は、座標北から東へ12～19度振った方向に流れていた。これは周辺の条里型地割とは方向（座標北から約９度東に振った方向）を異にしている。木太中村遺跡（高松市教委）５工区においても、同一時期と思われる幅１、深さ0.3ｍの溝状遺構（ＳＤ5009）が検出されているが、これも座標北から東へ約12度振った方向で直線に流れている。埋土の状況など細部まで共通しているわけではないが、両者は接続する可能性がある。条里型地割と検出された関連遺構に関する様々な事例から見ると、条里型地割と関連する遺構と考えられる。



第46図　高松市教育委員会調査地との関係図（座標は日本測地系）

主要な参考文献

尾上実「南河内の瓦器椀」『古文化論叢』藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会　1983
尾上実・森島康雄・近江俊秀「瓦器椀」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会　真陽社　1995
佐藤竜馬「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地遺跡Ⅳ』香川県教育委員会ほか　2000
菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢　奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集』同朋社　1983
鈴木康之「土師質土器椀」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会　真陽社　1995
高松市教育委員会『都市計画道路福岡三谷線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第一冊　木太中村遺跡』2001
松本和彦「瓦器椀の多寡が意味するもの－12・13世紀の土器流通システムについて－」『田村久雄先生傘寿記念文集　十瓶山Ⅱ』田村久雄傘寿記念会　2006
森島康雄「畿内産瓦器椀の併行関係と暦年代」『大和の中世土器Ⅱ－大和型瓦器椀とその周辺－』大和古中近研究会　1992
森田稔「東播系中世須恵器生産の成立と展開－神出古窯址群を中心に－」『神戸市立博物館研究紀要』第3号　1986
森田稔「中世須恵器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会　真陽社　1995
山本悦世「吉備系土師器椀の成立と展開」『鹿田遺跡3－第5次調査－』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　1993
山本悦世「岡山県南部における土師質鍋の変遷－中世前半期における鹿田遺跡の場合－」『鹿田遺跡4－第6次調査－』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　1997
山本信夫「中世前期の貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会　真陽社　1995
横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－形式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集4』1978



木太小学校　児童の見学会（1）

木太小学校　児童の見学会（2）

観察表

凡例

1．残存率は、遺物の図化部分に占める実物の割合を示しており、完形品に対するそれではない。

2．色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖 2001 年版」を参照した。

3．胎土中の砂粒の「粗」は径 4mm 以上、「中」は 0.5mm 以上、「細」は 0.5mm 以下を基準とした。

第６表　木太中村遺跡出土土器観察表

遺物番号	遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量			調整		残存率	備考
				外面・釉	内面・胎土	長石・石英	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)(現存長)	器高(cm)(現存幅)	底径(cm)(現存厚)	外面・凸面	内面・凹面		
1	SD01	弥生土器	壺	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y7/3 浅黄	中・並					14.6			マメツ（ナデ）	マメツ（ナデ）	口縁部 1/8	
2	SD01	弥生土器	甕	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	中・多					13.6			マメツ（ハケ目）	マメツ・指押さえ	口縁部 1/8	
3	SD01	弥生土器	甕	5YR4/6 赤褐	7.5YR6/4 にぶい橙	中・多	細・少				12.5			マメツ（ナデ）	ナデ・指押さえ	口縁部 1/8	
4	SD01	弥生土器	甕	7.5YR5/6 明褐	7.5YR6/6 橙	細・並	細・少	細・少			14.0			ナデ・マメツ（ハケ目）	ナデ・指押さえ	口縁部 1/8	下川津Ｂ類
5	SD01	土師器	高杯	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/2 灰白					細・少	-	-	-	マメツ	指押さえ後横ナデ	破片	
6	SD01	弥生土器	高杯	7.5YR7/6 橙	10YR8/3 浅黄橙	細・少	細・少						10.1	マメツ	マメツ(指押さえ)	脚部 3/8	
7	SD01	弥生土器	高杯	7.5YR5/6 明褐	7.5YR5/6 明褐	中・少	細・並		細・少				12.1	指押さえ後ハケ目	マメツ・指押さえ	脚部 7/8	胎土は下川津Ｂ類に似る
8	SD01		製塩土器	7.5YR7/4 にぶい橙	5YR6/6 橙	中・多			細・少				4.6	マメツ(指押さえ)	指押さえ	脚部 6/8	
9	SD01		製塩土器	5YR7/4 にぶい橙	5YR7/4 にぶい橙	中・少	細・少						5.0	マメツ	マメツ	脚部 破片	
10	SD01		製塩土器	2.5YR5/4 にぶい赤褐	2.5YR5/4 にぶい赤褐	細・少							3.0	マメツ	マメツ(指押さえ)	脚部 5/8	
11	SD01	鞴	羽口	N7/ 灰白	7.5YR7/4 にぶい橙					中・多	-	-	-	ナデ	ナデ	口縁部 破片	
12	SD01	弥生土器	壺	2.5Y7/4 浅黄	7.5YR6/6 橙	細・並			中・少		21.0			マメツ	マメツ（ナデ）	口縁部 破片	
13	SD01	弥生土器	壺	2.5Y8/2 灰白	10YR8/3 浅黄橙	中・並					17.2			マメツ（ナデ）	マメツ（ナデ）	口縁部 1/8	
14	SD01	弥生土器	壺	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	細・並		細・少	細・少		12.4			マメツ	指押さえ後ナデ	口縁部 1/8	下川津Ｂ類
15	包含層	弥生土器	高杯	10YR6/4 にぶい黄橙	7.5YR5/6 明褐	中・並			細・少		(21.2)			マメツ	マメツ	口縁部 破片	
16	SD01	弥生土器		2.5Y4/1 黄灰	2.5Y8/3 淡黄	中・並							4.8	マメツ	マメツ	底部 4/8	
17	SD01	弥生土器	甕	7.5Y7/4 浅黄	10YR6/2 灰黄褐	中・並							3.4	ハケ目・工具痕	指押さえ	4/8	
18	包含層	須恵器	杯	N6/ 灰	N6/ 灰					細・並	12.5	(3.7)	9.5	回転ナデ・回転ヘラ切り	回転ナデ	1/8	火襷
19	SD01	須恵器	皿	7.5Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰					細・少	16.0		13.4	回転ナデ・回転ナデヘラ切り後ナデ	回転ナデ	3/8	火襷
20	包含層	須恵器	平瓶	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白					細・少	6.0	12.8		回転ナデ・回転ヘラ削り	回転ナデ	7/8	自然釉付着・内面に油脂（？）状の付着物あり
21	SD01	須恵器	甕	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰					中・並	12.8			横ナデ・格子タタキ目後ハケ目	横ナデ・青海波紋	口縁部 2/8	ヘラ記号
22	包含層	黒色土器	椀	10YR8/4 浅黄橙	2.5Y3/1 黒褐					細・少			6.5	横ナデ	ナデ	底部 3/8	内面黒色
24	SD01	弥生土器	甕	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y7/3 浅黄	中・並			細・少		14.2			ナデ・マメツ（タタキ目）	ナデ・板ナデ	口縁部 1/8	
25	SD01	弥生土器	高杯	10YR6/6 明黄褐	10YR6/6 明黄褐	中・多					-	-	-	マメツ	マメツ（板ナデ）	杯部 1/8	
26	SD01		製塩土器	10YR6/4 にぶい黄橙	7.5YR5/4 にぶい褐	細・並							3.0	指押さえ	指押さえ	脚部 6/8	
27	SD01	須恵器	高杯	N6/ 灰	N6/ 灰					細・少	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	脚部 破片	
28	SD01	須恵器	平瓶	N7/ 灰白	N7/ 灰白					中・少			5.1	回転ナデ・回転ナデヘラ削り	回転ナデ	7/8	自然釉付着
29	SD02	須恵器	壺	N7/ 灰白	N6/ 灰					中・並	24.2			回転ナデ・タタキ目	回転ナデ・青海波紋	口縁部 1/8	自然釉付着
30	SD02	弥生土器	壺か甕	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	中・多							4.0	マメツ(タタキ目)	マメツ（板ナデ）	底部 4/8	
33	SD03	土師質土器	小皿	10YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR7/6 橙					細・少	8.0	1.2	6.2	指押さえ後ナデ・ヘラ切り	指押さえ後ナデ	5/8	
34	SD03	土師質土器	小皿	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙					細・少	8.2		5.8	マメツ（ナデ）・ヘラ切り	マメツ（ナデ）	1/8	
35	SD03	土師質土器	小皿	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙					細・並	8.0	(1.2)	6.8	回転ナデ・回転ヘラ切り	回転ナデ	6/8	
36	SD03	土師質土器	小皿	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙					細・少	8.1	1.5	7.1	指押さえ後ナデ・ヘラ切り	指押さえ後ナデ	8/8	
37	SD03	土師質土器	小皿	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白					細・少	8.6	1.4	7.2	回転ナデ・回転ヘラ切り	回転ナデ	5/8	

遺物番号	遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量			調整		残存率	備考
				外面・釉	内面・胎土	長石・石英	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)(現存長)	器高(cm)(現存値)	底径(cm)(現存厚)	外面・凸面	内面・凹面		
38	SD03	土師質土器	小皿	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR8/2 灰白					細・少	8.4	1.7	6.7	回転ナデ・ナデ・板状圧痕	回転ナデ	4/8	
39	SD03	土師質土器	小皿	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白					細・少	8.8	1.9	6.6	回転ナデ・回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	8/8	
40	SD03	土師質土器	小皿	10YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙					細・少	8.2	1.6	6.4	回転ナデ・回転ヘラ切り	回転ナデ・指押さえ後ナデ	8/8	
41	SD03	土師質土器	小皿	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙					細・少	8.6	1.6	5.9	回転ナデ・回転ヘラ切り	回転ナデ	8/8	
42	SD03	土師質土器	小皿	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙					細・少	7.4	1.2	5.7	回転ナデ・回転ヘラ切り・板状圧痕	回転ナデ	底部 8/8	
43	SD03	土師質土器	小皿	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙					細・少	7.9	1.4	5.5	ナデ・ヘラ切り	マメツ	口縁部 3/8	
44	SD03	瓦器	小皿	N5/ 灰	N6/ 灰					細・少	(8.2)		(6.5)	回転ナデ・指押さえ後ナデ	回転ナデ	口縁部 2/8	
45	SD03	瓦器	小皿	N5/ 灰	N7/ 灰白					細・少	8.2	1.5		回転ナデ・指押さえ	回転ナデ	2/8	
46	SD03	瓦器	小皿	N8/ 灰白	N8/ 灰白					細・少	9.0	1.1	4.8	ナデ	ナデ	2/8	
47	SD03	瓦器	小皿	N3/ 暗灰	N4/ 灰					細・少	8.7			ナデ・指押さえ後ナデ	ナデ	口縁部 2/8	
48	SD03	瓦器	小皿	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白					細・少	(8.0)			ナデ	ナデ	口縁部 2/8	
49	SD03	瓦器	小皿	N5/ 灰	N5/ 灰					細・少	9.0	(1.5)	8.0	回転ナデ・指押さえ	回転ナデ	口縁部 2/8	
50	SD03	瓦器	小皿	N3/ 暗灰	N3/ 暗灰					細・少	8.8	1.4	7.1	横ナデ・指押さえ後ナデ	横ナデ	3/8	
51	SD03	瓦器	小皿	N4/ 灰	N4/ 灰					細・少	7.6	1.7	6.7	ナデ・指押さえ	ナデ	2/8	
52	SD03	瓦器	小皿	N4/ 灰	N4/ 灰					細・少	8.2	1.5	6.9	ナデ・指押さえ後ナデ	ナデ	4/8	
53	SD03	瓦器	小皿	N4/ 灰	N4/ 灰					細・少	8.3	1.6	6.7	横ナデ・指押さえ後ナデ	横ナデ・指押さえ後ナデ	3/8	
54	SD03	瓦器	小皿	N5/ 灰	N4/ 灰					細・少	9.0	1.9	7.4	横ナデ・指押さえ	ナデ・指押さえ後ナデ	6/8	
55	SD03	瓦器	小皿	N5/ 灰	N6/ 灰					細・少	8.7	1.7	7.0	横ナデ・指押さえ後ナデ	横ナデ・指押さえ	7/8	
56	SD03	瓦器	小皿	N4/ 灰	N5/ 灰					細・少	4.5	1.7	7.4	横ナデ・指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	6/8	
57	SD03	瓦器	小皿	N4/ 灰	N4/ 灰					細・少	8.8	1.5	7.1	ナデ・指押さえ	ナデ・指押さえ後ナデ	7/8	
58	SD03	瓦器	小皿	N5/ 灰	N5/ 灰					細・少	8.1	1.9	6.2	指押さえ後ナデ・指押さえ	ナデ・指押さえ後ナデ	8/8	
59	SD03	瓦器	小皿	N5/ 灰	N5/ 灰					細・少	8.5	1.9	7.0	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	8/8	
60	SD03	土師質土器	杯	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙					細・少	13.7	2.5	9.5	マメツ・ヘラ切り	マメツ	口縁部 1/8	
61	SD03	土師質土器	杯	10YR8/2 灰白	2.5Y8/1 灰白					細・少	13.8	3.1	9.8	回転ナデ・ナデ	回転ナデ	1/8	
62	SD03	土師質土器	杯	7.5YR7/4 にぶい橙	5YR7/6 橙					細・少	14.2	4.0	9.3	マメツ・板状圧痕	マメツ	3/8	
63	SD03	土師質土器	杯	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/3 淡黄					細・少	12.7	3.6	7.0	マメツ・回転ヘラ切り	マメツ	2/8	
64	SD03	土師質土器	杯	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙					細・少			8.3	回転ヘラ切り	回転ナデ	底部 7/8	
65	SD03	土師質土器	杯	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙					細・少			6.4	横ナデ	指押さえ	脚部 2/8	
66	SD03	土師質土器	椀	10YR5/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐					細・少			5.7	ナデ	ナデ	底部 5/8	
67	SD03	土師質土器	杯	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白					細・少	14.0			マメツ(回転ナデ)	マメツ(回転ナデ)	口縁部 2/8	吉備系土師質土器

遺物番号	遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量			調整		残存率	備考
				外面・釉	内面・胎土	長石・石英	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)(現存長)	器高(cm)(現存幅)	底径(cm)(現存厚)	外面・凸面	内面・凹面		
68	SD03	土師質土器	椀	10YR8/2 灰白	2.5Y8/1 灰白					細・少	(12.0)			ナデ	ナデ・マメツ	口縁部 1/8	胎度中に 1mm ほどの砂粒が含まれる　色調＝吉備系土師質土器椀
69	SD03	土師質土器	椀	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白					中・少	13.3	4.5	6.2	指押さえ後ナデ・回転ナデ・ナデ	回転ナデ	7/8	吉備系土師質土器
70	SD03	土師器	椀	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白					細・少	13.7	4.2	6.4	回転ナデ・ナデ	回転ナデ	1/8	吉備系土師質土器
71	SD03	土師質土器	椀	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白					細・少	14.2	4.5	5.7	回転ナデ・ナデ	回転ナデ	2/8	吉備系土師質土器
72	SD03	土師器	椀	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白					細・並	15.2	4.4	7.4	マメツ・ナデ	マメツ	2/8	吉備系土師質土器
73	SD03	土師器	椀	5YR8/4 淡橙	10YR8/2 灰白					中・少	13.2	4.3	6.2	マメツナデ・指押さえ後ナデ	マメツ・ナデ	3/8	吉備系土師質土器
74	SD03	土師質土器	椀	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白					中・少	13.0	4.3	6.4	指押さえ後ナデ・ナデ	指押さえ後ナデ	3/8	吉備系土師質土器
75	SD03	土師質土器	椀	10YR8/2 灰白	10YR8/1 灰白					細・少	13.7	4.4	5.0	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	1/8	吉備系土師質土器
76	SD03	土師器	椀	10YR8/1 灰白	10YR7/1 灰白					細・少	13.7	4.4	6.8	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	6/8	吉備系土師質土器
77	SD03	土師器	椀	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白					細・少	15.2	4.7	7.0	マメツ	マメツ	1/8	吉備系土師質土器
78	SD03	土師質土器	椀	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白					細・少			5.8	指押さえ・ナデ	ナデ	底部 5/8	吉備系土師質土器
79	SD03	土師質土器	椀	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白					細・少			6.0	マメツ（ナデ）	マメツ(回転ナデ)	底部 8/8	吉備系土師質土器
80	SD03	土師質土器	椀	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙					細・少			6.0	マメツ	指押さえ・ナデ	底部 7/8	吉備系土師質土器
81	SD03	土師質土器	椀	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白					細・少			6.0	ナデ	マメツ	底部 7/8	吉備系土師質土器
82	SD03	土師質土器	椀	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白					細・少			6.6	回転ナデ	ナデ	底部 4/8	吉備系土師質土器
83	SD03	土師質土器	椀	5YR8/3 淡橙	10YR3/3 暗褐					細・少			6.2	マメツ	マメツ	底部 1/8	吉備系土師質土器
84	SD03	土師質土器	椀	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白					細・少			6.0	マメツ	マメツ	底部 5/8	吉備系土師質土器？
85	SD03	瓦器	椀	10YR8/2 灰白	2.5Y8/1 灰白					細・少			5.9	回転ナデ・マメツ	マメツ	底部 4/8	吉備系土師質土器
86	SD03	土師質土器	椀	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白					細・少			5.8	マメツ・横ナデ	ナデ	底部 7/8	吉備系土師質土器
87	SD03	土師質土器	椀	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR4/2 灰黄褐					細・少			5.9	マメツ	マメツ（ナデ）	底部 8/8	吉備系？
88	SD03	土師質土器	椀	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白					細・少			5.7	マメツ（ナデ）・指押さえ	マメツ（ナデ）	底部 8/8	吉備系土師質土器
89	SD03	土師質土器	椀	2.5Y8/2 灰白	10YR8/2 灰白					細・少			6.2	マメツ	マメツ	底部 6/8	吉備系土師質土器
90	SD03	土師質土器	椀	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白					細・少			5.7	マメツ・ナデ	マメツ	底部 7/8	吉備系土師質土器
91	SD03	土師質土器	椀	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白					細・並			6.0	ナデ・マメツ	マメツ	7/8	吉備系土師質土器
92	SD03	黒色土器	椀	N3/ 暗灰	N8/ 灰白					中・少			6.0	マメツ（ナデ）	マメツ	底部 2/8	両面黒色
93	SD03	須恵器	椀	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白					細・少	14.3			回転ナデ	ナデ	口縁部 3/8	西村型土器
94	SD03	須恵器	椀	N 7 / 灰白	N 7 / 灰白					細・少	14.8	5.0	5.4	回転ナデ	回転ナデ・ヘラミガキ	2/8	土師質焼成　西村型土器
95	SD03	土師質土器	椀	10YR8/1 灰白	10YR7/1 灰白					細・少	15.8	5.0	5.6	回転ナデ	回転ナデ・マメツ	2/8	土師質焼成　西村型土器
96	SD03	須恵器	椀	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白					細・少			5.3	回転ナデ	ナデ	底部 2/8	西村型土器
97	SD03	須恵器	椀	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白					細・少			5.1	回転ナデ	ナデ	底部 5/8	西村型土器
98	SD03	須恵器	椀	N7 ／灰白	N7 ／灰白					細・少			4.9	回転ナデ	マメツ・板ナデ	底部 破片	
99	SD03	須恵器	椀	N6/ 灰	N6/ 灰					細・少	17.4	5.5	6.6	回転ナデ・回転糸切り	回転ナデ	2/8	東播系
100	SD03	瓦器	椀	N8/ 灰白	N8/ 灰白					細・少	15.1			沈線一条・指押さえ後ナデ	横ナデ	口縁部 2/8	楠葉型
101	SD03	瓦器	椀	N5/ 灰	N4/ 灰					細・少	13.4	5.0	4.3	横ナデ・指押さえ後ナデ・ナデ	ヘラミガキ	3/8	楠葉型
102	SD03	瓦器	椀	2.5YR6/4 にぶい橙	5YR7/4 にぶい橙					細・並	15.8			横ナデ・指押さえ	マメツ	2/8	焼成不良　和泉型

遺物番号	遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量			調整		残存率	備考
				外面・釉	内面・胎土	長石・石英	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)(現存長)	器高(cm)(現存幅)	底径(cm)(現存厚)	外面・凸面	内面・凹面		
103	SD03	瓦器	椀	N5/ 灰	N5/ 灰					細・少	15.8	3.9	6.0	横ナデ・指押さえ後ナデ	ヘラミガキ	1/8	和泉型
104	SD03	瓦器	椀	N2/ 黒	N6/ 灰					細・少	15.9	4.1	4.2	指押さえ後ナデ・マメツ	マメツ（ヘラミガキ）	1/8	和泉型
105	SD03	瓦器	椀	N3/ 暗灰	N3/ 暗灰					細・少	15.8	3.7	5.0	横ナデ・指押さえ後ナデ	マメツ（ヘラミガキ）	2/8	和泉型
106	SD03	須恵器	椀	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白					細・少	14.8	4.0	3.9	ナデ・指押さえ後ナデ・ナデ	ヘラミガキ	2/8	(和泉型)
107	SD03	瓦器	椀	N4/ 灰	N4/ 灰					細・少	14.6	4.4	3.7	横ナデ・指押さえ	ヘラミガキ	1/8	和泉型
108	SD03	瓦器	椀	2.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/3 にぶい褐					細・少	15.4	4.4	4.0	マメツ	マメツ(指押さえ)	2/8	焼成不良　和泉型
109	SD03	瓦器	椀	N5/ 灰	N5/ 灰					細・少	15.2	3.8	5.4	横ナデ・指押さえ後ナデ・ナデ	ヘラミガキ	2/8	和泉型
110	SD03	瓦器	椀	N5/ 灰	N5/ 灰					細・少	14.9	4.1	4.1	指押さえ後ナデ	ヘラミガキ	1/8	和泉型
111	SD03	瓦器	椀	N5/ 灰	N7/ 灰白					細・少	15.2	4.2	4.1	横ナデ・指押さえ後ナデ	マメツ（ヘラミガキ）	3/8	和泉型
112	SD03	瓦器	椀	N5/ 灰	N5/ 灰					細・少	15.4	4.1	4.1	横ナデ・指押さえ	ヘラミガキ	2/8	和泉型
113	SD03	瓦器	椀	N 7 / 灰白	N 7 / 灰白					細・少	14.8	4.5	4.5	横ナデ・指押さえ後ナデ	ヘラミガキ	1/8	和泉型
114	SD03	瓦器	椀	N5/ 灰	N5/ 灰					細・少	14.9	3.6	3.8	横ナデ・指押さえ後ナデ	ヘラミガキ	1/8	和泉型
115	SD03	瓦器	椀	N 7 / 灰白	N6/ 灰					細・少	14.6	4.1	3.0	横ナデ・指押さえ後ナデ	ヘラミガキ	2/8	和泉型
116	SD03	瓦器	椀	N4/ 灰	N4/ 灰					細・少	16.0	4.2	(5.0)	ナデ・指押さえ後ナデ	ヘラミガキ	1/8	和泉型
117	SD03	瓦器	椀	N6/ 灰	N5/ 灰					細・少	15.4	4.1	4.5	横ナデ・指押さえ後ナデ	横ナデ・ヘラミガキ	1/8	和泉型
118	SD03	瓦器	椀	7.5Y8/1 灰白	N8/ 灰白					細・少	15.2	4.4	4.2	横ナデ・指押さえ後ナデ	ヘラミガキ	2/8	和泉型
119	SD03	瓦器	椀	N5/ 灰	7.5Y8/1 灰白					細・少	15.0	4.2	4.1	横ナデ・指押さえ後ナデ	マメツ（ヘラミガキ）	6/8	和泉型
120	SD03	瓦器	椀	N5/ 灰	N5/ 灰					細・少	15.0	4.1	4.2	ナデ・指押さえ・指押さえ後ナデ	ヘラミガキ	2/8	和泉型
121	SD03	瓦器	椀	N8/ 灰白	N8/ 灰白					細・少	14.8	4.5	3.3	横ナデ・指押さえ後ナデ	ヘラミガキ	5/8	和泉型
122	SD03	瓦器	椀	N5/ 灰	N4/ 灰					細・少	13.8	3.5	4.5	指押さえ後ナデ・ナデ	ヘラミガキ	1/8	和泉型
123	SD03	瓦器	椀	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白					細・少	(15.5)	3.6	4.0	横ナデ・指押さえ	ヘラミガキ	2/8	焼成不良　和泉型
124	SD03	瓦器	椀	N5/ 灰	N4/ 灰					細・少	14.3	3.7	4.7	横ナデ・指押さえ後ナデ・ナデ	マメツ（ヘラミガキ）	8/8	和泉型
125	SD03	瓦器	椀	N6/ 灰	N5/ 灰					細・少	16.2	4.1	4.6	横ナデ・指押さえ後ナデ	マメツ	3/8	和泉型
126	SD03	瓦器	椀	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白					細・少	14.7	4.5	3.9	ナデ・指押さえ	ヘラミガキ	1/8	(和泉型)
127	SD03	瓦器	椀	N5/ 灰	N5/ 灰					細・少	13.6	4.2	2.8	横ナデ・指押さえ後ナデ・ナデ	ヘラミガキ	1/8	和泉型
128	SD03	瓦器	椀	N6/ 灰	N7/ 灰白					細・少	15.2	4.6	3.7	横ナデ・指押さえ後ナデ	ヘラミガキ	3/8	和泉型
129	SD03	瓦器	椀	N4/ 灰	N4/ 灰					細・少	14.5	4.1	4.6	横ナデ・指押さえ後ナデ	横ナデ・ヘラミガキ	2/8	和泉型

遺物番号	遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量			調整		残存率	備考
				外面・釉	内面・胎土	長石・石英	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)(現存長)	器高(cm)(現存幅)	底径(cm)(現存厚)	外面・凸面	内面・凹面		
130	SD03	瓦器	椀	2.5Y7/1 灰白	N5/ 灰					細・少	13.6	3.7	3.8	横ナデ・指押さえ	マメツ（ヘラミガキ）	1/8	和泉型
131	SD03	瓦器	椀	N5/ 灰	N5/ 灰					細・少	14.0	4.0	3.8	ナデ・指押さえ後ナデ・指ナデ	ヘラミガキ	3/8	和泉型
132	SD03	瓦器	椀	N5/ 灰	N6/ 灰					細・少	16.8	4.7	3.1	ナデ・指押さえ後ナデ・ナデ	ヘラミガキ	2/8	和泉型
133	SD03	瓦器	椀	N5/ 灰	N5/ 灰					細・少	15.0	4.1	3.3	横ナデ・指押さえ後ナデ	ヘラミガキ	4/8	和泉型
134	SD03	瓦器	椀	N8/ 灰白	N8/ 灰白					細・少	14.6	5.1	4.5	横ナデ・指押さえ	ヘラミガキ	4/8	和泉型
135	SD03	瓦器	椀	N4/ 灰	N4/ 灰					細・少			4.8	指押さえ後ナデ	マメツ（ヘラミガキ）	底部 1/8	
136	SD03	瓦器	椀	N5/ 灰	N4/ 灰					細・少			3.8	指押さえ後ナデ	ヘラミガキ	底部 8/8	
137	SD03	瓦器	椀	N6/ 灰	N5/ 灰					細・少			4.4	板ナデ・ナデ	ヘラミガキ	底部 8/8	
138	SD03	瓦器	椀	N5/ 灰	N4/ 灰					細・少			3.8	指押さえ・ナデ	ヘラミガキ	2/8	
139	SD03	瓦器	椀	N5/ 灰	N5/ 灰					細・少			4.5	ナデ	ヘラミガキ	底部 5/8	
140	SD03	瓦器	椀	N7 ／灰白	N5/ 灰					細・少			3.5	指押さえ・ナデ	ヘラミガキ	底部 4/8	
141	SD03	瓦器	椀	5Y8/1 灰白	N4/ 灰					細・少			3.9	マメツ（ナデ）	マメツ（ヘラミガキ）	底部 8/8	
142	SD03	瓦器	椀	N4/ 灰	N4/ 灰					細・少			6.0	横ナデ	マメツ	底部 2/8	
143	SD03	青磁	椀	5Y5/2 灰オリーブ	5Y7/1 灰白					精 緻	15.0			施釉	施釉・飛雲文片彫り	口縁部 1/8	龍泉窯系青磁椀（Ⅰ-4 類）
144	SD03	青磁	椀	10Y6/1 灰	N6/ 灰					精 緻	16.4			施釉	施釉	1/8	龍泉窯系青磁椀（Ⅰ-2 類）
145	SD03	青磁	椀	2.5GY6/1 オリーブ灰	N8/ 灰白					精 緻	15.8			施釉	施釉・蓮華文片彫り	1/8	龍泉窯系青磁椀（Ⅰ-2 類）
146	SD03	青磁	椀	7.5Y6/2 灰オリーブ	N8/ 灰白					精 緻			6.1	施釉・削り出し高台・露胎	施釉	3/8	龍泉窯系青磁椀（Ⅰ-2 類）
147	SD03	青磁	椀	7.5Y6/3 オリーブ黄	7.5Y7/1 灰白					精 緻			6.2	施釉・露胎	施釉・蓮華文片彫り	底部 2/8	龍泉窯系青磁椀（Ⅰ-2 類 ?）
148	SD03	青磁	椀	10Y6/2 オリーブ灰	N8/ 灰白					精 緻	-	-	-	施釉	施釉	破片	龍泉窯系青磁椀（Ⅰ-4 類）
149	SD03	青磁	椀	7.5Y6/2 灰オリーブ	7.5Y6/2 灰オリーブ					精 緻	-	-	-	施釉	施釉	破片	龍泉窯系青磁椀（Ⅰ-4 類）
150	SD03	青磁	椀	7.5Y6/2 灰オリーブ	5Y7/1 灰白					精 緻	-	-	-	施釉	施釉	破片	龍泉窯系青磁椀（Ⅰ-2 類）
151	SD03	青磁	椀	10Y6/2 オリーブ灰	N7/ 灰白					精 緻			6.1	施釉・露帯	施釉	底部 2/8	龍泉窯系青磁椀（Ⅰ類）
152	SD03	青磁	椀	5Y6/3 オリーブ黄	5Y7/1 灰白					精 緻			5.1	施釉・削り出し高台・露胎	施釉	底部 2/8	龍泉窯系青磁椀（Ⅰ類）
153	SD03	青磁	皿	5Y6/2 灰オリーブ	10YR8/3 浅黄橙					精 緻	10.2		8.2	施釉	施釉	口縁部 1/8	(同安窯系青磁皿Ⅰ類 ?)
154	SD03	青磁	皿	2.5GY7/1 明オリーブ灰	N8/ 灰白					精 緻	10.6			施釉	施釉	口縁部 2/8	(同安窯系青磁皿Ⅰ類 ?)
155	SD03	青磁	皿	5Y6/2 灰オリーブ	2.5Y7/1 灰白					精 緻			4.8	施釉・露胎	施釉	底部 6/8	(同安窯系青磁皿Ⅰ類 ?)
156	SD03	青磁	皿	7.5Y7/2 灰白	7.5Y7/1 灰白					精 緻			5.3	ヘラ削り後施釉・露胎	回転ナデ・施釉	底部 8/8	(同安窯系青磁皿Ⅰ類 ?)
157	SD03	白磁	椀	7.5Y8/1 灰白	7.5Y8/1 灰白					精 緻	-	-	-	施釉	施釉	口縁部 破片	白磁
158	SD03	須恵器	鉢	N7/ 灰白	N7/ 灰白					細・並	30.0			回転ナデ	回転ナデ	口縁部 1/8	東播系
159	SD03	須恵器	鉢	N5/ 灰	N5/ 灰					細・少	29.8			回転ナデ	回転ナデ	口縁部 1/8	東播系
160	SD03	須恵器	鉢	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白					細・少	(27.2)			回転ナデ	回転ナデ	口縁部 1/8	東播系

遺物番号	遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量			調整		残存率	備考
				外面・釉	内面・胎土	長石・石英	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)(現存長)	器高(cm)(現存幅)	底径(cm)(現存厚)	外面・凸面	内面・凹面		
161	SD03	須恵器	鉢	N6/ 灰	N6/ 灰					細・並	31.0			回転ナデ	回転ナデ	口縁部 1/8	東播系
162	SD03	須恵器	鉢	N7/ 灰白	N7/ 灰白					細・少			9.8	回転ナデ・回転糸切り	回転ナデ	底部 8/8	東播系
163	SD03	須恵器	鉢	N6/ 灰	N6/ 灰					細・少	26.8	9.4	10.5	回転ナデ・回転糸切り	回転ナデ	底部 3/8	東播系
164	SD03	土師質土器	土釜	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白					細・少	-	-	-	横ナデ	横ナデ・指押さえ	口縁部 破片	
165	SD03	土師質土器	足釜	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐					細・並	-	-	-	指押さえ	−	破片	
166	SD03	土師質土器	足釜	10YR7/4 にぶい黄橙	−					細・少	-	-	-	指押さえ	−	破片	
167	SD03	土師質土器	足釜	10YR7/2 にぶい黄橙	2.5Y5/1 黄灰					細・並	-	-	-	指押さえ後ナデ	−	破片	
168	SD03	土師質土器	足釜	2.5Y6/2 灰黄	−					細・並	-	-	-	指押さえ	−	破片	
169	SD03	瓦器	土釜	N6/ 灰	N6/ 灰					細・少	27.6			ナデ・指押さえ後ナデ	ナデ・マメツ（ナデ）	口縁部 1/8	
170	SD03	瓦器	土釜	N4/ 灰	N5/ 灰					中・並	22.8			指押さえ後横ナデ・ナデ	ナデ	口縁部 1/8	
171	SD03	瓦器	土釜	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白					細・少	22.1			指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	口縁部 1/8	
172	SD03	瓦器	土釜	N4/ 灰	N5/ 灰					中・少	19.2			指押さえ後横ナデ・マメツ	指押さえ・マメツ	口縁部 1/8	山城型
173	SD03	瓦器	足釜	N5/ 灰	N5/ 灰					細・少	22.6			指押さえ後ナデ・指押さえ後板ナデ	板ナデ	6/8	山城型
174	SD03	瓦器	足釜	N8/ 灰白	2.5Y6/1 黄灰					細・少	-	-	-	指押さえ後ナデ	板ナデ	破片	山城型
175	SD03	瓦器	足釜	N4/ 灰	-					細・少	-	-	-	指押さえ後ナデ	−	破片	山城型
176	SD03	瓦器	足釜	N4/ 灰	−					中・並	-	-	-	指押さえ後ナデ	−	破片	
177	SD03	土師質土器	土鍋	10YR6/4 にぶい黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙					細・少	41.8			ナデ・指押さえ後ハケ目	ナデ・ハケ目	2/8	吉備系土師質土器
178	SD03	土師質土器	土鍋	10YR8/6 黄橙	10YR8/6 黄橙					細・少	33.6	17.9		ハケ目後ナデ・指押さえ後ハケ目	ハケ目後ナデ・ハケ目	2/8	吉備系土師質土器
179	SD03	土師質土器	土鍋	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙					中・並	33.4			横ナデ・指押さえ後ナデ	横ナデ・板ナデ	口縁部 1/8	吉備系土師質土器
180	SD03	土師質土器	土鍋	10YR5/2 灰黄褐	2.5Y7/2 灰黄					細・並	34.8			ナデ・ハケ目後指押さえ	ハケ目後ナデ・ハケ目	口縁部 2/8	
181	SD03	土師質土器	土鍋	10YR3/2 黒褐	7.5YR6/4 にぶい橙					細・多	36.1			指押さえ後ナデ・指押さえ後ハケ目	ナデ・ハケ目	口縁部 2/8	
182	SD03	土師質土器	土鍋	5YR7/6 橙	2.5YR7/3 淡赤橙					細・少	-	-	-	ナデ・指押さえ後ナデ	ナデ・横ナデ	口縁部 破片	
183	SD03	土師質土器	土鍋	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR7/4 にぶい橙					細・少	-	-	-	ナデ・指押さえ	ナデ・板ナデ	口縁部 破片	
184	SD03	土師質土器	土鍋	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙					細・少	-	-	-	横ナデ・ハケ目後横ナデ	横ナデ・ハケ目	破片	
185	SD03	土師質土器	土鍋	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y8/3 淡黄					細・少	-	-	-	指押さえ	ハケ目	口縁部 破片	
186	SD03	土師質土器	土鍋	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙					細・少	-	-	-	指押さえ後ナデ	横ナデ	口縁部 破片	
187	SD03	土師質土器	土鍋	7.5YR5/3 にぶい褐	10YR8/3 浅黄橙					細・並	-	-	-	ナデ・指押さえ・ハケ目	ナデ・ハケ目	口縁部 破片	
188	SD03	土師質土器	土鍋	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙					細・少	26.0			マメツ・指押さえ	指押さえ後ハケ目	1/8	
189	SD03	土師質土器	土鍋	7.5YR7/4 にぶい橙	2.5Y7/2 灰黄					細・少	(27.5)			指押さえ後ナデ・マメツ	ハケ目・マメツ	口縁部 1/8	煤付着
190	SD03	瓦質土器	甕	5Y5/1 灰	5Y5/1 灰					細・少	18.4			ナデ	ナデ・板ナデ	口縁部 1/8	
191	SD03	土師質土器	壺か甕	5Y7/1 灰白	2.5Y3/2 黒褐					細・少			11.2	板ナデ・ナデ	板ナデ・ナデ	底部 2/8	

遺物番号	遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量			調整		残存率	備考
				外面・釉	内面・胎土	長石・石英	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)(現存長)	器高(cm)(現存幅)	底径(cm)(現存厚)	外面・凸面	内面・凹面		
192	SD03	須恵器	甕	N6/ 灰	N5/ 灰					細・少	43.0			ナデ・板ナデ・タタキ目	ナデ・板ナデ	口縁部 破片	
194	SD03		管状土錘	7.5YR8/6 浅黄橙	−					細・少	4.3	1.7	1.3	ナデ	−	8/8	
195	SD03	土師質土器	移動式竈	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR5/3 にぶい褐					細・並	-	-	-	ハケ目・ナデ	指押さえ後ハケ目・マメツ	5/8	
196	SD03	土師質土器	移動式竈	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR4/2 灰褐					細・並	-	-	-	横ナデ・ハケ目	板ナデ・ハケ目・指押さえ後ハケ目	口縁部 破片	
197	SD03	土師質土器	移動式竈	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR4/3 褐					細・並	-	-	-	横ナデ・ハケ目・指押さえ	横ナデ・ハケ目・指押さえ	口縁部 破片	
198	SD03	土師質土器	移動式竈	5YR6/8 橙	5YR7/8 橙					細・並	-	-	-	指押さえ後ナデ	指ナデ・マメツ（ハケ目）	破片	
199	SD03	土師質土器	移動式竈	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR4/2 灰褐					中・並	-	-	-	ハケ目・指押さえ	ハケ目・指押さえ	破片	
200	SD03	土師質土器	移動式竈	10YR6/3 にぶい黄橙	7.5YR6/4 にぶい橙					中・少	-	-	-	指押さえ後ハケ目	指押さえ後ハケ目・ナデ	破片	
201	SD03	土師質土器	移動式竈	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR6/4 にぶい橙					細・並	-	-	-	ナデ・指押さえ・マメツ（ハケ目）	ナデ・板ナデ後ナデ	口縁部 破片	
202	SD03	土師質土器	移動式竈	10YR3/2 黒褐	7.5YR5/3 にぶい褐					細・並	-	-	-	指押さえ後ナデ・マメツ（ハケ目）	板ナデ後ナデ	口縁部 破片	
203	SD03	土師質土器	移動式竈	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR5/4 にぶい褐					細・多	-	-	-	横ナデ・板ナデ・指押さえ後ナデ	横ナデ	口縁部 破片	
204	包含層	土師器	小皿	7.5YR7/2 明褐灰	7.5YR7/2 明褐灰					細・少	6.9	1.9	6.6	指押さえ後横ナデ・回転ヘラ切り	指押さえ後ナデ	口縁部 3/8	
205	包含層	土師質土器	小皿	7.5YR7/6 橙	10YR7/3 にぶい黄橙					細・並	8.5	(1.3)	7.2	マメツ（回転ナデ）・マメツ	マメツ（回転ナデ）	2/8	
206	包含層	瓦器	小皿	N4/ 灰	N4/ 灰					細・少	7.6	1.5	5.9	ナデ・指押さえ後ナデ	ナデ	2/8	
207	包含層	瓦器	小皿	N4/ 灰	N6/ 灰					細・少	(8.0)	1.3	6.2	ナデ・指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	4/8	不整円形
208	包含層	瓦器	椀	N5/ 灰	N6/ 灰					細・少	12.9			回転ナデ・指押さえ後ナデ	ヘラミガキ	口縁部 2/8	和泉型
209	包含層	瓦器	椀	N3/ 暗灰	N4/ 灰					細・少	15.2			指押さえ後ナデ	マメツ	口縁部 1/8	和泉型
210	包含層	瓦器	椀	N6/ 灰	N6/ 灰					細・少	14.8			横ナデ・指押さえ	ヘラミガキ	1/8	和泉型
211	包含層	瓦器	椀	N4/ 灰	N4/ 灰					細・少	14.4			横ナデ・指押さえ	ヘラミガキ	口縁部 2/8	和泉型
212	包含層	瓦器	椀	N5/ 灰	N5/ 灰					細・少	15.8			横ナデ・指押さえ後ナデ	ナデ後ヘラミガキ	口縁部 1/8	和泉型
213	包含層	瓦器	椀	N5/ 灰	N6/ 灰					細・少	16.4	4.4	4.7	指押さえ	マメツ（ヘラミガキ）	1/8	和泉型
214	包含層	瓦器	椀	N4/ 灰	N5/ 灰					細・少	15.2	4.5	2.2	指押さえ後ナデ	マメツ	2/8	和泉型
215	包含層	瓦器	椀	N5/ 灰	N6/ 灰					細・少	8.0	4.2	5.6	指押さえ	ヘラミガキ	4/8	和泉型
216	包含層	青磁	皿	7.5Y6/1 灰	2.5Y6/1 黄灰					精 緻	10.2	2.1	5.2	施釉・回転ヘラ削り	施釉	6/8	同安窯系青磁皿Ⅰ類
217	包含層	土師質土器	土釜	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙					細・少	23.5	13.3		横ナデ・指押さえ後ナデ・指押さえ後板ナデ	横ナデ・指押さえ・マメツ（板ナデ）	1/8	
218	SE01	青磁	椀	5Y6/3 オリーブ黄	5Y7/1 灰白					精 緻	-	-	-	施釉	施釉	口縁部 破片	龍泉窯系青磁椀Ⅰ－4類
219	SE01	青磁	椀	10Y5/2 オリーブ灰	10Y6/2 オリーブ灰					精 緻	-	-	-	施釉	施釉	体部 1/8	龍泉窯系青磁椀Ⅰ－2類
220	SE01	瓦器	小皿	N8/ 灰白	N8/ 灰白					細・少	4.2	1.7	6.4	ナデ・指押さえ後ナデ	ナデ	1/8	

遺物番号	遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量			調整		残存率	備考
				外面・釉	内面・胎土	長石・石英	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)(現存長)	器高(cm)(現存幅)	底径(cm)(現存厚)	外面・凸面	内面・凹面		
221	SE01	土師質土器	杯	5YR8/3 淡橙	5YR8/3 淡橙					細・少	11.8	2.9	8.0	回転ナデ・ナデ	回転ナデ	1/8	
222	SE01	青磁	皿	7.5Y6/2 灰オリーブ	N8/ 灰白					精 緻			4.9	施釉	施釉・回転ヘラ切り後ナデ	底部 7/8	同安窯系青磁皿Ⅰ類
223	SE01	青磁	椀	7.5GY7/1 明緑灰	N8/ 灰白					精 緻	-	-	-	施釉	施釉	口縁部 破片	龍泉窯系青磁椀Ⅰ－5b 類
224	SE01	瓦器	土釜	5Y5/1 灰	5Y5/1 灰					細・多	-	-	-	マメツ・ナデ	マメツ・板ナデ	口縁部 破片	(山城型)
225	SE01	須恵器	鉢	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白					細・少	(27.8)			回転ナデ	回転ナデ	口縁部 破片	東播系
226	SP43	瓦器	椀	5Y7/1 灰白	7.5Y7/1 灰白					細・少	15.1	3.8	4.0	指押さえ後ナデ・ナデ	ヘラミガキ	口縁部 3/8	和泉型
227	SE02	土師質土器	井側	7.5YR6/3 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい橙					中・並	70.4	68.2	73.4	ナデ・櫛先刺突文・板ナデ後ナデ	ナデ・指押さえ後ナデ	1/8	
228	SE03	土師質土器	井側	7.5YR7/4 にぶい橙	5YR5/6 明赤褐					中・並	67.8	62.1	69.0	ナデ	ナデ・指押さえ後ナデ・横ナデ	2/8	刻印有り
229	SE04	土師質土器	井側	7.5YR7/5 にぶい橙	5YR4/6 赤褐					中・並	65.0	63.0	67.2	横ナデ・櫛先刺突文・板ナデ	横ナデ・指押さえ・板ナデ・ナデ・ハケ目	2/8	
230	SE05	土師質土器	井側	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙					中・並	74.8	77.4	79.0	ナデ・櫛先刺突文・横ナデ	ナデ・横ナデ・指押さえ後板ナデ	2/8	
231	SE06	土師質土器	井側	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙					中・並	66.0	64.5	64.6	板ナデ後ナデ	指押さえ後板ナデ後ナデ	2/8	
232	SE07	土師質土器	風呂	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙					中・並	66.8	63.0	43.3	ナデ・櫛先刺突文・マメツ・板ナデ・貼付け凸帯	ナデ・マメツ（指押さえ）指押さえ・横ナデ	2/8	
233	SK18	土師質土器	井側	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/2 灰黄褐					中・並			53.6	板ナデ後ナデ・貼付け凸帯	指押さえ後ナデ・横ナデ	1/8	煤付着
234	SK18	土師質土器	風呂	10YR5/2 灰黄褐	10YR6/3 にぶい黄橙					中・並	-	-	-	指押さえ・ナデ	ナデ	底部 小片	
235	包含層	瓦器	小皿	N5/ 灰	N5/ 灰					細・少	8.4	1.8	7.1	横ナデ・指押さえ後ナデ	横ナデ・ナデ	2/8	
236	SD07		製塩土器	5YR6/4 にぶい橙	7.5YR5/2 灰褐					細・少	-	-	-	マメツ(指押さえ)	マメツ	底部 3/8	
237	SR01	弥生土器	高杯	5YR5/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	中・少			細・少		-	-	-	マメツ	マメツ	1/8	下川津Ｂ類　円盤充填
238	SR01	弥生土器	壺	10YR7/3 にぶい黄橙	5YR7/6 橙	中・並	細・少				19.0			マメツ・横ナデ	マメツ	1/8	
239	SR01	弥生土器	甕	10YR7/4 にぶい黄橙	7.5YR6/6 橙	中・並	細・少				(12.8)			マメツ・タタキ目後ハケ目	マメツ	1/8	
240	SR01	弥生土器	壺か甕	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/3 淡黄	細・多							4.1	マメツ・ナデ	マメツ	底部 8/8	
241	SR01	弥生土器	壺か甕	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	中・並							4.8	マメツ・板ナデ・工具痕	マメツ・指押さえ	底部 5/8	
242	SR01		製塩土器	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐					細・少			3.2	指押さえ後ナデ	ナデ	底部 8/8	
243	SR01	須恵器	杯	7.5Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰					細・少	(12.0)			回転ナデ	回転ナデ	口縁部 破片	
244	SR01	須恵器	皿	N6/ 灰	N6/ 灰					細・少	16.2	2.2	12.4	回転ナデ・回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	1/8	火襷
245	SR01	土師質土器	(把手)	5YR6/6 橙	－					細・並	-	-	-	指押さえ後ナデ	－	把手 破片	
246	SR01	土師質土器	土釜	10YR8/2 灰白	10YR8/3 浅黄橙					細・多	(29.2)			マメツ・ナデ・刺突文	マメツ・ナデ	口縁部 破片	
247	SR01	土師質土器	土釜	7.5YR5/3 にぶい褐	10YR6/4 にぶい黄橙					細・多	(22.6)			横ナデ・指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	1/8	
248	SR01	須恵器	鉢	N5/ 灰	2.5Y7/1 灰白					細・少	-	-	-	横ナデ	横ナデ	口縁部 破片	東播系
249	SR01	瓦質土器	甕	N4/ 灰	2.5Y8/2 灰白					細・少	-	-	-	横ナデ・タタキ目	横ナデ・板ナデ	口縁部 破片	

遺物番号	遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量			調整		残存率	備考
				外面・釉	内面・胎土	長石・石英	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径 (cm)(現存長)	器高 (cm)(現存幅)	底径 (cm)(現存厚)	外面・凸面	内面・凹面		
250	SR01	瓦質土器	焙烙	10YR3/2 黒褐	10YR7/1 灰白					細・少	46.4			横ナデ・指押さえ後ナデ	横ナデ・ナデ	口縁部 破片	
251	包含層	弥生土器	壺か甕	7.5YR7/4 にぶい橙	10YR7/3 にぶい黄橙	中・並	細・並						2.7	マメツ	指押さえ	6/8	
252	包含層	弥生土器	壺か甕	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	細・並							4.6	タタキ目後ハケ目	ヘラ削り・指押さえ	底部 2/8	
253	包含層	弥生土器	甑	2.5Y4/1 黄灰	2.5Y4/2 暗灰黄	中・多							1.3	マメツ・板ナデ	マメツ	底部 8/8	
254	包含層		製塩土器	10YR7/4 にぶい黄橙	5Y3/1 オリーブ黒					細・多			4.8	指押さえ・マメツ	マメツ	底部 2/8	
255	包含層	須恵器	鉢	N7/ 灰白	N7/ 灰白					細・少	33.0	10.8	18.6	回転ナデ	回転ナデ	1/8	東播系

第７表　木太中村遺跡出土瓦観察表

報文番号	遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量			調整		備考
				外面・釉	内面・胎土	長石・石英	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	外面・凸面	内面・凹面	
193	SD03	瓦	平瓦	N6/ 灰	N6/ 灰					細・少	-	-	-		布目	須恵質焼成

第８表　木太中村遺跡出土石器観察表

遺物番号	遺構名	器種	法量				材質	備考
			現存長 (cm)	現存幅 (cm)	現存厚 (cm)	重量 (g)		
23	SD01	石包丁	8.1	0.8	6.2	59.70	安山岩	
31	SD02	石鏃	1.7	1.2	2.5	0.37	サヌカイト	凹基式
32	SD02	有溝石錐	8.3	7.9	5.3	494.53	安山岩系	

写真図版

SD03　遺物出土状況（北から）

SD03　遺物出土状況（南から）

図版 2

調査地より東北を望む

Ⅲ区東西トレンチ　砂層および木質検出状況（北から）

Ⅰ・Ⅱ区　南壁断面 (北から)

Ⅰ・Ⅱ区　南壁断面 (SD01 付近)(北東から)

図版 4

Ⅱ区　西壁断面 (南端)(東から)

Ⅱ区　西壁断面 (東から)

Ⅱ区　西壁断面 (東から)

Ⅱ区　東壁断面 (南端)(西から)

図版 6

Ⅰ・Ⅱ区　掘削状況 (北から)

SD03　遺物出土状況 (北から)

SD03　遺物出土状況 (南から)(手前は SE01)

米軍　1948 年 1 月撮影 (部分、上が北)

図版 8

国土地理院　1962 年撮影 (S1-62-4　C6B-8(部分))

SD01　断面 (西から)

SD01　遺物検出状況 (東から)

図版 10

SD01　掘削状況 (南西から)

SD01　掘削状況 (東北から)

SD02　掘削状況 (東北から)

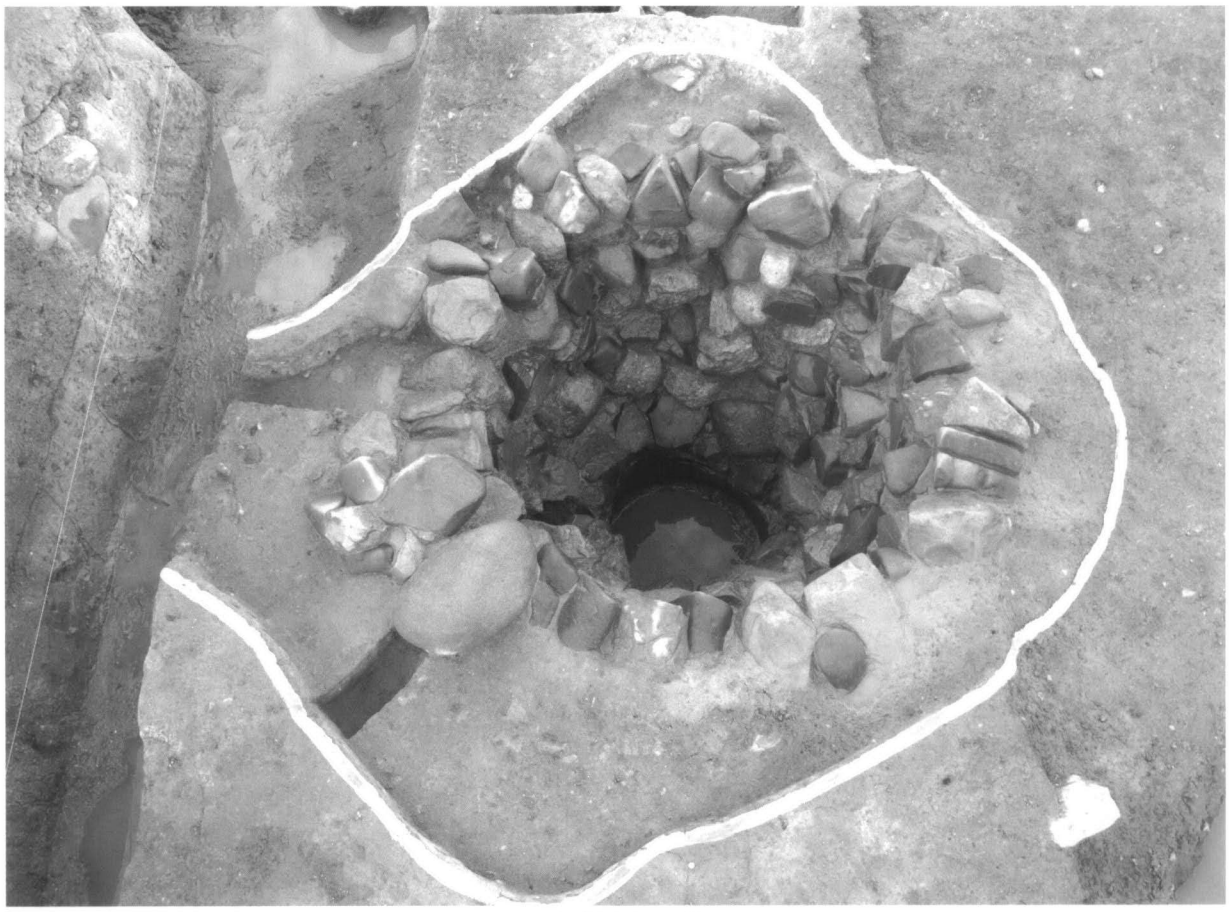
SD02　遺物出土状況 (東北から)

SD03　遺物出土状況 (北から)

SD03　遺物出土状況 (２回目)(北から)

SD03　掘削状況 (北から)

SD03　断面 (北から)

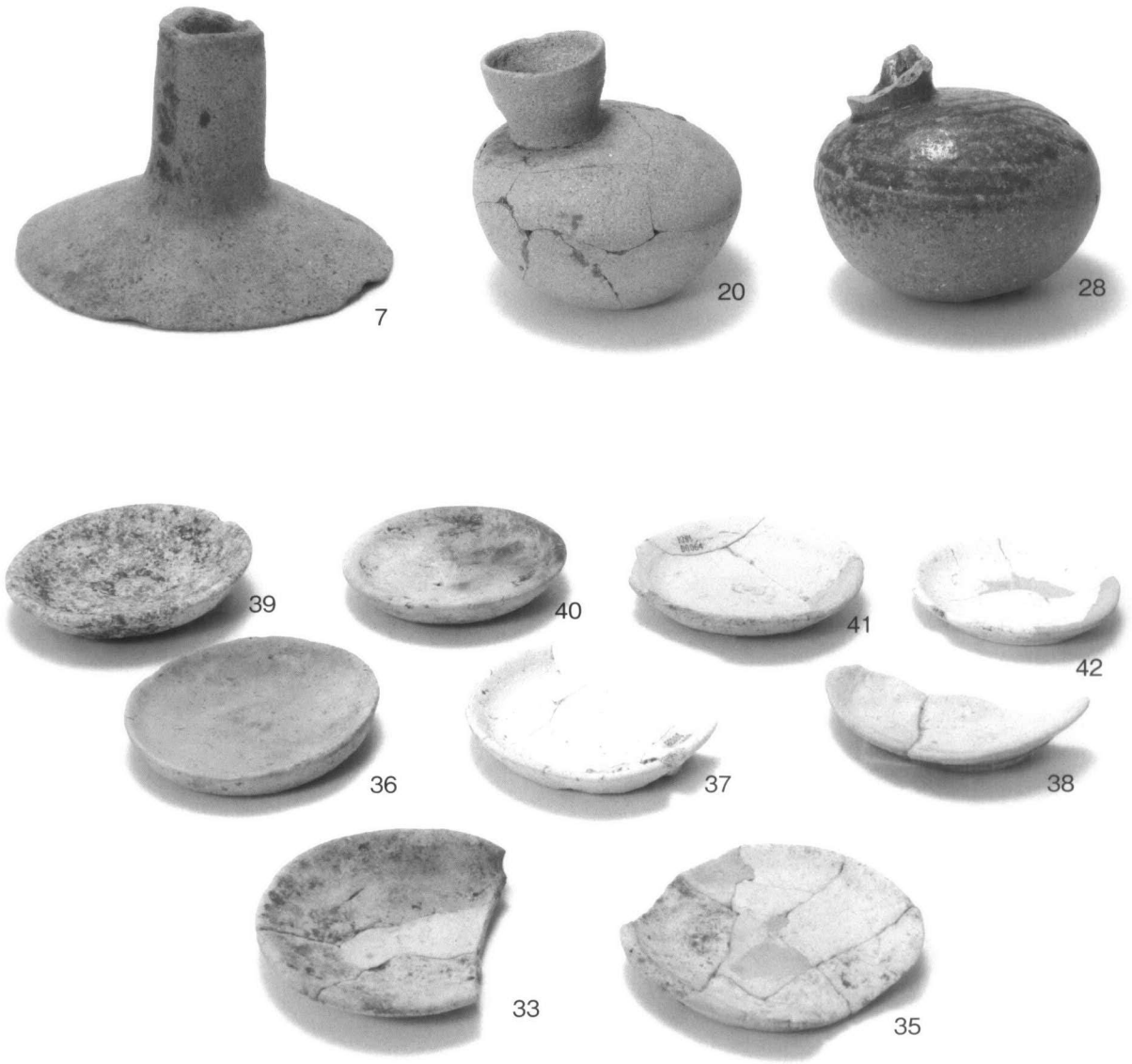


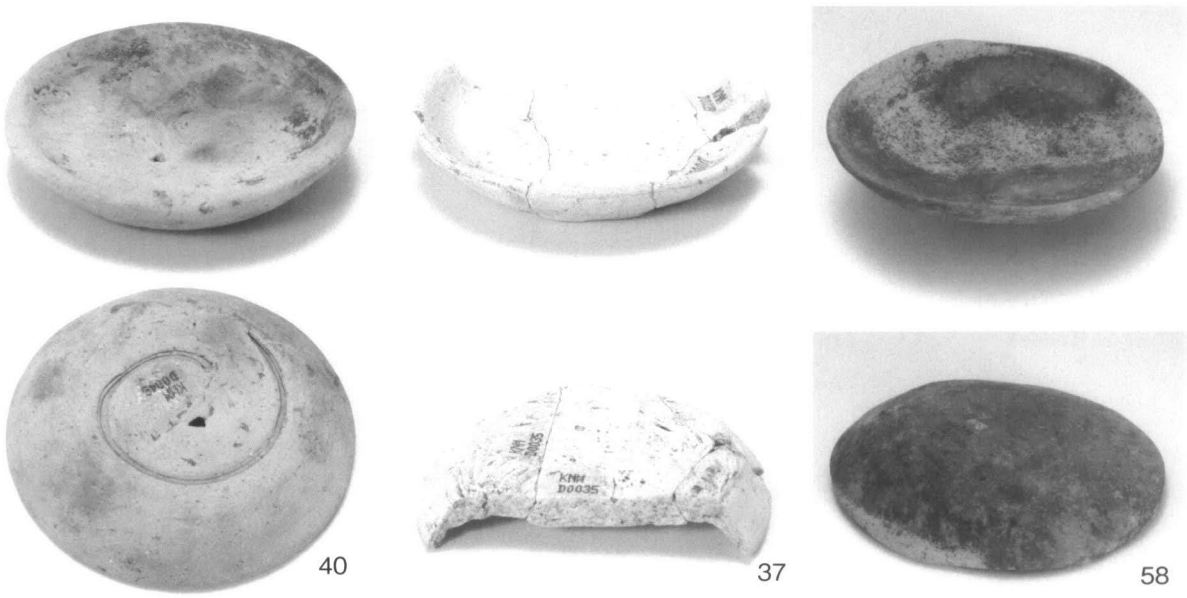
SE01　掘削状況 (南から)

Ⅲ区　東部掘削状況 (東から)

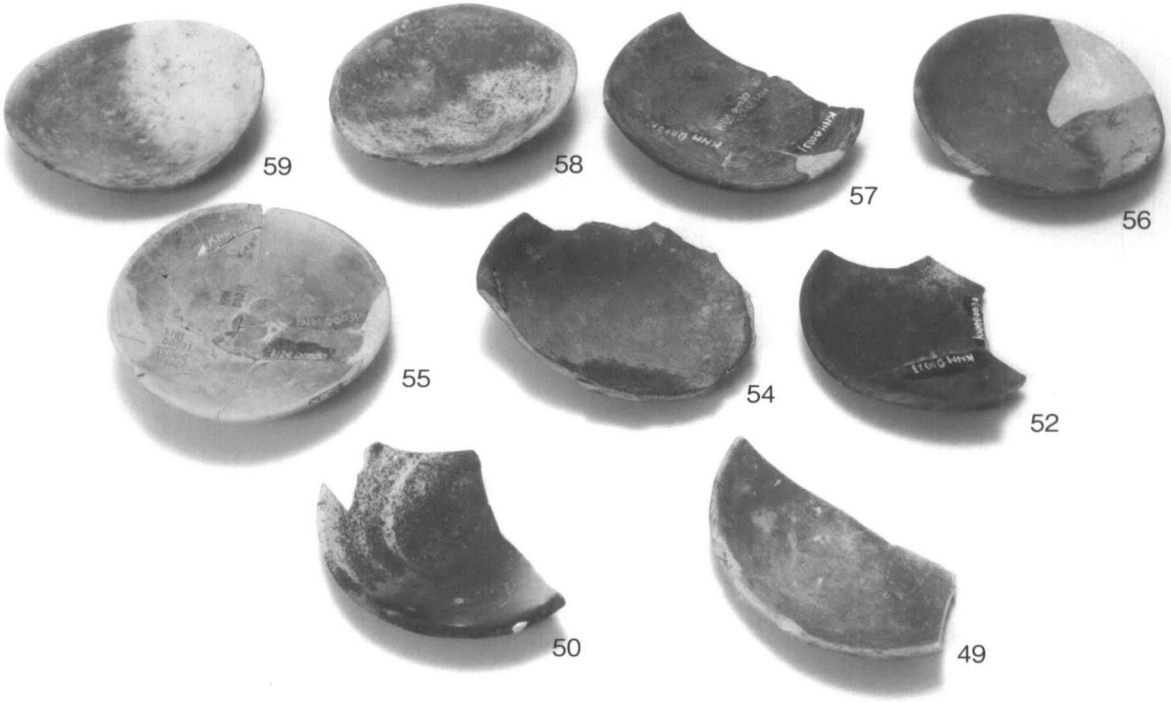
Ⅳ区（東部）　掘削状況（南から）

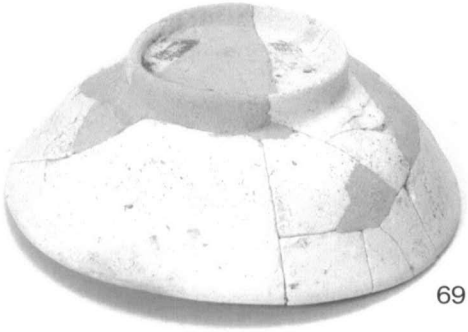
Ⅳ区（西部）　掘削状況（北から）

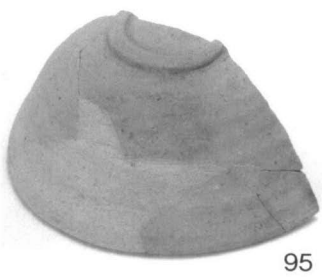




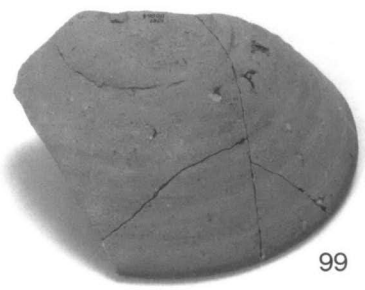
出土遺物

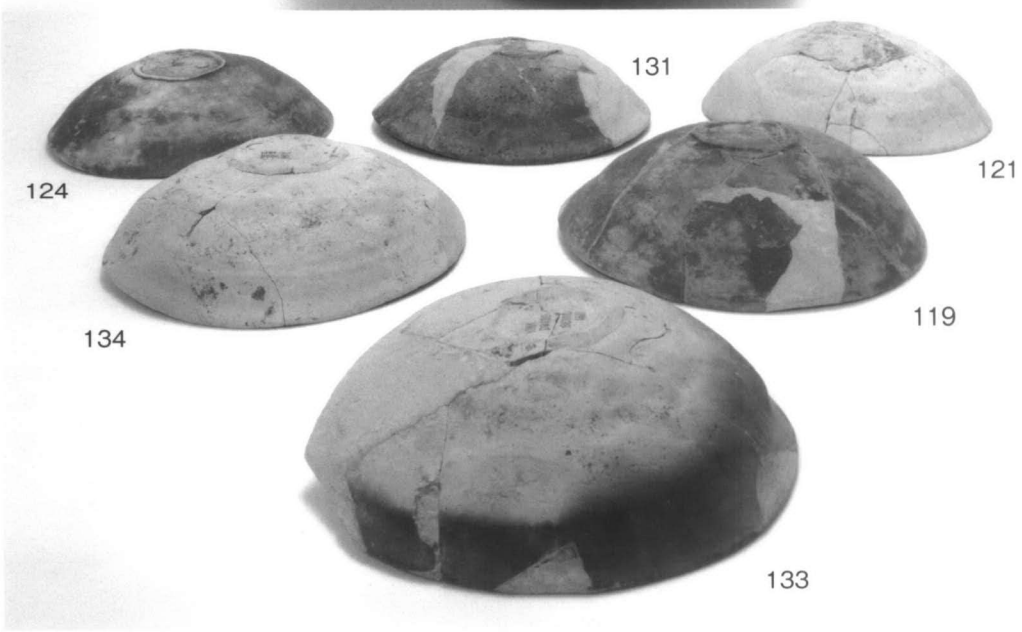




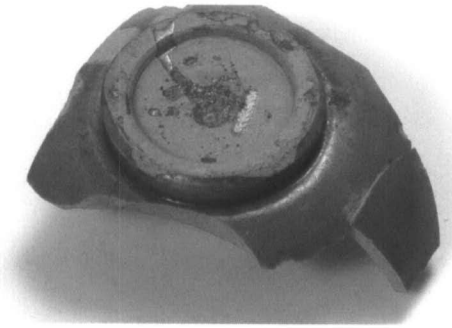


出土遺物



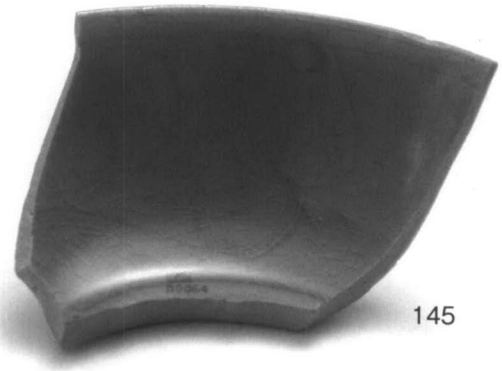


出土遺物

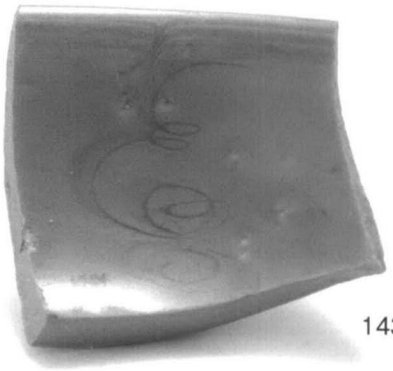


146

156



145



143

173

出土遺物

163

177

195

出土遺物

都市計画道路富士見町線他１線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

文京町二丁目西遺跡

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

都市計画道路富士見町線は、坂出市街地を南北に走る道路で、川津町の国道11号との交差点から県道33号までの区間である。

坂出市街地においては、坂出高校の校庭内にある製塩遺跡（文京町二丁目遺跡）以外の遺跡の所在はほとんど知られていなかったが、都市計画道路富士見町線改築予定地が同遺跡に近接することから、予定地内においても遺跡が所在する可能性が考えられた。このため香川県教育委員会文化行政課（現在の生涯学習･文化財課）は、用地買収と家屋の退去に合わせて試掘調査を実施し、遺跡の所在の確認を行った。

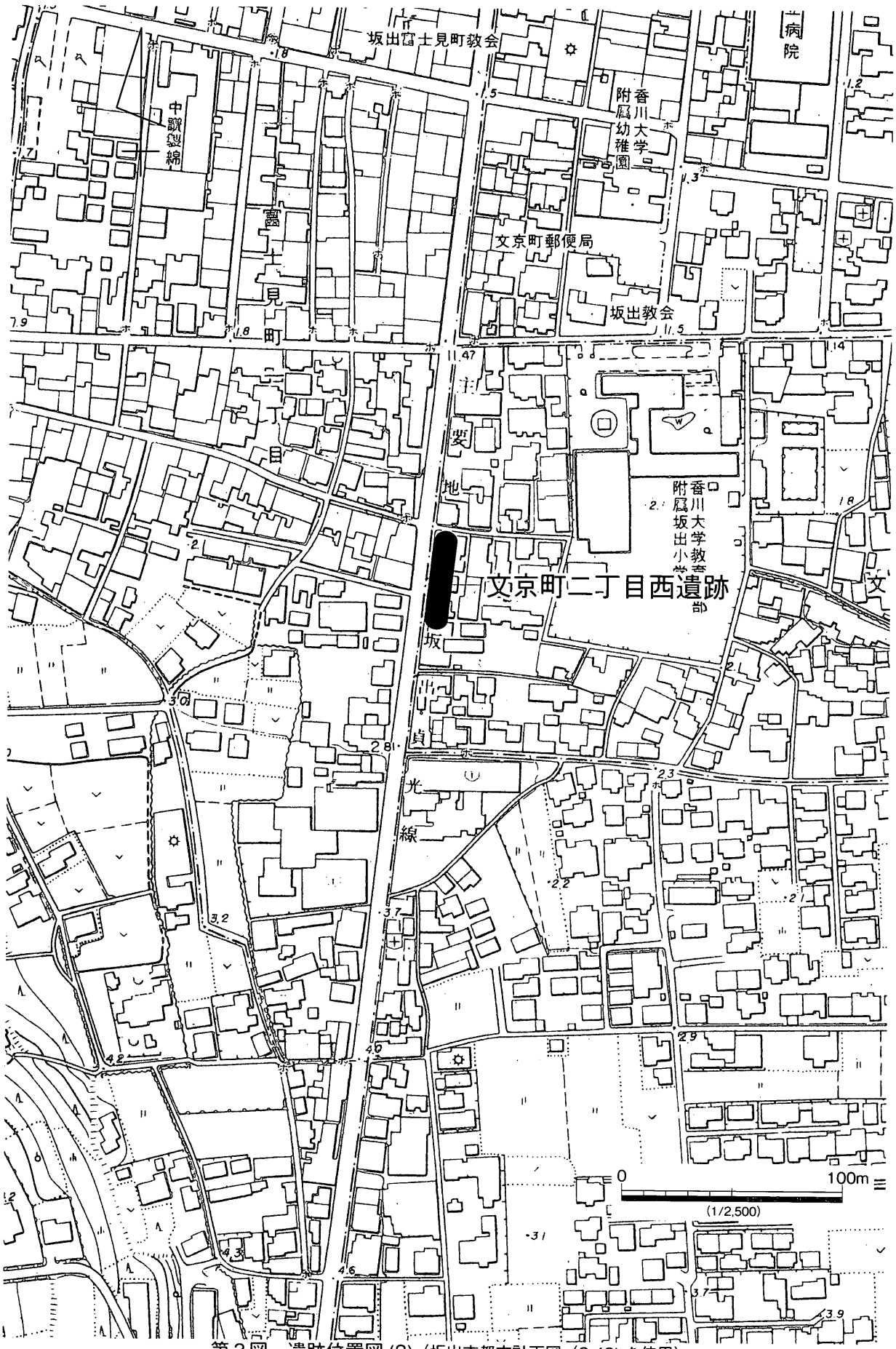
最初の試掘調査は、平成13年７月に行われた。３ヶ所のトレンチのうちの南の１ヶ所から遺構・遺物を検出した。ここでは地表下約１ｍで白色細砂層が現れ、その上面にＬ字状に配置された複数の石があり、周囲から土師器、須恵器、製塩土器、蛸壺が出土した。北側の２ヶ所のうち１ヶ所は建物基礎のため調査が不可能であったが、１ヶ所は分厚く堆積する砂層・シルト層に流入した自然木・植物遺体・貝殻等が含まれている状況が確認された。その後、８月にも１ヶ所の試掘調査を追加し、遺構・遺物を検出したトレンチより北側のトレンチでは遺跡が存在しないと判断された。

遺構・遺物を検出したトレンチの基盤は白色砂層であったが、製塩遺跡である文京町二丁目遺跡から連続する浜堤の堆積物と考えられ、この前縁が、西の教専寺から香川大学附属坂出小学校の校庭に切られる形で東の坂出高校に至る小道に当ると推定されたことから、遺跡の範囲が決定され、文京町二丁目西遺跡と命名された。なお、トレンチより南側については、今後の確認行為が必要と判断された。

第１図　遺跡位置図(1)

第２図　遺跡位置図 (2)（国土地理院地形図「丸亀」を使用）

その後、平成 14、15 年度に文京町二丁目西遺跡から南へ国道 11 号交差点に至る範囲の試掘調査が行われ、遺跡の所在は確認されなかった。この範囲での基盤層は黄褐色系シルト～粘土で、文京町二丁目西遺跡がのる浜堤の南限は確認されなかった。これは用地交渉や退去の遅れなどのために、平成 13 年度に遺跡が発見された地筆の南側の約 900㎡についてはトレンチが入れられず、この部分に浜堤の南限があると考えられた。



第３図　遺跡位置図 (3)（坂出市都市計画図（S.48）を使用）

第２節　調査の経過

文化行政課による上記の確認行為を経て、平成15年７月１日から９月30日までの３ヶ月間で、平成13年に確定していた範囲のうち530㎡の本調査が財団法人香川県埋蔵文化財調査センターによって実施された。この調査の際には、試掘調査によって遺構・遺物が検出された地筆（130㎡）は、一般車両の進入路を確保するなどの理由から次年度以降に見送られた。

その後、平成19年９月１日から10月31日までの２ヶ月間で、残りの130㎡の本調査と南側の予備調査を実施した。この段階では、まだ４筆のうちの中央部の２筆の家屋が未退去の状況であったが、南側の地筆のトレンチで浜堤の南限が確認され、北側の地筆のトレンチでは浜堤の上部が削平されている様子が確認され、浜堤上では遺構が残っておらず、北側へ傾斜する部分に包含層として遺存していることが確認された。このため、予備調査対象地の埋蔵文化財の保護措置は終了し、130㎡の本調査を行って現地を撤収した。

文京町二丁目西遺跡の整理作業は、平成20年９月１日から10月31日までの２ヶ月間で実施した。遺物の洗浄や注記作業については終了していたことから、遺物の接合･図化･写真撮影と遺構図のトレース、遺構写真の整理などを行い、本書にまとめた。出土遺物量は28㍑入りコンテナ44箱である。

第３節　調査体制・整理体制

発掘調査及び整理作業の体制は、以下のとおりである。

平成15年度

香川県教育委員会事務局文化行政課

総括

課　　長	北原　和利
課長補佐	森岡　修

総務・芸術文化グループ

主　　任	香川　裕章
主　　査	須崎　陽子
主任主事	八木　秀憲

文化財グループ

副主幹	大山　真充
主　　任	片桐　孝浩
文化財専門員	佐藤　竜馬
主任技師	松本　和彦

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総　括

所　　長	中村　仁
次　　長	渡部　明夫

総務係

参　　事	河野　浩征
副主幹	野保　昌弘
係　　長	多田　敏弘
主　　査	塩崎　かおり
主　　査	田中　千晶

調査係

主任文化財専門員	藤好　史郎
主任文化財専門員	西村　尋文
主任技師	細川　健一
調査技術員	飯間　俊之

平成19年度

香川県教育委員会事務局生涯学習課・文化財課

課　　長　　鈴木　健司

総括・生涯学習推進グループ

課長補佐　　武井　壽紀

副 主 幹　　古田　泉

主　　任　　林　照代

文化財グループ

課長補佐　　藤好　史郎

文化財専門員　森　格也

文化財専門員　信里　芳紀

香川県埋蔵文化財センター

総　括

所　　長　　渡部　明夫

次　　長　　廣瀬　常雄

総務課

課　　長　　野口　孝一

主　　任　　宮田　久美子

主　　任　　嶋田　和司

主　　任　　古市　和子

調査課

課　　長　　廣瀬　常雄（兼務）

文化財専門員　　木下　晴一

文化財専門員　　山元　素子

嘱託（土木）　　高嶋　勝英

嘱託（調査技術員）　木野戸　直

平成20年度

香川県教育委員会事務局生涯学習課・文化財課

課　　長　　春山　浩康

総括・生涯学習推進グループ

課長補佐　　武井　壽紀

副主幹　　香西　としみ

主　　任　　林　照代

文化財グループ

主幹（兼）課長補佐　藤好　史郎

主任文化財専門員　森　格也

文化財専門員　乗松　真也

香川県埋蔵文化財センター

総　括

所　　長　　大山　真充

次　　長　　廣瀬　常雄

総務課

課　　長　　廣瀬　常雄（兼務）

主　　任　　宮田　久美子

主　　任　　嶋田　和司

主　　任　　古市　和子

資料普及課

課　　長　　西岡　達哉

文化財専門員　　木下　晴一

なお、整理作業に携わった方は、以下のとおりである。

嘱託整理作業員　山地　真理子・市川　孝子・加藤　恵子・柴垣　智美・朝田　加奈子・廣瀬　杏子

第２章　立地と環境

第１節　地理的環境

概況

第二次世界大戦直後に撮影されたアメリカ空軍の空中写真によって、遺跡付近の地理的環境を解説する。

空中写真では、角山北麓と笠山西麓を結ぶ線を境に、南側は明るい色調で写り、北側はやや暗く、市街地北側の瀬戸内海に面する所は暗く写っている。この差は、地表の乾湿と関係し、明るい所は相対的に乾いており、暗い所は湿っていることを表し、土地の成り立ちが異なっていることを示している。明るく写っている所には、真北方向の条里型地割が広がるが、その北側には認められない。条里型地割が施工された時には、北側は可耕地ではなかったと考えられる。

明るく写る所とやや暗い所の境界付近は、地表直下に淘汰の良い砂層が現れるためか、地元ではかつての砂浜と伝えている。ここは、台風等の暴風によって浅い海底の砂が吹き上げられて堆積した浜堤と呼ばれる微高地と考えられる。不明瞭であるが、現地表上では微かな盛り上がりが認められ、角山北東麓に家屋が集中する所が見られるように、居住適地である。文京町二丁目西遺跡は、この浜堤に立地している。

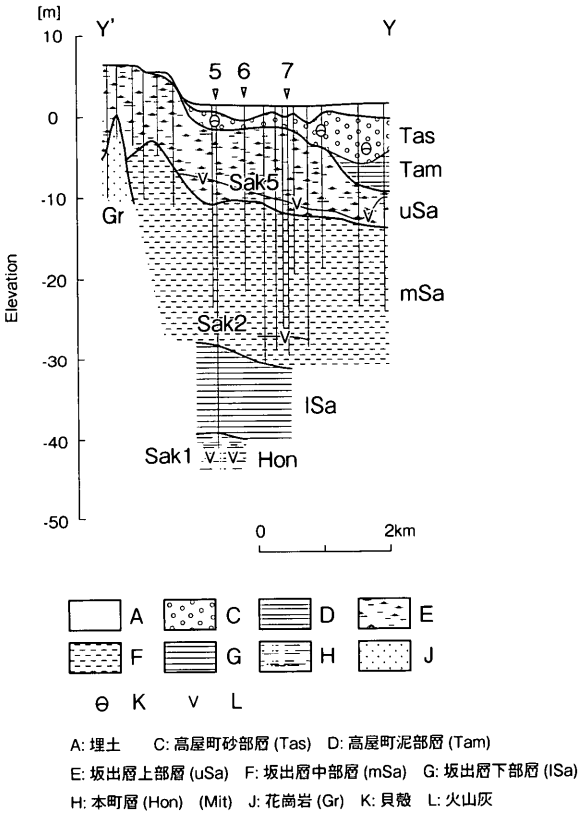
坂出市街地には、海側にもう１列の浜堤がある。市街地の街路に南に凸の弓状に延びるものが２条ある。この付近は家屋が密集しており現地を歩かないとわかりにくいが、陸側から緩やかに盛り上がり海側で急な傾斜をもつ断面形を呈する。急な傾斜部分は比高１ｍほど段差となっている。

海側の浜堤より北側の色調が暗く写る範囲は、高松藩の御普請奉行である久米通賢によって1830年前後に造成された塩田と畑地が広がっている。

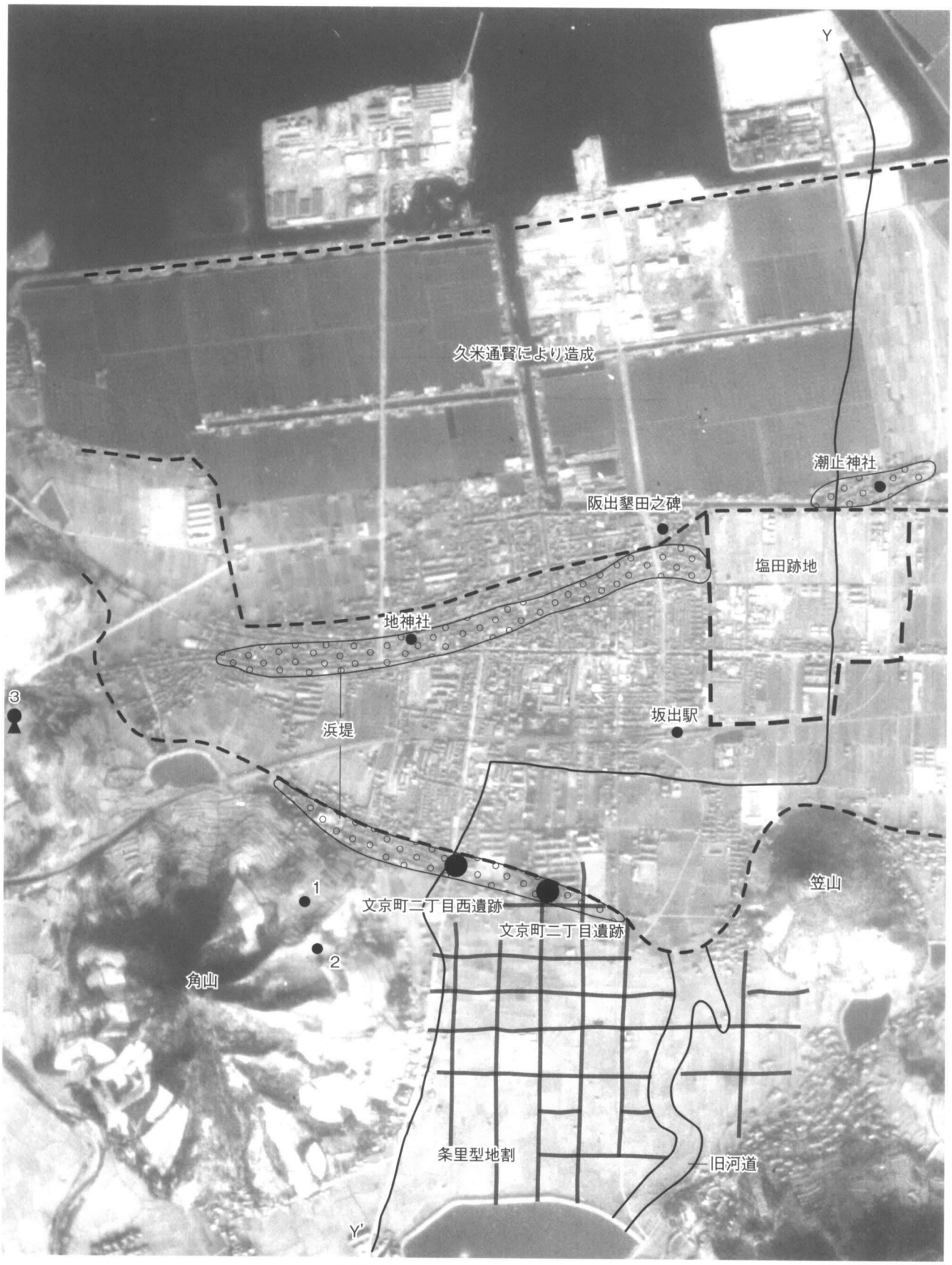
地下地質

川村教一氏によるボーリング・コア試料や掘削工事現場の露頭での観察・分析によって、当該地付近の上部更新統以後の層序と堆積環境の検討がなされている。図４は、図５のＹ－Ｙ´から作成された地質断面図である。文京町二丁目西遺跡の立地する浜堤は、坂出上部層が地表下に潜り込んでいくところに所在する。

坂出上部層は、－20～－３ｍに普遍的に見出され、連続性が良い。岩相は粘土もしくはシルトを主体とし、しばしば腐食質という。層厚は１～８ｍで、当該地付近では最上部に比較的厚い砂礫層がある。また、層中にＡＴ火山灰層が存在している。高屋町砂部層は、シルト層、粘土層を挟在する暗灰～灰色の砂層で、ＪＲ坂出駅の地下駐車場建設現場の露頭では、本層最上



第４図　地質断面図



1．三翼鏃採集地　2．潮（汐）見場古墳　3．田尾茶臼山古墳

Y-Y' は第４図　地質断面図作成位置

第５図　立地と環境解説図（空中写真は 1948 年１月　アメリカ空軍撮影）

部に多量の海生貝類化石が密集していた。これはイボキサゴ－ウミニナ属－ハマグリ群集で、生息深度は内湾の潮間帯下部、古水深として０～数m程度が想定され、貝化石の補正放射性炭素年代は5940 ± 90cal yrs BPが得られている。

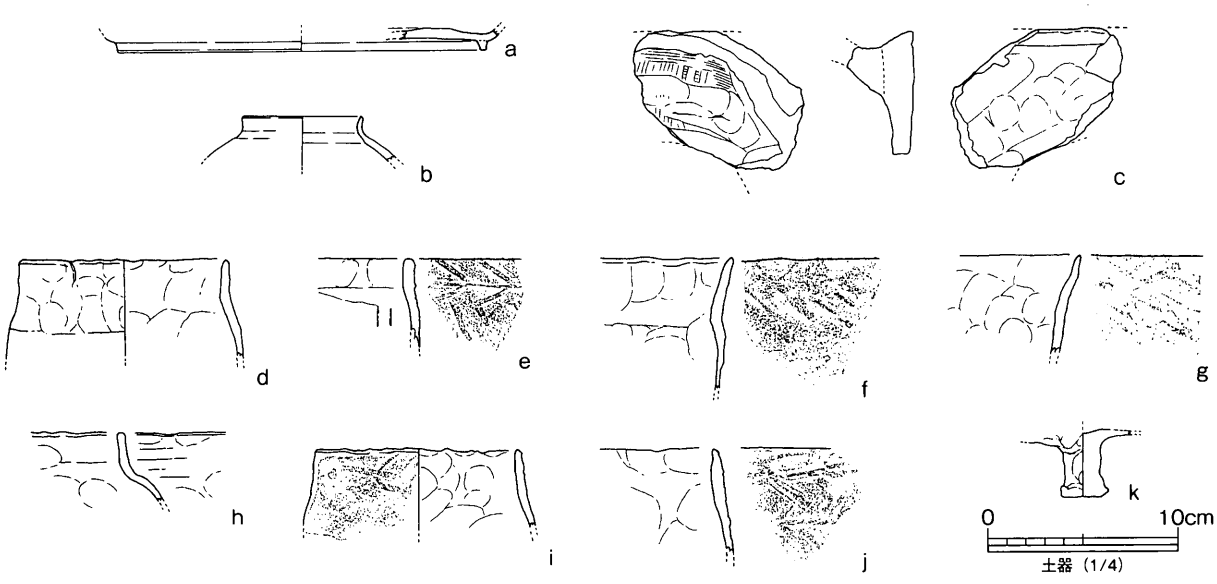
以上のことから、文京町二丁目西遺跡付近の地形発達史を概観する。当遺跡が立地する浜堤以南では、陸成層である坂出上部層が広がり、当遺跡発見の契機となった都市計画道路富士見町線の試掘調査でも当遺跡以南では海成層が認められないことから、浜堤前縁が縄文海進時の海岸線に相当する可能性がある。これは、ＪＲ坂出駅の地下駐車場の貝化石の生息深度や年代とも整合する。縄文海進以後の陸化の進行は、流入河川がないこともあって遅かったようで、後述する製塩遺跡である文京町二丁目遺跡や当遺跡の調査成果から、古代にも浅海が広がっていたと考えられる。なお、海側の浜堤がいつ頃形成されたのかは不明である。

第２節　歴史的環境

文京町二丁目西遺跡周辺には、内容の知られる遺跡は多くない。遺跡の東約250ｍの所に所在する文京町二丁目遺跡では、被熱した砂層と製塩土器が多数出土している。図６は、文京町二丁目遺跡から出土した遺物実測図である。当遺跡からは28ℓ入りコンテナ１箱の土器片が出土している。大半は製塩土器であるが、底部の形状がわかるものは無い。第６図では図化可能な破片の約２割を図化している。

製塩土器は、いずれも細片で歪んでいるものが多い。これらは口縁部に矢羽根状や菱形の格子状のタタキをもつものともたないものがあり、口径は10～11cmに復原でき、器厚は３～５mm程度を測る。これらの様相は、備讃瀬戸の櫃石島に所在する大浦浜遺跡での編年のⅣ類（７世紀第２四半期）に相当する。なお、ａの土師器皿は後出のものであるが、製塩土器が大浦浜Ⅳ類に限定されるのか他の型式のものが含まれているのかは、細片のため良くわからず、出土状況も不明確なため、７世紀中頃を中心とする製塩遺跡と捉えておく。また、ｋは、山口県の美濃ヶ浜式土器等に見られる台脚の可能性がある。

この他、西側の角山（184ｍ）斜面から青銅製三翼鏃が採集されている他、横穴式石室をもつ潮見場（汐見場）古墳が所在している。また、西北西1.1kmには、聖通寺山と角山の間の丘陵上に全長80mの前方後円墳の田尾茶臼山古墳が所在している。



第６図　文京町二丁目遺跡　出土遺物実測図

文京町二丁目西遺跡の南一帯には、真北方向の条里型地割が50町程度の広さで認められる。ここは丸亀平野に広範囲に見られる条里型地割とは方向を異にしている。

(参考文献)
川村教一「香川県坂出平野における上部更新統および完新統の層序と堆積環境」<第四紀研究>第41巻第2号　2002年
川村教一「坂出市京町から産した完新世貝化石群集－14C年代と古環境解析－」『香川県教育研究会　理化・生地部会会誌』第36号　2000年
香川県教育委員会・本州四国連絡橋公団『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅴ　大浦浜遺跡』1988年
川畑迪・渡部明夫「坂出市角山東麓採集の三翼鏃」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅰ』2005年

第3章　調査の成果

第1節　調査区と調査順序

調査対象地の着手時の様相は、すべて宅地跡地であった。高松法務局丸亀支局が保管する旧土地台帳によると、南端のトレンチ2は、昭和4年に田から宅地に地目変更されている。その他の調査区も、昭和初期に宅地に地目変更され、以後分筆が行われている。このことから、調査区に見られる水田耕作土より上層から掘り込まれた遺構は、昭和初期以降のものと考えることができる。

平成15年度調査では、530㎡の調査地をⅠ～Ⅲ区に分割して調査を行った。

Ⅰ区では、旧水田耕作土層の直下で遺構検出を行い、北半は撹乱されていたが、柱穴跡・土坑・溝状遺構等を検出した。これらの遺構は昭和初期以降のものと考えられる。次に15層上面で遺構検出を行なったが、遺構は確認されなかった。次に調査区中央を南北にトレンチ掘削し、無遺物であることを確認して調査を終了した。

Ⅱ区でも、旧水田耕作土層の直下で遺構検出を行い、井戸跡2・土坑・柱穴跡を検出した。これらも昭和初期以降のものと考えられる。次に21層の上面で遺構検出を行ったが、生痕化石と考えられる小穴多数を認めた以外、遺構は検出されなかった。次に14層上面で遺構検出を行い、トレンチ調査によって遺物包含の有無を確認して調査を終了した。

Ⅲ区は、面積が狭小であることから工事立会形式で調査を行った。遺構・遺物は検出されなかった。

平成19年度調査では、130㎡の本調査対象地をⅣ区（調査時呼称はⅠ区)、935㎡の予備調査対象地のうち北側の地筆をトレンチ1（調査時呼称はⅡ区)、南側地筆をトレンチ2（調査時呼称はⅢ区）とし、トレンチ1、トレンチ2、Ⅳ区の順番で調査を行った。

トレンチ1では、造成土、旧水田耕作土層の直下に浜堤堆積物である砂層を検出した。遺構・遺物は検出されなかった。砂層は、Ⅳ区では上面が土壌化していること、トレンチ2の検出高より約0.5m低いことから、削平を受けていると判断できた。その後、遺物・有機物の有無を確認するために、砂層を0.9m掘り下げたが、無遺物であったため自然科学的な分析を行うための試料を採集して掘削を中止した。

トレンチ2では浜堤の南限を確認したが、遺構・遺物は確認されなかった。トレンチ1，2の結果から、予備調査対象地には遺跡が広がらないことが確認されたため、トレンチ調査のみで調査を終了した。

Ⅳ区は、西に国道438号が走り、東は一般車両の出入りを確保する等の必要があるため、実掘67㎡の調査となった。南半はトレンチ1と同じ様相であったが、北半部で奈良時代の遺物包含層を検出した。包含層は、砂層が海側に落ち込んでいく所に堆積したものである。

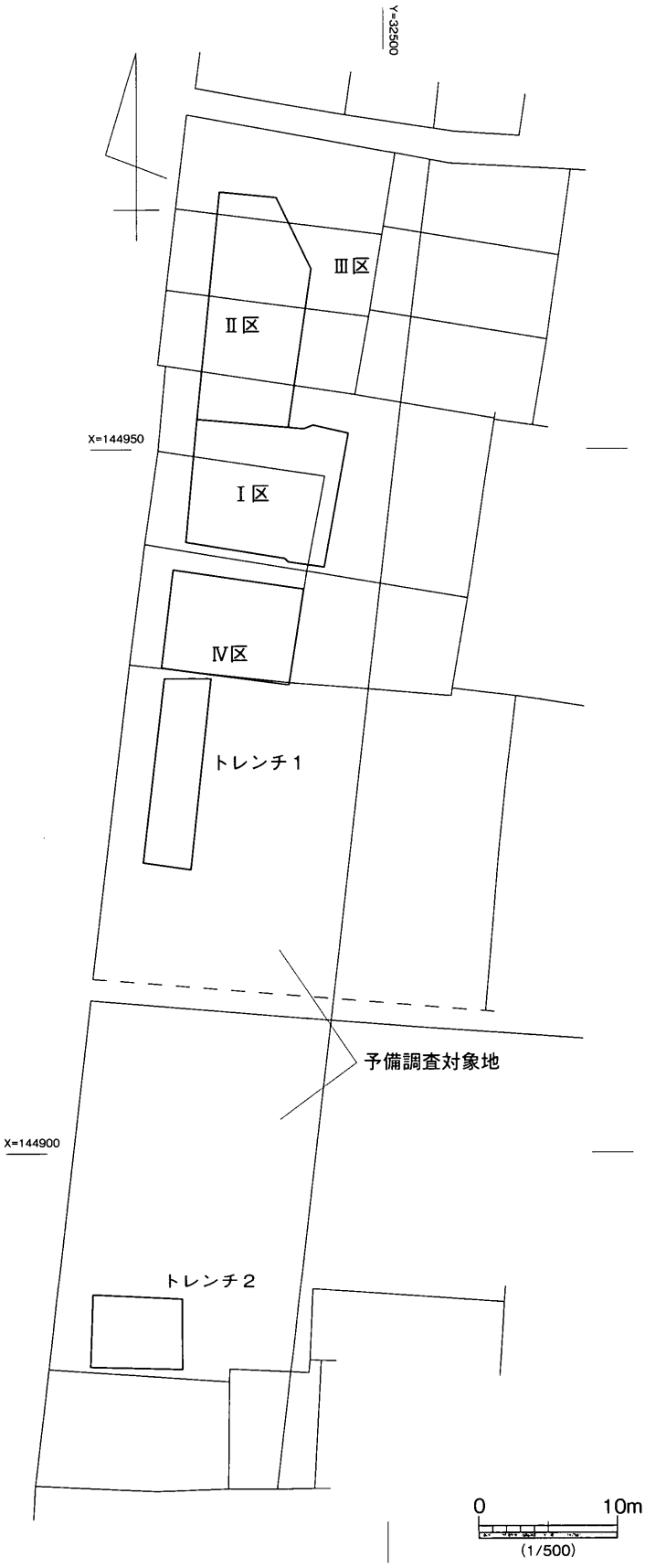
第2節　土層

予備調査トレンチ

トレンチ1（南北13m、東西3.5m）（第8図）

地表面の標高はT.P.2.3mである。上から花崗土層、3層程度に細分される造成土層、水田耕作土層、砂層の順に堆積する。水田耕作土層は、昭和初めに宅地に地目変更される以前のものと考えられる。また、砂層は浜堤堆積物と考えられる。上部は細～中砂を主体とし、下方に向かい粗砂、小礫が目立つようになる。まれに大礫が混じる。ラミナの方向は海側に傾斜している。貝殻片等は認められない。砂層上面では遺構・遺物は検出されなかった。なお、砂層をT.P.0.6mまで掘削したが、砂層中にも遺物は認められなかったため調査を終了した。検土杖によりさらに1m以上砂層が堆積することを確認している。

砂層上面の標高は1.5mであるが、トレンチ2の砂層上面の標高は2.0mであり、後述するように地表面は土壌化していたと考えられ、一般的な浜堤の断面形から考えて、上面は削平を受けていると考えられる。なお、砂層の堆積環境を推定する目的で珪藻分析を実施したが、珪藻は検出されなかった。



第7図　調査区割図（国土座標は日本測地系）

粗粒堆積物であることから保存の状態が不良なことが理由と考えられる。

トレンチ２（南北５ｍ、東西6.5ｍ）（第８図）

トレンチ１から南へ31ｍ離れたところに位置する。地表面はT.P.2.6ｍ、上から建築廃材や花崗土層、撹乱された層を経て、トレンチ南側では灰白色粘土混じりシルト質土層が現れる。この層は、以南の試掘トレンチで報告されている「黄褐色系シルト～粘土の基盤層」に相当する。灰白色粘土混じりシルト質土層は、海側に向かって下方に傾斜しており、その上面に砂層が堆積している。砂層は細砂～小礫からなり、淘汰はよくない。トレンチ１の砂層の下方の様相に近似している。ここが浜堤の南限に当たる。なお、遺構・遺物は検出されなかった。

Ⅳ区（第９図）

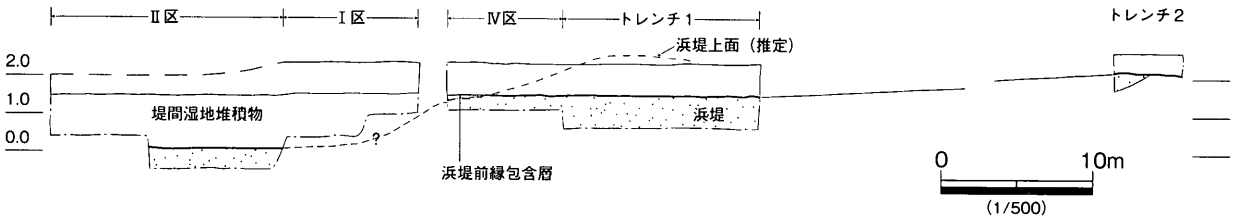
平成13年度の試掘調査により、遺跡の存在が判明していたところで、調査区の大きさは南北７ｍ、東西9.5ｍである。地表面の標高はT.P.2.3ｍで、上から花崗土層、造成土層、水田耕作土層、砂層の順に堆積する。砂層はトレンチ１から連続するもので、調査区北部で緩やかに下がり、その上にオリーブ褐色砂が堆積する。オリーブ褐色砂層は、細・中砂を主体とするもので、奈良時代を中心とする遺物を包含している。オリーブ褐色砂層の下の砂層は土壌化しており、黒褐色を呈している。土壌化する部分は海側に緩やかに下がっていることから、本来の浜堤部分の地表面は、土壌化（クロスナ化）しており、以南においては削平を受けているものと考えられる。

なお、クロスナの花粉と珪藻分析を実施しており、近隣にニヨウマツ林が分布する植生が復原されている。ニヨウマツは、浜堤上の海岸林を形成するクロマツの可能性が指摘されている。

Ⅰ・Ⅱ区（第10、11図）

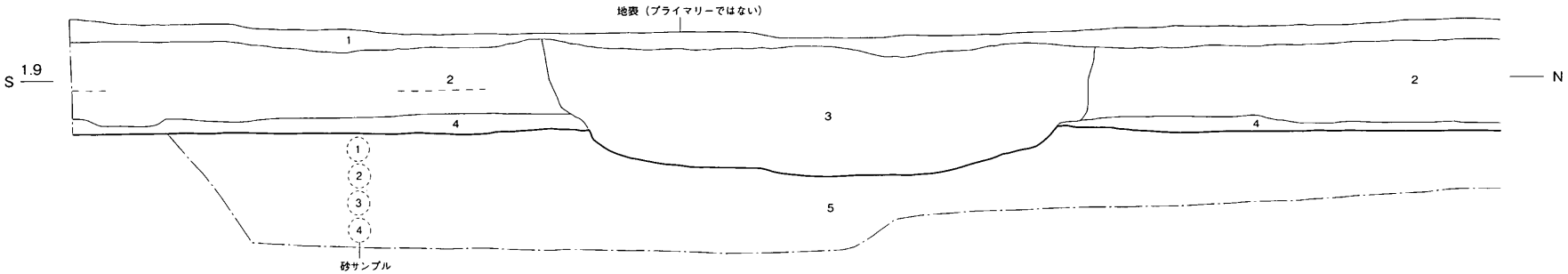
平成15年度の調査区である。Ⅰ・Ⅱ区は巨視的には浜堤前面の湿地性堆積物からなり、海側に向かって層厚が厚くなる傾向がある。堆積層は砂を主体とするもので、中には有機物を多く包含する層がある。このうち18層の上面には、直径数cmの生痕化石と思われる斑文が見られた他、19層の珪藻分析（第４章参照）では、干潟の潮間帯の環境が推定される成果を得ている。また、遺物が出土した最も下層は28層であるが、この層中の木材の放射性炭素年代測定を行った結果、2700 ± 40BP（補正）を得ている。なお、Ⅰ区とⅣ区は２ｍ離れるだけであるが、奈良時代を中心とする遺物包含層や浜堤堆積物である砂層との層位関係は、よくわからない。

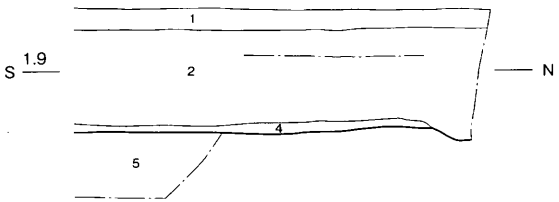
Ⅰ・Ⅱ区の堆積層には、摩滅した土器小片が包含されている。



第８図　堆積状況模式図

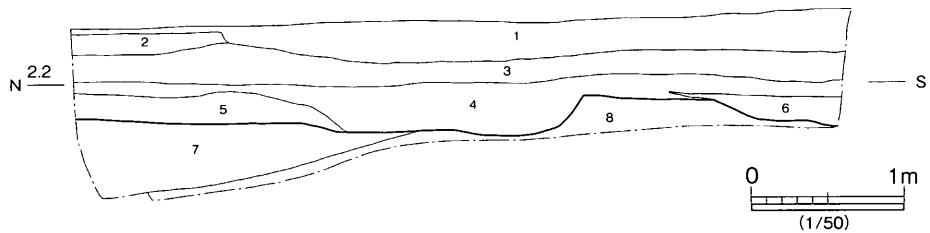
トレンチ１





1　花崗土
2　造成土 (3 層に細分可　点線は上から２層目と３層目　一点鎖線は１層目と２層目　黄色地山粘土と花崗土などがブロック状に混ざる)
3　5Y4/3 暗オリーブに変色した花崗土 (5 ～ 10cm の亜角礫含　コンクリート塊含) 撹乱
4　5Y4/1 灰色細砂まじりシルト質土　旧耕作土
5　砂層 (上面鉄分沈着　上部は細～中砂主　下方に向かい粗砂小礫が目立つ　まれに 2cm 程の礫が入る　級化層理あり　海側に傾斜する)

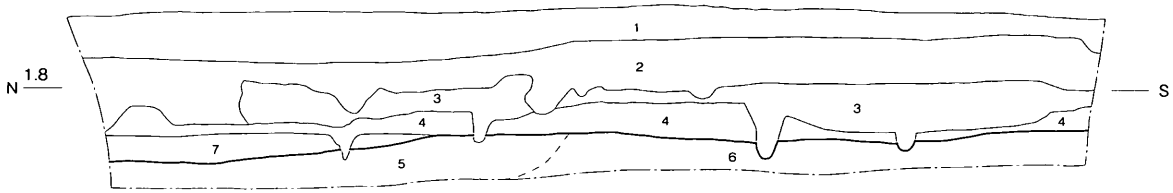
トレンチ２



1　建築物廃材　撹乱
2　5YR3/1 黒褐色　炭化物　撹乱
3　花崗土 (地山ブロック含)　撹乱
4　2.5Y4/2 暗灰黄色粗砂まじりシルト質土 (Fe 含)　撹乱
5　炭化物 (4 層土が多少まじる)　撹乱
6　炭化物 (4 層土が多少まじる)　撹乱
7　10YR5/3 にぶい黄褐色砂 (細砂～小礫　淘汰悪い　トレンチ１の浜堤堆積層と同じ　上の風成砂層はカットされている)
8　5Y7/2 灰白色粘土まじりシルト質土 (Fe 含　小礫が卓越する部分あり)

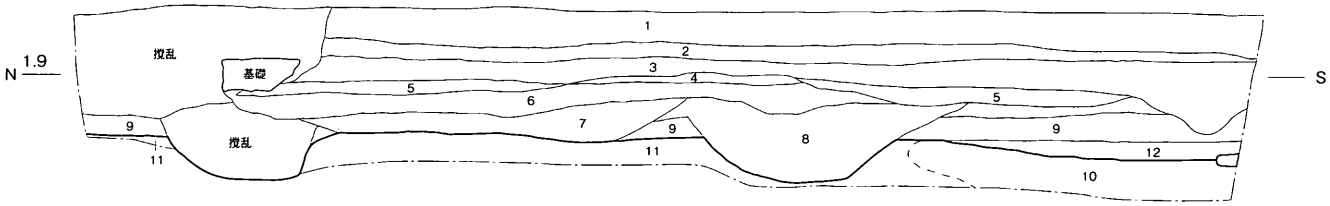
第９図　予備調査トレンチ　断面図

Ⅳ区　東壁



1　花崗土　撹乱　造成土
2　2.5Y3/2 黒褐色砂礫まじり極細砂質土 (6cm 以下の礫含　1cm ほどの地山粘土ブロック含) 撹乱　造成土
3　10YR5/6 黄褐色粘土 (小礫含　地山粘土による造成) 撹乱　造成土
4　5Y4/1 灰色シルト質土 (小礫以下の砂含)
5　2.5Y3/1 黒褐色砂 (砂層最下部　2.5Y2/1 黒色をベースに 2.5Y5/1 黄灰色の 5cm 程の斑文となる　砂は細砂主　クロスナ)
6　2.5Y6/3 にぶい黄色砂 (上部は橙色　細・中砂主　風成？)
7　2.5Y4/3 オリーブ褐色砂 (細・中砂主　奈良包含層)

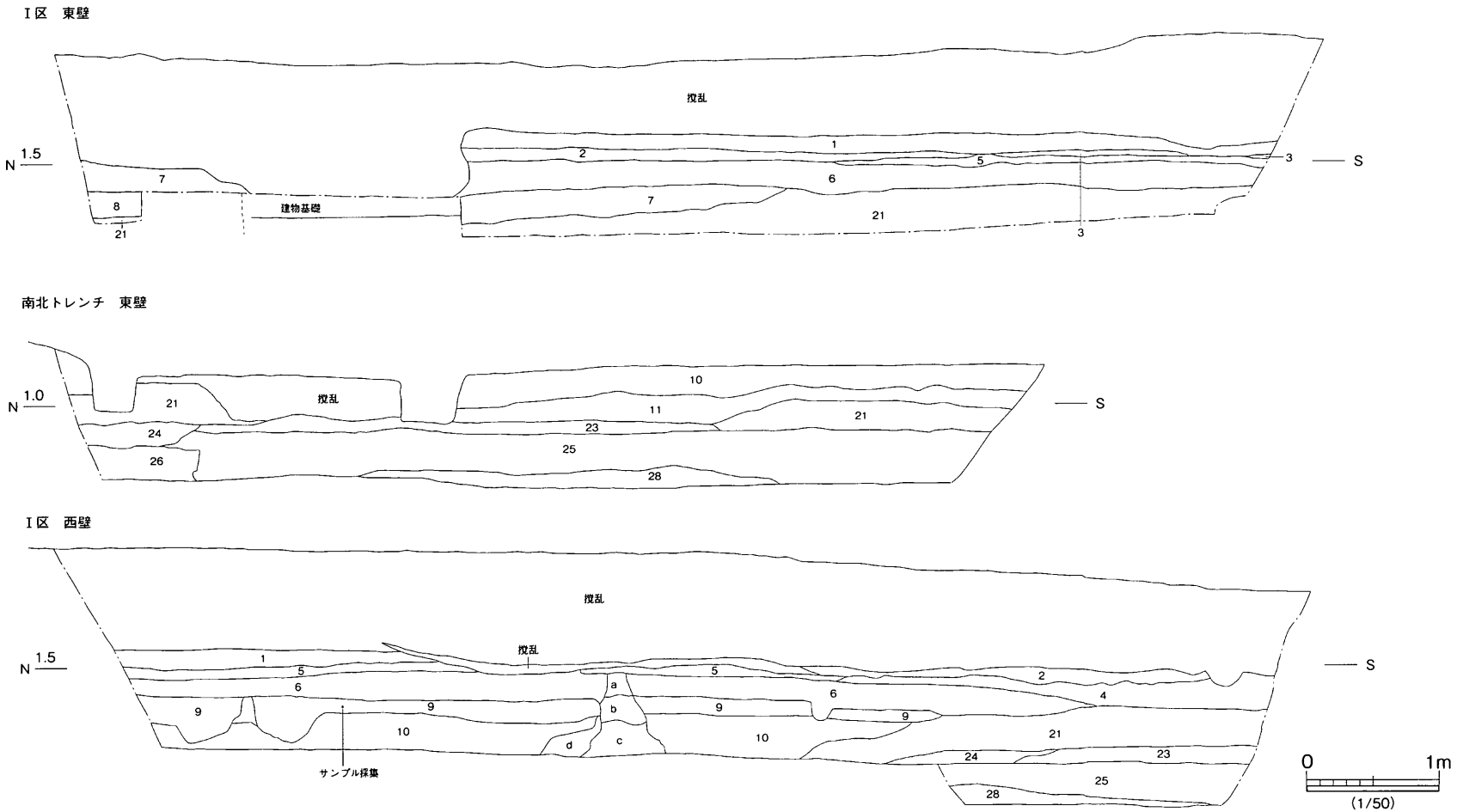
Ⅳ区　西壁



1　撹乱 1(下辺に 2cm 厚のセメント　5cm ほどの礫を含む)
2　花崗土と 3 層土が混じる
3　2.5Y4/1 黄灰色砂礫混じりシルト質土
4　炭化物
5　花崗土
6　2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土 (中・粗砂主)
7　花崗土
8　炭化物 (上に砂がまざる) 撹乱 3 のつづき
9　2.5Y4/1 黄灰色砂混じりシルト質土 (細砂まじる) 水田耕土？
10　クロスナ
11　砂層
12　奈良包含層

0　1m
(1/50)

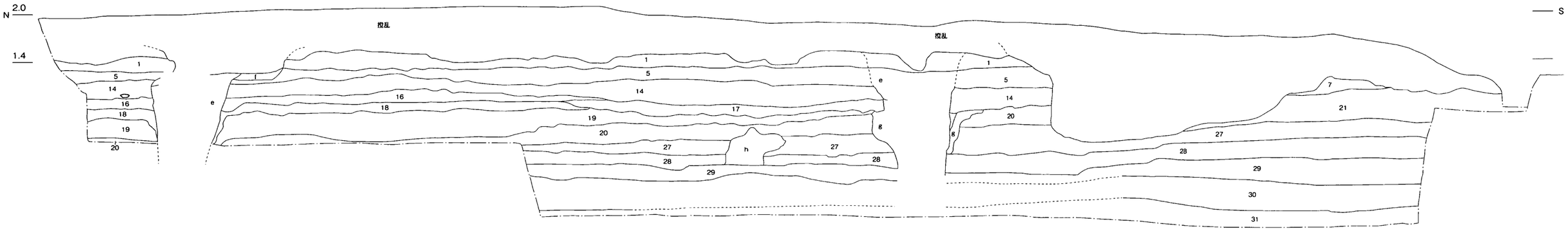
第 10 図　Ⅳ区　東西壁　断面図



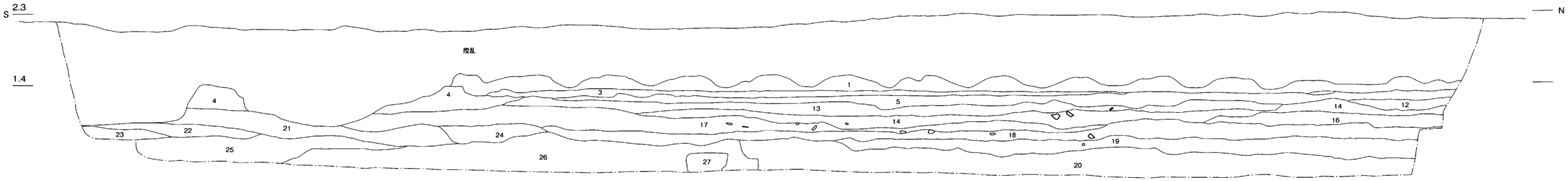
1　淡黒色土　旧耕作土
2　黄褐色土混じり暗灰茶色砂質土　旧耕作土か？
3　灰色砂質土　床土層に相当
4　褐色砂
5　淡黄灰色砂
6　淡褐色砂
7　灰白色砂
8　淡灰黄色砂 (21 層上面を洗う砂)
9　暗黒灰色砂 (黒色土と灰色砂の混合、黒色土が主、黒色土は有機層)
10　黒灰色砂 (9 層と 21 層の中間)
11　暗黄灰色砂 (暗灰褐・黄灰色砂の混合、有機物を含)
21　淡灰黒色砂 (黒色土と灰色砂の混合、灰色砂が主、黒色土は有機層、9 層に類似)
23　黒灰色砂 (9 層に類似)
24　暗黄灰色砂 (暗灰褐・黄灰色砂の混合、有機物を含)
25　淡灰青黒色砂 (21 層に類似)
28　淡青灰色砂 (比較的硬質→シマッテいる→トレンチの最下面にあたる)
a　淡灰茶色砂
b　淡灰青茶褐色砂
c　淡灰青褐色砂
d　暗青灰褐色砂

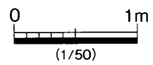
第 11 図　Ⅰ区　東西壁、南トレンチ　断面図

Ⅱ区　東壁



Ⅱ区　西壁





1　淡黒色土　旧耕作土
3　灰色砂質土　床土層に相当
4　褐色砂
5　淡黄灰色砂
7　灰白色砂
12　淡灰茶褐色砂
13　淡灰褐色砂 (Mn 点多)
14　淡灰色砂
16　淡灰黄褐色砂 (灰色・褐色・黄褐色砂の混合、17 層に類似)
17　淡灰黒色砂 (淡灰色・暗灰色砂の混合、有機物含、10 層に類似)
18　黒色土・褐色砂・淡灰色砂等のブロック層 (有機物多)
19　暗青灰色シルト (淡灰褐色砂・黒色粘土等ブロックを含、粗砂多、有機物多)
20　暗青灰色砂 (19 層と色調同じ、粗砂多、シルト質が強い)
21　淡灰黒色砂 (黒色土と灰色砂の混合、灰色砂が主、黒色土は有機層、9 層に類似)
22　暗茶褐色砂
23　黒灰色砂 (9 層に類似)
24　暗黄灰色砂 (暗灰褐・黄灰色砂の混合、有機物を含)
25　淡灰青黒色砂 (21 層に類似)
26　淡灰青褐色砂
27　青灰色砂
28　淡青灰色砂 (比較的硬質→シマッている→トレンチの最下面にあたる)
29　淡青灰色粘土
30　淡灰青色シルト (粘性強)
31　淡灰色細砂 (若干シルト質)
e　灰色粘土・灰褐色砂ブロック層 (SE01 埋土)
g　茶褐色粗砂
h　茶褐色粗砂

第 12 図　Ⅱ区　東西壁　断面図

第３節　遺物

Ⅳ区浜堤前縁部の包含層

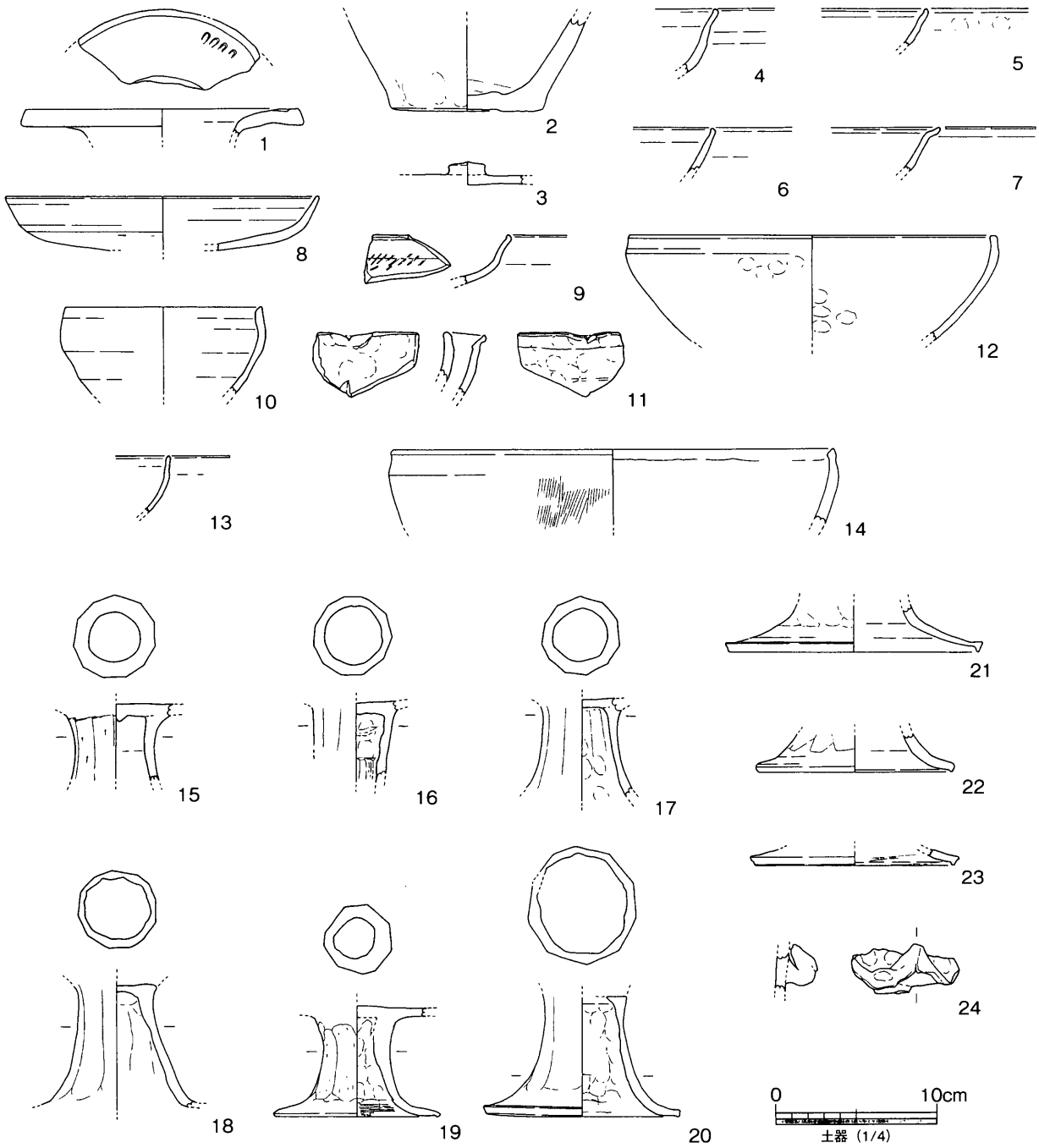
第 13 ～ 18 図は、浜堤前縁部の包含層から出土した遺物実測図である。弥生土器片が微量含まれるが、大半は古代の土器である。浜堤前縁部の包含層は、Ⅳ区北半において浜堤の砂層の上面に堆積する。調査区北端では層厚 10cmである。平成 13 年度の試掘調査の際には、石材が並べられていると観察されたが、本調査の結果、人為的な配置は認められないと判断した。遺物の出土状況には粗密があり、飯蛸壺の破片が集中する所も見られたが、原位置を動いて砂の中に埋もれている状況である。なお、包含層中に含まれる石材は、表面に約２㎜の小穴が多数空いた径約 25cm、厚さ約４cmの大きさの安山岩が主体で、風化したサヌカイト、砂岩、花崗岩等からなる。石材に被熱の痕跡や付着物は認められなかった。

第 13 図１は、弥生土器広口壺の口縁部の破片で、口縁端部内面に列点文が認められる。２は、弥生土器の壺か甕の底部である。１，２ともに摩滅している。

３は、土師器の杯蓋の破片である。つまみは扁平で、上面中央がわずかに突出している。４～９は、土師器の杯か皿の破片で、口縁端面が内側に丸く肥厚するものと口縁部上半で大きく外反するものがある。９は内面に斜め方向の暗文が認められる。10 ～ 14 は、土師器の鉢である。11 は口縁端部を一部折り曲げて注ぎ口をつくっているが、12 と同一個体の可能性が高い。12 は体部が内湾して立ち上がり、口縁は強いナデにより直立気味となり、口縁端部は丸く収めている。11、12 には内外面に赤色顔料が付着している。14 は小片であるが、鉢と考えた。外面に縦方向のハケが見られ、口縁部端面は内傾している。15 ～ 23 は土師器の高杯である。15 ～ 18 は柱状部の破片で、柱状部は円筒形ではなく下方に向かって広がる形状で、ヘラ状工具で下方から上方に面取りしている。15 ～ 17 は 11 面、18 は 12 面に面取りしている。19、20 は脚部片である。19 は９面に面取りし、脚裾を大きく湾曲させ端部は内側に丸めている。裾部内面にはハケが見られる。20 は 10 面に面取りし、端部は内側に肥厚させている。内面に粘土紐の接合痕が明瞭に残っている。21 ～ 23 は脚裾部の破片である。21 と 23 は端部を下方に摘み出している。24 は三角形の二辺を折り曲げて屈曲させた把手である。

第 14 図 25 ～ 38 は土師器甕である。25 ～ 28 は、体部最大径が体部中位付近にあると推定され、いずれも口縁部を「く」の字状に屈曲させ、口縁端部を上方に摘み上げ、外傾する端面を形成している。体部外面は縦方向のハケ、口縁部内面（25 は体部上半も）に横方向のハケを施している。29、30、32 は、口縁部の屈曲部付近が最大径と推定される。調整は 25 ～ 28 と同じである。37 は厚手のつくりで、体部から明瞭な稜をもたずに外上方に屈曲する口縁で、端部は丸く収めている。38 は、小破片のため全形を想定し難いが、甕と考えられる。口縁端部は外面を肥厚させているが、体部からそのまま立ち上がり終わっている。39 は土師器鍋、40、41 は移動式竈である。

第 15 図 42 は、須恵器杯蓋で、口縁端部は段を持たず、下方に短く屈曲する形態である。天井部に回転ヘラ削りが認められる。43 ～ 45 は須恵器杯で、口縁端部を尖り気味にしている。44 は胎土中に２㎜以下の砂粒を多く含み、底部と口縁部の境界は明瞭な稜をもたない。径高指数は 43 が 32、44 が 30 である。46 は杯よりも深い形態であることから椀と考える。径高指数は 37 である。47、48 は高台を付す須恵器杯である。47 の高台は外側に踏ん張り、端面は平坦である。48 の端面は外側が上がっている。49 は須恵器椀で、高台端面は内側が上がる形態である。径高指数は 42 である。51 ～ 54 は須恵器皿である。51、52、54 の口縁端部は丸く収めているが、53 は外面を丸く肥厚させている。また、53 は厚い底部を



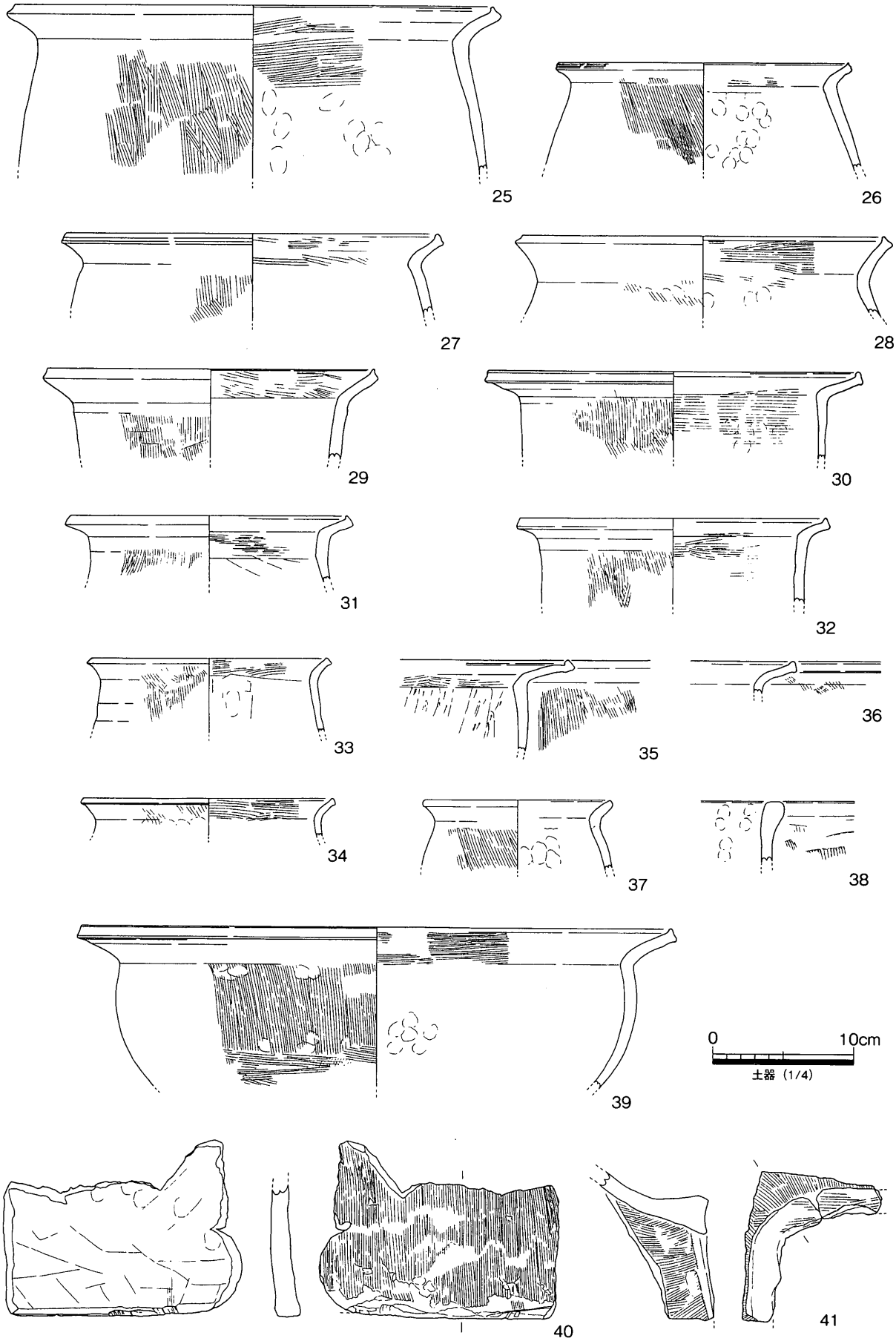
第13図　Ⅳ区　浜堤前縁部　包含層出土遺物（1）

もつ。51の径高指数は16、52は小片のため復原径については正確さを欠く。55は須恵器高杯の脚部、56は須恵器平瓶の口縁部と考えられる。外上方に開く口縁の端面はほぼ水平に仕上げている。

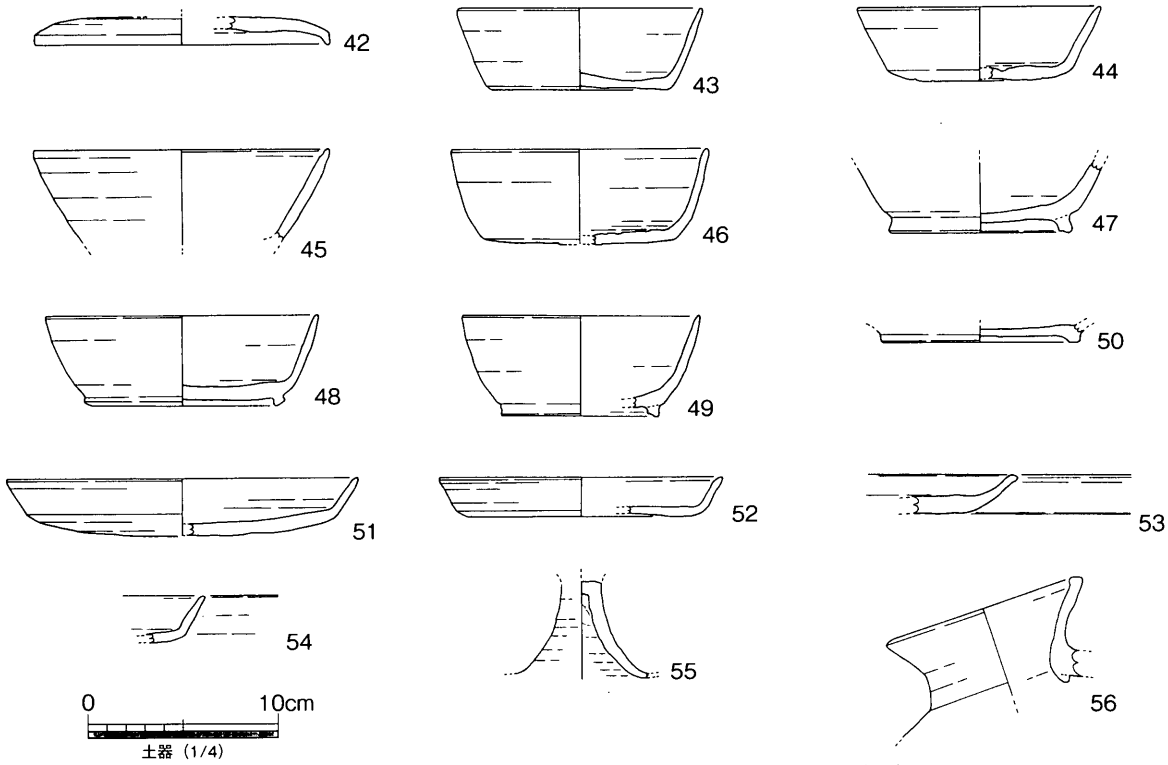
第16～18図は、飯蛸壺である。飯蛸壺については、吊り手部上面の形状・ヘラ記号・穿孔の方向が明瞭にわかるかどうか・色調・胎土などの視点から分類を試み、主として吊り手部上面の形状を中心に以下のⅤ類に分類した。

Ⅰ類（57～59）

吊り手部上面に棒状工具で窪みをつくっている。上から見た吊り手部の形状は隅丸方形になる。体部内面の最上部は窪まない。穿孔の方向は明瞭で、色調は灰白色を呈する。



第14図　Ⅳ区　浜堤前縁部　包含層出土遺物（2）



第15図　Ⅳ区　浜堤前縁部　包含層出土遺物（3）

Ⅱ類（60～64）

吊り手部上面に指オサエで窪みをつくっている。上から見た吊り手部の形状は隅丸方形になる。体部内面の最上部は窪まないものが多い。5例中4例に孔の下側に縦方向に入れるヘラ記号がある。穿孔の方向は明瞭なものが多い。色調・胎土に共通性は認められない。

Ⅲ類（65～71）

吊り手部上面に指オサエで平坦面をつくる。上から見た平坦面の形状は隅丸長方形である。体部内面の最上部は明瞭に窪むものが多い。7例中4例にヘラ記号があり、いずれも孔面の孔の下部に横方向に入れられる。穿孔の方向は明瞭なものと不明瞭のものがある。色調・胎土に共通性は認められない。

Ⅳ類（72～84）

吊り手部上面に指オサエにより平坦面をつくる。上から見た平坦面の形状は円形である。体部内面の最上部の窪みは、楕円形を呈する明瞭のものと不明瞭のものがある。ヘラ記号は破損のため観察できない2例を除く、11例すべてに吊り手部の一側面に縦方向のヘラ記号がある。穿孔の方向は明瞭で、開け始めた面の方が押圧によって窪んでいる。色調はすべて灰白色を呈し、砂粒の含有は少ない。Ⅳ類は、共通する要素が非常に多く、同時に焼成されたものである可能性が高い。

Ⅴ類（85～94）

吊り手部上面が球面となり平坦面をもたない。体部内面最上部の窪みは体部と一体となった小さな窪みである。ヘラ記号は、孔面の孔の下部に横方向に入れるものが3例、縦方向に入れるものが1例である。穿孔の方向はすべて不明瞭である。色調は、灰黄色のものが10例中7例を占め、胎土中に赤色粒を含むものが大多数を占める。また、半数は5mm以上の砂粒を含んでいる。

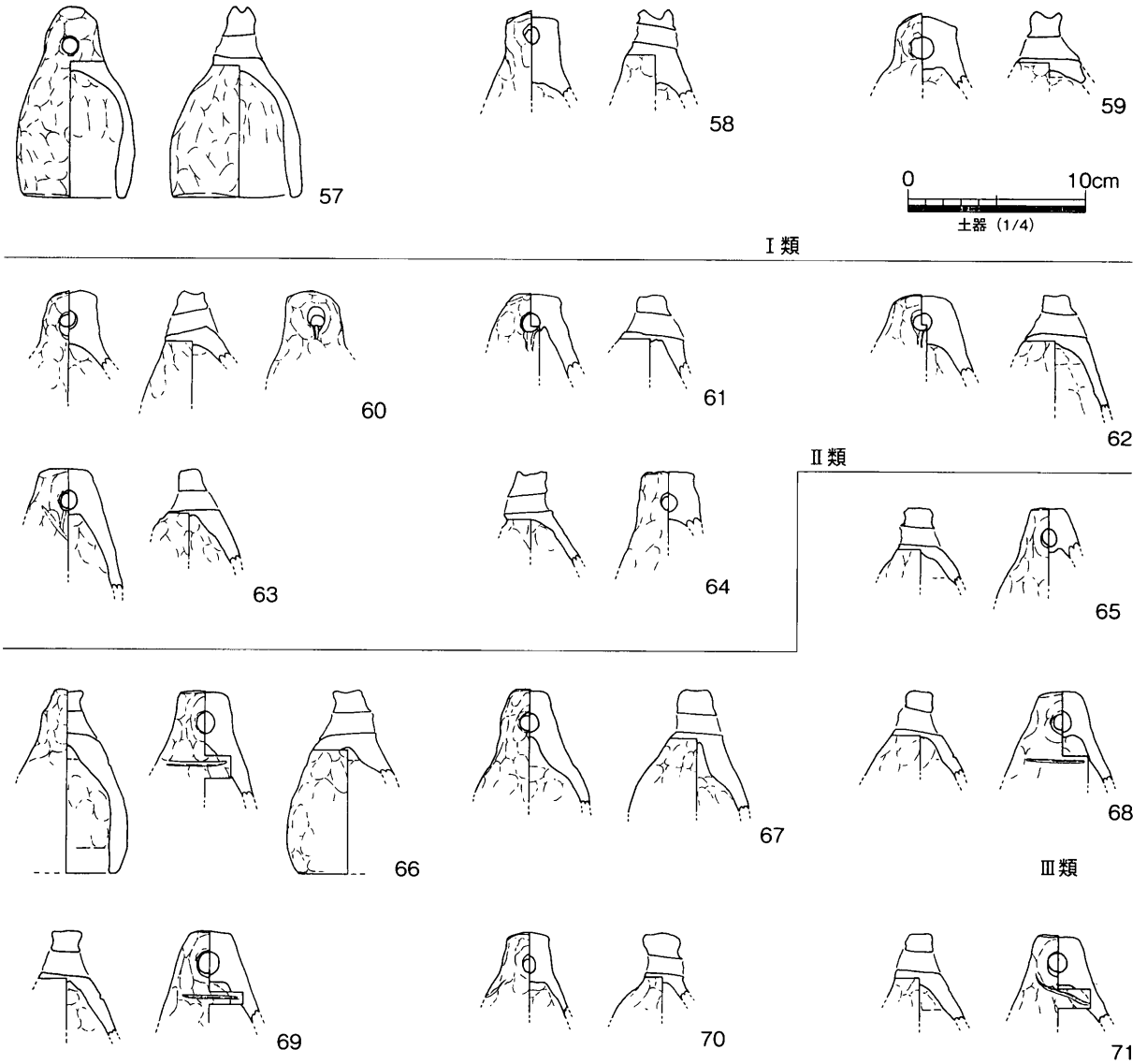
第18図95～102は、吊り手部上面が観察できないため、分類しなかったものである。しかし、95、96はⅣ類に入る可能性が高い。

以上Ⅰ～Ⅴ類の系譜はよくわからないが、出土状況から同時期の所産と考えられる。飯蛸壺が多数検出されたのが生産地の近辺であれば、同一の類型のものが集中すると想定されることから、実際に使用された場所であったことを示すものと考えられる。

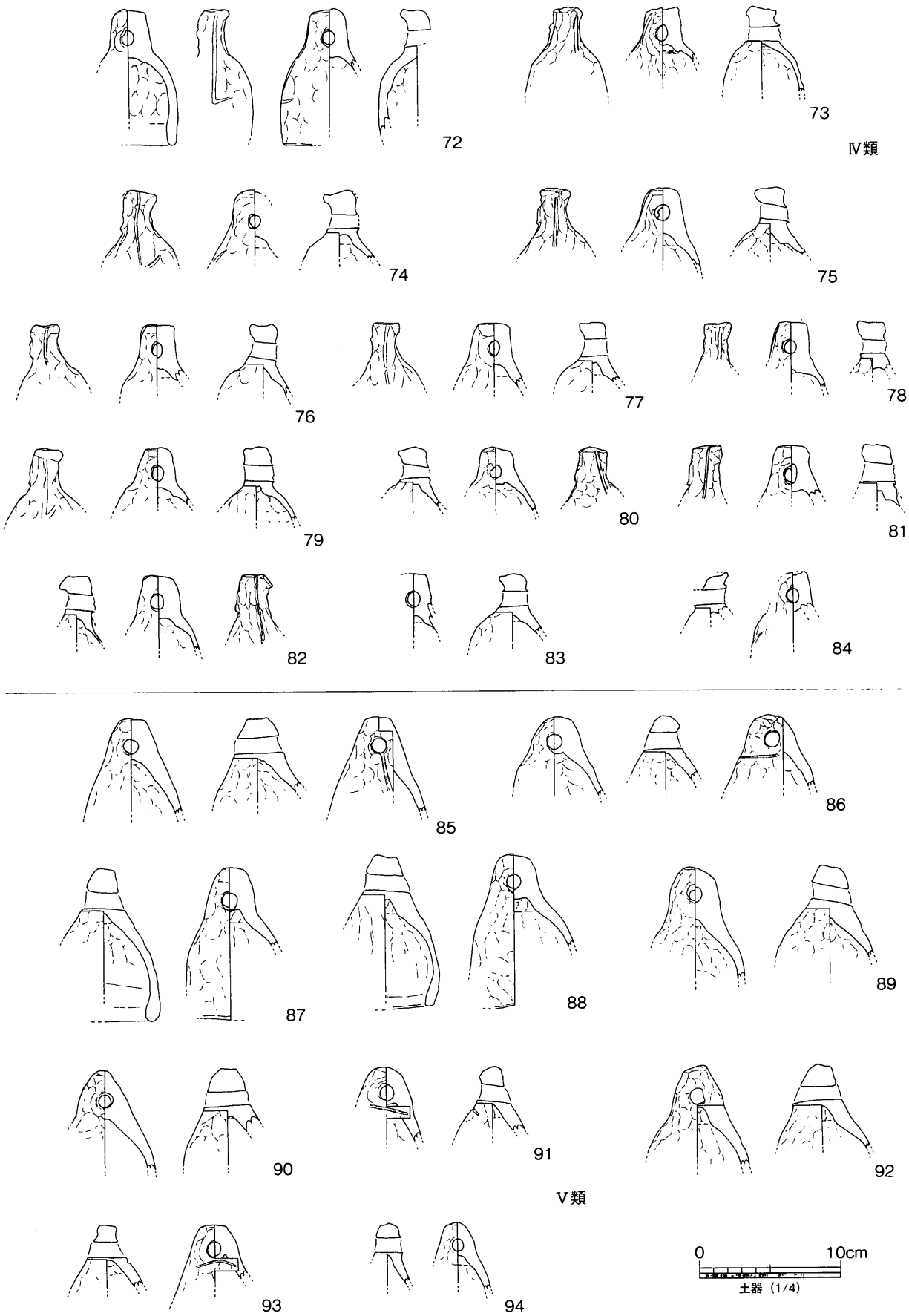
以上の遺物の年代は、平城宮跡出土の土器との比較から、概ね８世紀前半期代のものと考えられる。

第19図103～106は、Ⅳ区の撹乱層から出土した遺物のうち、中世以前のものを図化したものである。103は須恵器杯である。先述の包含層から出土した杯に比べると、口縁の外傾度が大きく、後出のものと思われる。径高指数は25である。104は飯蛸壺である。吊り手部上面を棒状工具で窪ませており、先の分類のⅠ類に当る。105、106は中世の土師質土器足釜の脚部である。

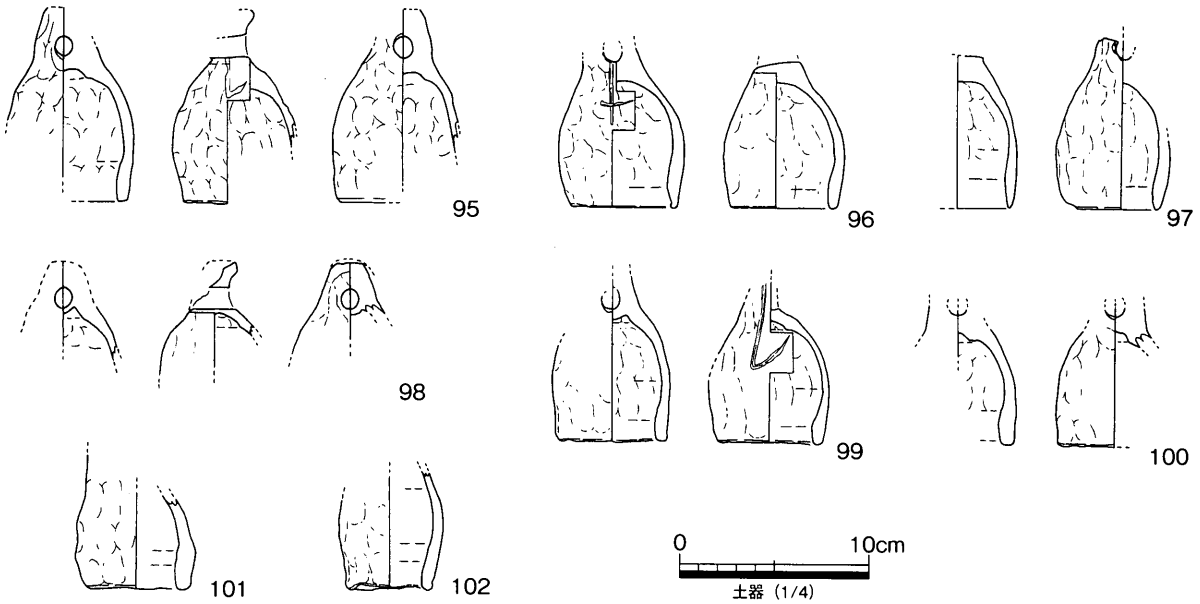
遺物包含量も少なく、憶測の域を出ないが、これらの遺物は、後の時代においても浜堤上での土地利用が積極的に行われていたことを暗示するものと捉えたい。



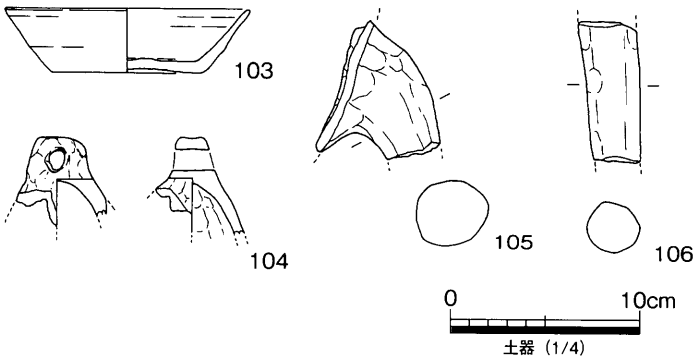
第16図　Ⅳ区　浜堤前縁部　包含層出土遺物（4）



第17図　Ⅳ区　浜堤前縁部　包含層出土遺物（5）



第18図　Ⅳ区　浜堤前縁部　包含層出土遺物（6）



第19図　Ⅳ区　その他の遺物

2．Ⅰ、Ⅱ区の出土遺物

Ⅰ、Ⅱ区は、浜堤前面の湿地堆積物中に遺物が包含されている。遺物は細片で、摩滅したものが多いのが特徴である。

第20～23図は、Ⅰ、Ⅱ区から出土した遺物実測図である。Ⅰ区、Ⅱ区の順にそれぞれ堆積年代の新しいものから掲載する。

Ⅰ区は、盛んに土地利用がなされた浜堤に近い位置であることから、Ⅱ区よりも遺物の包含量が多いことが想定されるが、事実は逆で少量の遺物しか採集されていない。

第20図107、108は6層から出土したものである。107は飯蛸壺の吊り手部の破片である。吊り手部上面を棒状工具で窪ませており、先の分類のⅠ類に当たる。108は形状から考えて移動式竈の焚き口部の破片と考えたが、積極的な根拠はない。内外面に横ハケが施されている。この他、6層からは器種を特定できない土師質の土器細片や陶器片が出土している。

109は弥生土器の壺か甕の底部で、9・10層から出土した。摩滅している。この他、9・10層からは弥生時代前期の可能性がある砂粒を多く含む破片が出土している。

110は21層から出土した飯蛸壺の吊り手部の破片である。吊り手部上面を棒状工具で窪ませているが、上から見た平面形は円形で、穿孔の方向も不明瞭である。先のⅠ～Ⅴ類の分類にはあてはまらない。なお、21層で採集されたのは110の1点のみである。

第21図111～128は、Ⅱ区の5層から出土した遺物実測図である。

111は底部を回転ヘラ切りした土師質土器小皿の破片、112～114は土師質土器杯・小皿の破片である。115、116は須恵器の杯・皿の底部で、115は外側に踏ん張り、水平な端面をもつ高台を貼り付けている。117は須恵器高杯の脚端部の破片である。端部は明瞭な段を形成せず、上方に摘み出すのみで形成している。118～120は土師器甕の口縁部で、口縁は外上方に屈曲し、端部は上方に摘み出している。118、119は口縁部内面に横ハケ、体部外面に縦ハケが見られる。121は土師質の真蛸壺の口縁部と考えられる。口縁部は強いナデにより、わずかに外反している。122は土師器の牛角状の把手部分である。摩滅している。123は土師質土器土釜の鍔部小片である。水平方向に突き出した鍔を斜め上方に屈曲させ、先端は尖り気味におわっている。124は土師質土器土鍋の口縁部片であるが、摩滅している。125は飯蛸壺の吊り手部で、上面に棒状工具で窪みをつくり、穿孔の方向は不明瞭である。先の分類のⅠ類に相当する。126は製塩土器の脚台部の破片で、被熱により傷んでいる。127は丸瓦である。焼成は土師質で、凹面は布目、凸面は板ナデである。128は平瓦で、須恵質で凹面は布目、凸面は縄目である。

5層からは約60点の土器片が出土したが、大半が古代と中世に所属すると思われる。

第21図129～131はⅡ区の12層から出土した遺物である。129は須恵器杯身で、立ち上がり端部も受け部先端も丸く収めている。130は土師質土器足釜の脚部である。131はサヌカイト製の凹基式の石鏃である。この他27層からは須恵器・土師質土器の細片60点余りが出土している。中世に所属すると考えられるものが多い。

第21図132～136はⅡ区の13層から出土した遺物である。132は土師質土器杯、133は須恵器杯の破片である。134は逆「ハ」字形に開く口縁をもつ須恵器壺である。135は平瓦で、焼成は土師質で、凹面布目、凸面縄目である。136は、丸瓦の玉縁部と考えられ、焼成は須恵質、凹面布目、凸面は板ナデである。

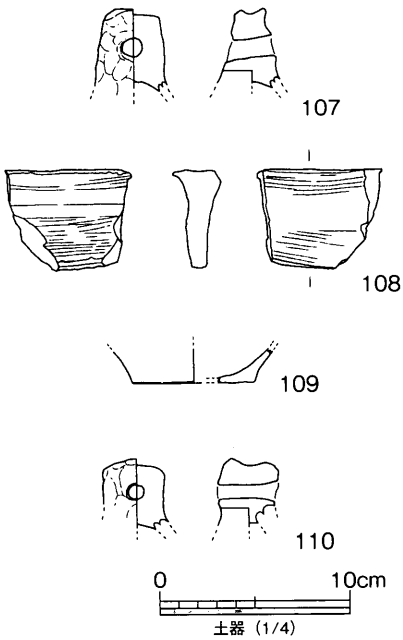
この他の13層出土遺物も、染付け1点が混入していたが、古代から中世の遺物片からなると思われる。

第21図137～149、第22図150～152は、Ⅱ区14層出土の遺物実測図である。

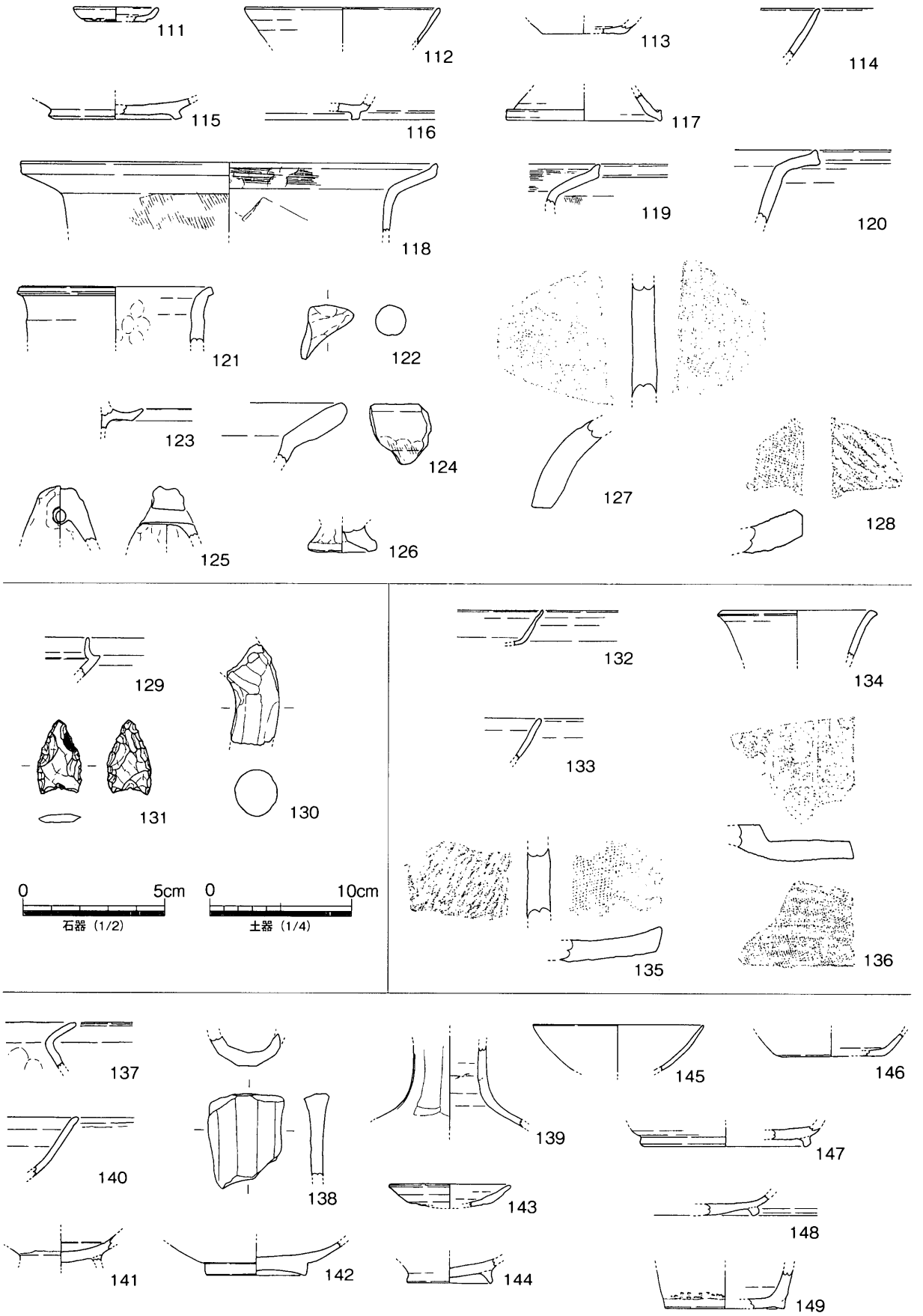
137は、「く」の字状に屈曲する口縁をもつ弥生土器甕の破片であが、摩滅する。138、139は土師器高杯で、柱状部をヘラ状工具で面取りする。140～142は緑釉陶器椀で、140は軟陶で、口縁端部をわずかに外反させている。141は硬陶であるが、釉は剥落しており、高台は貼り付けられたもので、見込み部に一条の沈線を巡らせている。142は軟陶で、全面に釉がかかり、高台を削り出している（円盤状高台）。上記の特徴から、140、142は畿内産で、9世紀前半期のものと考えられる（高橋照彦氏分類による）。141は少し後出のものと思われる。

143は土師質土器小皿、144は土師質土器椀であるが、いずれも摩滅する。中世のものである。

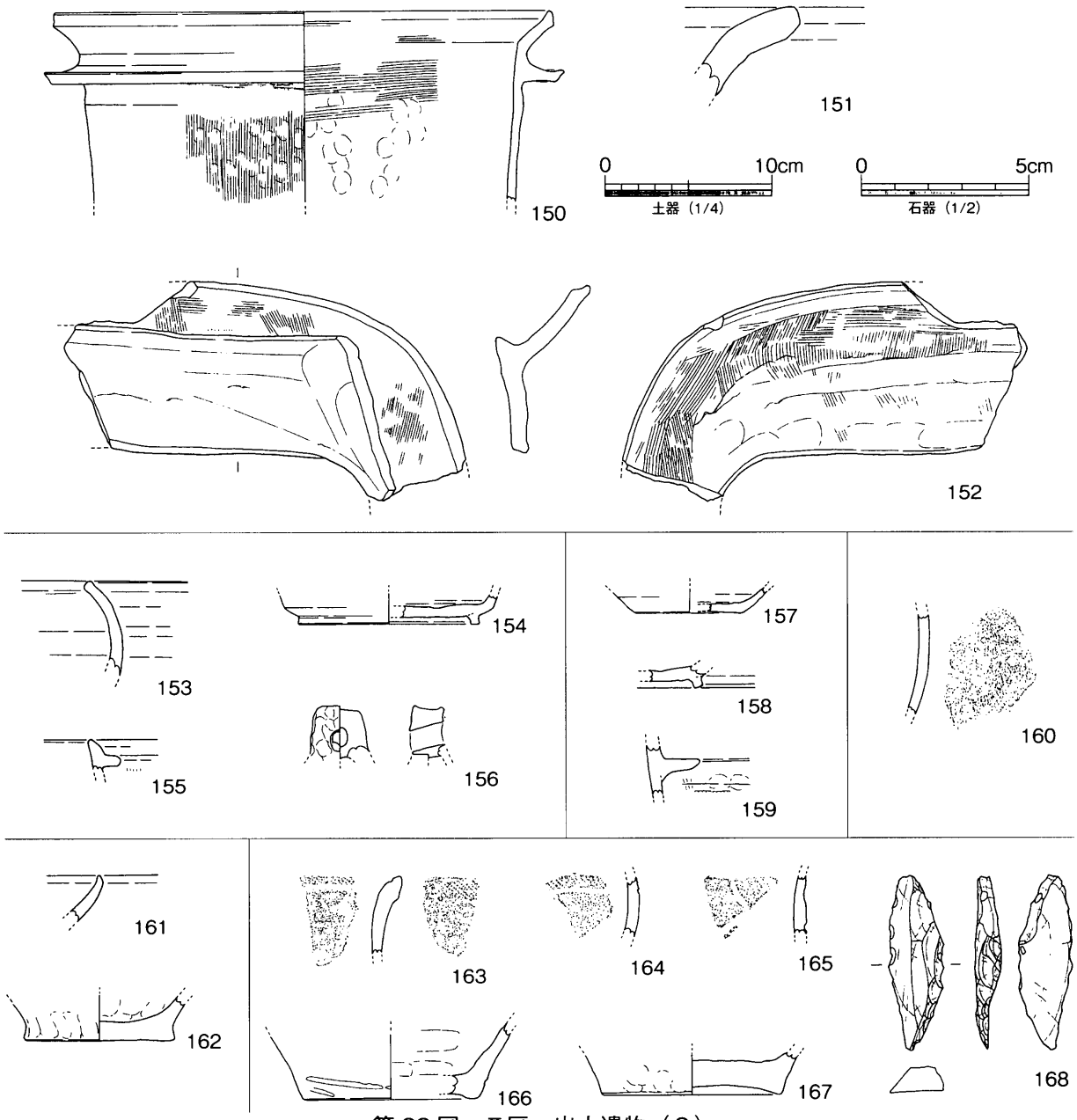
145は須恵器椀、146～148は須恵器杯である。147、148は高台を付すもので、外端部が上がっている。149は須恵器の壺か甕の底部である。



第20図　Ⅰ区　出土遺物



第21図　Ⅱ区　出土遺物（1）



第22図　Ⅱ区　出土遺物（2）

第22図150は土師質土器土釜で、口縁は外上方に屈曲し、端部はわずかに上方に摘み上げている。鍔部は水平方向に突き出し、上方に摘み上げている。151は土師質土器土鍋、152は移動式竈の焚き口部上部の破片である。

14層からは、この他に約120点の図化不能の細片が出土しているが、概ね古代から中世に所属すると考えられるものである。

第22図153～156は、17、18層出土の遺物実測図である。153は鉄鉢状の土師器鉢である。154は端面が水平の高台を付した須恵器杯である。155は土師質土器土釜で、口縁部は内傾し、短い鍔が付く。156は飯蛸壺で、先述のⅠ類に当たる。

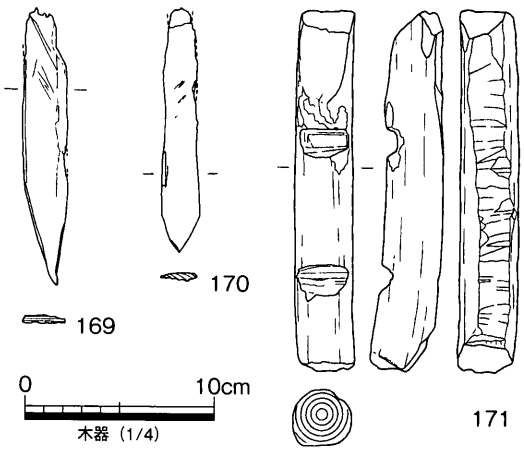
17、18層からは、図化していないが、中世の土師質土器の小皿か杯、椀の、瓦質土器等が出土しており、古代から中世の遺物が含まれている。

第22図157～159は、19層出土の遺物である。157は土師質土器杯の底部、158は高台を付す須恵

器の杯か皿、159 は土師質土器土釜の鍔部の破片である。19 層には、この他にも少量の遺物細片が出土しているが、古代から中世の遺物と考えられる。

第 22 図 160 は、21 層から出土した縄文土器片で、3 条の平行する細い沈線を曲線状に施している。図の天地は推定である。21 層からの出土遺物は 160 の 1 点のみである。

第 22 図 161、162 は 20、27 層から出土したもので、161 は縄文土器浅鉢の口縁と思われる。内湾気味に立ち上がり、端部は内側にやや尖り気味に終っている。摩滅するが、外面に RL の縄文の痕跡が認められる。162 は弥生土器の壺か甕の底部で、円盤状をなす平底の底部をもつ。この他 20、27 層からは数片の土器片が出土している。これらの胎土は砂粒を多く含むものであるが、帰属を特定することは困難である。



第 23 図　Ⅱ区　出土遺物（3）

第 22 図 163 ～ 168 は、28 層から出土した遺物である。163 は縄文土器深鉢で、外湾する口縁の内側に 1 条の沈線を巡らせている。外面は肥厚させ RL の縄文を施している。164 は、沈線で区画し、一方に RL の縄文を施した破片である（図の天地推定）。165 は、太い沈線を直角に近い角度に屈曲させた破片である（図の天地推定）。166、167 は、やや上げ底状を呈する平底の底部で、166 の外面に太い沈線があるが、文様か否かわからない。168 はナイフ形石器である。

第 23 図 169 ～ 171 は、Ⅱ区の 14 層から出土した木製品である。169、170 は斎串で、下端は剣先状を呈しているが、上端と側縁部は欠損している。171 は芯持ち材に 2 ヶ所の刳り込みと刳り込みの反対側に平坦面を整形したもので、用途は不明である。

以上が、Ⅰ・Ⅱ区出土の遺物の概要である。出土量が少ないため正確ではないが、19 層までは中世の遺物を含むことから、中世以降の堆積層と考えられる。また、縄文時代後期の土器片を包含する 28 層については、より新しい時代の遺物の包含は無いが、出土遺物量が稀少であることから、積極的に縄文時代後期の層と認定するには躊躇する。なお、29 層以下には遺物が包含されず、29 層以下が地山でⅣ区の浜堤砂層に連続するものと考えられる。

第４章　自然科学分析

自然科学分析は、平成15年度と20年度の２回に分けて行なわれた。本章は分析を行なった株式会社古環境研究所の報告を編集したものである。

第１節　放射性炭素年代測定

1．試料と方法

試料名	遺構・資料名	種類	前処理・調整	測定法
No.1	Ⅱ区　No.28層	木材	酸－ｱﾙｶﾘ－酸洗浄，石墨調整	ＡＭＳ

※１）AMSは加速器質量分析法：Accelerator Mass Spectrometry

2．測定結果

試料名	測定No. (Beta-)	^{14}C年代 (年BP)	δ^{13}C (‰)	補正^{14}C年代 (年BP)	暦年代（西暦）
No.1	188277	2740 ± 60	-27	2700 ± 40	交点：cal BC 830 １σ：cal BC 905 ～ 810 ２σ：cal BC 975 ～ 790

１）^{14}C年代測定値

試料の^{14}C／^{12}C比から、単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

２）δ（デルタ）^{13}C測定値

試料の測定^{14}C／^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C／^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

３）補正^{14}C年代値

δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C／^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

４）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。calはcalibrationした年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と^{14}C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。最新のデータベースでは約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正^{14}C年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。１σ（シグマ）（68％確率）と２σ（95％確率）は、補正^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の１σ・２σ値が表記される場合もある。

第２節　花粉分析

１．はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

２．試料

試料は、Ⅰ区西壁の№９層（暗灰色砂質土，試料１）、Ⅱ区北壁の№18層（灰褐色砂質土，試料２）と No.19層（(青）暗灰褐色土（砂混），試料３）（その１）、Ⅳ区東壁７層（奈良包含層）から採取された１点である（その２）。

３．方法

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

１）試料から１cm^3を採量

２）0.5％リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎

３）水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去

４）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置

５）水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す

６）再び氷酢酸を加えて水洗処理

７）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成

８）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示す。イネ属については、中村（1974，1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。また、この処理を施すとクスノキ科の花粉は検出されない。

４－１．結果（その１）

（１）分類群

出現した分類群は、樹木花粉20、樹木花粉と草本花粉を含むもの２、草本花粉８、シダ植物胞子２形態の計32である。これらの学名と和名および粒数を表１に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図24に示す。なお、200個未満であっても100個以上の試料については傾向をみるため参考に図示した。主要な分類群の写真を図版に示した。また、寄生虫卵についても同定した結果、３分類群が検出された。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ヤマモモ属、クルミ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、ニシキギ科、トチノキ、ブドウ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科

〔草本花粉〕

イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科、セリ亜科、タンポポ亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

〔寄生虫卵〕

回虫卵、鞭虫卵、マンソン裂頭条虫卵

以下に各寄生虫卵の特徴を記す。

・回虫　*Ascaris lumbricoides*

回虫は、世界に広く分布し、現在でも温暖・湿潤な熱帯地方の農村地帯に多くみられ、卵には受精卵と不受精卵がある。遺跡の堆積物の分析では、長期の堆積年数や薬品処理の影響により、受精卵と不受精卵の区別は不明瞭である。比較的大きな虫卵で、およそ80×60μmあり楕円形で外側に蛋白膜を有し、胆汁色素で黄褐色ないし褐色を呈する。糞便とともに外界に出た受精卵は、18日で感染幼虫包蔵卵になり経口摂取により感染する。

・鞭虫　*Trichuris trichiura*

鞭虫は、世界に広く分布し、現在ではとくに熱帯・亜熱帯の高温多湿な地域に多くみられる。卵の大きさは、50×30μmでレモン形あるいは岐阜ちょうちん形で、卵殻は厚く褐色で両端に無色の栓がある。糞便とともに外界に出た虫卵は、３～６週間で感染幼虫包蔵卵になり経口感染する。

・マンソン裂頭条虫卵　*Diphyllobothoyium mansoni*

イヌ、ネコには普通にみられる条虫で、世界各地にみられる。イヌ科、ネコ科の諸動物が終宿主となり、第１中間宿主は、ケンミジンコ属９種で、第２中間および待機宿主はヒトならびに終宿主と魚類をのぞいた脊椎動物全般にわたる。ヒトは生水を飲んだり、広範に分布している第２中間および待機宿主を生食したり加熱不充分な状態で摂取することによって感染するが、ヒトは終宿主ではないため幼虫の形で寄生している。卵の大きさは、およそ60×35μmで両端がやや尖り、一端に蓋を有し卵殻の彎曲度が不平等なため、しばしば非対称にみえる。

（２）花粉群集の特徴

１）Ⅰ区西壁№9層（試料１）

№9層（試料１）では花粉密度は低く、参考程度ではあるが、樹木花粉の占める割合が草本花粉より高い。樹木花粉ではマツ属複維管束亜属がやや高率で出現し、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属、スギ、シイ属、ブナ属などが伴われる。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属などが出現している。

２）Ⅱ区北壁№18層（試料２）、№19層（試料３）

№19層（試料３）では樹木花粉の占める割合が草本花粉より高い。樹木花粉ではコナラ属アカガシ

亜属、マツ属複維管束亜属が多く、コナラ属コナラ亜属、シイ属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科などが伴われる。草本花粉ではヨモギ属、イネ科などが出現し、カヤツリグサ科、アカザ科－ヒユ科などが伴われる。

№18層（試料２）では花粉密度が低く参考程度ではあるが、樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属、マツ属複維管束亜属などが出現する。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属、カヤツリグサ科などが出現する。

４－２．結果（その２）

（１）分類群

出現した分類群は、樹木花粉17、樹木花粉と草本花粉を含むもの１、草本花粉11、シダ植物胞子２形態の計31である。これらの学名と和名および粒数を表２に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図25に示す。主要な分類群は顕微鏡写真に示した。また寄生虫卵についても同定した結果、１分類群が検出された。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、トチノキ、トネリコ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

マメ科

〔草本花粉〕

イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、タデ属、タデ属サナエタデ節、アブラナ科、アリノトウグサ属－フサモ属、セリ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

〔寄生虫卵〕

鞭虫卵

以下に特徴を示す。

・鞭虫　*Trichuris*（*trichiura*）

鞭虫は、世界に広く分布し、現在ではとくに熱帯・亜熱帯の高温多湿な地域に多くみられる。卵の大きさは、50×30μmでレモン形あるいは岐阜ちょうちん形で、卵殻は厚く褐色で両端に無色の栓がある。糞便とともに外界に出た虫卵は、３～６週間で感染幼虫包蔵卵になり経口感染する。

（２）花粉群集の特徴

Ⅳ区東壁７層（奈良包含層）では、樹木花粉の占める割合が草本花粉より高く、約70％を占める。とくにマツ属複維管束亜属が高率に出現し、次いでコナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ亜属が多い。イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、クリ、スギ、シイ属なども伴われる。草本花粉ではイネ科（イネ属型を含む）、ヨモギ属などが出現する。鞭虫卵がわずかに認められた。

5－1．花粉分析から推定される植生と環境（その1）

1）Ⅰ区西壁No.9層（試料1）

出現した草本花粉はいずれも人里植物あるいは耕地雑草の性格を持つもので、陽当たりの良いやや乾燥した環境を好む。堆積地周辺はこれらの草本が生育する開地も分布していたと考えられる。周辺の森林植生はマツ属複維管束亜属、スギなどの森林と、コナラ属アカガシ亜属、シイ属などの照葉樹林とコナラ属コナラ亜属、ブナ属などの落葉広葉樹林が分布していたと推定される。

2）Ⅱ区壁、No.18層（試料2）、No.19層（試料3）

Ⅰ区西壁、No.9層の堆積環境と大差ないが、カシ類、シイ類などの照葉樹林がやや優勢であった。密度や草本花粉の占める割合などにより、No.18層はNo.19層の時期よりも乾燥した環境であったと思われる。

5－2．花粉分析から推定される植生と環境（その2）

マツ属複維管束亜属が多く、近隣にはニヨウマツ林が分布し、周辺にはスギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科などの針葉樹と、コナラ属アカガシ亜属、シイ属などの照葉樹、コナラ属コナラ亜属、クリなどの落葉広葉樹なども生育していた。マツ属複維管束亜属（ニヨウマツ類）は、海岸林を形成するクロマツの可能性が高い。草本では周辺にイネ科やヨモギ属が分布していた。ヨモギ属が多いことからやや乾燥した環境が示唆される。イネ属型が検出され、周辺には水田などの農耕地も分布していた。鞭虫卵が検出され、人為環境および人為活動による汚染が認められる。

参考文献

中村純（1973）花粉分析．古今書院，p.82 － 110.

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248 － 262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集，60p.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として．第四紀研究.13,p.187 － 193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p.21 － 30.

Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard（1992）Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils.Jounal of Archaeological Science，19, p.231 － 245.

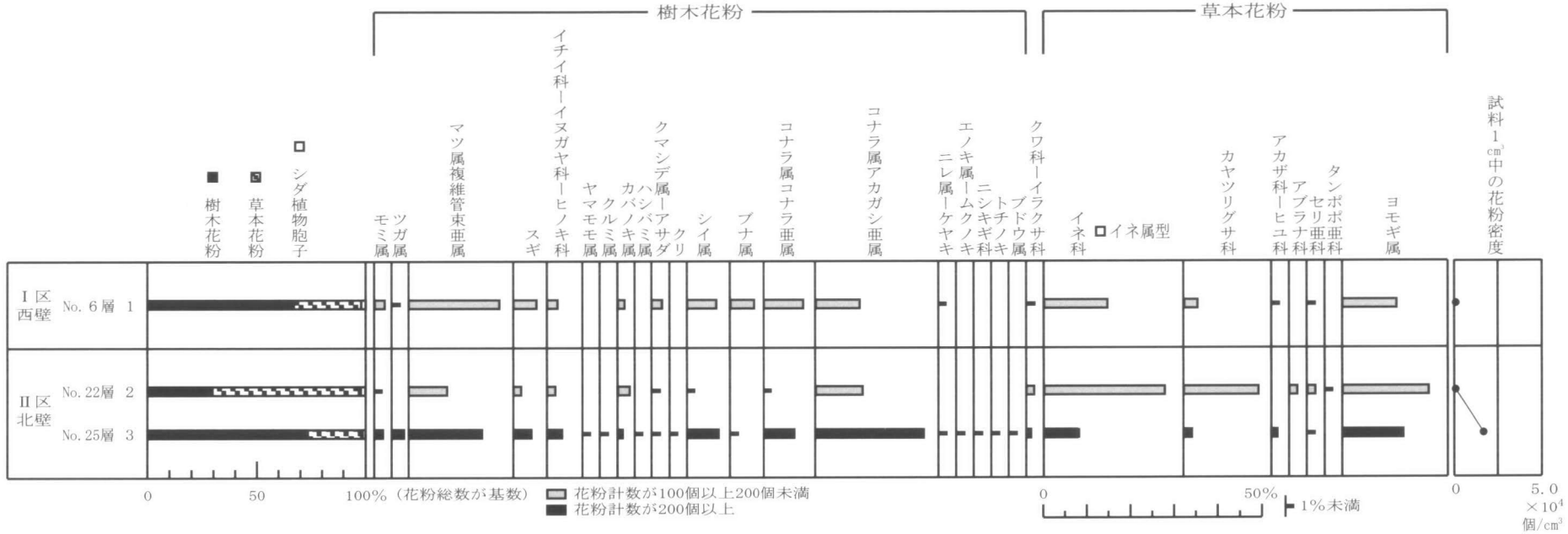
金原正明・金原正子（1992）花粉分析および寄生虫．藤原京跡の便所遺構－藤原京7条1坊－，奈良国立文化財研究所，p.14 － 15.

金子清俊・谷口博一（1987）線形動物・扁形動物．医動物学，新版臨床検査講座，8，医歯薬出版，p. 9 － 55.

金原正明（1999）寄生虫．考古学と動物学，考古学と自然科学，2，同成社，p.151 － 158.

分類群		Ⅰ区 西壁	Ⅱ区 北壁	
		No.9 層	No.18 層	No.19 層
学名	和名	1	2	3
Arboreal pollen	樹木花粉			
Abies	モミ属	3	1	7
Tsuga	ツガ属	1		10
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	27	10	61
Cryptomeria japonica	スギ	7	2	15
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科 - イヌガヤ科 - ヒノキ科	3	2	12
Myrica	ヤマモモ属			1
Juglans	クルミ属			2
Betula	カバノキ属	2	3	4
Corylus	ハシバミ属			1
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属 - アサダ	3	1	2
Castanea crenata	クリ			1
Castanopsis	シイ属	9	1	26
Fagus	ブナ属	7		2
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	12	1	26
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	13	12	89
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属 - ケヤキ	1		2
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属 - ムクノキ			1
Celastraceae	ニシキギ科			1
Aesculus turbinata	トチノキ			1
Vitis	ブドウ属			3
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉			
Moraceae-Urticaceae	クワ科 - イラクサ科	1	2	4
Nonarboreal pollen	草本花粉			
Gramineae	イネ科	19	31	28
Oryza type	イネ属型			1
Cyperaceae	カヤツリグサ科	4	19	7
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科 - ヒユ科	1		5
Cruciferae	アブラナ科		2	
Apioideae	セリ亜科	1	2	1
Lactucoideae	タンポポ亜科		1	
Artemisia	ヨモギ属	16	22	50
Fern spore	シダ植物胞子			
Monolate type spore	単条溝胞子			2
Trilate type spore	三条溝胞子	3	3	5
Arboreal pollen	樹木花粉	88	33	267
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	1	2	4
Nonarboreal pollen	草本花粉	41	77	92
Total pollen	花粉総数	130	112	363
	試料 1cm^3 中の花粉密度	9.5	8.3	1.7
		$\times 10^2$	$\times 10^2$	$\times 10^4$
Unknown pollen	未同定花粉	5	6	4
Fern spore	シダ植物胞子	3	3	7
Helminth eggs	寄生虫卵			
Ascaris(lumbricoides)	回虫卵		1	2
Trichuris(trichiura)	鞭虫卵			2
Diphyllobothoyium mansoni	マンソン裂頭条虫卵			1
Total	計	0	1	5
	試料 1cm^3 中の寄生虫卵密度	0.0	0.7	3.5
			$\times 10$	$\times 10$
	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)

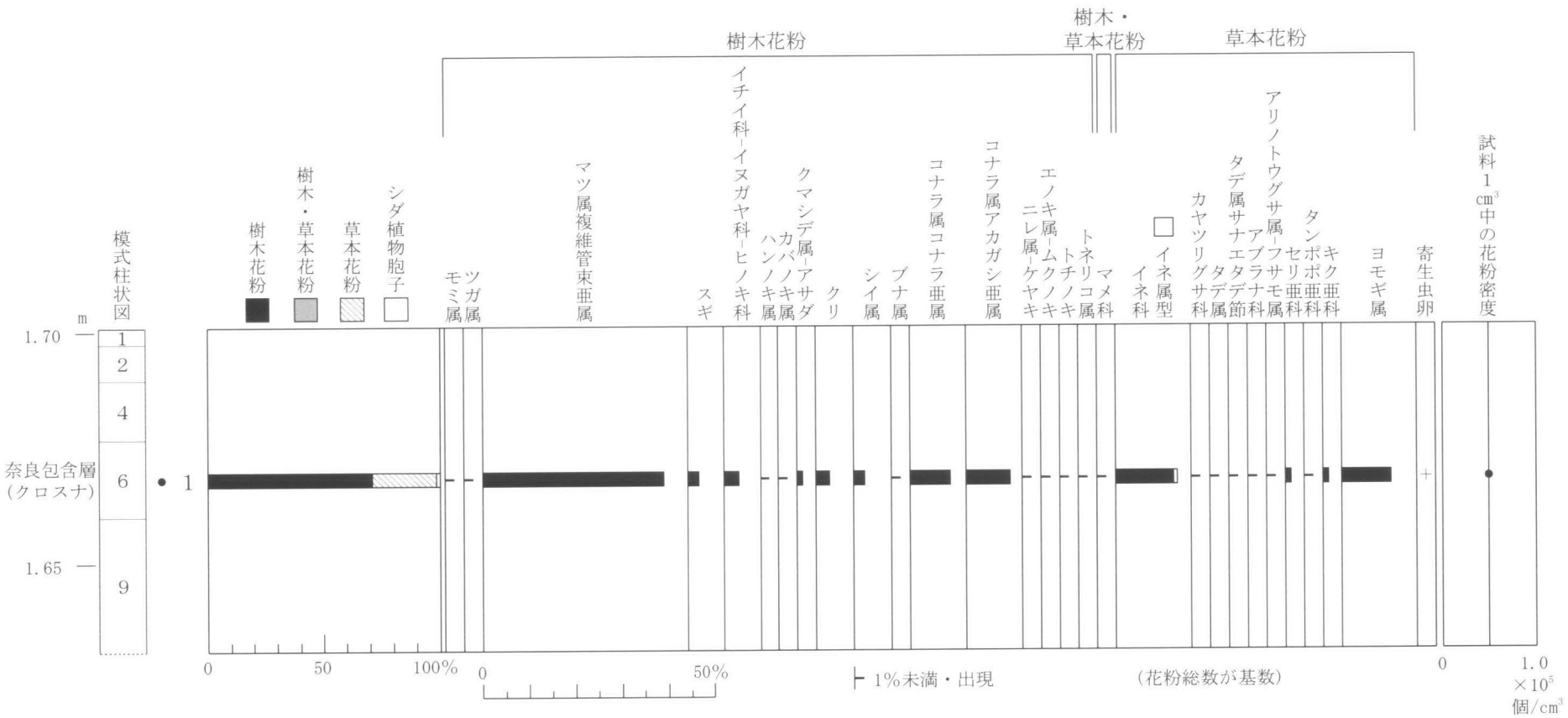
第１表　文京町二丁目西遺跡における花粉分析結果（その１）



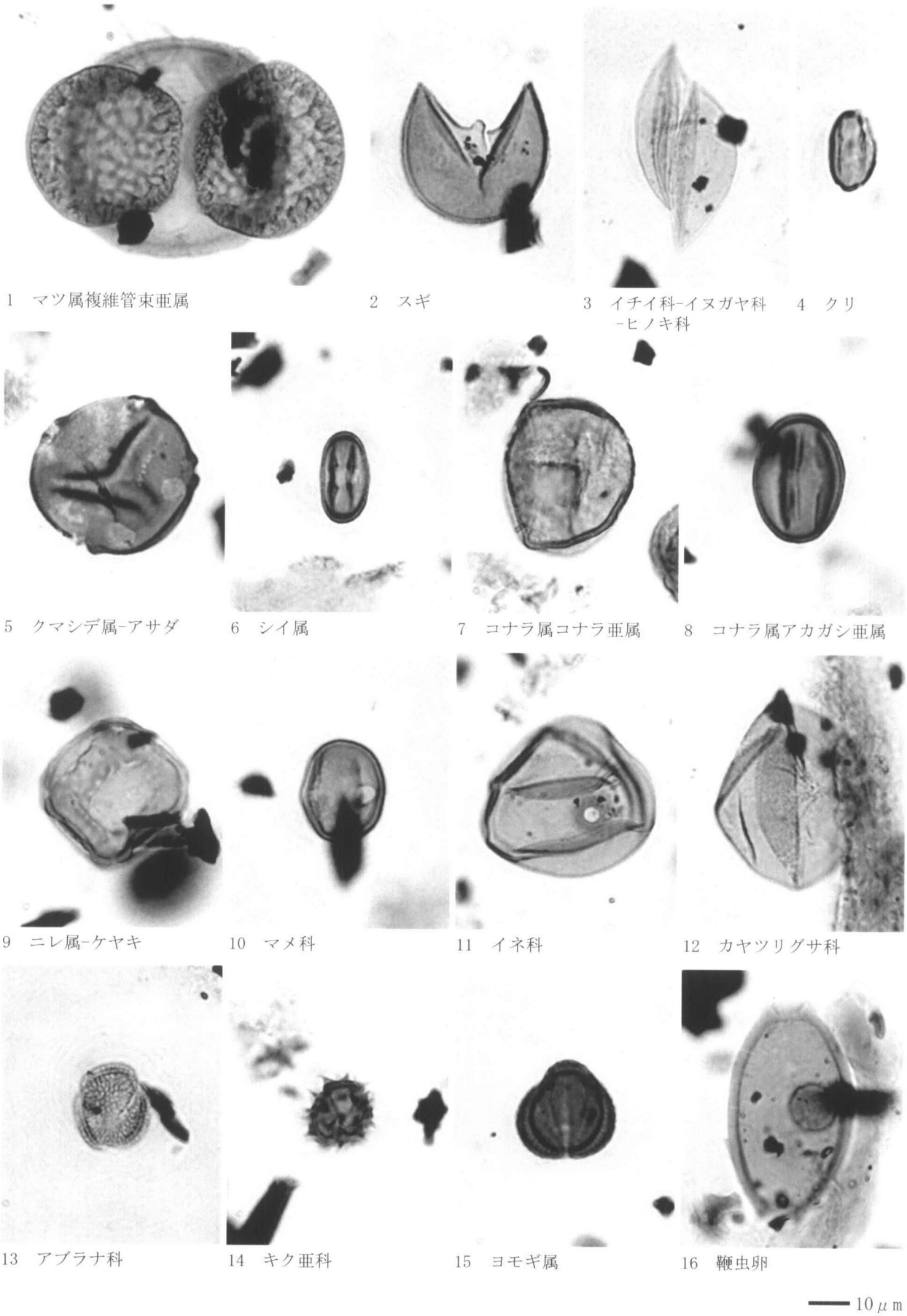
第24図　文京町二丁目西遺跡における花粉ダイアグラム（その1）

分類群		Ⅳ区　東壁　7層 奈良包含層
学名	和名	1
Arboreal pollen	樹木花粉	
Abies	モミ属	1
Tsuga	ツガ属	2
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	199
Cryptomeria japonica	スギ	13
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科 - イヌガヤ科 - ヒノキ科	16
Alnus	ハンノキ属	1
Betula	カバノキ属	3
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属 - アサダ	6
Castanea crenata	クリ	15
Castanopsis	シイ属	12
Fagus	ブナ属	1
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	44
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	48
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属 - ケヤキ	4
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属 - ムクノキ	2
Aesculus turbinata	トチノキ	1
Fraxinus	トネリコ属	1
Arboreal · Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	
Leguminosae	マメ科	1
Nonarboreal pollen	草本花粉	
Gramineae	イネ科	63
Oryza type	イネ属型	4
Cyperaceae	カヤツリグサ科	4
Polygonum	タデ属	1
Polygonum sect. *Persicaria*	タデ属サナエタデ節	1
Cruciferae	アブラナ科	1
Haloragis-Myriophyllum	アリノトウグサ属 - フサモ属	1
Apioideae	セリ亜科	6
Lactucoideae	タンポポ亜科	1
Asteroideae	キク亜科	6
Artemisia	ヨモギ属	54
Fern spore	シダ植物胞子	
Monolate type spore	単条溝胞子	2
Trilate type spore	三条溝胞子	6
Arboreal pollen	樹木花粉	369
Arboreal · Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	1
Nonarboreal pollen	草本花粉	142
Total pollen	花粉総数	512
Pollen frequencies of $1cm^3$	試料 $1cm^3$ 中の花粉密度	5.0 $\times 10^4$
Unknown pollen	未同定花粉	11
Fern spore	シダ植物胞子	8
Helminth eggs	寄生虫卵	
Trichuris(trichiura)	鞭虫卵	2
Total	計	2
Helminth eggs frequencies of $1cm^3$	試料 $1cm^3$ 中の寄生虫卵密度	1.2 $\times 10$
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)
Charcoal fragments	微細炭化物	

第２表　文京町二丁目西遺跡における花粉分析結果（その２）

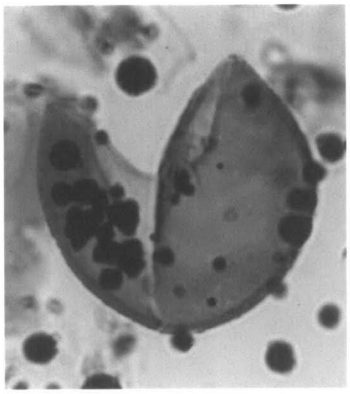


第25図　文京町二丁目西遺跡における花粉ダイアグラム（その2）



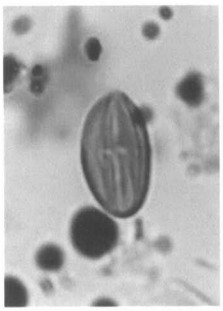
第26図　文京町二丁目西遺跡の花粉・寄生虫卵（その1）

1　マツ属複維管束亜属

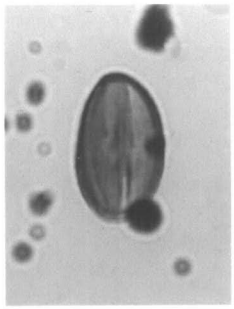


2　スギ

3　イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科



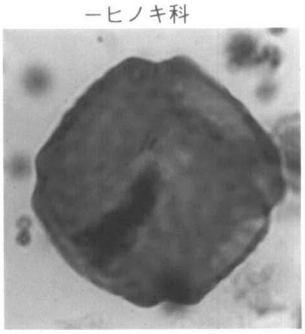
4　クリ



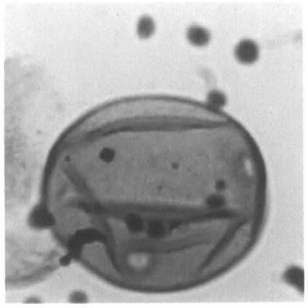
5　シイ属

6　コナラ属コナラ亜属

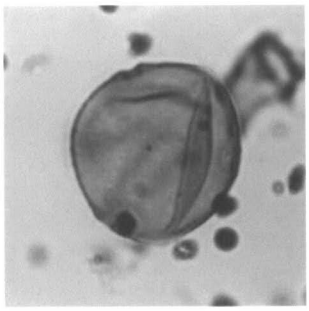
7　コナラ属アカガシ亜属



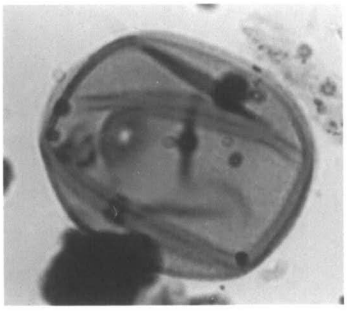
8　ニレ属ーケヤキ



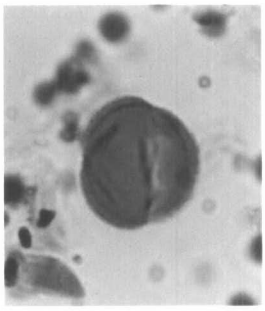
9　エノキ属ームクノキ



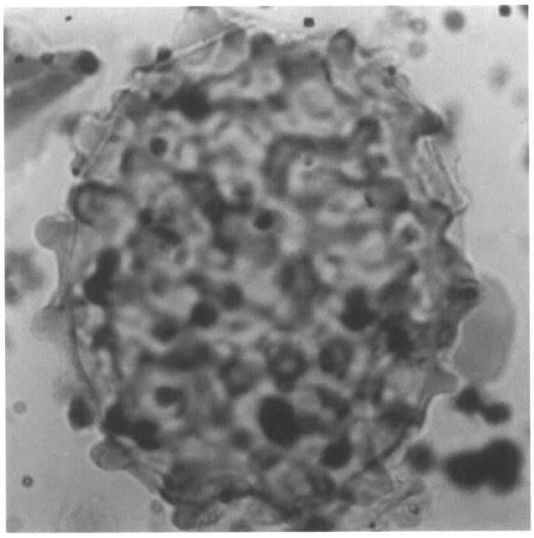
10　クワ属ーイラクサ科



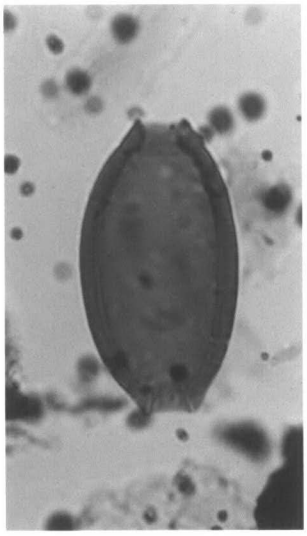
11　イネ属型



12　ヨモギ属



13　回虫卵



14　鞭虫卵

15　マンソン裂頭条虫卵

10μm

第27図　文京町二丁目西遺跡の花粉・寄生虫卵（その2）

第３節　珪藻分析

１．はじめに

珪藻は主に水域に生息する珪酸の被殻を有する単細胞植物であり、海水域から淡水域のほぼすべての水域に生活し、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息する。塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じてそれぞれの種類が固有にまたは許容範囲をもって多重な環境要因に生育する。珪酸の被殻は死後、堆積粒子として堆積物中に残存する。堆積物より検出した珪藻遺骸の種類構成や組成は当時の堆積環境を反映し水域の環境を主とする古環境の復元に用いられる。

２．試料

試料は、Ⅱ区北壁のNo.19層（(青）暗灰褐色土（砂混),試料４）の１点（その１）とⅣ区東壁７層（奈良包含層）から採取された１点、予備調査トレンチ１の５層から採取された２点（浜堤砂層№２、浜堤砂層№４）の計３点である（その２)。

３．方法

以下の手順で珪藻を抽出し、プレパラートを作成した。

１）試料から乾燥重量１ｇを秤量

２）10％過酸化水素水を加え、加温しながら１晩放置

３）上澄みを捨て、細粒のコロイドと薬品を水洗

４）残渣をマイクロピペットでカバーグラスに滴下して乾燥

５）マウントメディアによって封入し、プレパラート作成

６）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって600～1000倍（その２は1500倍）で行った。計数は珪藻被殻が100個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

４－１．結果（その１）

試料から出現した珪藻は、真－中塩性種（海－汽水生種）64分類群、貧塩性種（淡水生種）64分類群である。計数された珪藻の学名と個数を表３に示す。また珪藻総数を基数とする百分率を算定したダイアグラムを図28に示す。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記す。

〔真－中塩性種〕

Achnanthes brevipes、*Achnanthes delicatula*、*Amphora coffeaeformis*、*Amphora holsatica*、*Amphora strigosa*、*Cocconeis scutellum*、*Dimerogramma fulvum*、*Diploneis interrupta*、*Diploneis pseudovalis*、*Diploneis smithii*、*Navicula marina*、*Nitzschia cocconeiformis*、*Nitzschia compressa*、*Nitzschia granulata*、*Nitzschia plana*、*Paralia sulcata*、*Plagiogramma pulchellum*、*Rhopalodia musculus*

〔貧塩性種〕

Achnanthes lanceolata、*Amphora montana*、*Caloneis hyalina*、*Caloneis silicula*、*Diploneis oblongella*、*Navicula mutica*、*Navicula* sp.

№19層（試料４）では、貧塩性種（淡水生種）よりも真－中塩性種（海－汽水生種）の占める割合が非常に高い。真－中塩性種（海－汽水生種）で海水泥質干潟指標種の*Nitzschia granulata*が優占し、次いで中塩性種（汽水生種）で海水砂質干潟指標種の*Achnanthes delicatula*、真－中塩性種（海－汽水生種）で海水泥質干潟指標種の*Nitzschia cocconeiformis*が多く出現し、*Amphora coffeaeformis*などが伴われる。貧塩性種（淡水生種）では不定性種の*Diploneis oblongella*、陸生珪藻の*Amphora montana*、*Caloneis hyalina*、*Navicula mutica*、流水性種の中～下流性河川種である*Achnanthes lanceolata*などが出現している。

４－２．結果（その２）

（１）分類群

試料から出現した珪藻は、真塩性種（海水生種）４分類群、真－中塩性種（海－汽水生種）６分類群、貧－中塩性種（淡－汽水生種）６分類群、貧塩性種（淡水生種）18分類群である。表３に分析結果を示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定した珪藻ダイアグラムを図29に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性は、Lowe(1974)や渡辺（2005）等の記載により、陸生珪藻は小杉（1986）による。環境指標種群のうち、海水生種から汽水生種は小杉（1988）により、淡水生種は安藤（1990）による。主要な分類群について顕微鏡写真を示した。以下にダイアグラムで表記した分類群を記載する。

〔真塩性種〕

Dimerogramma sp.、*Grammatophora macilenta*、*Plagiogramma* sp.、*Rhaphoneis surirella*、

〔真－中塩性種〕

Achnanthes haukiana、*Cocconeis scutellum*、*Cyclotella striata-stylorum*、*Diploneis interrupta*、*Diploneis smithii*、*Nitzschia cocconeiformis*、

〔中－貧塩性種〕

Achnanthes brevipes、*Diploneis pseudovalis*、*Nitzschia compressa* v. *elongata*、*Nitzschia littoralis*、*Rhopalodia gibberula*、*Rhopalodia musculus*、

〔貧塩性種〕

Achnanthes montana、、*Amphora fontinalis*、*Cocconeis placentula*、*Diploneis finnica*、*Diploneis* spp.、*Fragilaria pinnata*、*Gyrosigma* spp.、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula elginensis*、*Navicula erifuga*、*Navicula laevissima*、*Navicula mutica*、*Neidium* spp.、*Nitzschia frustulum*、*Nitzschia* sp.1、*Pinnularia borealis*、*Pinnularia gibba*、*Pinnularia viridis*、

（２）珪藻群集の特徴

１）Ⅳ区東壁７層（奈良包含層）

珪藻は極めて低密度で、貧塩性種（淡水生種）が約60％を占め、次いで真－中塩性種（海－汽水生種）の占める割合が約25％と高く、中－貧塩性種（汽－淡水生種）、真塩性種（海水生種）と続く。貧塩性種（淡水生種）では流水不定性種の占める割合が高く、次いで陸生珪藻の占める割合が高い。流水不定性種では*Amphora fontinalis*、、*Diploneis* spp.を主に、*Gyrosigma* spp.、*Navicula erifuga*、*Naviculalaevissima*、*Neidium* spp.、*Nitzschia* sp.1、沼沢湿地付着生環境指標種群の*Pinnularia gibba*、*Pinnularia viridis*が低率に出現する。陸生珪藻では*Navicula mutica*が比較的多く、*Hantzschia amphioxys*、*Pinnularia borealis*が伴われる。真－中塩性種（海－汽水生種）では海水泥質干潟環境指標種群の*Diploneis smithii*を主に、海水砂質干潟環境指標種群の*Achnanthes haukiana*、真－中塩性種（海－汽水生種）の

Diploneis interrupta、内湾環境指標種群の*Cyclotella striata-stylorum*、海水藻場環境指標種群の*Cocconeis scutellum*などが出現する。中－貧塩性種（汽－淡水生種）では*Diploneis pseudovalis*、海水泥質干潟環境指標種群の*Nitzschia compressa* v. *elongata*、*Achnanthes brevipes*、*Nitzschia littoralis*、*Rhopalodia gibberula*、*Rhopalodia musculus*が低率に出現する。真塩性種（海水生種）では内湾環境指標種群の*Grammatophora macilenta*、海水砂質干潟環境指標種群の*Rhaphoneis surirella*、真塩性種（海水生種）の*Dimerogramma* sp.、*Plagiogramma* sp.がわずかに出現する。

２）Ⅱ区西壁５層（浜堤砂層№２、浜堤砂層№４）

どちらの試料も珪藻は検出されない。

５－１．珪藻分析から推定される堆積環境（その１）

№19層（試料４）について珪藻分析を行った。その結果、貧塩性種（淡水生種）よりも真－中塩性種（海－汽水生種）の占める割合が非常に高く、海水泥質干潟指標種が優占し、海水砂質干潟指標種、海水泥質干潟指標種が多く出現した。こうしたことから、泥質ないし砂質の干潟の潮間帯の環境が示唆される。

５－２．珪藻分析から推定される堆積環境（その２）

１）Ⅳ区東壁７層（奈良包含層）

貧塩性種（淡水生種）が多いが、真－中塩性種（海－汽水生種）、中－貧塩性種（汽－淡水生種）、真塩性種（海水生種）など多様に出現する。優占種としては、貧塩性種の流水不定性種である*Amphora fontinalis*、陸生珪藻の*Navicula mutica*、海水泥質干潟環境指標種群の*Diploneis smithii*が優占する。珪藻の密度が極めて低密度であることから、これらの珪藻は堆積地の環境を示すものではなく、周囲からもたらされた可能性が高く、浜堤間には、主たる環境として淡水性の不安定な水域や湿地と海水性の干潟が形成されていた。海浜成の強風や飛沫により、そこより飛来しとりこまれたものと推定される。本堆積物は、相対的にはやや湿った環境ないしやや乾燥した環境にあったと考えられる。

２）予備調査トレンチ１、５層（浜堤砂層№２、浜堤砂層№４）

珪藻は検出されなかった。試料となった堆積物が粗粒であるため、微細な珪藻が堆積せず、浜堤の形成時に淘汰されたと考えられる。

参考文献

Hustedt,F.(1937 － 1938)Systematische und ologishe Untersuchungen uber die DiatomeenFlora von Java,Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch.Hydrobiol,Suppl.15,p.131 － 506.

Patrick, R.eimer, C. W.(1966) The diatom of the United States, vol.1. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No.13, The Academy of Natural Siences of Philadelphia, 644p.

Lowe,R.L.(1974)Environmental Requirements and pollusion tolerance of fresh-water diatoms. 333p., National Environmental Reserch.Center.

Patrick, R.eimer, C. W.(1975) The diatom of the United States, vol.2. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No.13, The Academy of Natural Siences of Philadelphia, 213p.

Asai,K.&,Watanabe,T.(1995)Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relaiting to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,p.35 － 47.

小杉正人（1986）陸生珪藻による古環境解析とその意義－わが国への導入とその展望－．植生史研究，第１号，植生史研究会，p.29 － 44.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，p.1-20.

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用．東北地理，42，p.73 － 88.

伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，6，p.23 － 45.

K. Krammer・H.Lange-Bertalot(1986-1991) Bacillariophyceae・１－４.

渡辺仁治（2005）淡水珪藻生態図鑑　群集解析に基づく汚濁指数DAIpo, pH耐性能．内田老鶴圃，pp.666.

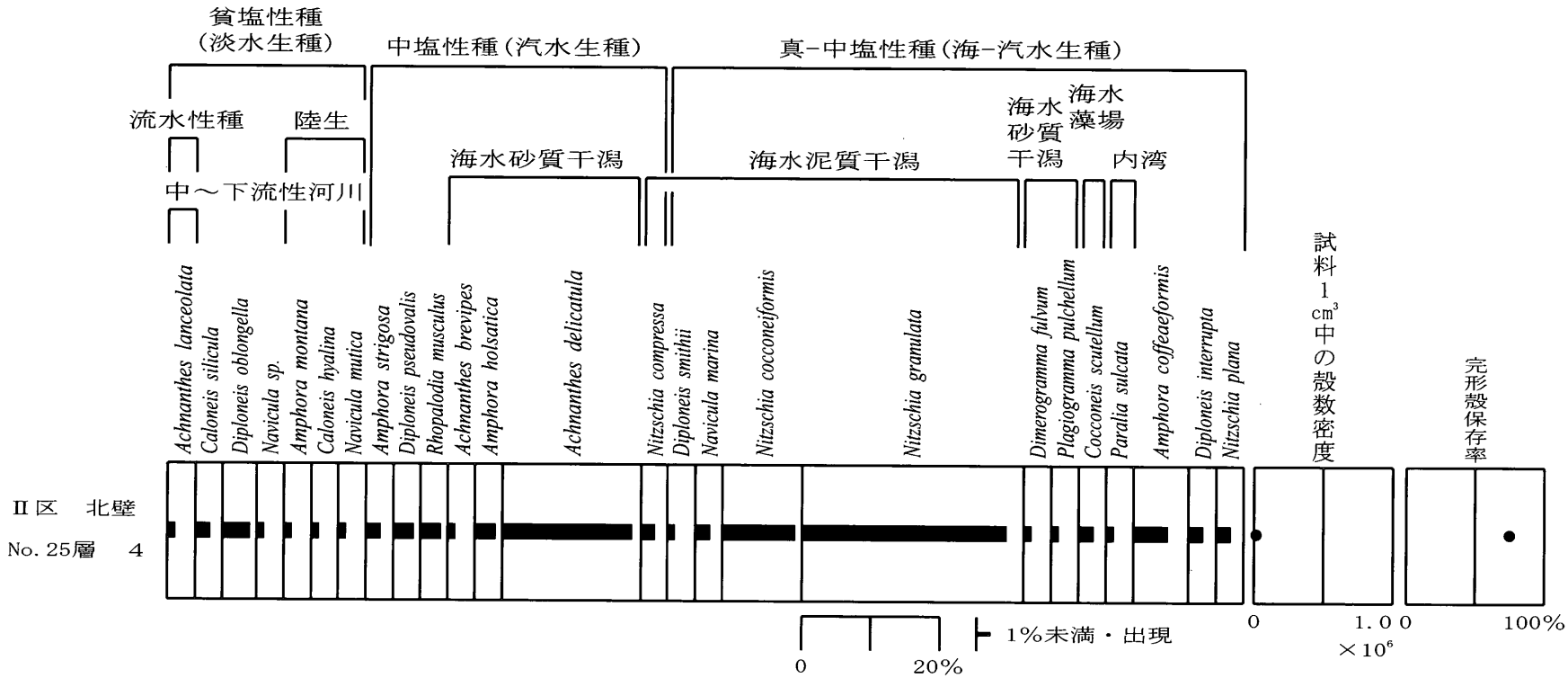
分類群	Ⅱ区 北壁 No.19 層
	4
貧塩性種（淡水生種）	
Achnanthes lanceolata	1
Amphora montana	1
Caloneis hyalina	1
Caloneis silicula	2
Diploneis oblongella	4
Navicula mutica	1
Navicula sp.	1
真 - 中塩性種（海 - 汽水生種）	
Achnanthes brevipes	1
Achnanthes delicatula	19
Amphora coffeaeformis	5
Amphora holsatica	3
Amphora strigosa	2
Cocconeis scutellum	2
Dimerogramma fulvum	1
Diploneis interrupta	2
Diploneis pseudovalis	3
Diploneis smithii	1
Navicula marina	2
Nitzschia cocconeiformis	11
Nitzschia compressa	2
Nitzschia granulata	30
Nitzschia plana	2
Paralia sulcata	1
Plagiogramma pulchellum	1
Rhopalodia musculus	3
合　計	102
未同定	8
破片	46
試料 1 cm ^{3} 中の殻数密度	1.6 × 10^5
完形殻保存率（%）	70.5

（その１）

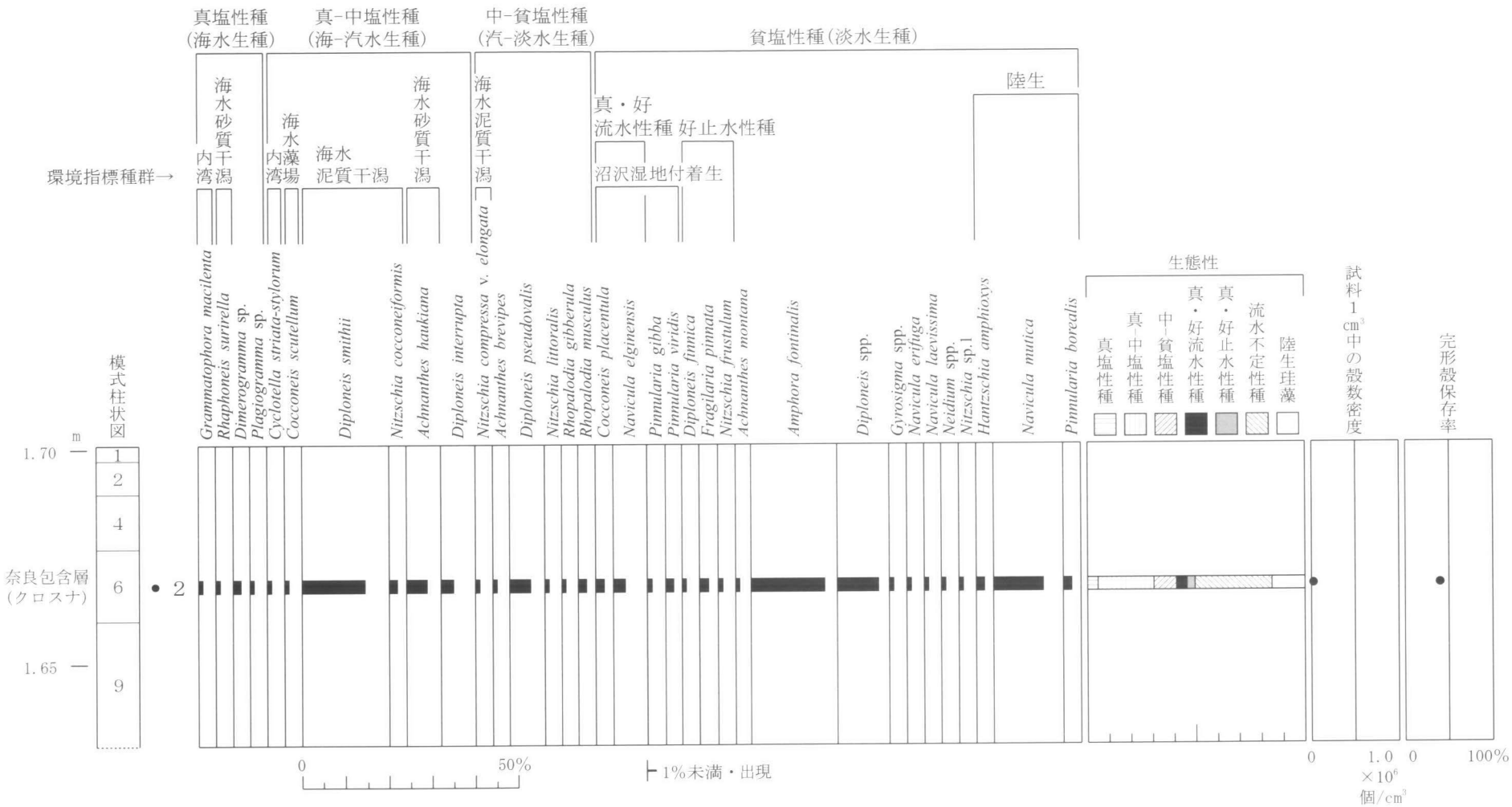
分類群	Ⅳ区東壁７層 奈良包含層	予備調査トレンチ１・５層 浜堤砂層No.２	浜堤砂層No.４
	2	3	4
貧塩性種（淡水生種）			
Achnanthes montana	1		
Amphora fontinalis	18		
Cocconeis placentula	2		
Diploneis finnica	1		
Diploneis spp.	10		
Fragilaria pinnata	2		
Gyrosigma spp.	1		
Hantzschia amphioxys	2		
Navicula elginensis	3		
Navicula erifuga	1		
Navicula laevissima	1		
Navicula mutica	12		
Neidium spp.	1		
Nitzschia frustulum	1		
Nitzschia sp.1	1		
Pinnularia borealis	2		
Pinnularia gibba	1		
Pinnularia viridis	2		
中－貧塩性種（汽－淡水生種）			
Achnanthes brevipes	1		
Diploneis pseudovalis	5		
Nitzschia compressa v. *elongata*	1		
Nitzschia littoralis	1		
Rhopalodia gibberula	1		
Rhopalodia musculus	2		
真－中塩性種（海－汽水生種）			
Achnanthes haukiana	5		
Cocconeis scutellum	1		
Cyclotella striata-stylorum	1		
Diploneis interrupta	3		
Diploneis smithii	15		
Nitzschia cocconeiformis	2		
真塩性種（海水生種）			
Dimerogramma sp.	2		
Grammatophora macilenta	1		
Plagiogramma sp.	1		
Rhaphoneis surirella	1		
合　計	105	0	0
未同定	6	0	0
破片	157	0	0
試料 1 cm ^{3} 中の殻数密度	2.3 × 10^4	0.0	0.0
完形殻保存率（%）	41.4	-	-

（その２）

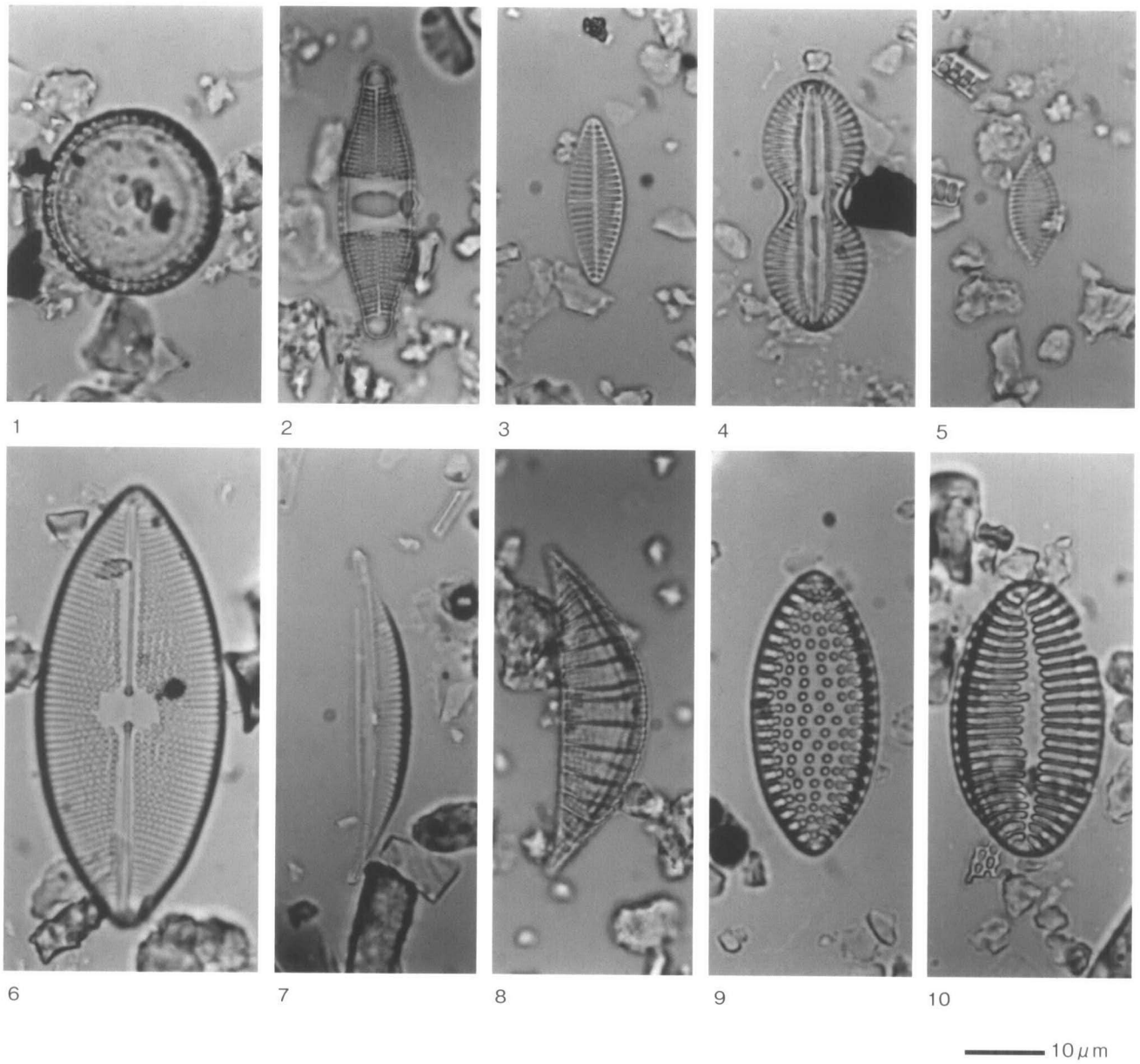
第３表　文京町二丁目西遺跡における珪藻分析結果



第28図　文京町二丁目西遺跡における珪藻ダイアグラム（その1）

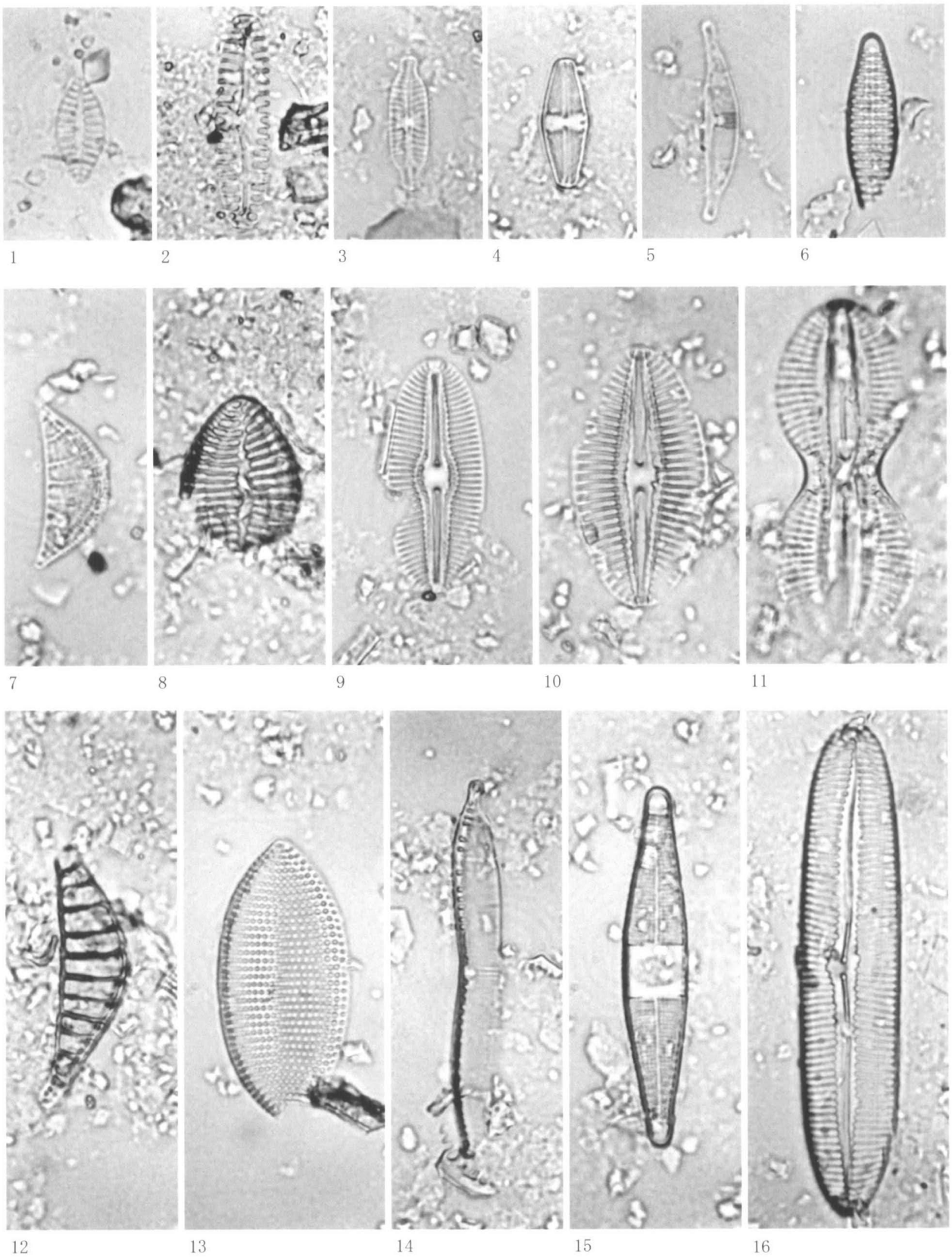


第29図　文京町二丁目西遺跡における珪藻ダイアグラム（その2）



1. *Paralia sulcata* 2. *Plagiogramma pulchellum* 3. *Achnanthes delicatula* 4. *Diploneis interrupta*
5. *Nitzschia compressa* 6. *Navicula marina* 7. *Amphora coffeaeformis* 8. *Rhopalodia musculus*
9. *Nitzschia granulata* 10. *Nitzschia cocconeiformis*

第30図　文京町二丁目西遺跡の珪藻（その1）



1. *Achnanthes haukiana* 2. *Pinnularia borealis* 3. *Navicula elginensis* 4. *Navicula mutica*
5. *Amphora fontinalis* 6. *Dimerogramma* sp. 7. *Rhopalodia musculus* 8. *Nitzschia cocconeiformis*
9. *Diploneis pseudovalis* 10. *Diploneis smithii* 11. *Diploneis interrupta* 12. *Rhopalodia gibberula*
13. *Nitzschia compressa* 14. *Hantzschia amphioxys* 15. *Plagiogramma* sp. 16. *Pinnularia viridis*

第31図　文京町二丁目西遺跡の珪藻（その2）

第４節　砂層の粒度分析

文京町二丁目西遺跡では、浜堤の存在が空中写真判読によって確認でき、その堆積物と考えられる砂層が検出された。今後、砂層の堆積環境を推定するための基準資料とするために、篩による粒度分析を行った。

試料は、予備調査トレンチ１から採集した４点（第８図参照）である。分析は、風乾させた試料を秤量し、わんがけして粘土分を除去してから再び風乾させ、4.75mm（-2 φ）・2.00mm（-1 φ）・850 μ（0 φ）・425 μ（1 φ）・250 μ（2 φ）・106 μ（3 φ）・75 μ（4 φ）の篩を用いて篩い分けを行った。それぞれの篩に残った試料を秤量し、縦軸に累積頻度（%）、横軸に粒径（φ）をとった累積曲線を作成した。

砂の粒度分析に関する論考によると、篩目の間隔をより細かくする必要が指摘されている。また、より厳密に篩分けを行う必要性があったことから、財団法人大阪市文化財協会の趙哲済氏の指導により、１／２間隔の篩による篩分けも行った。表４、５と図32、33が分析結果である。

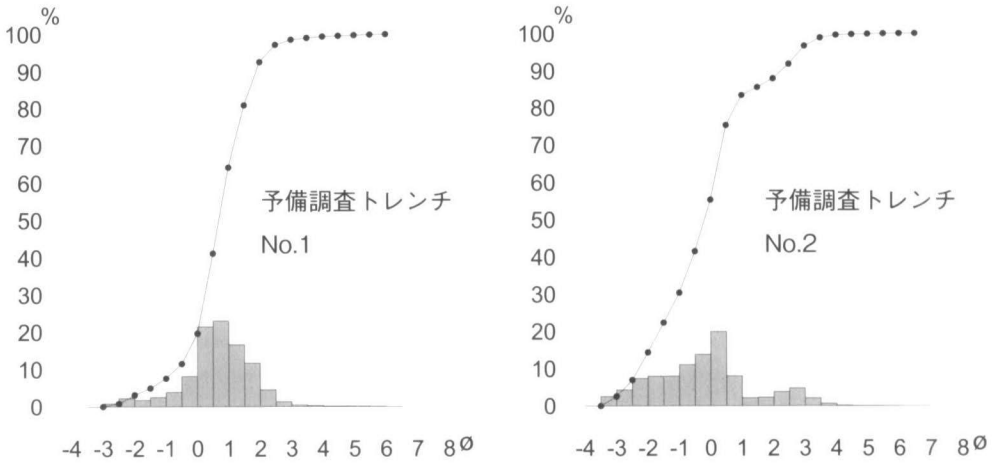
分析結果を見ると、№２の資料は、0.5 φと3.5 φにピークをもつ双峰性の曲線を示している。この資料については、２層理にまたがって試料採取を行ってしまった可能性がある。なお、前掲の木太中村遺跡報告書に述べたとおり、この結果のみをもって堆積環境を断定するのは難しいため、今後、調査地近辺の現成の砂海岸等における試料の分析を行った上で判断することとし、今回は分析値のみを報告する。

fai_Med	予備調査トレンチ	
	no.1	no.2
-3.75		0
-3.25	0	2.60103812
-2.75	0.82852102	4.370560253
-2.25	2.331672664	7.383530372
-1.75	1.815595781	8.01035569
-1.25	2.600592245	8.040325975
-0.75	3.901665592	11.10494701
-0.25	8.192720518	13.81056229
0.25	21.46771022	19.95255768
0.75	23.07034656	8.125135504
1.25	16.65669229	2.214612746
1.75	11.69877898	2.377217482
2.25	4.603499063	3.868079734
2.75	1.379572993	4.843070488
3.25	0.474883999	2.189743786
3.75	0.362963711	0.70972185
4.25	0.190419934	0.158141077
4.75	0.167880432	0.109040823
5.25	0.147672602	0.075244545
5.75	0.108811391	0.051650916
6.25	0	0.004463659
6.75		0

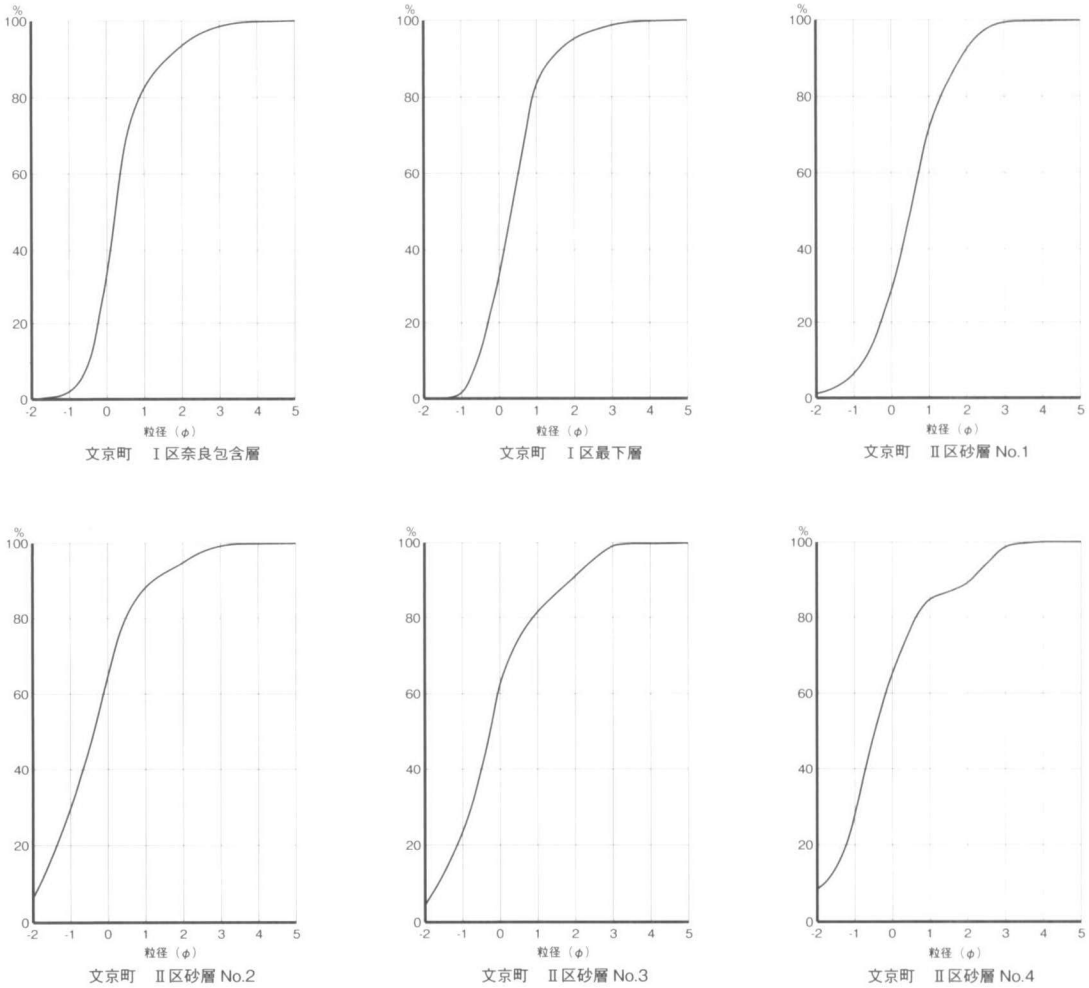
第４表　篩目 1/2 φによる粒度分析結果表（単位は g）

fai_Med	予備調査トレンチ				浜堤前縁部	
	№1	№2	№3	№4	包含層	クロスナ
-2	1.00	5.93	3.64	8.49	0.00	0.00
-1	4.89	22.90	17.98	18.62	1.26	1.06
0	22.34	33.77	40.76	36.72	30.35	29.73
1	41.67	22.76	18.16	18.35	46.40	47.58
2	19.94	6.48	9.17	3.70	11.13	10.14
3	6.34	4.68	8.54	9.86	4.56	3.19
4	0.42	0.13	0.25	0.75	1.00	0.59
5	3.38	3.33	1.51	2.89	5.28	7.51

第５表　篩目 1/4 φによる粒度分析結果表（単位は g）



第 32 図　累積曲線・ヒストグラム



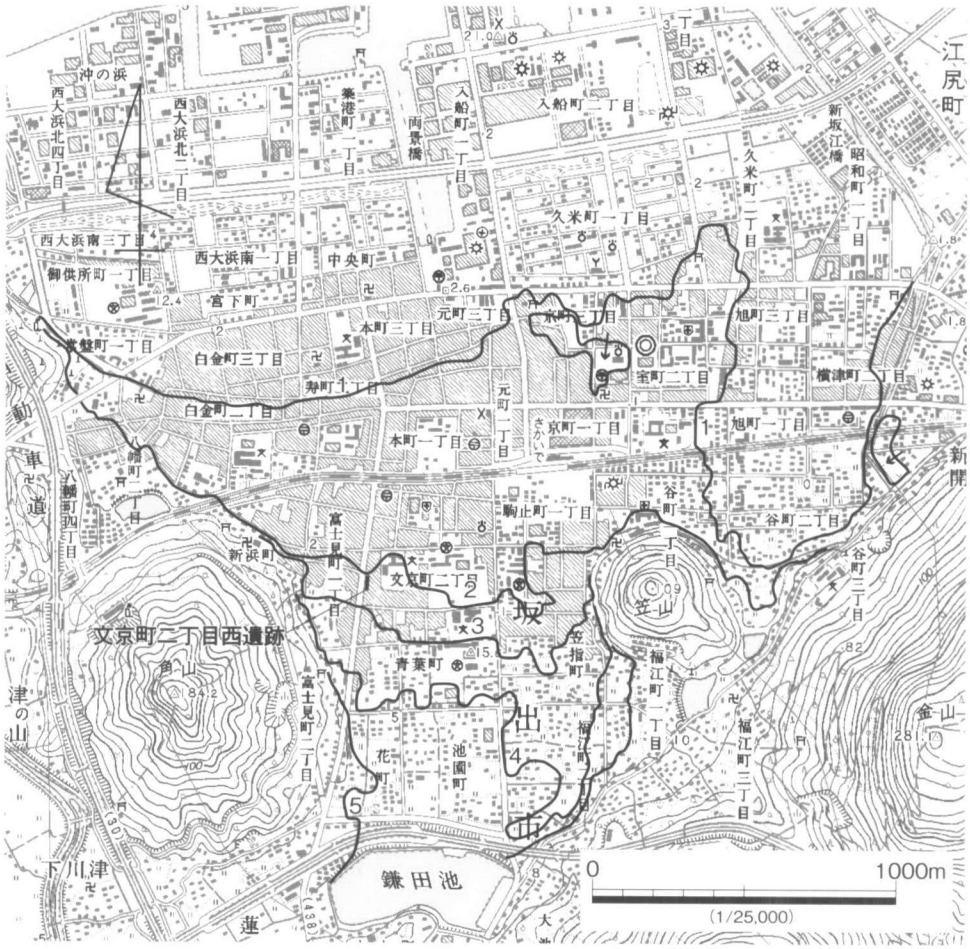
第 33 図　累積曲線

第5章　まとめ

文京町二丁目西遺跡では、坂出市街地の地形発達を考える上で、貴重な資料を得ることができた。調査成果は、浜堤が海側に傾斜する所に堆積した包含層から、８世紀を中心とする多量の遺物が出土し、その内容は飯蛸壺が多く、漁労に関連する集落の存在を示すものであった。また、その北側は、中世まで満潮時には海水が浸入する湿地が広がっていたことが判明した。ここでは、坂出市街地の地形発達を予察しながら、調査成果のまとめと今後の課題を考えたい。

まず、遺跡が立地していた浜堤であるが、都市計画道路富士見町線改築事業に先立って行われた試掘調査の結果から見ると、遺跡以南では海成層が認められず、最も内陸側の浜堤であることがわかる。坂出駅前駐車場の掘削現場で観察された貝化石群集の分析から、坂出駅付近には縄文時代前期に浅海が広がっていたことが判明し、このことから、浜堤前縁は、縄文海進時の海岸線である可能性がある。しかし、坂出市街地では浜堤の発達が２列であるため、今後も形成年代を確定する努力が必要である。同様に、遺跡が立地する浜堤よりも海側にある浜堤は、形成年代を知る資料が無いため、今後検討を深める必要がある。

第34図の等高線は、2500分の１都市計画図に記される１ｍ間隔の等高線を抜き出したものである。等高線のパターンや浜堤の形状を見ると、西側の埋積の方が早く、東側の横津付近は、埋積が遅れていたことがわかる。現在市役所等が所在する京町・室町付近には、昭和４年に廃止されるまで塩田が営まれていたように、東側はつい最近まで海に直結する土地柄であった。浜堤北側からは、出土遺物が少なかったため、各堆積層の堆積年代を決定することはできなかった。また、珪藻分析から干潟の潮間帯という環境の復原ができたものの、どのような過程で陸化が進行したのか明確にできなかった。これらも今後の検討課題である。



第34図　等高線図（国土地理院地形図「丸亀」を使用）

地元説明会風景（1）

地元説明会風景（2）

観察表

凡例

1．残存率は、遺物の図化部分に占める実物の割合を示しており、完形品に対するそれではない。

2．色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖 2001 年版」を参照した。

3．胎土中の砂粒の「粗」は径 4mm 以上、「中」は 0.5mm 以上、「細」は 0.5mm 以下を基準とした。

第６表　文京町二丁目西遺跡出土土器観察表

遺物番号	遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量			調整		残存率	備考
				外面・釉	内面・胎土	長石・石英	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)(現存長)	器高(cm)(現存値)	底径(cm)(現存厚)	外面・凸面	内面・凹面		
a		土師器	皿	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR5/4 にぶい褐					細・少			19.4	ナデ・ヘラ削り後ナデ	ナデ	底部　1/8	
b		須恵器	壺	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰					細・少	6.3			回転ナデ	回転ナデ	口縁部　1/8	
c		土師質土器	竈	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙					中・並				ナデ・指押さえ・板ナデ後ナデ	ハケ目後指押さえ	細片	
d			製塩土器	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙					細・少	10.6			指押さえ・ナデ	指押さえ後ナデ	口縁部　1/8	
e			製塩土器	5YR6/4 にぶい橙	5YR6/4 にぶい橙					細・少				矢羽根状タタキ	指押さえ・板ナデ	口縁部　破片	
f			製塩土器	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙					細・少				タタキ・指押さえ	指押さえ後ナデ	口縁部　破片	
g			製塩土器	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙					細・少				菱形の格子状タタキ	指押さえ	口縁部　破片	
h			製塩土器	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR5/4 にぶい黄褐					細・少				指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	口縁部　破片	
i			製塩土器	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR6/4 にぶい黄橙					細・少	10.6			矢羽根状タタキ	指押さえ後ナデ	口縁部　破片	
j			製塩土器	5YR6/4 にぶい橙	10YR7/3 にぶい黄橙					細・少				矢羽根状タタキ	指押さえ後ナデ	口縁部　破片	
k			製塩土器	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙					中・並			2.1	指押さえ・ナデ	板ナデ・ナデ	底部　8/8	
1	浜堤前縁包含層	弥生土器	壺	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	細・多					17.0			横ナデ	横ナデ・列点文	口縁部　1/8	
2	浜堤前縁包含層	弥生土器	底部	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y7/3 浅黄	細・多							9.4	マメツ	マメツ	底部　4/8	
3	浜堤前縁包含層	土師器	蓋	１０YR5/2 灰黄褐	7.5YR5/3 にぶい褐					細・少				回転ナデ	マメツ	つまみ部　破片	
4	浜堤前縁包含層	土師器	杯	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄					細・少	-	-	-	ナデ	ナデ	口縁部　破片	
5	浜堤前縁包含層	土師器	杯か皿	10YR 7/2 にぶい黄橙	10YR6/2 灰黄褐					細・少				指押さえ後横ナデ	横ナデ	口縁部　破片	
6	浜堤前縁包含層	土師器	杯	10YR 7/2 にぶい黄橙	10YR 7/2にぶい黄橙					細・少				横ナデ・板ナデ	横ナデ・マメツ	口縁部　破片	
7	浜堤前縁包含層	土師器	杯	2.5YR6/6 橙	5YR7/6 橙					細・少				横ナデ・マメツ	横ナデ・マメツ	口縁部　破片	
8	浜堤前縁包含層	土師器	杯	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙					細・少	19.5	(3.3)	17.0	回転ナデ・回転ヘラ削り	回転ナデ	2/8	
9	浜堤前縁包含層	土師器	杯か皿	2.5YR6/8 橙	7.5YR7/4 にぶい橙					細・少				マメツ	ミガキ・マメツ	口縁部　細片	
10	浜堤前縁包含層	土師器	鉢	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄					細・少	12.2			回転ナデ	回転ナデ	口縁部　1/8	
11	浜堤前縁包含層	土師器	鉢	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄					細・少	-	-	-	指押さえ後横ナデ	指押さえ後横ナデ	口縁部　破片	赤色顔料付着
12	浜堤前縁包含層	土師器	鉢	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙					細・少	22.8	-	-	ナデ・ヘラ削り後ナデ	ナデ・指押さえ後ナデ	口縁部　1/8	内外面赤色顔料付着
13	浜堤前縁包含層	土師器	鉢	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙					細・少				横ナデ・マメツ	横ナデ・マメツ	口縁部　破片	
14	浜堤前縁包含層	土師器	鉢	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙					細・少	27.4			横ナデ・ハケ目	横ナデ	口縁部　1/8	

遺物番号	遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量			調整		残存率	備考
				外面・釉	内面・胎土	長石・石英	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)(現存長)	器高(cm)(現存幅)	底径(cm)(現存厚)	外面・凸面	内面・凹面		
15	浜堤前縁包含層	土師器	高杯	10YR8/3 浅黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙					細・少				面取り	板ナデ	脚部　破片	面取り 11 面
16	浜堤前縁包含層	土師器	高杯	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR5/2 灰黄褐					細・少				面取り	横ナデ・板ナデ	脚部　破片	面取り 11 面
17	浜堤前縁包含層	土師器	高杯	10YR6/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐					細・少				面取り	指押さえ後ナデ	脚部　破片	面取り 11 面
18	浜堤前縁包含層	土師器	高杯	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙					細・少	-	-	-	面取り	指押さえ後ナデ	脚部　5/8	面取り 12 面
19	浜堤前縁包含層	土師器	高杯	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙					細・少				面取り	指押さえ後横ナデ・ハケ目	脚部　1/8	面取り 9 面
20	浜堤前縁包含層	土師器	高杯	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙					細・少			11.9	面取り	指押さえ後ナデ	脚部　6/8	面取り 10 面
21	浜堤前縁包含層	土師器	高杯	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙					細・少	-	-	15.5	面取り・横ナデ	横ナデ	脚部　1/8	
22	浜堤前縁包含層	土師器	高杯	2.5Y7/2 灰黄	10YR8/2 灰白					細・少	-	-	12.1	面取り・ナデ	マメツ（ナデ）	脚部　1/8	
23	浜堤前縁包含層	土師器	高杯	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙					細・少			12.2	横ナデ	ハケ目後横ナデ	脚部　破片	
24	浜堤前縁包含層	土師器	（把手）	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙					細・並	-	-	-	ナデ・指押さえ	-	把手部　8/8	
25	浜堤前縁包含層	土師器	甕	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y6/2 灰黄					細・少	(34.0)			横ナデ・ハケ目	横ナデ・ハケ目・指押さえ後ナデ	口縁部　1/8	
26	浜堤前縁包含層	土師器	甕	2.5YR6/6 橙	10YR5/2 灰黄褐					中・並	(20.7)			横ナデ・ハケ目	横ナデ・ハケ目・板ナデ・指押さえ	口縁部　1/8	
27	浜堤前縁包含層	土師器	甕	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙					中・少	26.6			横ナデ・ハケ目	ハケ目・ナデ	口縁部　1/8	
28	浜堤前縁包含層	土師器	甕	7.5YR6/6 橙	10YR7/4 にぶい黄橙					細・並	25.8			横ナデ・マメツ（指押さえ後ハケ目）	ハケ目・指押さえ	口縁部　1/8	
29	浜堤前縁包含層	土師器	甕	2.5YR6/8 橙	10YR6/3 にぶい黄橙					細・並	(23.4)			横ナデ・マメツ	ハケ目・マメツ	口縁部　1/8	
30	浜堤前縁包含層	土師器	甕	2.5Y6/3 にぶい黄	2.5Y6/3 にぶい黄					中・並	26.3			横ナデ・ハケ目	横ナデ・ハケ目・ナデ	口縁部　2/8	
31	浜堤前縁包含層	土師器	甕	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/6 明黄褐					中・並	(19.4)	-	-	横ナデ・ハケ目	横ナデ・ハケ目・板ナデ	口縁部　1/8	
32	浜堤前縁包含層	土師器	甕	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙					中・並	21.8	-	-	横ナデ・ハケ目	横ナデ・ハケ目・ナデ	口縁部　1/8	
33	浜堤前縁包含層	土師器	甕	5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙					中・並	(17.0)			横ナデ・ハケ目・指押さえ	ハケ目・板ナデ・指押さえ	口縁部　1/8	
34	浜堤前縁包含層	土師器	甕	5YR6/4 にぶい橙	10YR7/2 にぶい黄橙					細・少	17.8			横ナデ・ハケ目・指押さえ	ハケ目・ナデ	口縁部　2/8	
35	浜堤前縁包含層	土師器	甕	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙					中・並				横ナデ・ハケ目	横ナデ・ハケ目・ヘラ削り	口縁部　破片	
36	浜堤前縁包含層	土師器	甕	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙					中・並				横ナデ・ハケ目	横ナデ・マメツ	口縁部　破片	
37	浜堤前縁包含層	土師器	甕	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙					細・並	13.4			横ナデ・ハケ目	横ナデ・指押さえ後ナデ	口縁部　2/8	
38	浜堤前縁包含層	土師器	甕	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR6/2 灰黄褐					細・並				板ナデ・ハケ目	指押さえ・ナデ	口縁部　破片	

遺物番号	遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量			調整		残存率	備考
				外面・釉	内面・胎土	長石・石英	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)(現存長)	器高(cm)(現存幅)	底径(cm)(現存厚)	外面・凸面	内面・凹面		
39	浜堤前縁包含層	土師器	土鍋	10YR7/2 にぶい黄橙	2.5Y7/2 灰黄					細・並	41.8			横ナデ・板ナデ・指押さえ後ハケ目	ハケ目・ナデ・指押さえ	口縁部 1/8	
40	浜堤前縁包含層	土師器	移動式竈	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙					細・並				ハケ目・指押さえ	指押さえ・板ナデ	破片	
41	浜堤前縁包含層	土師器	移動式竈	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR6/2 灰黄褐					細・並				ハケ目・指押さえ	ハケ目・板ナデ	細片	
42	浜堤前縁包含層	須恵器	蓋	N6/ 灰	N6/ 灰					細・少	15.4			回転ヘラ削り・回転ナデ	回転ナデ	口縁部 1/8	
43	浜堤前縁包含層	須恵器	杯	N7/ 灰白	N6/ 灰					細・少	13.0	4.2	9.3	回転ナデ・回転ヘラ削り後回転ナデ	回転ナデ	2/8	
44	浜堤前縁包含層	須恵器	杯	N5/ 灰	N5/ 灰					中・少	12.8	3.8	9.6	回転ナデ・回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	2/8	
45	浜堤前縁包含層	須恵器	杯	N5/ 灰	N5/ 灰					細・少	15.6	-	-	回転ナデ	回転ナデ	口縁部 2/8	
46	浜堤前縁包含層	須恵器	椀	N8/ 灰白	N8/ 灰白					細・少	13.4	5.0	10.0	マメツ（回転ナデ）・回転ヘラ切り	マメツ（回転ナデ）	3/8	
47	浜堤前縁包含層	須恵器	杯	N5/ 灰	N5/ 灰					細・少	-	-	9.6	回転ナデ・貼付け高台・回転ヘラ削り	回転ナデ・仕上げナデ	底部 2/8	
48	浜堤前縁包含層	須恵器	杯	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白					細・少	14.3	4.7	10.6	回転ナデ・削り出し高台・回転ヘラ削り	回転ナデ	5/8	
49	浜堤前縁包含層	須恵器	椀	N6/ 灰	N7/ 灰白					細・少	12.5	5.2	8.2	回転ナデ・貼り付け高台	回転ナデ	1/8	
50	浜堤前縁包含層	須恵器	杯か椀	N5/ 灰	N5/ 灰					細・少			10.4	貼り付け高台・ナデ	ナデ	底部 3/8	
51	浜堤前縁包含層	須恵器	皿	5Y6/1 灰	5Y8/1 灰白					細・少	18.4	3.0	16.4	回転ナデ・回転ヘラ削り後板ナデ	回転ナデ	2/8	
52	浜堤前縁包含層	須恵器	皿	N7/ 灰白	N7/ 灰白					細・少	(14.8)	2.0	(11.8)	回転ナデ・回転ヘラ削り後ナデ	回転ナデ	1/8	
53	浜堤前縁包含層	須恵器	皿	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白					細・少				回転ナデ・回転ヘラ切り	回転ナデ・仕上げナデ	口縁部 破片	
54	浜堤前縁包含層	須恵器	皿	N5/ 灰	N5/ 灰					細・少				回転ナデ	回転ナデ	口縁部 破片	
55	浜堤前縁包含層	須恵器	高杯	N7/ 灰白	N7/ 灰白					細・少	-	-	-	回転ナデ	回転ナデ	破片	
56	浜堤前縁包含層	須恵器	平瓶	N6/ 灰	N6/ 灰					細・少	9.7			横ナデ・回転ナデ	回転ナデ	口縁部 2/8	
57	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白					細・並	7.0	10.5	-	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	8/8	
58	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	2.5Y8/2 灰白	10YR8/2 灰白					細・並	-	-	-	棒状工具による窪み・マメツ	指押さえ後ナデ	破片	
59	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y6/1 黄灰					細・並	-	-	-	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	破片	
60	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙					細・並	-	-	-	指押さえ・ナデ	指押さえ・ナデ	破片	

遺物番号	遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量			調整		残存率	備考
				外面・釉	内面・胎土	長石・石英	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)(現存長)	器高(cm)(現存幅)	底径(cm)(現存厚)	外面・凸面	内面・凹面		
61	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	10YR8/2 灰白	7.5YR8/2 灰白					細・並	-	-	-	指押さえ後ナデ	マメツ	破片	
62	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白					細・少	-	-	-	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	破片	
63	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	10YR8/3 浅黄橙	7.5YR7/6 橙					細・少	-	-	-	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	破片	線刻あり
64	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	7.5YR8/6 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙					細・少	-	-	-	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	破片	
65	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙					細・少	-	-	-	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	破片	
66	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙					細・並	-	10.2		指押さえ・ナデ	ナデ・指押さえ	4/8	線刻あり
67	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	10YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙					中・並	-	-	-	指押さえ・ナデ	指押さえ	破片	
68	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	2.5Y8/2 灰白	2.5Y7/3 浅黄					細・少	-	-	-	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	破片	線刻あり
69	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙					細・少	-	-	-	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	破片	線刻あり
70	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/2 灰白					細・少	-	-	-	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	破片	
71	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙					細・少	-	-	-	指押さえ後ナデ	ナデ	破片	線刻あり
72	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/3 淡黄					細・少	-	9.4	-	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	4/8	線刻あり
73	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白					細・少	-	-	-	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	破片	線刻あり
74	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白					細・少	-	-	-	マメツ	指押さえ後ナデ	破片	線刻あり
75	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙					細・少				指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	破片	線刻あり
76	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄					細・少	-	-	-	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	破片	線刻あり
77	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	10YR8/3 浅黄橙	2.5Y7/2 灰黄					細・少				指押さえ後ナデ	指押さえ後横ナデ	破片	線刻あり
78	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄					細・少	-	-	-	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	破片	線刻あり
79	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白					細・少	-	-	-	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	破片	線刻あり
80	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	10YR8/3 浅黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙					細・少	-	-	-	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	破片	線刻あり
81	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙					細・少	-	-	-	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	破片	線刻あり
82	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/1 灰白					細・少	-	-	-	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	破片	線刻あり
83	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙					細・少	-	-	-	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	破片	
84	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙					細・少	-	-	-	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	破片	
85	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙					細・並	-	-	-	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	破片	線刻あり

遺物番号	遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量			調整		残存率	備考
				外面・釉	内面・胎土	長石・石英	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)(現存長)	器高(cm)(現存幅)	底径(cm)(現存厚)	外面・凸面	内面・凹面		
86	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR8/4 浅黄橙					細・並	-	-	-	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	破片	線刻あり
87	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙					中・並	-	10.7	-	指押さえ後ナデ	指押さえ後横ナデ	4/8	
88	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙					中・並	-	10.6	-	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	4/8	
89	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	2.5Y7/2 灰黄	10YR7/2 にぶい黄橙					中・並	-	-	-	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	破片	
90	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	2.5Y8/2 灰白	10YR7/3 にぶい黄橙					細・多	-	-	-	指押さえ・ナデ	ナデ	破片	
91	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄					細・少	-	-	-	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	破片	線刻あり
92	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	2.5Y8/2 灰白	10YR7/2 にぶい黄橙					中・多	-	-	-	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	破片	
93	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR7/4 にぶい橙					中・並	-	-	-	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	破片	線刻あり
94	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙					中・並	-	-	-	指押さえ後ナデ	指押さえ後横ナデ	破片	
95	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白					細・少	-	9.6	-	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	6/8	線刻あり
96	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	10YR8/2 灰白	2.5Y8/1 灰白					細・並	5.6	-	-	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ・横ナデ	5/8	線刻あり
97	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白					細・並	4.5	-	-	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ・横ナデ	5/8	
98	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	7.5YR8/3 浅黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙					細・並	-	-	-	マメツ	指押さえ後ナデ	破片	
99	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白					細・並	5.5	-	-	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ・横ナデ	6/8	線刻あり
100	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/3 淡黄					細・少	-	-	-	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	3/8	
101	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙					細・少	5.0	-	-	指押さえ後ナデ	指押さえ後横ナデ	4/8	
102	浜堤前縁包含層		飯蛸壺	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙					細・少	4.4	-	-	指押さえ後ナデ	指押さえ後横ナデ	4/8	
103	Ⅳ区包含層	須恵器	杯	N6/ 灰	N6/ 灰					細・少	13.0	3.3	6.8	回転ナデ・回転ヘラ切り	回転ナデ	2/8	火ダスキ有り
104	Ⅳ区包含層		飯蛸壺	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白					細・少				指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	破片	
105	Ⅳ区包含層	土師質土器	足釜	2.5Y8/1 灰白	2.5Y7/2 灰黄					中・並				指ナデ・ナデ	指押さえ	脚部　破片	
106	Ⅳ区包含層	土師質土器	足釜	10YR7/2 にぶい黄橙	-					細・並				指押さえ・ナデ	-	脚部　破片	
107	6 層		飯蛸壺	10YR8/3 浅黄橙	2.5Y8/3 淡黄					細・少				指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	破片	
108	6 層	土師質土器	移動式竈	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y7/3 浅黄					細・少				ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目	焚き口部 破片	
109	9 層・10 層	弥生土器	壺か甕	2.5Y4/1 黄灰	10YR5/3 にぶい黄褐	細・並							6.4	マメツ	マメツ	底部　1/8	
110	21 層		飯蛸壺	5YR7/6 橙	5YR7/4 にぶい橙					細・少				指押さえ後ナデ	ナデ	破片	
111	5 層	土師質土器	小皿	10YR4/2 灰黄褐	2.5Y8/3 淡黄					細・少	5.8	1.0	4.4	横ナデ・回転ヘラ切り	横ナデ	口縁部　1/8	

遺物番号	遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量			調整		残存率	備考
				外面・釉	内面・胎土	長石・石英	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)(現存長)	器高(cm)(現存値)	底径(cm)(現存厚)	外面・凸面	内面・凹面		
112	5層	土師質土器	杯	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙					細・少	13.6			回転ナデ	回転ナデ	口縁部 1/8	
113	5層	土師質土器	杯か小皿	2.5Y7/2 灰黄	5Y7/1 灰白					細・少			5.8	回転ナデ・回転ヘラ切り	回転ナデ	底部 1/8	
114	5層	土師質土器	杯	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙					細・少	12.4			マメツ(回転ナデ)	マメツ(回転ナデ)	口縁部 1/8	
115	5層	須恵器	杯	N7/ 灰白	N7/ 灰白					細・少			9.4	貼り付け高台・回転ヘラ切り後回転ナデ	回転ナデ	底部 2/8	
116	5層	須恵器	杯か皿	10YR7/4 にぶい黄橙	5Y5/1 灰					細・少				横ナデ・削り出し高台後横ナデ	横ナデ・ナデ	底部 破片	
117	5層	須恵器	高杯	N5/ 灰	N5/ 灰					細・少			(11.0)	回転ナデ	回転ナデ	脚部 1/8	
118	5層・13層・14層(最上層は5層)	土師器	甕	10YR6/2 灰黄褐	2.5Y7/2 灰黄					細・並	(29.1)			横ナデ・ハケ目	ハケ目・板ナデ	口縁部 1/8	
119	5層・13層・14層・トレンチ(最上層は5層)	土師器	甕	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y6/2 灰黄					細・少				横ナデ・ナデ・ハケ目	ハケ目	口縁部 破片	
120	5層	土師器	甕	10YR8/2 灰白	7.5YR7/4 にぶい橙					細・並				マメツ	マメツ	口縁部 破片	
121	5層・13層・14層・トレンチ(最上層は5層)		真蛸壺	10YR8/1 灰白	2.5Y8/3 淡黄					細・並	13.2			横ナデ・マメツ	横ナデ・指押さえ	口縁部 1/8	
122	5層	土師器	把手	7.5YR7/4 にぶい橙	-					細・少				指押さえ・指ナデ	-	把手 8/8	
123	5層	土師質土器	土釜	5YR6/6 橙	7.5YR7/4 にぶい橙					細・少				マメツ	マメツ	破片	
124	5層	土師質土器	土鍋	10YR6/2 灰黄褐	2.5Y6/2 灰黄					細・並				マメツ・ハケ目	マメツ	口縁部 破片	
125	5層・13層・14層		飯蛸壺	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙					中・少				指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	破片	
126	5層		製塩土器	5YR6/4 にぶい橙	10YR5/2 灰黄褐					細・並			4.8	マメツ	マメツ	脚部 7/8	
129	12層	須恵器	杯身	N5/ 灰	N4/ 灰					細・少				回転ナデ・回転ヘラ削り	回転ナデ	口縁部 破片	
130	12層	土師質土器	足釜	10YR6/4 にぶい黄橙	-					細・並				指押さえ後ナデ	-	脚部 破片	
132	13層	土師質土器	杯	7.5YR7/3 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙					細・少				マメツ	マメツ	口縁部 破片	
133	13層	須恵器	杯	N7/ 灰白	N7/ 灰白					細・少				回転ナデ	回転ナデ	口縁部 破片	
134	13層	須恵器	壺	N4/ 灰	N4/ 灰					細・少	10.4			回転ナデ	回転ナデ	口縁部 破片	
137	14層	弥生土器	甕	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐	中・並								マメツ(ナデ)	マメツ(ナデ)・指押さえ後ナデ	口縁部 破片	
138	14層	土師器	高杯	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR6/2 灰黄褐					細・少				面取り	マメツ・横ナデ後板ナデ	脚部 破片	現存5面
139	14層	土師器	高杯	2.5Y6/3 にぶい黄	2.5Y6/2 灰黄					細・少				面取り	横ナデ	脚部 破片	
140	14層	緑釉陶器	椀	釉 7.5Y7/2 灰白	胎土 7.5Y8/1 灰白					精 緻				施釉	施釉	口縁部 破片	軟陶
141	14層	緑釉陶器	椀	釉 10YR8/3 浅黄橙	胎土 10YR8/3 浅黄橙					精 緻				回転ナデ	ナデ・沈線	破片	硬陶
142	14層	緑釉陶器	椀	釉 5Y7/3 浅黄	胎土 2.5Y8/2 灰白					精 緻			7.0	施釉	施釉	底部 3/8	軟陶
143	14層	土師質土器	小皿	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白					細・少	8.5	(1.6)	(6.0)	回転ナデ	回転ナデ	2/8	

遺物番号	遺構名	種類	器種	色調		胎土					法量			調整		残存率	備考
				外面・釉	内面・胎土	長石・石英	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)(現存長)	器高(cm)(現存幅)	底径(cm)(現存厚)	外面・凸面	内面・凹面		
144	14 層	土師質土器	椀	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白					細・少			6.0	貼り付け高台・回転ナデ	マメツ	底部 8/8	
145	14 層	須恵器	椀	7.5Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰					細・少	12.0			回転ナデ	回転ナデ	口縁部 1/8	
146	14 層	須恵器	杯	N8/ 灰白	N8/ 灰白					細・少			7.6	回転ナデ・回転ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	底部 1/8	
147	14 層	須恵器	杯	5Y6/1 灰	N6/ 灰					細・少			12.0	回転ナデ・貼り付け高台・回転ヘラ削り	回転ナデ・仕上げナデ	底部 1/8	
148	14 層	須恵器	杯	7.5Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰					中・並				回転ナデ・回転ヘラ切り	回転ナデ	底部 破片	
149	14 層	須恵器	壺か甕	N7/ 灰白	N7/ 灰白					細・少			6.3	回転ナデ・タタキ	回転ナデ	底部 1/8	
150	14 層	土師質土器	土釜	10YR4/2 灰黄褐	2.5Y7/2 灰黄					細・少	29.4			横ナデ・ハケ目	ハケ目・指押さえ	口縁部 1/8	
151	14 層	土師質土器	鍋	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙					中・少				マメツ	マメツ	口縁部 破片	
152	14 層	土師質土器	移動式竈	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙					細・並				指押さえ後ハケ目・マメツ(ハケ目)	マメツ(ナデ)・マメツ(ハケ目)	焚き口部 破片	
153	17 層・18 層	土師器	鉢	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y6/2 灰黄					細・少				回転ナデ	回転ナデ	口縁部 破片	
154	17 層・18 層	須恵器	杯	5Y7/1 灰白	7.5Y6/1 灰					細・少			10.8	回転ナデ・貼り付け高台・回転ヘラ切り	回転ナデ	底部 1/8	
155	17 層・18 層	土師質土器	土釜	10YR6/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐					細・少				横ナデ・ハケ目	横ナデ	口縁部 破片	
156	17 層・18 層		飯蛸壺	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙					細・少				指押さえ後ナデ	マメツ	破片	
157	19 層	土師質土器	杯	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白					細・少			6.4	回転ナデ・回転ヘラ切り	回転ナデ	底部 3/8	
158	19 層	須恵器	杯か皿	5Y7/1 灰白	10Y7/1 灰白					細・少				回転ナデ・貼り付け高台・回転ヘラ切り	回転ナデ	底部 破片	
159	19 層	土師質土器	土釜	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y7/3 浅黄					細・少				横ナデ・指押さえ・ハケ目	ナデ・マメツ	体部 破片	
160	21 層	縄文土器	体部	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐	細・並								ナデ	ナデ	体部 破片	
161	20 層・27 層	縄文土器	浅鉢	2.5Y7/2 灰黄	10YR5/2 灰黄褐	細・多								マメツ	マメツ	口縁部 破片	
162	20 層・27 層	弥生土器	壺か甕	10YR6/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐	細・並							8・9	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	底部 3/8	
163	28 層	縄文土器	深鉢	2.5Y4/1 黄灰	5Y2/1 黒	細・少								縄文(RL)・ナデ	縄文(RL)・沈線 1 条・ナデ	口縁部 破片	
164	28 層	縄文土器	(体部)	10YR7/1 灰白	2.5Y6/1 黄灰	細・並								縄文(RL)・マメツ	マメツ	体部 細片	
165	28 層	縄文土器	(体部)	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y6/2 灰黄	細・多								マメツ・沈線	マメツ	体部 破片	
166	28 層	縄文土器	底部	2.5Y4/1 黄灰	5Y7/2 灰白	細・並							10.6	ナデ・沈線	指ナデ	底部 1/8	
167	28 層	縄文土器	底部	10YR6/2 灰黄褐	2.5Y6/2 灰黄	細・多							10.6	指押さえ後ナデ	指押さえ後ナデ	底部 1/8	

第７表　文京町二丁目西遺跡出土瓦観察表

遺物番号	遺構名	種類	器種	色調		胎土	法量				調整				備考
				外面	内面	砂粒	現存長 (cm)	広端幅 (cm)	狭端幅 (cm)	厚さ (cm)	凸面	凹面	側面	端面	
127	5 層・13 層・14 層・トレンチ		丸瓦	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	細・少	10.2	-	-	1.7	板ナデ	布目	削り		土師質
128	5 層		平瓦	N4/ 灰	N4/ 灰	細・少	5.6	-	-	2.1	網目	布目	削り		須恵質
135	13 層		平瓦	2.5Y8/2 灰白	2.5Y7/2 灰黄	細・少	7.3	-	-	1.7	網目	布目	不明	-	土師質
136	13 層		丸瓦	N5/ 灰	N7/ 灰白	細・少	8.2	-	-	-	板ナデ	布目	-	削り	須恵質

第８表　文京町二丁目西遺跡出土石器観察表

遺物番号	遺構名	器種	法量				材質	備考
			現存長 (cm)	現存幅 (cm)	現存厚 (cm)	重量 (g)		
131	12 層	石鏃	2.6	1.5	0.3	1.18	サヌカイト	凹基式
168	28 層	ナイフ形石器	5.1	1.6	0.7	5.61	サヌカイト	

第９表　文京町二丁目西遺跡出土木器観察表

遺物番号	遺構名	器種	法量			木取り	樹種	備考
			現存長 (cm)	現存幅 (cm)	現存厚 (cm)			
169	14 層	斎串	14.2	2.3	0.4			
170	14 層	斎串	12.6	2.0	0.4	柾目		
171	17・18 層	?	18.7	3.1	2.9	芯持		

写真図版

Ⅳ区　掘削状況（南から）

Ⅳ区　浜堤前縁包含層　遺物出土状況（西から）

図版２

予備調査トレンチ１　全景（東南から）

予備調査トレンチ１　断面（西から）

予備調査トレンチ２　断面（西から）

Ⅳ区　浜堤前縁部包含層　検出状況（西から）

図版 4

Ⅳ区　調査区東壁　断面（西から）

Ⅳ区　完掘状況（下が北）

Ⅱ区　西壁　断面（東南から）

Ⅱ区　東壁　断面（西から）

図版 6

Ⅰ区　掘削状況（北から）

Ⅰ区　南北トレンチ西壁　断面

米軍 1948 年 1 月撮影（M746　55 部分）

図版 8

国土地理院　1962 年撮影（SI-62-4　C-7A-9 部分）

調査地（Ⅳ区）遠景（南から）

調査地（Ⅳ区）遠景（北から）

Ⅳ区　浜堤前縁部包含層　遺物出土状況①

Ⅳ区　浜堤前縁部包含層　遺物出土状況②